（財）大阪府文化財センター調査報告書　第182集

寝屋川市

讃良郡条里遺跡 Ⅶ

一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年９月

財団法人　大阪府文化財センター

上段　第11－2層出土土器集合　中段　古墳時代土坑出土石製小玉　下段　第11－2層出土　土・石・金属製品集合

序　　文

讃良郡条里遺跡は北河内の生駒山系西麓に位置し、寝屋川市と四條畷市にまたがる遺跡です。この遺跡名は、律令制下に施行された条里地割の痕跡がいまだ残っていることに由来します。この遺跡の北東端から南西端に向けて、国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路が建設されることになり、このたび大規模な発掘調査をおこなうことになりました。

本書で報告する讃良郡条里遺跡03－６・06－３は、遺跡のなかでも南西端にあたり、これまで発掘調査がほとんどおこなわれなかった場所です。

この発掘調査では、古墳時代中期から後期にかけての集落跡や、遺物が大量に投棄された落ち込みが発見されました。この調査成果より、当遺跡では古墳時代における渡来系の馬飼達が活躍し、たくさんの馬が駆け回っていた情景が想いめぐらされます。おそらく讃良郡条里遺跡の近辺は、日本ではじめて大規模な馬の飼養がおこなわれた場所のひとつと考えられ、当遺跡が北河内地域の地域史の範疇を超え、列島通史のなかで重要な意味合いを持ってくることはいうまでもありません。

また古墳時代から数百年後の奈良・平安時代の建物も数多く発見され、これまでさほど認識されることのなかった讃良郡条里遺跡南西部において、古代の大規模集落が営まれていたこともあきらかになっています。以上のような調査成果をもとにして今後、北河内における古墳時代から平安時代にかけての歴史景観が、これまで以上に詳しく復元されてゆくでしょう。

最後になりましたが、本発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）関西支社枚方工事事務所、大阪府教育委員会、寝屋川市、寝屋川市教育委員会、堀溝自治会、南大成町自治会、新家自治会、そして地元住民の皆様に深く感謝すると共に、今後とも文化財の保護に一層のご協力とご理解を賜りますよう、お願いいたします。

平成20年９月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水野正好

例　　言

1．本書は、大阪府寝屋川市讃良東町に所在する讃良郡条里遺跡03－６・06－３の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、第二京阪道路（大阪北道路）の建設にともなうもので、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。発掘調査期間は讃良郡条里遺跡03－６が、平成16年４月１日から平成18年３月31日、同06－３が、平成18年12月６日～平成19年２月２日、平成19年５月14日～平成19年６月８日である。出土遺物整理期間は平成18年４月１日～平成20年３月31日である。

3．調査体制は、以下の通りである。

平成16年度（平成16年４月１日～平成17年３月31日）

調査部長　玉井功、調整課長　赤木克視、京阪支所支所長　渡邊昌宏

調査第三係係長　岡戸哲紀、技師　奥村茂輝・鹿野塁、専門調査員　和田一之輔

平成17年度（平成17年４月１日～平成18年１月31日）

調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、京阪支所支所長　渡邊昌宏

調査第三係係長　岡戸哲紀、技師　奥村茂輝・鹿野塁、専門調査員　村田昌也（平成17年10月１日から）

平成17年度（平成18年２月１日～平成18年３月31日）

調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、京阪調査事務所所長　山本彰

調査第二係係長　金光正裕、技師　奥村茂輝、専門調査員　村田昌也

平成18年度

調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、京阪調査事務所所長　山本彰

調査第二係係長　金光正裕、技師　奥村茂輝、専門調査員　村田昌也

平成19年度

調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、京阪調査事務所所長　山本彰

調査第五係係長　金光正裕、技師　奥村茂輝、専門調査員　村田昌也

4．讃良郡条里遺跡03－６の工事請負名称は「讃良郡条里遺跡（その９）」である。

5．遺物写真については、中部調査事務所主査　片山彰一が担当した。木器・金属製品の保存処理については、中部調査事務所主査　山口誠治が担当した。

6．花粉・珪藻微化石分析、大型植物遺体同定分析は（株）パリノ・サーヴェイに、放射性炭素年代測定（AMS）は（株）パレオ・ラボに、鉄製品X-CT撮像は（株）日立エンジニアリング・アンド・サービスにそれぞれ委託した。

7．本書の執筆は、主として奥村があたったが、第５章第５節（４）②、（５）⑥は村田がおこなった。自然科学分析結果については、先の委託機関から受けた報告を奥村が要約した。

8．本書の編集は奥村がおこなった。

9．現地での発掘調査では、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）関西支社枚方工事事務所、寝屋川市、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條

曝市教育委員会、寝屋川市立第七中学校、堀溝自治会、南大成町自治会、新家自治会の皆様の御協力を得るとともに、関係各機関の方々の御指導、御教示を賜った。感謝いたします。

10. 本書収録の写真・遺物などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

11. 発掘調査および遺物整理にあたっては、下記の方々から御指導、御教示を賜った。記して謝意を表します（五十音順）。田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、田中元浩（財団法人和歌山県文化財センター）、中野咲（奈良県立橿原考古学研究所）、浜中邦弘（同志社大学）、村上始（四條畷市教育委員会）、村上恭通（愛媛大学）

凡　　例

1．発掘調査及び整理作業は、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】　2003.8」に従っておこなった。

2．発掘調査でおこなった測量は、世界測地系に準拠する平面直角座標系第Ⅵ系を基準とする。また、本書で記す北は、座標北を示す。

3．発掘調査で使用した測量の標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準とする。本文中および挿図で示される標高はすべてこれによる。

4．発掘調査は、調査地内を10の調査区に分けておこなっている。讃良郡条里遺跡03－６の調査区である、１から７区については北東から南西への順で調査区番号を付している。讃良郡条里遺跡06－３の調査区である、８～10区については調査着手順に番号を付している。

5．遺構は、アラビア数字を用いて通し番号で名称を付けており、アラビア数字の後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付している。例）123溝、456流路
なお、複数の遺構の集合である、掘立柱建物については遺構番号とは別に、遺構の種類を表す文字の後ろに、アラビア数字の通し番号を付して表している。例）掘立柱建物１

6．遺構番号は調査時に付した番号をそのまま用いている。したがって報告書中の本文・遺構挿図・遺構写真中の遺構番号は、調査時に作成した遺構図面、遺物ラベル、写真・遺物・図面台帳に記されている遺構番号と同一である。

7．遺構・遺物の断面図・平面図は、対象により適宜縮尺を変え掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。

8．遺物図版の縮尺は、土器は基本的に４分の１であるが、大型の土器、木製品、銭貨、石製品、金属製品については必要に応じて異なる縮尺を用い、スケールバーと縮尺で表示している。

9．本文中の挿図に掲載された遺物と、写真図版に掲載された遺物の対応関係については、例えば第50図の１番の遺物を写真図版に掲載する場合、写真図版中の個別遺物の右下に50－１と記している。

10．地層の土色の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』2004年版　農林水産省農林水産会議事務局監修・財団法人日本色彩研究色票監修に準拠した。

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……1
　第３節　現地公開……1
第２章　調査の方法……2
　第１節　発掘調査……2
　第２節　整理作業……3
第３章　位置と環境……4
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……4
第４章　基本層序……5
　（１）中世～近世初頭の水田耕作にともなう地層……5
　（２）中世前半の地層……9
　（３）古墳時代～古代の地層……9
　（４）弥生時代～古墳時代の地層……10
第５章　調査成果……10
　第１節　中世後半期の遺構面と遺物……10
　（１）第２～４面の遺構と出土遺物……10
　（２）第５面の遺構と出土遺物……13
　（３）第６～８面の遺構と出土遺物……13
　第２節　中世前半期の遺構と遺物……14
　第３節　古代末期から中世初頭の遺構と遺物……16
　（１）第10面の遺構と出土遺物……16
　（２）第11面の遺構と出土遺物……17
　第４節　古代の遺構と遺物－第12面の遺構と出土遺物①－……21
　（１）包含層出土遺物……21
　（２）掘立柱建物……28
　（３）井戸……45
　（４）土坑……50
　（５）溝……64
　第５節　古墳時代の遺構と遺物－第12面の遺構と出土遺物②－……67
　（１）掘立柱建物……67
　（２）井戸……74
　（３）土坑・溝……84
　（４）落ち込み内第11－１層出土遺物……112

①土器…… 112
②木製品…… 112
（5）落ち込み内第11－2層出土遺物・骨…… 115
①須恵器…… 115
②土師器…… 115
③土製品…… 117
④金属製品…… 133
⑤石製品…… 135
⑥木製品…… 135
⑦井戸枠転用準構造船…… 151
⑧骨…… 155
第6節　弥生時代の遺構…… 155
（1）第14面の遺構…… 155
（2）第15面の遺構…… 158
（3）弥生時代の遺構の性格…… 158
第6章　自然科学分析…… 159
第7章　調査成果のまとめ…… 161
第1節　古墳時代中・後期（5・6世紀）の遺構変遷…… 161
第2節　飛鳥・白鳳時代（7世紀）の遺構変遷…… 162
第3節　奈良・平安時代（8・9世紀）の遺構変遷…… 162
第4節　平安時代以降の遺構変遷…… 166

挿　図　目　次

第1図　調査地の位置…… 2
第2図　地区割りの方法と調査区割り…… 3
第3図　周辺の遺跡…… 6
第4図　基本層序断面図①…… 7
第5図　基本層序断面図②…… 8
第6図　7区検出溝・堤……11
第7図　5区東南端検出土坑・堤……11
第8図　1・2区検出溝……11
第9図　5・6区検出坪境溝・堤……12
第10図　1区検出水田段差……12
第11図　第5～7層出土遺物……14
第12図　371溝平面図…… 14
第13図　第9層出土遺物①……15
第14図　第9層出土遺物②……16
第15図　7区検出第10面溝群……18
第16図　1・3・4区検出第10面溝群……18
第17図　1～4区第11面平面図……19
第18図　5区第11面溝群……20
第19図　7区第11面溝群……20
第20図　溝群堆積土（第10－1層）出土遺物…21
第21図　734盛土内出土遺物…… 22
第22図　第10層出土遺物①……23
第23図　第10層出土遺物②……24
第24図　第10層出土遺物③……25
第25図　第10層出土遺物④……26
第26図　第10層出土遺物⑤……27

第27図　1～4区古代の建物配置図……29
第28図　建物5平・断面図……30
第29図　建物6平・断面図……31
第30図　建物7平・断面図……31
第31図　建物13平・断面図……32
第32図　建物14平・断面図……33
第33図　建物15平・断面図……34
第34図　6区古代の建物配置図……35
第35図　建物17平・断面図……36
第36図　建物18平・断面図……36
第37図　建物19平・断面図……37
第38図　建物20平・断面図……38
第39図　建物21平・断面図……40
第40図　建物22平・断面図……41
第41図　建物25平・断面図……42
第42図　7区古代の建物配置図……42
第43図　建物23平・断面図……43
第44図　建物24平・断面図……43
第45図　古代の建物柱穴出土土器①……44
第46図　古代の建物柱穴出土土器②……45
第47図　2030井戸平・断面図……46
第48図　403井戸平・断面図……48
第49図　153井戸平・断面図……49
第50図　196井戸平・断面図……49
第51図　古代の井戸出土土器……50
第52図　2区古代の遺構配置図……51
第53図　1区古代の遺構配置図……51
第54図　1～3区境古代の遺構配置図……51
第55図　2・3区古代の遺構配置図……52
第56図　4・5区古代の遺構配置図……53
第57図　6区古代の遺構配置図①……54
第58図　6区古代の遺構配置図②……55
第59図　834土坑平・断面図……57
第60図　6区古代の遺構配置図③……58
第61図　7区古代の遺構配置図……59
第62図　古代の遺構断面図①……60
第63図　古代の遺構断面図②……61
第64図　古代の遺構出土土器①……62
第65図　古代の遺構出土土器②……63
第66図　古代の遺構から出土した古墳時代の土器……64
第67図　1～4区古墳時代の建物配置図……65
第68図　建物1平・断面図……66
第69図　建物2平・断面図……67
第70図　建物3平・断面図……68
第71図　建物8平・断面図……69
第72図　建物9平・断面図……70
第73図　建物10平・断面図……71
第74図　建物11平・断面図……71
第75図　建物12平・断面図……72
第76図　建物16平・断面図……73
第77図　古墳時代の建物柱穴出土土器……73
第78図　288井戸平・断面図……75
第79図　409井戸平・断面図……76
第80図　411土坑・412井戸平・断面図……77
第81図　385井戸平・断面図……78
第82図　1396井戸平・断面図……79
第83図　754井戸平・断面図……81
第84図　古墳時代の井戸出土土器①……82
第85図　古墳時代の井戸出土土器②（754井戸出土土器）……83
第86図　古墳時代の井戸出土土器③……84
第87図　1962土坑平面図……85
第88図　1987・1684土坑平面図……85
第89図　2・3区古墳時代の遺構配置図……86
第90図　4・5区古墳時代の遺構配置図……87
第91図　6区古墳時代の遺構配置図①……88
第92図　6区古墳時代の遺構配置図②……89
第93図　406溝・407土坑平・断面図……91
第94図　1398土坑平・断面図……92
第95図　古墳時代の遺構断面図①……93
第96図　古墳時代の遺構断面図②……96
第97図　844土坑平・断面図……97
第98図　902土坑平・断面図……98
第99図　749土坑平・断面図……99
第100図　6・10区古墳時代の遺構配置図……101

第101図　2301・2373土坑断面図……101
第102図　1857溝平面図……102
第103図　古墳時代の遺構出土土器①……104
第104図　古墳時代の遺構出土土器②……105
第105図　古墳時代の遺構出土土器③……106
第106図　古墳時代の遺構出土土器④……107
第107図　古墳時代の遺構出土土器⑤……108
第108図　古墳時代の遺構出土土器⑥……109
第109図　古墳時代の遺構出土土器⑦……110
第110図　古墳時代の遺構出土土器⑧……111
第111図　古墳時代の遺構出土土器⑨……111
第112図　第11－2層の範囲……113
第113図　第11－1層出土土器……114
第114図　特殊遺物の出土地点……116
第115図　第11－2層出土須恵器①……118
第116図　第11－2層出土須恵器②……119
第117図　第11－2層出土須恵器③……120
第118図　第11－2層出土須恵器④……121
第119図　第11－2層出土須恵器⑤……122
第120図　第11－2層出土須恵器⑥……123
第121図　第11－2層出土須恵器⑦……124
第122図　第11－2層出土土師器①……125
第123図　第11－2層出土土師器②……126
第124図　第11－2層出土土師器③……127
第125図　第11－2層出土カマド……128
第126図　第11－2層出土カマド・U字形土製品……129
第127図　第11－2層出土U字形土製品……130
第128図　第11－2層出土埴輪・剣形土製品……131
第129図　第11－2層出土不明須恵器・金属製品……134
第130図　第11－2層出土金属製品……136
第131図　第11－2層出土石製品……137
第132図　第11－2層A地点出土土器……138
第133図　木製品①……140
第134図　木製品②……141
第135図　木製品③……142
第136図　木製品④……143
第137図　木製品⑤……144
第138図　木製品⑥……146
第139図　木製品⑦……148
第140図　木製品⑧……149
第141図　木製品⑨……150
第142図　385井戸井戸枠転用船材①……152
第143図　385井戸井戸枠転用船材②……153
第144図　754井戸井戸枠……154
第145図　第14面の調査範囲……156
第146図　第14面遺構配置図……156
第147図　第15面遺構配置図……157
第148図　第14・15層出土弥生土器……157
第149図　古墳時代の遺構（1～4区）……163
第150図　奈良・平安時代の遺構（1～4区）……164
第151図　古墳時代の遺構（6区）……165
第152図　奈良・平安時代の遺構（6区）……165

表　目　次

表1　当センターによる既往の調査報告一覧…5

写　真　目　次

写真1　現地公開の様子（03－6調査区）……1
写真2　現地公開の様子（03－4調査区）……1

図　版　目　次

巻頭カラー図版

上段　第11－２層出土土器集合

中段　古墳時代土坑出土石製小玉

下段　第11－２層出土　土・石・金属製品集合

図版１　１　５～７区調査着手前（西から）
　　２　１～４区調査着手前（南から）
　　３　７区道路中央断面北壁（北から）
　　４　１区東壁断面（西から）
　　５　６区道路中央断面北壁（北から）
　　６　４区南側溝東西断面（北から）
　　７　６区中央南北断面（西から）
　　８　２区西側溝南北断面（東から）

図版２　１　５区第５面全景（西から）
　　２　７区第２面31溝（西から）
　　３　５区第２面289土坑（東から）
　　４　２区第２面溝（南東から）
　　５　１区第５面水田段差（南東から）

図版３　１　７区第10面全景（東から）
　　２　５区第10面全景（東から）
　　３　３区第10面全景（北から）
　　４　６区第10面全景（北から）
　　５　１区第10面全景（南から）

図版４　１　１区第11面全景（南西から）
　　２　７区第11面全景（東から）
　　３　３区第11面全景（西から）
　　４　６区第11面全景（北から）
　　５　耕作溝と古墳・古代遺構の重複関係（４区西端・西から）

図版５　１　１区第12面全景（南西から）
　　２　２区第12面全景（西から）

図版６　１　３区第12面全景（西から）
　　２　４区第12面全景（東から）

図版７　１　６区第12面全景（北東から）
　　２　５区第12面全景（南から）

図版８　１　10区第12面全景（真上から）
　　２　９区第12面全景（東から）

図版９　１　掘立柱建物５～７（北から）
　　２　建物５　2197柱穴断面（西から）
　　３　建物５　2198柱穴断面（南東から）
　　４　建物５　2199柱穴断面（南から）
　　５　建物５　548･550柱穴断面（西から）

図版10　１　建物６　458柱穴断面１（南から）
　　２　建物６　458柱穴断面２（北から）
　　３　建物６　461柱穴断面（北から）
　　４　建物７　674柱穴断面（東から）
　　５　建物７　682柱穴断面（東から）
　　６　建物７　683柱穴断面（南から）
　　７　建物７　573柱穴断面（北から）
　　８　建物７　491柱穴断面（西から）

図版11　１　建物13　1428柱穴断面（北東から）
　　２　建物13　1431柱穴断面（北から）
　　３　建物13　1441柱穴断面（西から）
　　４　建物13　1445柱穴断面（南から）
　　５　建物15　1577柱穴断面（西から）
　　６　建物15　1584柱穴断面（南西から）
　　７　建物15　1562柱穴断面（南西から）
　　８　建物15　1570柱穴断面（北から）

図版12　１　建物14全景（北から）
　　２　建物14完掘状況　奥は建物12・13（西から）

図版13　１　建物14　1550柱穴断面（北東から）
　　２　建物14　1671柱穴断面（北西から）
　　３　建物14　1662柱穴断面（北東から）
　　４　建物14　1541柱穴断面（南東から）
　　５　建物14　1542柱穴断面（北から）
　　６　建物14　1545柱穴断面（東から）
　　７　建物14　1547柱穴断面（東から）
　　８　建物14　1533柱穴断面（南から）

図版14　1　建物17全景（西から）
　　2　建物17完掘状況（北から）
図版15　1　建物17　1019柱穴断面（南東から）
　　2　建物17　1003柱穴断面（北東から）
　　3　建物17　1021柱穴断面１
　　（南東から）
　　4　建物17　1021柱穴断面２（南から）
　　5　建物17　906柱穴断面（北から）
　　6　建物17　837柱穴断面（南東から）
　　7　建物17　1018柱穴断面（北から）
　　8　建物17　841柱穴断面（西から）
図版16　1　建物19全景（西から）
　　2　建物19完掘状況（南から）
図版17　1　建物19　908柱穴断面（南東から）
　　2　建物19　1137柱穴断面（北西から）
　　3　建物19　843柱穴断面（東から）
　　4　建物19　826柱穴断面（西から）
　　5　建物19　1067柱穴断面（南から）
　　6　建物19　823柱穴断面（北から）
　　7　建物19　827柱穴断面（南から）
　　8　建物19　1064柱穴断面（北西から）
図版18　1　建物21全景（南から）
　　2　建物18・20・21完掘状況
　　（南東から）
図版19　1　建物18　786柱穴断面（南から）
　　2　建物18　880柱穴断面（南から）
　　3　建物18　1767柱穴断面（南から）
　　4　建物18　1100柱穴断面（南西から）
　　5　建物21　1312柱穴断面（東から）
　　6　建物21　990柱穴断面（南西から）
　　7　建物21　1213柱穴断面（南西から）
　　8　建物21　1196柱穴断面（北西から）
図版20　1　建物21　793柱穴断面（南西から）
　　2　建物21　800柱穴断面（南から）
　　3　建物20　765柱穴断面（南西から）
　　4　建物20　1212柱穴断面（南東から）
　　5　建物20　1266柱穴断面（西から）
　　6　建物20　992柱穴断面（南から）
　　7　建物20　814柱穴断面（北から）
　　8　建物20　760柱穴断面（西から）
図版21　1　建物22全景（北から）
　　2　建物22完掘状況（西から）
図版22　1　建物22　2365柱穴断面（西から）
　　2　建物22　2368柱穴断面（西から）
　　3　建物22　2367柱穴断面１
　　（北東から）
　　4　建物22　2367柱穴断面２
　　（南西から）
　　5　建物22　2369柱穴断面１
　　（南東から）
　　6　建物22　2369柱穴断面２
　　（北西から）
　　7　建物22　2370柱穴断面（南から）
　　8　建物22　2371柱穴断面（西から）
図版23　1　建物23・24全景（西から）
　　2　建物24完掘状況（東から）
図版24　1　2030井戸検出状況（北から）
　　2　井戸枠検出状況（南東から）
　　3　井戸枠内木製品検出状況（上から）
　　4　井戸断面（南から）
　　5　井戸枠内網代出土状況（南から）
　　6　網代取り上げ（上から）
　　7　井戸枠最下段検出状況１（南から）
　　8　井戸枠最下段検出状況２（南から）
図版25　1　403井戸　井戸枠上段（南西から）
　　2　井戸枠下段断面（南から）
図版26　1　403井戸断面（北から）
　　2　井戸枠上段検出状況（西から）
　　3　井戸枠上段折櫃検出状況（南から）
　　4　折櫃内面角（南から）
　　5　折櫃合わせ目内面（南西から）
　　6　井戸枠下段検出状況１（南から）
　　7　井戸枠下段検出状況２（南から）
　　8　井戸枠最下段断面（南から）
図版27　1　153井戸（南から）
　　2　井戸検出状況（北東から）

	3	井戸枠最下段検出状況（南から）
	4	196井戸（南から）
	5	井戸検出状況（北から）
	6	井戸枠内土器出土状況（北から）
図版28	1	413土坑断面（北から）
	2	413土坑土器出土状況（東から）
	3	287土坑断面（北から）
	4	791土坑断面（南から）
	5	763土坑断面１（南東から）
	6	763土坑断面２（北から）
	7	794土坑断面（南から）
	8	797土坑断面（南から）
図版29	1	804土坑断面（西から）
	2	815土坑断面（西から）
	3	831土坑断面（南から）
	4	834土坑土器出土状況（南から）
	5	862・1256土坑断面（南西から）
	6	862土坑断面（北東から）
	7	866土坑断面（南から）
	8	873土坑断面（南から）
図版30	1	1000土坑土器出土状況（南から）
	2	1014土坑断面（西から）
	3	1330土坑断面（西から）
	4	1164土坑断面１（東から）
	5	1164土坑断面２（南東から）
図版31	1	２区古代の溝検出状況（南から）
	2	２区古代の溝（南西から）
図版32	1	２区溝中の杭断面１（南から）
	2	２区溝中の杭断面２（南から）
	3	401溝群土器出土状況（西から）
	4	1415土坑断面（北から）
	5	386土坑断面（西から）
	6	386土坑・385井戸の重複関係（西から）
	7	2321土坑断面（北から）
	8	2360土坑断面（南から）
図版33	1	建物１・２全景（南西から）
	2	建物１～３全景（南西から）
図版34	1	建物１　2140柱穴断面（東から）
	2	建物１　2136柱穴断面（北西から）
	3	建物１　2143柱穴断面（南東から）
	4	建物１　2134柱穴断面（北東から）
	5	建物２　2083柱穴断面（東から）
	6	建物２　2150柱穴断面（南西から）
	7	建物２　2146柱穴断面（南西から）
	8	建物２　2148柱穴断面（北から）
図版35	1	建物３全景（南から）
	2	建物３　2121柱穴断面（西から）
	3	建物３　2131柱穴断面（東から）
	4	建物３　2122柱穴断面（東から）
	5	建物３　2120柱穴断面（北から）
図版36	1	建物８～11と古墳時代の溝・土坑（西から）
	2	建物８～11（西から）
図版37	1	建物８　631柱穴断面（南から）
	2	建物８　628柱穴断面（南から）
	3	建物８　595柱穴断面（北東から）
	4	建物８　616柱穴断面（東から）
	5	建物９　643柱穴断面（南から）
	6	建物９　597柱穴断面（西から）
	7	建物９　645柱穴断面（南から）
	8	建物９　601柱穴断面（南東から）
図版38	1	建物10　627柱穴断面（南から）
	2	建物10　525柱穴断面（南から）
	3	建物10　534柱穴断面（南から）
	4	建物11　659柱穴断面（北から）
	5	建物11　633柱穴断面（西から）
	6	建物11　613柱穴断面（南から）
	7	建物11　609柱穴断面（西から）
	8	建物11　605柱穴断面（南から）
図版39	1	建物12～16と古墳時代の溝・土坑（東から）
	2	建物12・13全景（北から）
図版40	1	建物15・16完掘状況（西から）
	2	建物12　1412柱穴断面（南東から）
	3	建物12　1429柱穴断面（北西から）

4　建物12　1448柱穴断面（北東から）
5　建物12　1450柱穴断面（南西から）

図版41　1　建物16　1569柱穴断面（東から）
2　建物16　1568柱穴断面（北から）
3　建物16　1581柱穴断面１（南西から）
4　建物16　1581柱穴断面２（北東から）
5　建物16　1561柱穴断面（南西から）
6　建物16　1579柱穴断面（西から）
7　４・６区　第12面全景（東から）

図版42　1　288井戸（西から）
2　288井戸・281土坑断面（西から）
3　井戸全景（南から）
4　井戸枠内土器出土状況（東から）
5　井戸枠除去後（東から）

図版43　1　409井戸断面（北から）
2　井戸枠内瓢箪・土器（東から）

図版44　1　409井戸　井戸枠検出状況（東から）
2　井戸上層断面（北から）
3　井戸枠内土器出土状況（南から）
4　井戸枠を縛る紐（北から）
5　井戸枠裏込め土除去時１（北東から）
6　井戸枠裏込め土除去時２（東から）
7　井戸枠を縛る紐（東から）
8　井戸枠内出土瓢箪取り上げ

図版45　1　412井戸検出状況（西から）
2　井戸上層断面・土器出土状況（東から）
3　井戸上層断面（西から）
4　断面除去時土器出土状況１（南から）
5　断面除去時土器出土状況２（南から）
6　断面除去時土器出土状況３（南から）
7　井戸下層断面（東から）
8　最下層土器出土状況（東から）

図版46　1　385井戸断面１（北から）
2　井戸枠内最下層土器出土状況（北から）
3　井戸断面２（北から）
4　井戸枠取り上げ１
5　井戸枠取り上げ２

図版47　1　1396井戸土器・木製品出土状況（西から）
2　井戸検出状況（西から）
3　井戸上層断面（東から）
4　出土土器・木製品（西から）
5　最下層土器・木製品出土状況（南西から）

図版48　1　754井戸検出状況（東から）
2　井戸上層断面（南西から）

図版49　1　754井戸枠内最下層土器出土状況（南から）
2　最下層土器出土状況（南西から）

図版50　1　754井戸　井戸枠検出状況（上から）
2　井戸枠内断面（南西から）
3　井戸枠内木製品出土状況（上から）
4　井戸枠内土器出土状況１（上から）
5　井戸枠内土器出土状況２（南から）
6　井戸枠内最下層土器出土状況１（上から）
7　井戸枠内最下層土器出土状況２（上から）
8　井戸枠内出土土器に巻かれた紐

図版51　1　406溝・407土坑土器出土状況（西から）
2　406溝・407土坑断面（西から）
3　414土坑断面（西から）
4　411土坑完掘状況（東から）
5　411土坑断面（西から）

図版52　1　1857溝土器出土状況（北から）
2　1962・1963土坑断面（南から）
3　436土坑断面（西から）
4　540土坑断面（南西から）
5　1987土坑断面（南から）
6　1385溝断面（東から）
7　1386溝断面（東から）
8　1387溝断面（東から）

図版53　1　1398土坑土器出土状況（南東から）
2　1398土坑検出状況（南から）
3　1389溝断面（東から）
4　1397土坑土器出土状況・断面（北から）
5　1397土坑土器出土状況（北から）
図版54　1　1391溝断面１（東から）
2　1391溝断面２（東から）
3　1625土坑断面（北から）
4　1684土坑断面（北から）
5　1405土坑断面（北から）
6　785土坑断面（南から）
7　842土坑（北から）
8　846土坑断面（南から）
図版55　1　749土坑（南から）
2　749土坑断面（北東から）
3　749土坑土器出土状況（南から）
4　895土坑断面（西から）
5　902土坑断面（南西から）
6　902土坑木製品出土状況（南から）
7　902土坑完掘状況（南から）
8　894土坑断面（南から）
図版56　1　844土坑（東から）
2　844土坑断面１（北から）
3　844土坑断面２（西から）
4　844土坑から派生する溝断面（南から）
5　929土坑断面（南西から）
図版57　1　耕作溝と古墳・古代遺構の重複関係（３区西側・南から）
2　2312土坑断面（南から）
3　2373土坑土器出土状況（西から）
4　2373土坑断面（西から）
5　1395土坑と1386溝の重複関係（西から）
6　840溝内側土器出土状況（北東から）
7　425製塩土器集積（南から）
8　2420製塩土器集積（南から）
図版58　1　落ち込み土器・木製品出土状況（６区・北から）
2　落ち込みと剣形土製品（５区・南から）
3　竈片出土状況（６区・東から）
4　土器群出土状況（５区・西から）
5　木製品出土状況（５区・東から）
図版59　1　５区　落ち込み肩部（南から）
2　土器群出土状況（６区・東から）
3　獣骨出土状況（５区・南から）
4　土器群出土状況（５区・北から）
5　鉄鏃出土状況（５区・南から）
6　木製鐙出土状況（５区・南から）
7　斧柄出土状況（６区・南西から）
8　木製弓出土状況（６区・南東から）
図版60　1　４区　第12層中足跡検出状況（北西から）
2　２区　第14面全景（西から）
3　２区　第14面足跡検出状況(北から)
4　２区　第15面全景（西から）
5　２区　第15面流路断面（北から）
6　２区　第15面流路先端部分足跡検出状況（西から）
7　１区　第15面全景（南東から）
8　１区　第15ｂ層鳥形木製品出土状況（西から）
図版61　出土遺物（須恵器・土師器・土製品）
図版62　出土遺物（須恵器・土師器）
図版63　出土遺物（須恵器・土師器）
図版64　出土遺物（須恵器・土師器）
図版65　出土遺物（須恵器）
図版66　出土遺物（須恵器）
図版67　出土遺物（須恵器）
図版68　出土遺物（須恵器）
図版69　出土遺物（須恵器・土師器・土製品・瓦）
図版70　出土遺物（瓦塼）
図版71　出土遺物（須恵器・土師器）
図版72　出土遺物（須恵器・土師器）

図版73　出土遺物（須恵器・土師器）
図版74　出土遺物（須恵器・土師器）
図版75　出土遺物（須恵器・土師器）
図版76　出土遺物（須恵器・土師器）
図版77　出土遺物（須恵器）
図版78　出土遺物（須恵器）
図版79　出土遺物（須恵器）
図版80　出土遺物（須恵器）
図版81　出土遺物（須恵器）
図版82　出土遺物（須恵器）
図版83　出土遺物（須恵器・土師器）
図版84　出土遺物（土師器）
図版85　出土遺物（土師器）
図版86　出土遺物（須恵器）
図版87　出土遺物（須恵器）
図版88　出土遺物（須恵器・土師器）
図版89　出土遺物（須恵器・土師器）
図版90　出土遺物（土師器）
図版91　出土遺物（土製品）
図版92　出土遺物（土製品）
図版93　出土遺物（土製品）
図版94　出土遺物（土製品）
図版95　出土遺物（土製品）
図版96　出土遺物（土製品・弥生土器）
図版97　出土遺物（土製品・石製品）
図版98　出土遺物（金属製品・石製品）
図版99　出土遺物（金属製品）
図版100　出土遺物（金属製品）
図版101　出土遺物（木製品）
図版102　出土遺物（木製品）
図版103　出土遺物（木製品）
図版104　出土遺物（木製品）
図版105　出土遺物（木製品）
図版106　出土遺物（木製品）
図版107　出土遺物（木製品）
図版108　井戸枠転用準構造船
図版109　井戸枠転用準構造船
図版110　井戸枠転用準構造船
図版111　出土動物骨

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

本書に記載する、讃良郡条里遺跡内の発掘調査は、第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴って実施したものである。讃良郡条里遺跡03－６は大阪府寝屋川市讃良東町に所在する。

当該遺跡は、埋蔵文化財包蔵地として周知されていたため、道路建設に先立って確認調査が平成13年（2001年）～平成15年（2003年）におこなわれた。これらの調査成果を踏まえ、また一部は並行しながら、平成14年（2002年）４月から讃良郡条里遺跡（その１）、同（その２）、同（その３）として、本格的な発掘調査が実施された。その後、同遺跡内の道路予定地で、讃良郡条里遺跡03－１、同03－２、同03－３、同03－４、同03－５の発掘調査がおこなわれた。

第２節　調査の経過

讃良郡条里遺跡03－６の調査期間は、複数年にまたがるものであるが、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所との受託契約は、単年度契約となっている。

平成16年４月に国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所と「第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡発掘調査（その７）」として、平成17年３月までの受託契約を結び、発掘調査を開始した。また翌年度にも同名の受託契約を結び、調査を継続した。

その後、平成18年４月に同事務所と「第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡遺物整理　讃良郡条里遺跡（７）遺物整理」として、平成20年３月までの受託契約を結び、整理作業を中心としながら、平成17年度末時点での未調査箇所の発掘調査をおこなった。

第３節　現地公開

調査の期間中である平成17年10月15日（土）に、現地公開を実施した。公開をおこなった箇所は、讃良郡条里遺跡03－４調査地、03－６調査地である。また03－４、03－６それぞれの調査地で、03－４・03－５・03－６の調査で出土した遺物を野外展示した。

現地公開実施にあたっては、周辺自治会・関連市町村及び関係機関に呼びかけ、寝屋川市広報には掲載を依頼した。

当日は雨天であったにもかかわらず、参加者は180名を超え、そのほとんどは寝屋川市域から来られた方々であった。このことは当遺跡の発掘調査に対する地元での関心の高さが窺え、現地公開を実施できたことの意義の大きさを物語っている。

写真１　現地公開の様子（03－６調査区）

写真２　現地公開の様子（03－４調査区）

第２章　調査の方法

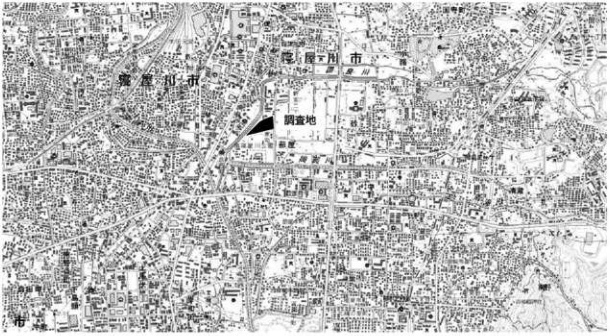
発掘調査および整理作業においては、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】　2003．8」に従っておこなった。

第１節　発掘調査

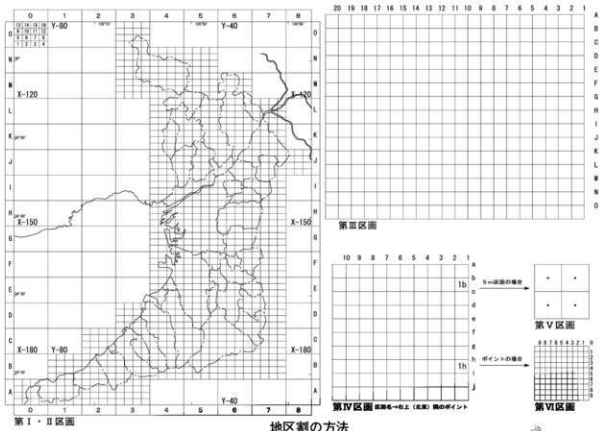
現地での発掘調査をおこなう前に事前調査を実施しており、周辺環境への配慮をはじめとして、寝屋川市、周辺地元自治会など関係諸機関との調整をおこなった。調査では掘削土の仮置き場所の関係、水田用水路の確保、道路工事の施工計画との関係等から、調査地を10の調査区に分割した。平成16・17年度に調査した１～７区、すなわち讃良郡条里遺跡03－６の調査区については、北東から南西への順で調査区番号を付した。いっぽう、平成18・19年度に調査した８～10区、すなわち讃良郡条里遺跡06－３の調査区については、調査着手順に番号を付している。

調査地内に地層観察用のトレンチを、発掘調査の原因となった第二京阪道路の基準線に平行して北東から南西方向に設置した。これは本調査地より東に位置する、讃良郡条里遺跡03－５や03－４と地層の比較検討をおこなうことを目的としており、各調査担当者間で調査着手時に取り決めたトレンチ設置である。さらに各調査区の地層を的確に捉えるため、複数の連続するトレンチを設けた。

調査時におこなった測量は、世界測地系に準拠する平面直角標系第Ⅵ系を基準としており、水準については、東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。遺構面の測量には、必要に応じてヘリコプターをカメラステーションとして使用する航空写真測量を実施した。またデジタルカメラを用いて、オルソフォトを作成するコンピューターソフト（クラボウ社製クラベス－Ｋ）も導入し、遺構の平面実測や大型遺物の平面実測に使用している。



第１図　調査地の位置



第２図　地区割りの方法と調査区割り

調査時の掘削方法については、盛土及び現代の耕土と、明らかに近世に堆積したと判断できる地層を、重機を用いて掘削した。その後、基本層序でいう第１層から人力によって掘削をおこない、遺構や遺物の検出をおこなった。基本的には、第12層と呼称している自然堆積層の上面を、最終遺構検出面としてとらえ調査を終了している。ただし、一部の区画で、第12層よりも下層に弥生時代の遺構・遺物が含まれていると想定されたため、部分的に下層の調査を行っている。

第２節　整理作業

４年度にわたる調査で、コンテナバッド300箱におよぶ遺物が出土した。平成18年４月からは京阪調査事務所、平成19年３月からは京阪調査事務所門真分室にて、出土遺物の整理作業をおこなった。整理

作業についての国土交通省との委託契約は、すべて単年度で締結されており、平成18年度は主に出土遺物・遺構図面・遺構写真の管理を目的とした各種台帳の作成と、出土遺物の接合作業をおこなった。平成19年度は出土遺物の実測および製図作業、遺構図面の製図作業をおこない、これらの図面を用いて本報告書を作成した。

第3章　位置と環境

第1節　地理的環境

讃良郡条里遺跡は、生駒山系の北端にあたる枚方丘陵から、西に広がる沖積地上に立地する。遺跡の範囲は、東西約1.65km、南北約2.65kmに及ぶ。遺跡の南東部分は、四條畷市域に入るが、それ以外は寝屋川市域に入る。本書で報告する讃良郡条里遺跡03－6と06－3は遺跡の南西端にあたり、遺跡内を東西に流れる讃良川の左岸に位置する。調査地は、西に向けて緩やかに低くなる地形を呈する。当地周辺における、現行水田地割の一部には、条里制施行以来そのまま受け継がれたと考えられるものもある。また、調査地付近を流れる、楠根川と讃良川の現在位置は人工的に固定されたものであるが、これら二河川の前身河川により、当調査地を含め周辺の地形が形作られたといえよう。

第2節　歴史的環境

これまでの当センターによる讃良郡条里遺跡の調査は複数次にわたっており、すでに刊行されている報告書もいくつかある（表1）。また、周辺の小路遺跡、高宮遺跡、郡屋北遺跡についても調査報告がされているため、ここでは既刊報告書との重複を避け、概略のみ記述する。

旧石器時代の調査成果としては、高宮遺跡、讃良川遺跡、讃良川川床遺跡、忍ヶ丘駅前遺跡から国府型のナイフ形石器が出土している。南山下遺跡からは有舌尖頭器が、岡山南遺跡からは木葉状尖頭器が出土している。

縄紋時代の調査成果としては、高宮遺跡で縄紋前期の石鏃・石錐・石匙が出土している。讃良川遺跡では船元式（中期）の土器が、砂遺跡では縄紋時代中期後半・後期後半の土器が出土している。更良岡山遺跡では晩期の土壙墓27基が検出されている。また当遺跡の既往の調査でも中期から後・晩期の土器が出土している。

弥生時代の調査成果としては、高宮八丁遺跡で前期から中期の遺構が検出されており、石庖丁や鍬、鋤などの農耕具が出土している。

古墳時代の調査成果としては、最も古いものとして、小路遺跡の前方後方墳（古墳時代初頭）があげられる。高宮遺跡では古墳時代後期の集落が丘陵斜面で検出されている。郡屋北遺跡では古墳時代後期の大規模集落が確認されている。長保寺遺跡では集落の遺構は少ないものの、古墳時代後期の須恵器、土師器、木製品が大量に出土している。また平地から生駒西麓にかけては、更良岡山古墳群（中期から後期）、太秦古墳群（後期）、石宝殿古墳（終末期）が点在する。

古代（飛鳥から平安時代）の調査成果としては、高宮遺跡で大型掘立柱建物群が確認されたことがあげられよう。また高宮廃寺、讃良寺跡、正法寺跡の古代寺院も調査（確認）され、不確定ながら伽藍配置の復元もされている。

表１　当センターによる既往の調査報告一覧

調査名	所在地	調査年度	報告書名	
讃良郡条里遺跡００（確認）	寝屋川市高宮 四条畷市砂地先	平成12年度	『讃良郡条里遺跡、小路、打上遺跡、畑子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾嶽経塚、長尾東地区』	第77集
讃良郡条里遺跡０１（確認２）	寝屋川市高宮・新家 四条畷市砂地先	平成13年度	『讃良郡条里遺跡、小路、打上遺跡、畑子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾嶽経塚、長尾東地区』	第77集
讃良郡条里遺跡０１（確認３）	寝屋川市新家二丁目他	平成13年度	『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・大東古墳群、打上遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』	第93集
讃良郡条里遺跡０２－１	寝屋川市高宮	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その１）』	第109集
讃良郡条里遺跡０２－２	寝屋川市高宮	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その２）』	第98集
讃良郡条里遺跡０２－３	寝屋川市高宮・小路	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その３）』	第114集
讃良郡条里遺跡０２－３－２	寝屋川市高宮・小路	平成14年度	『讃良郡条里遺跡（その３）』	第114集
讃良郡条里遺跡０２－４	寝屋川市堂島東３丁目 讃良東町地先	平成14年度	『讃良郡条里遺跡、寝屋市遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』	第101集
讃良郡条里遺跡０３－１	寝屋川市高宮・小路	平成15年度～ 平成17年度	『讃良郡条里遺跡VI』	第173集
讃良郡条里遺跡０３－２	寝屋川市高宮地先　他	平成15年度～ 平成17年度	『讃良郡条里遺跡V』	第160集
讃良郡条里遺跡０５－１	寝屋川市小路地先	平成17年度	『讃良郡条里遺跡V』	第160集
讃良郡条里遺跡０５－２	寝屋川市梅屋地先	平成17年度	『讃良郡条里遺跡VI』	第173集
讃良郡条里遺跡０３－３	寝屋川市梅屋南町地先	平成18年度～ 平成18年度	『讃良郡条里遺跡IV』	第138集
讃良郡条里遺跡０６－１－１	寝屋川市高宮地先	平成18年度	『寝屋東遺跡、太東遺跡、太東古墳群、大尾遺跡、讃良郡条里遺跡、砂遺跡』	第176集

第４章　　基本層序

調査地は生駒山系の北西の麓、現在の行政区で言うと寝屋川市域に入るが、四條畷市との市境にも近接する。北に讃良川と隣接しており、近世から現代の水田耕作土層を重機により除去すると、中世末から近世にかけて讃良川からもたらされた洪水砂が確認された。この洪水砂の堆積を第１層とし、以下層序番号を付して調査にあたった。

（１）中世～近世初頭の水田耕作にともなう地層

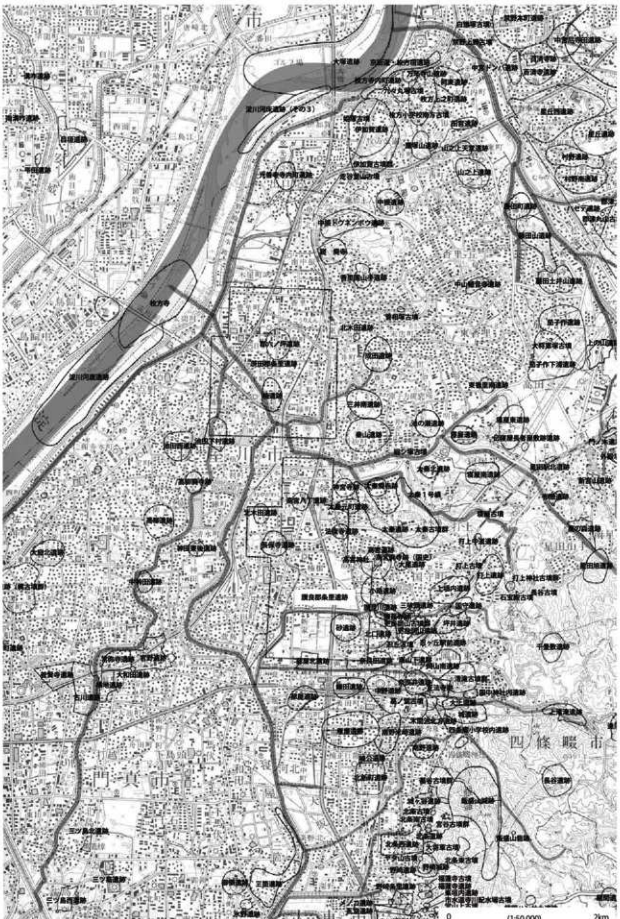
以下に述べる第１～７層の地層は第８層の堆積後、調査区内の地表面がほぼ平坦化した後に、水田耕作により形成された地層である。

第１・２・３層　現代の水田耕作土を除去した直下の地層を第１層とした。基本的には讃良川からもたらされた粒径の大きな（直径３～５㎜）洪水砂が主体となるが、５区の高所では洪水砂がもたらされなかったようで、下層である第２・３層が露頭する。出土土器がないため、遺物からは洪水砂の下限を決めることはできない。第２・３層の時期からみて17世紀以降と考えられる。

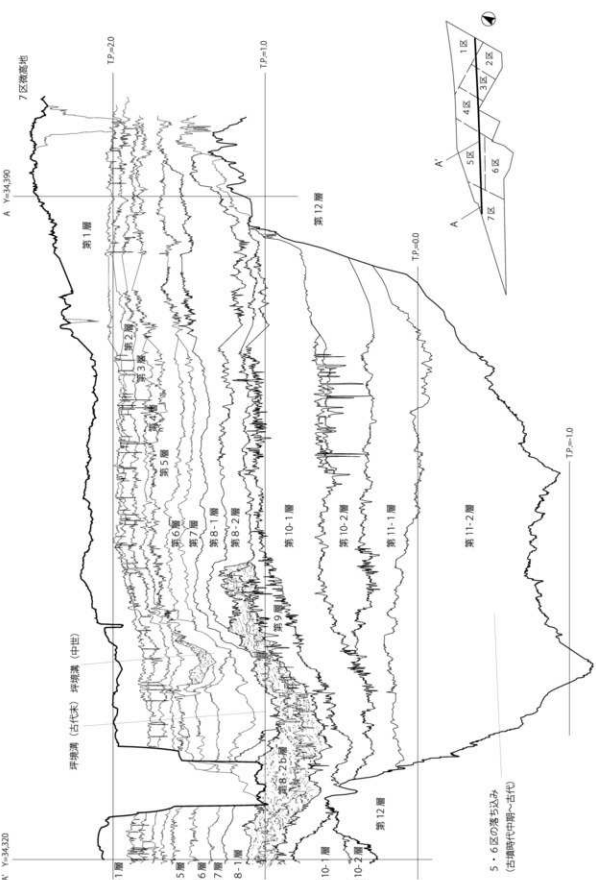
第２・３層は古土壌で人的な撹拌の痕跡が認められるが、全域にわたって確認できるものではない。湿地状の環境下または、荒田などの開墾の手が入らない環境下で堆積した地層と考えられる。地層内に包含されている出土土器の下限は、16世紀後半である。

第４層　中世末の自然堆積層。色調はオリーブ褐色または暗オリーブ褐色を呈し、シルトで構成される。地層の観察から、第４層の堆積時期は湿地状の堆積のもと植物が繁茂していた状況が想定できる。３区から４区にかけての低所では、第４層は上下二つにわかれ、上層が他の調査区と同じ第４層、下層を第４－２層として細分できる箇所もあった。

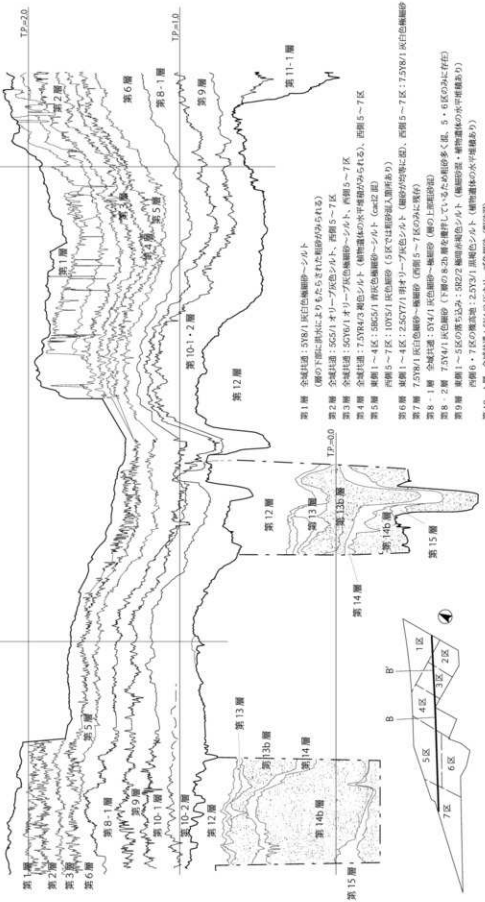
第５層　中世の古土壌。概して灰色ないしは黒灰色を呈し、細砂で構成され直径２㎜程度の砂粒が混じる。水田耕作により形成された可能性が考えられ、人為的な撹拌痕跡が認められる。ただし大規模な撹拌行為により形成された地層とは言いがたい。



第３図　周辺の遺跡



第4図　基本層序断面図①



第10・2層　東側1～4区：7.5Y3/1 灰色極細砂～シルト（下層の12層の粒径が揃ったため極細砂～シルトが主体となる。西側5～7区：7.5Y6/2 灰オリーブ色細砂（下層の12層の粒径が比較的荒いため細砂が主体となる）

第11・1層　10Y3/1 オリーブ黒色極細砂～シルト（4～6区の落ち込み部分のみに存在）

第11・2層　5Y3/1 オリーブ黒色極細砂～シルト（11・1層との境界部分に多量の植物遺体が水平堆積。層中には植物遺体・種子・木材片・貝殻・土器片多く含まれる）

第12層　ほぼ全域：5GY6/1 オリーブ灰色極細砂～シルト、1～6区の最表層：7.5YR2/2 黒色細砂～粗砂　第14層　5Y4/1 灰色極細砂（シルトブロック層が点在）

第15層　2.5Y3/1 黒褐色シルト（層中に植物遺体の水平堆積がみられる）

第1層　全域平均：5Y8/1 灰白色極細砂～シルト（層の下部に砂礫によりもたらされた粗砂がみられる）

第2層　全域平均：5G5/1 オリーブ灰色シルト、西側5～7区

第3層　全域平均：5GY6/1 オリーブ灰色極細砂～シルト、西側5～7区

第4層　全域平均：7.5YR4/3 褐色シルト（植物遺体の水平堆積がみられる）、西側5～7区

第5層　東側1～4区：5BG5/1 青灰色極細砂～シルト（coa混）

西側5～7区：10Y5/1 灰色細砂（5区では粗砂混入部所あり）

第6層　東側1～4区：2.5G7/1 明オリーブ灰色シルト（細砂がやや多く混）、西側5～7区：7.5YR6/1 灰色極細砂

第7層　7.5YR4/1 灰色細砂～極細砂（西側5～7区のみに存在）

第8・1層　全域平均：5Y4/1 灰色細砂～極細砂（層の上部混在）

第8・2層　7.5Y4/1 灰色細砂（下層のまさ層を挟持している点が特徴的。5・6区のみに存在）

第9層　東側1～5区の落ち込み：5B2/2 褐灰色粗砂シルト（植物混砂・植物遺体の水平堆積あり）

西側6・7区の落ち込：2.5Y3/1 黒褐色シルト（植物遺体の水平堆積あり）

第10・1層　全域平均：5Y4/2 灰オリーブ色細砂（粗砂混）

第5図　基本層序断面図②

第４層は自然堆積層であるため、第５層の上面は撹拌された痕跡がさほど無く、地層の最終堆積状況（廃絶の状況）が乱されずに残存している。地層内に包含されている出土土器の下限は、15世紀後半である。

第６・７層　中世の古土壌。概して灰色を呈し、細砂で構成される。第５層同様、水田耕作により形成された地層であるが、上層の撹拌により層の上面は乱されている。第６層と第７層は砂粒の混入度合で分層したが（第６層のほうが砂粒を多く含む）、堆積環境としては同一のものであり、本来は一つの層として認識すべきかもしれない。第６層は調査地全域に広がり、第７層は５・６区だけに認められる。第６層内に包含されている出土土器の下限は、13世紀前半である。

（２）中世前半の地層

第８層　中世の古土壌。灰色ないしは黒灰色を呈し、細砂で構成される。上層である第６・７層よりやや黒色化しており、土壌が発達している。５区で検出された坪境溝よりも北側では、第８層が２層にわかれ、上層を第８－１層、下層を第８－２層とした。第８層は目立った遺物が出土していないため、時期は不明だが、上下層の時期から判断して12世紀代の形成と考えられる。第８－２層は直下の洪水砂（第８－２ｂ層）を撹拌しているため、層中に粗砂が混じる。第８－２ｂ層は５区の東側のみに存在する。５・６区西側の落ち込みだけにもたらされた洪水砂で、調査区全域にまたがるものではない。そのため、第８－２層も５・６区のみに認められる地層である。

第９層　古代末から中世にかけての自然堆積層。暗赤灰色を呈し、シルトまたは極細砂で構成され、植物遺体を多く含む。第４層と同様、湿地状の堆積環境のもと、植物が繁茂していた状況が想定できる。第９層は調査区全域で確認でき、４区や６区の高所では層の厚みは薄くなるものの、依然植物遺体を含んでいる状況が観察できる。地層内に包含されている土器の下限は、11世紀後半である。

（３）古墳時代～古代の地層

以下は落ち込み部分に堆積した地層である。

第10層　古代の古土壌。第10層は５・６区では２層にわかれ、上層を第10－１層、下層を第10－２層とした。第10層は調査区全域にわたって確認できる古土壌で、概して褐灰色を呈し、極細砂で構成される。湿地状の環境のもとで堆積したと考えられるが、断面観察から、地層の下部には下層の第11層または第12層を撹拌した痕跡が認められる。遺構の章で後述するが、第10－１層を除去した面（第11面）からは、この地層が堆積した溝が多数検出されている。このことから、第10層の堆積時には湿地状の環境にありながらも、人為的な撹拌行為がおこなわれていたことを示す。第10－１層は５区の中央部では、下層である第10－２層と第11－１層を侵食しており、なだらかな窪地状地形を作り出している。第10－１層に包含されている土器の下限は、９世紀後半である。第10－２層は５区と６区の落ち込みのみで確認された地層。緑灰色の細砂ないしは極細砂を主体とする。本来落ち込み内で水平に堆積していたものと考えられるが、東側部分は第10－１層に侵食されている。第10－１層のような明確な撹拌痕跡はない。

第11層　古墳時代の古土壌。４・５・６区にわたる沼地状の落ち込みで確認できる（第112図）。第11層は第11－１・11－２層の二つにわかれる。第11－１層は灰色を呈し、主に極細砂で構成される。落ち込みにのみ堆積した地層であるため、明瞭な撹拌痕跡は認められない。地層内に包含されている土器の下限は、７世紀前半（初頭）である。第11－２層はオリーブ黒色を呈し、極細砂またはシルトで構成される。層の上部には多くの木屑、葉、種などの有機物の破片を包含し、落ち際ではそれらの有機物に混じって大量の土器片が含まれていた。第11－２層は当遺跡内で出土遺物を最も多く含む包含層で、隣接

する微高地に展開する居住域から廃棄されたものを数多く含んでいる。層の下部は最も低いところで、T.P.＝－1.0mに至り、現時点での地下水位よりも低いレベルに達している。そのため、層の下部は水分の含有量が多く、獣骨や金属製品が良好な遺存状況で出土した。

第12層　青灰色の極細砂、または灰白色の細砂で構成される自然堆積層。この地層の堆積により、調査区内の低地と高地が形成された。調査地および周辺の、古墳時代から古代・中世にかけての景観は、この地層の堆積によってつくりだされたといえる。調査区の東端では、第12層堆積以前の地表面（第13層上面）が高かったため（T.P.＝＋0.4～0.5m）、第12層の堆積は薄く、20～30cmの厚みであった。逆に調査区の西端では、堆積以前の地表面が低かったためか、第12層の堆積は1.5m以上と想定される。出土土器がないため、堆積時期は明確ではないが、当センターが実施した周辺の調査成果と照らし合わせると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて堆積したものと想定される。

（4）弥生時代～古墳時代の地層

以下の地層は、1・2・3・4・6区において確認されたものである。

第13層　灰白色ないしは灰オリーブ色の細砂から粗砂で構成される自然堆積層。洪水によりもたらされたと考えられ、2区の西側半分では、下層の第14・15層を侵食している。西側での堆積は厚く、2区では80cmの厚みがある。上部はやや黒色化しており、古土壌となっているが、顕著な遺構は確認できなかった。層中には厚さ約5cmのシルト層をはさむ。そのシルト層上面では、人の足跡がいくつも検出された。洪水の合間に人が移動していたのだろう。

第14層　暗緑灰色の細砂で構成される自然堆積層（第14b層）と、その上部のシルト（古土壌、第14層）である。下層である第15層が低い部分に堆積している。弥生時代後期の土器が数片出土している。

第15層　灰色のシルトから成る自然堆積層。上部には植物遺体の累重が顕著にみられることから、湿地状の環境下で堆積した地層といえる。弥生時代中期後半の土器片が1点出土している。

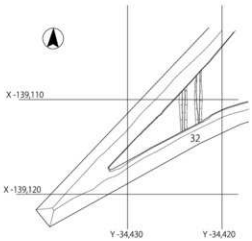
調査地での地層堆積環境を概観すると、以下のようになる。調査地の東側では、弥生時代後期までは湿地状の堆積環境が続いていたが、後期に入り数回の洪水がおこり、それにともなった地形の逆転現象がおきている。西側では、氾濫源から遠かったためか、弥生後期前後の洪水は確認できず、湿地状の堆積環境が続いたようである。その後、古墳時代初頭に堆積したと考えられる第12層により、調査区内の高地と低地が形づくられた。この地形的特長は、古墳時代中期（5世紀）から中世末（第4・5層堆積当初、16世紀前後）まで続き、近世初頭には高地と低地の落差のあまりない、緩やかな傾斜となって踏襲される。このように、古墳時代から近世初頭までの当地は、低い部分に各時代の地層が堆積するという後背湿地状の環境下にあったといえよう。中世末から近世になると、讃良川からの洪水砂（第1層）が、調査地一帯に供給されるのを期に水田耕作がおこなわれたようである。

第5章　　調査成果

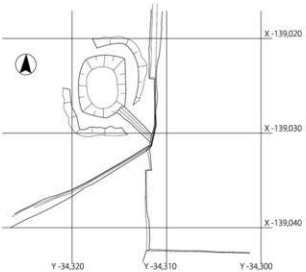
第1節　中世後半期の遺構面と遺物

（1）第2～4面の遺構と出土遺物

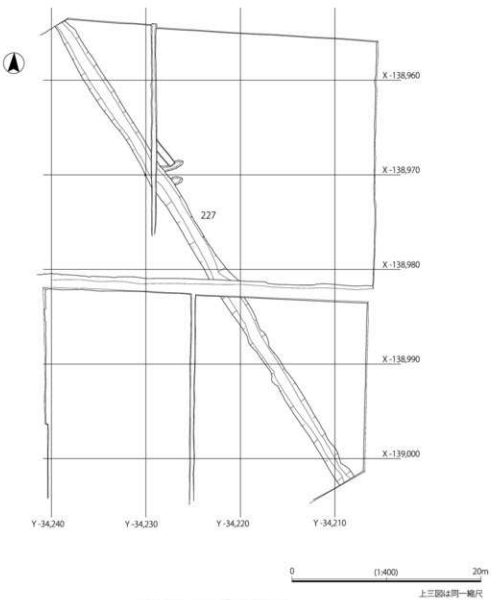
第2面　第1層を除去した遺構面。第1面は機械掘削直後の第1層上面であるため、本節では第2面から記述する。第1層は洪水砂であるため、下層の上面である第2面は上層の撹拌を受けずに残存して



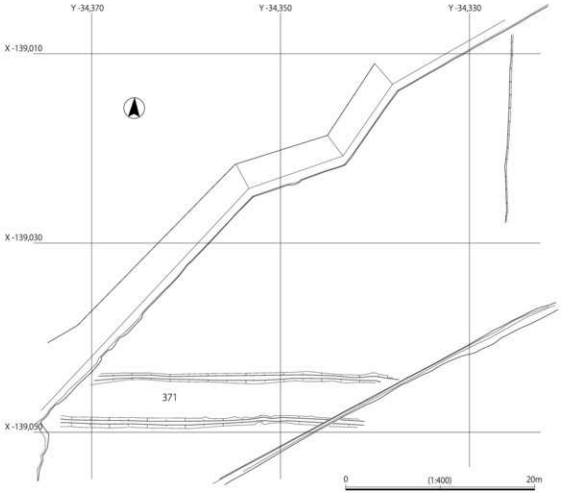
第６図　７区検出溝・堤



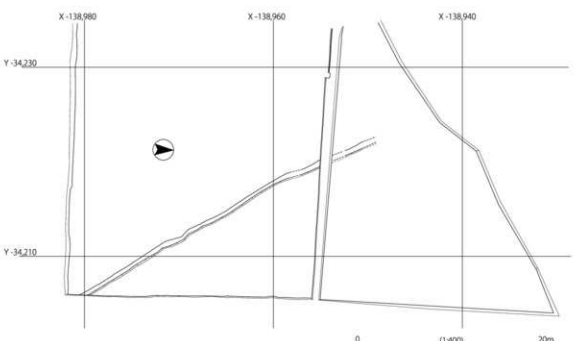
第７図　５区東南端検出土坑・堤



第８図　１・２区検出溝



第９図　５・６区検出坪境溝・堤



第10図　１区検出水田段差

いた。ただし、大規模な土地開発はおこなわれた様相はなく、検出された遺構は、西端で堤をともなう溝１条（32溝、第６図）と、中央部分で水溜状遺構１基（第７図）、東端で溝１条（227溝、第８図）である。

第３・４面　第２層を除去した遺構面（第３面）、第３層を除去した遺構面（第４面）では、顕著な遺構は検出されなかった。

（２）第５面の遺構と出土遺物

遺構　第５面は第４層を除去した遺構面である。第４層は植物遺体が累重する自然堆積層であるため、下層の上面である第５面は上層の撹拌を受けずに残存していた。

371坪境溝　５・６区では、条里地割による東西方向の坪境の溝を検出した（第９図）。溝の両側には盛土が施され、堤状に盛り上がっている。ただし、溝内の堆積土の大半が、極細砂やシルトといった止水堆積環境下に形成されたものであることから、溝は排水や取水を目的としたものではなく、条里地割の境界線を設定するために掘削されたと考えられる。

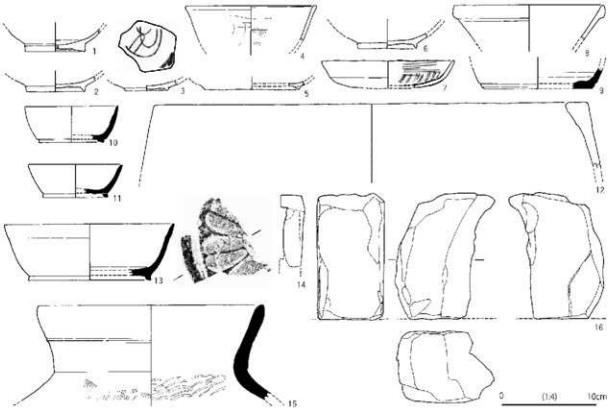
畦畔　５区の北側では、南北方向の水田段差を検出した（第９図）。いっぽう、１区の東端では、南北方向から東に約30°ふれた水田段差を検出した（第10図、図版２－５）。このように当地では、おしなべて東西南北方向に沿った形で、水田が区画されていたのではなかったことがわかる。ただし、これらの畦畔は、上層が自然堆積であるにもかかわらず、畦畔と水田面の高低差が低く、遺存状況が悪い。また、検出された畦畔は、調査区内のごく一部である。このことから、第５面廃絶の時点では、調査区全体で水田経営がおこなわれていたとは言いがたく、局所的に水田耕作をおこない、それ以外の土地は、荒田として放置されていた可能性が指摘できる。

出土遺物　溝中や畦畔上からは、時期を決定する遺物は出土していない。したがって、第５層の出土遺物から、第５面の廃絶時期を決定する以外に方法はない。第11図－１～７・12は第５層から出土した土器である。１は緑釉陶磁器椀、２・３・６は瓦器椀、12は瓦質火鉢である。この中では、１の緑釉陶磁器椀が最も古く９世紀後半、12の瓦質火鉢が最も新しく15世紀後半である。したがって、12の瓦質火鉢が示す15世紀後半が、第５面の廃絶時期に最も近く、坪境溝や畦畔は15世紀代に機能して、16世紀の前半に廃絶したと考えるのが妥当であろう。

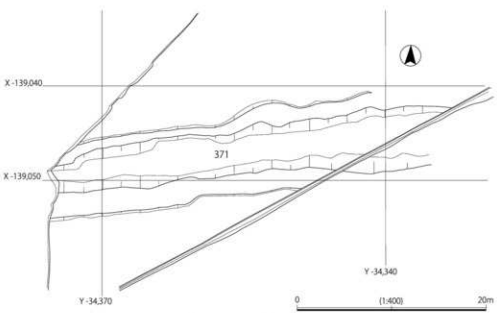
（３）第６～８面の遺構と出土遺物

第６～８面は基本的には、第５面と同じ遺構が連続して確認されたにとどまる。調査区中央部分（５・６区）では、先述した坪境溝（371溝）の下層部分を確認した（第12図）。調査区東端では南北方向から東に約30°ふれた水田段差が検出された。基盤層である第６～８層は古土壌の連続であるため、分離可能な場所と不可能な場所がある。とくに第６層と第７層は、西端の７区以外は分離不可能であったため、ここでは第６・７層一括出土遺物として報告する。

出土遺物　第６・７層から出土した遺物は、第11図－８～11・13・14（図版70）・15・16（図版70）である。この中で古いものは、14の軒丸瓦（７世紀第２四半期）、15の須恵器甕（古墳時代）、16の塼（７～８世紀）が挙げられる。いっぽう、最も新しいものは、８の白磁椀（Ⅳ類）で11世紀後半に位置づけられる。したがって、遺物からみた第６～８面の上限は、11世紀後半にあてられる。しかし、後述する第９面の廃絶時期が12世紀後半と考えられるため、第６～８面の上限は12世紀後半と捉えるのが妥当である。



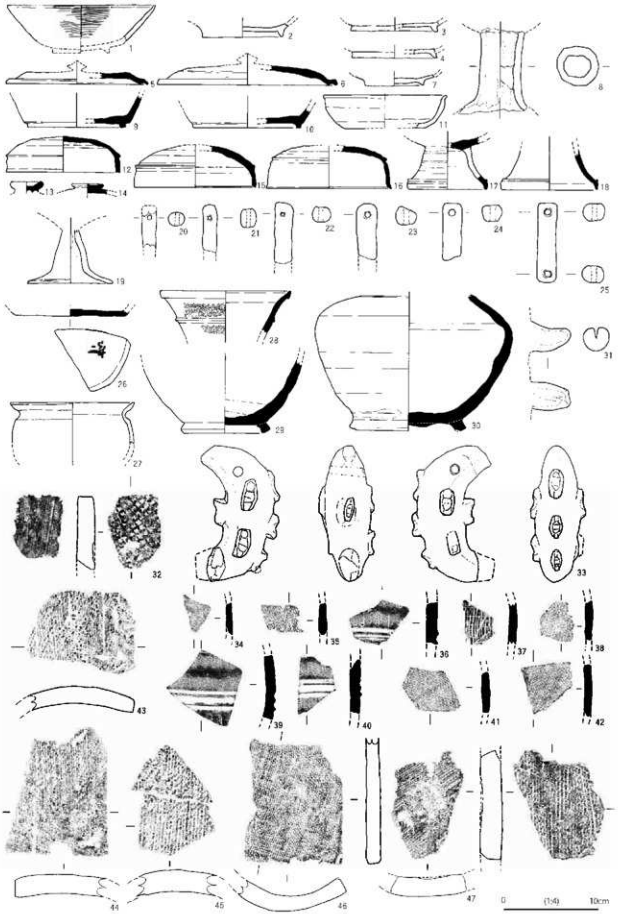
第11図　第５～７層出土遺物



第12図　371溝平面図

第２節　中世前半期の遺構と遺物

遺構　第９面（第８層除去面）で検出された遺構も、第５～８面と同じ遺構の連続である。下面の第10面（第９層除去面）では、これらの遺構が検出されなかったことから、第９面が上記の条里遺構の上限にあたると考えられる。ただし、第９層の堆積環境は、微高地上では植物が繁茂していた状態、低地では僅かながらの流水状態が想定できる湿地状の環境にあったと考えられる。このため、第９面の遺構



第13図　第９層出土遺物①（33は1/2）

検出状況は、第10面の廃絶状況を示すものではなく、直上の第８層堆積期間中に形成された遺構を示しているといえる。

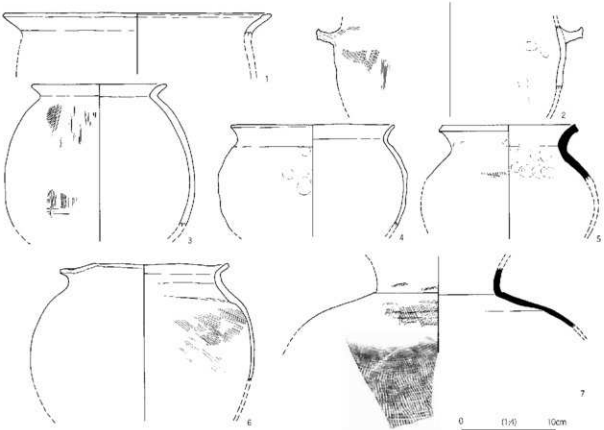
出土遺物　第13・14図は第９層から出土した遺物である（図版61・70・97）。これらの時期は、古墳時代（６世紀代）から中世までにわたる。新しいものでは、第13図－２・４・７が10世紀後半の黒色土器、１が12世紀後半の瓦器椀がある。殆どが低地からの出土で、かつ破片資料ばかりであることから、下層遺物や周辺の居住域からの流れ込みと考えられ、直接第９面の廃絶時期を示すものではない。第９面の廃絶時期については、１の瓦器椀から12世紀後半と考えられ、このことから、上層の条里遺構の上限も同様の時期となる。

第３節　古代末期から中世初頭の遺構と遺物

調査地である讃良郡条里遺跡の南西部では、基本層序の項で述べた第12層が庄内期前後に堆積すると、基本的な地形の大勢は形成され、微高地と低地の様相は近世まで保たれる。逆をかえせば、海抜1.0～2.0mという汀線に近い立地にありながらも、庄内期以降、大規模な洪水がおこらず、安定した堆積環境下にあった地域といえる。そのため以下に述べるような、古墳時代から古代にかけての集落関連の遺構が数多く検出されたといえよう。これは当調査地だけにあてまる状況ではなく、南に隣接する都屋北遺跡も同様であろう。

（１）第10面の遺構と出土遺物

遺構　第10面は第10層形成期間中の最終状況を示す遺構面で、主たる遺構は溝である。溝および溝以



第14図　第９層出土遺物②

外の平坦地では、面上には自然堆積層である第９層が堆積している。このことから、第10面は上層に撹拌（侵食）されることなく残存した遺構面であるといえる。調査区の北東部は微高地を形成しており、東と南に向かってなだらかに落ち込む傾斜を呈する。西南部にも微高地が形成されており、北に向かってなだらかに落ち込む傾斜を呈している。微高地上には、落ち込みに向かって溝が開削されている。１区から４区にかけては、南側の落ち込みに向かって南北方向の溝が開削されている（第16図、図版３－３・５）。このうち2418溝は、下面である第11面でも同じ場所に溝が確認できることから、第11面の段階から連続して排水用の溝として機能していたと考えられる。しかし、他の溝は第11面の溝とは位置がずれており、連続した機能を想定することはできない。これらは排水用の溝ではなく、畠の畝間の溝と考えられる。６区では、北側の落ち込みに向かって南北方向の溝１条が開削されている（図版３－４）。この溝は第10面段階のみ機能していたと考えられる。７区では、主に東西方向に溝が走るが（第15図、図版３－１）、これらは第11面の溝とほぼ同じ位置にあることから、第11面段階から継続して機能していたものと考えられる。ただし、７区では、溝が検出された地点と周辺では、顕著な高低差がみられない。そのため、これらの溝は取排水用のものではなく、畠の畝間の溝と考えられる。

出土遺物　第10面の遺構内堆積土から出土している遺物はごく少量かつ、小破片が多い。そのため、次項で述べる第11面の溝群検出時に出土した土器（第10－１層包含土器）のうち、最も新しいものが第10面廃絶の上限を示し、前項で掲げた第９層出土土器のうち、最も新しいものが下限を示しているといえる。第10面の廃絶時期については、以下の第11面の項でまとめて述べる。

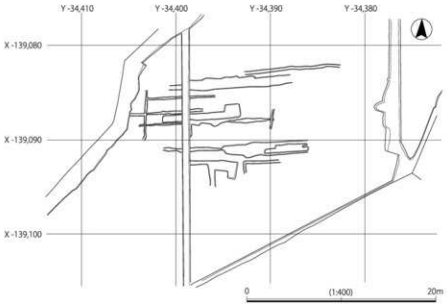
（２）第11面の遺構と出土遺物

遺構　基本層序の章で述べた第10－１層を除去して検出される遺構面。第11面での検出遺構の殆どは耕作溝で、堆積土は主に第10－１層。耕作溝は調査区の高地（T.P.＝＋0.8～1.6m）で検出され、東西南北の正方位に掘削され、格子状に交差している。調査区の北側１～４区では、南北方向の溝が約１m間隔で数多く掘削されているのに対し、東西方向の溝は５～10mの間隔を開けて掘削されている（第17図、図版４－１・３）。逆に、調査区の南側６・７区では、東西方向の溝が約１m間隔で掘削され、南北方向の溝は約５mの間隔で掘削されている（第18・19図、図版４－２・４）。溝は畠の畝立てをおこなう際に掘削されたものと考えられ、調査区の東と西で主となる溝の方向が違うのは、畝の方向の違いによるものと考えられよう。すべての溝は、下層遺構である古墳～平安時代の遺構の多くを侵食している（図版４－５）。

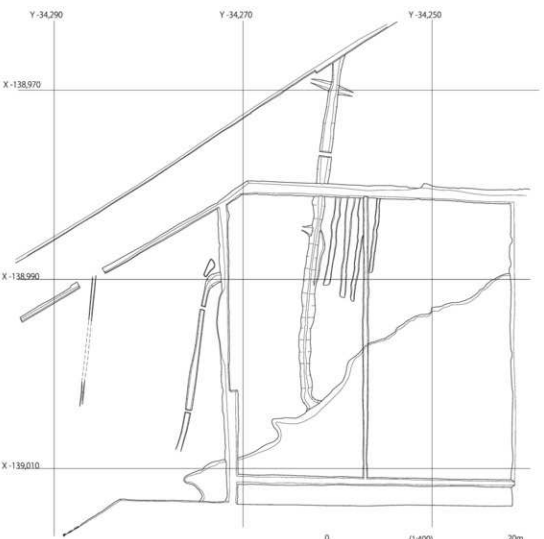
出土遺物　溝から出土した遺物はすべて細片で、完形に近いものは皆無である（第20図、図版61･70）。おそらく、畠耕作をおこなう際に、下層に包含されている遺物を撹拌したために溝内に包含されたと考えられる。そのため、出土遺物の時期は古墳時代から平安時代と長期にわたるが、この溝の掘削・機能の時期を示すものではない。出土遺物の中では、16の壺が最も新しい時期で、９世紀後半と考えられる。ただし、この土器の時期が直接溝の掘削開始時期を示すとはいえず、これよりも下った時期に掘削されたと考えるべきだろう。

第11面は畠作開始時に畝立てをおこなうために溝を掘削した状況を示し、その時期の上限は11世紀初め頃、第10面は畠が放置・廃絶されていた状況を示し、その時期の下限は12世紀後半と考えられる。

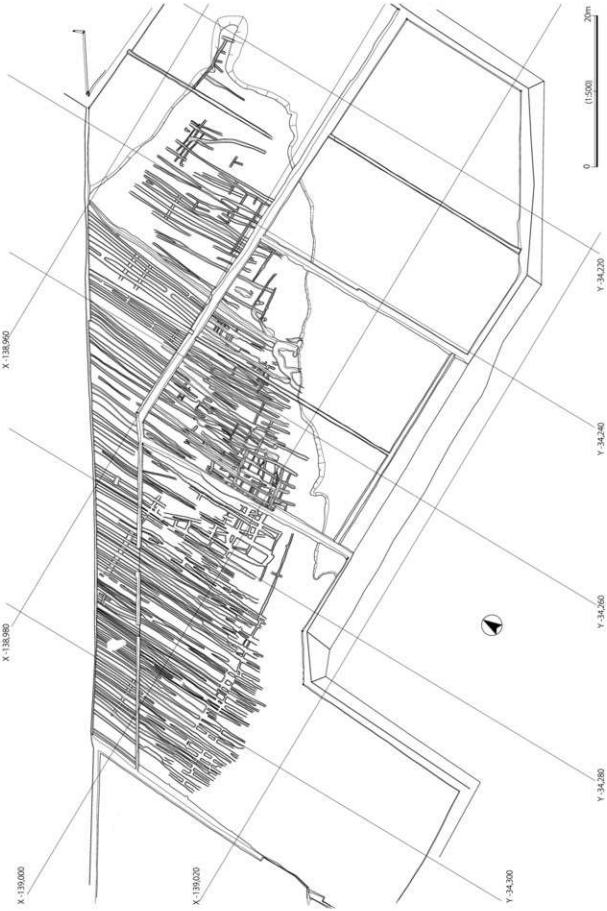
734盛土（第18図）　調査区の中央南側６区の微高地上で、落ち込み際を埋め立てる盛土を検出した。盛土はオリーブ灰色ないしは緑灰色を呈する、粗砂から細砂のブロックで構成されている。盛土上には、南側から耕作溝が延伸する形で掘削されており、盛土を除去した面からは耕作溝は検出されなかっ



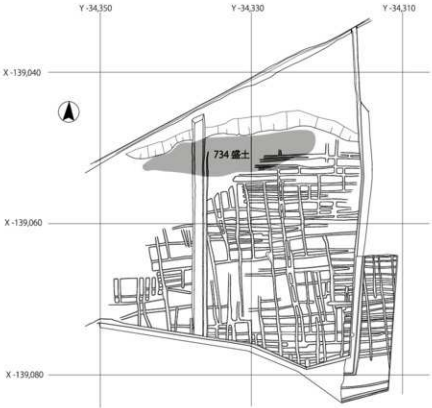
第15図　7区検出第10面溝群



第16図　1・3・4区検出第10面溝群

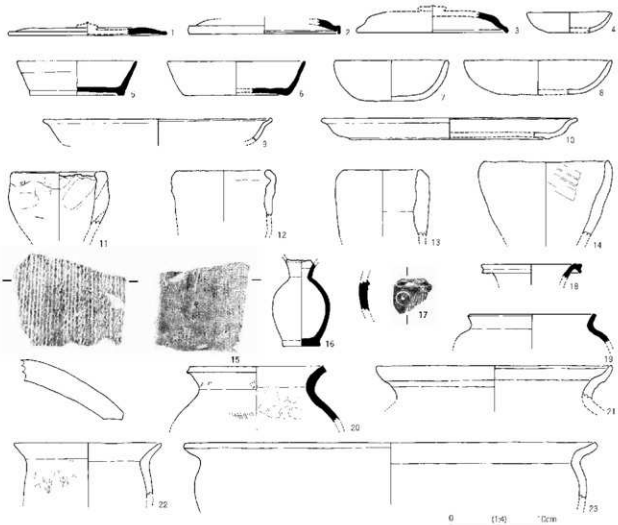


第17図　1～4区第11面平面図



第18図　5 区第11面溝群

第19図　7 区第11面溝群



第20図　溝群堆積土（第10－１層）出土遺物

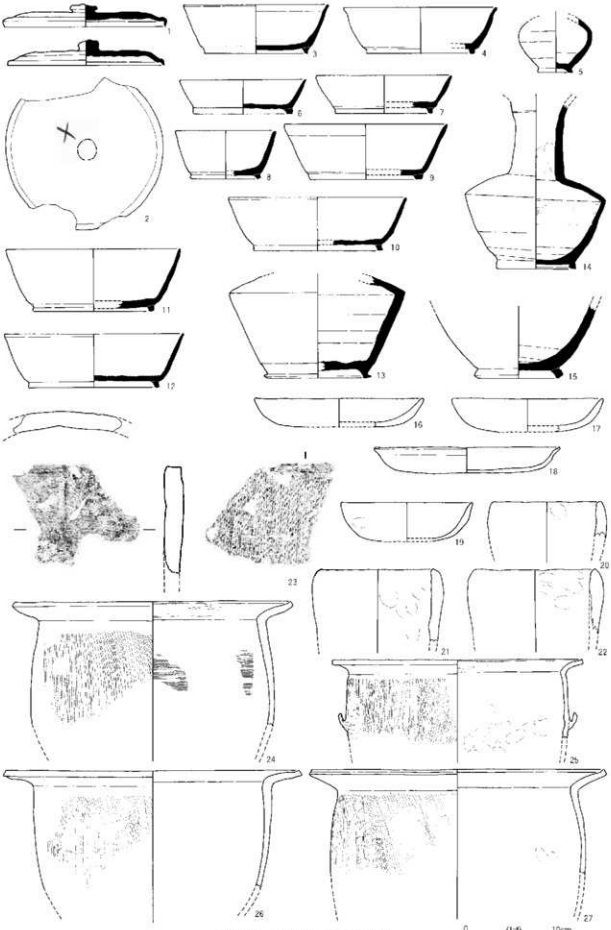
た。このことから、盛土は耕作域を広範囲化するためにおこなわれたと解釈され、盛土用の土砂は南側の微高地から運び込んだと考えられる。そのため盛土中からは、下層に包含された遺物が大量に出土した。この盛土出土遺物を検討することにより、当地における耕作溝の掘削開始時期とそれ以前の段階の建物群の機能時期の下限を知ることができる。

734盛土から出土した遺物は、第21図に示した（図版64～66・69）。完形の遺物が多く、古代の居住域の包含層をそのまま運び込んだ結果といえよう。出土土器は８世紀中頃から９世紀後半までのものに限られ、後述する建物群の機能時期と重なっている。

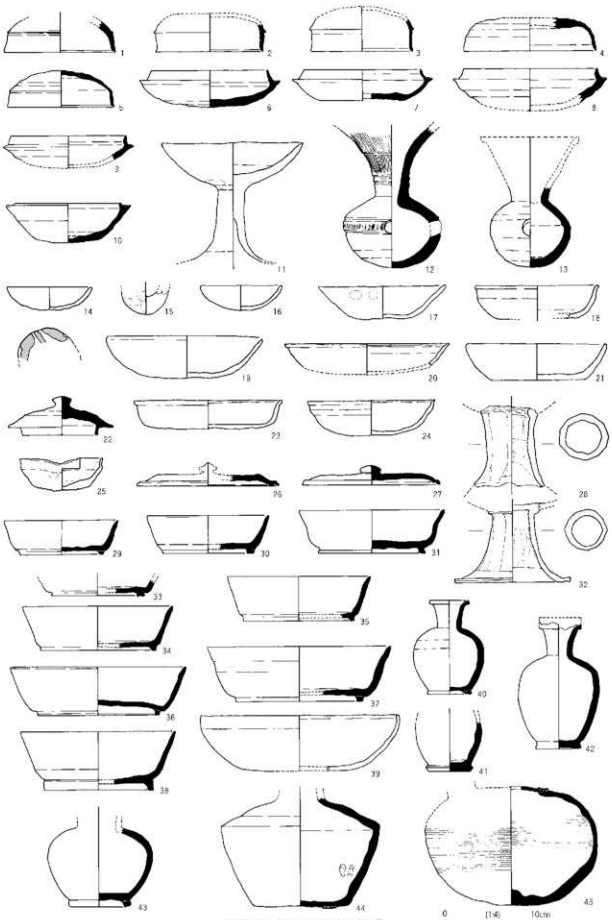
第４節　古代の遺構と遺物―第12面の遺構と出土遺物①―

基本層序の章で述べた第10－２層と第11－１・11－２層を除去して検出される遺構検出面を第12面と呼ぶ。この面では、古墳時代から古代の建物や井戸、土坑、溝が検出された。このうち古代の遺構群は、上層である第10－１層形成時、すなわち全面的な畠耕作がおこなわれた時期の11世紀初頭には廃絶したといえよう。したがって、個々の遺構が機能した上限については、個別の時期差はあっても、11世紀初頭までに廃絶していたと考えてよい。

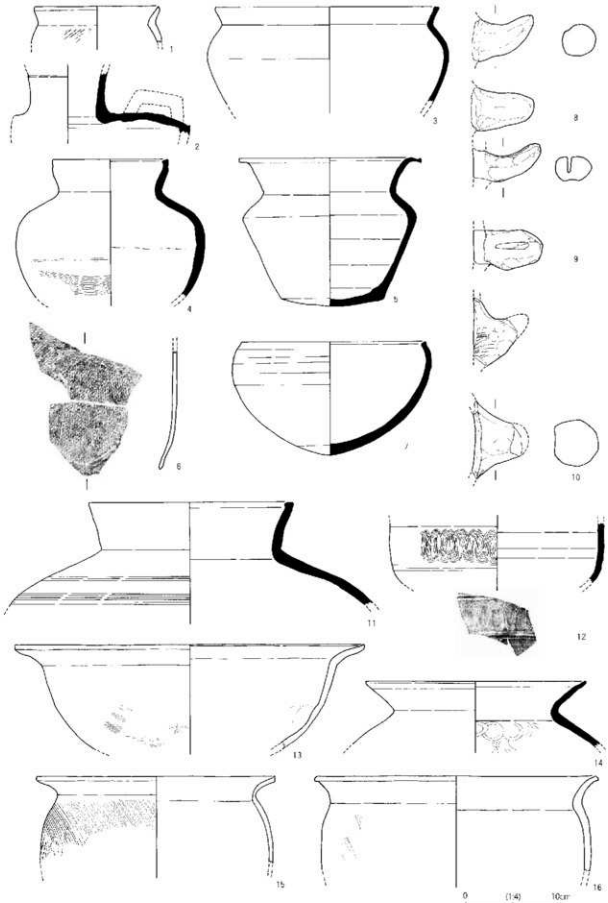
（１）包含層出土遺物（第22～26図、図版64～70・91・94・95）



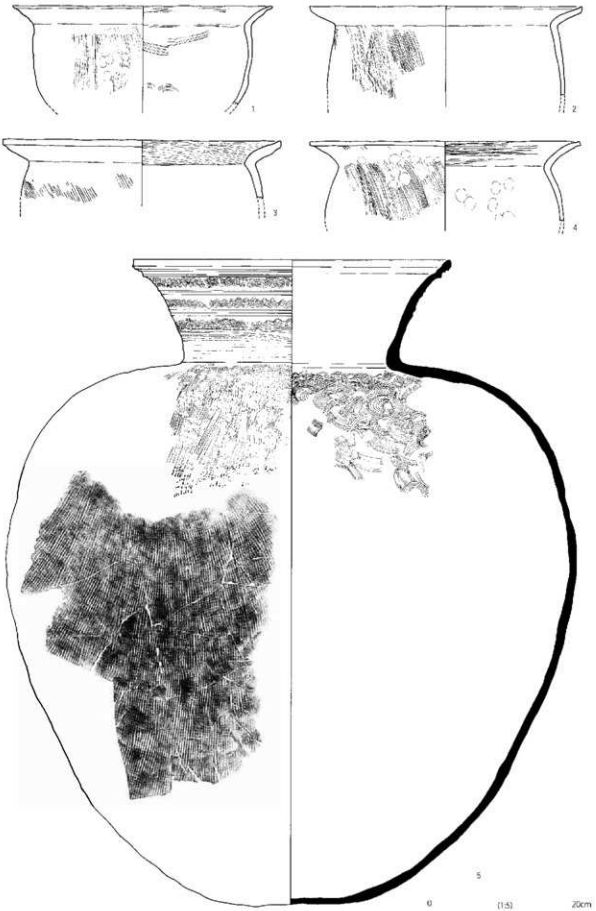
第21図　734盛土内出土遺物



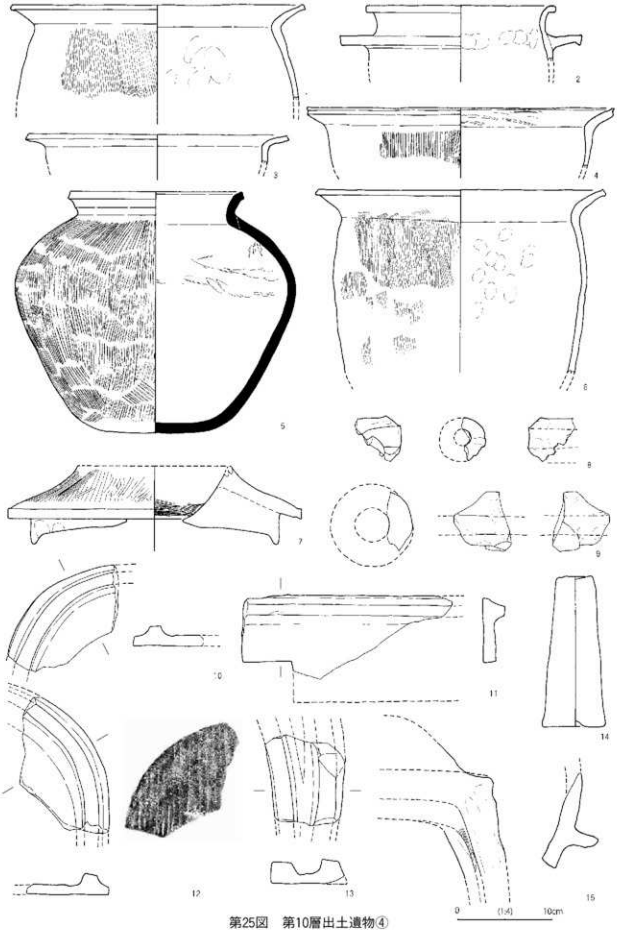
第22図　第10層出土遺物①



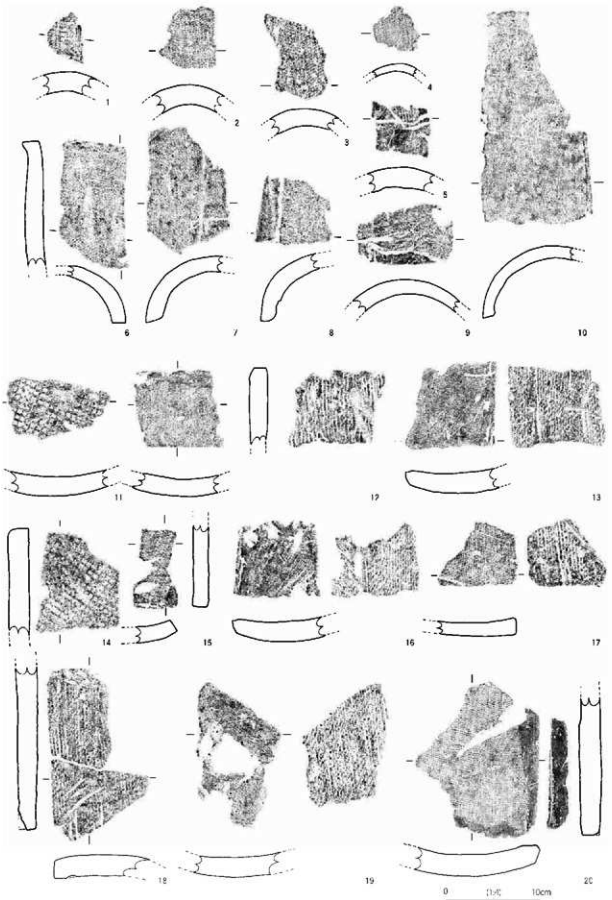
第23図　第10層出土遺物②



第24図　第10層出土遺物③



第25図　第10層出土遺物④



第26図　第10層出土遺物⑤

遺構について説明する前に、飛鳥～平安時代までに形成されたと考えられる第10－２層から出土した遺物について述べておきたい。第22図－１～13、第23図－６・９・11・12、第24図－５、第25図－５・７・10～15は古墳時代のもので、古代の開発時に下層遺物が混入したものと考えられる。このうち特筆すべきは、第24図－５と第25図－７・14である。第24図－５は調査地北側２区の北端で出土した須恵器大型甕である（第55図アミ掛け部分）。横たわって出土し、上半分が削平されていた。土器の直下は基盤層である第12層である。斜面地に横たえられ、上部は第10層形成段階で削平されたものと推測する。遺構にともなう可能性が高いが、上部は第10－２層により削平されているため、輪郭はわからない。甕棺の可能性を指摘しておく。第25図－７は蓋埴輪の傘部の破片か。第25図－14は調査区南側の微高地から低地に向かう落ち際（第60図×地点）で出土した土師製支脚である。上部と下部に凹みがみられ、煤が若干付着していることから、カマドに用いられた支脚の可能性が高い。

以上で述べた遺物以外は、すべて奈良～平安時代のものである。須恵器杯や土師器甕など日用雑器が多くを占めるが、特筆すべきは第22図－14、第23図－７、第25図－８・９である。第22図－14は灯明皿で、８世紀末から９世紀前半頃のもの。７区の落ち込みから出土した。内面には油と灯芯による煤の付着がみられる。第23図－７は完存する鉄鉢形須恵器。６区の落ち込みから出土した。日用雑器ではなく、僧侶が托鉢に用いるものである。第25図－８・９は輪の羽口。４・７区の落ち込みから出土した。当地で鍛冶行為がおこなわれていたことを示唆する。下層の包含遺物であった可能性も考えられ、古墳時代のものかもしれない。第26図は第10層から出土した丸・平瓦である。平瓦の多くは一枚作りで、奈良時代のものと考えられるが、11・14は桶巻き作りで製作された可能性が高い。20は側面に布目圧痕がみられることから、布目押圧技法で製作されたものといえる。これらの瓦と第６・７層から出土した第11図－14の軒丸瓦、第23図－７の鉄鉢形須恵器を合わせて、当地に持仏堂が存在した可能性が示唆でき興味深い（註１）。

（２）掘立柱建物

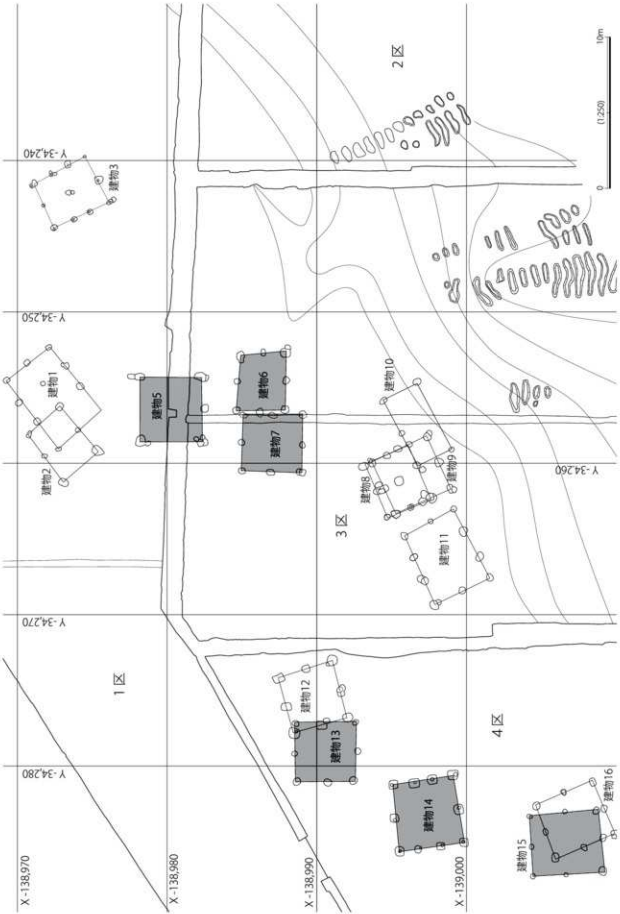
以下に述べる建物５～７、13～15は調査地の北西部の微高地に集中している（第27図）。

建物５（第27・28図、図版９）　桁行は２間（想定）で総長4.3m、柱間はほぼ等間。梁間は２間（想定）で総長4.3m、柱間はほぼ等間（柱間の長さは芯々間で計算、以下で述べるすべての建物も同様）。建物の軸はN－２°－Eで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。桁行と梁間中央の柱で検出できたものは、440柱穴一つだけである。柱穴の平面形はすべてほぼ円形で、断面形はすべてほぼ方形。柱痕、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等はみられなかった。

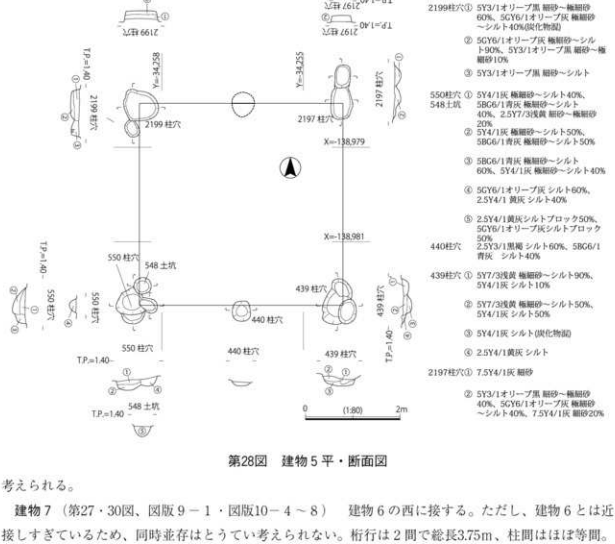
柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を、以下で述べる他の建物（６・７区の建物）と合わせて、古代の建物と考えられる。

建物６（第27・29図、図版９－１・図版10－１～３）　建物５の南西側に隣接する。桁行は２間で北側の総長3.48m、南側の総長3.75m。南と北で約１尺分の長さの差があるが、どちらも柱間はほぼ等間。梁間は２間で東の妻側の総長3.0m、西の妻側の総長3.3m。桁行同様、東と西で１尺分の長さの差がみられる。おそらく、北西隅の462柱穴が東西南北に１尺ずつずれているために、桁行梁間の総長が食い違うのであろう。建物の軸は西の妻側がN－２°－Wであるが、東の妻側はN－５°－Wで、ややふれが大きい。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形はすべてほぼ方形。柱穴内では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は見られなかった。

建物５同様、柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古代の建物と



第27図　1～4区古代の建物配置図



第28図　建物５平・断面図

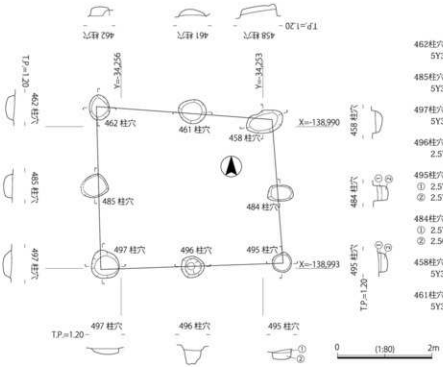
考えられる。

建物７（第27・30図、図版９－１・図版10－４～８）　建物６の西に接する。ただし、建物６とは近接しすぎているため、同時並存はとうてい考えられない。桁行は２間で総長3.75m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長3.75m、柱間はほぼ等間。建物の軸はＮ－５°－Ｅで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形はすべてほぼ方形。573柱穴（図版10－７）・587柱穴・682柱穴（図版10－５）・683柱穴（図版10－６）で、柱の抜き取り痕跡を確認した。残りの柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は見られなかった。

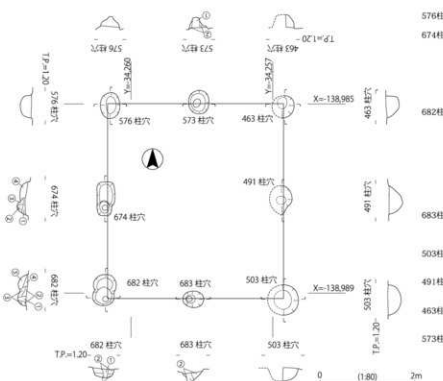
第45図－１は674柱穴（図版10－４）から出土した須恵器壺の口縁部片であるが、古墳時代のものと考えられ、建物の機能時期を直接示すものではない。建物５・６同様、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古代の建物と考えられる。また、軸の触れ具合から、建物５と７は同時並存していた可能性が高い。

建物13（第27・31図、図版11－１～４・図版12－２・図版39）　桁行は２間で総長3.9m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長3.8m、柱間はほぼ等間。建物の軸はＮ－１°－Ｅで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形はすべてほぼ方形。1455柱穴で、柱の抜き取り痕跡を確認した。残りの柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は見られなかった。他の建物同様、柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古代の建物と考えられる。

建物14（第27・32図、図版12・図版13・図版39－１）　建物13の南西に位置する。桁行３間で総長3.9m、梁間２間で総長4.3m、柱間はほぼ等間。西側の桁行中央柱間（1.5m）が両脇の柱間（1.4m）より

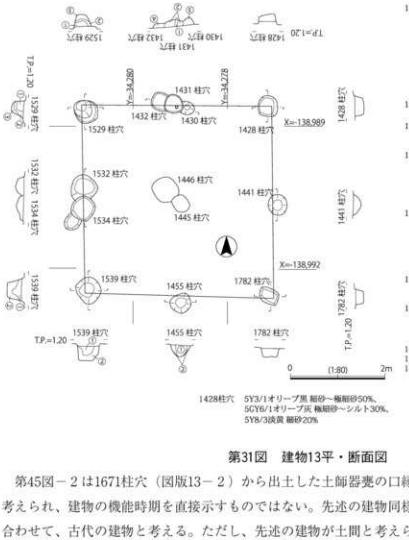


第29図　建物６平・断面図



第30図　建物７平・断面図

やや広いことから、ややいびつではあるが、西側の壁に扉がついた可能性がある。建物の軸はＮ－14°－Ｅで、やや座標の南北方向からは西に傾く。桁行中央の棟筋には、床束（1546柱穴・1548柱穴）が２基みられる。柱穴の平面形はすべて方形で、断面形もすべてほぼ方形。残存する深さが平均15cm程度であったが、すべての柱穴で、柱の抜き取り痕跡を確認している。ただし、礎板はみつからなかった。床束の平面形は２基とも円形、掘形も円形である。



第31図　建物13平・断面図

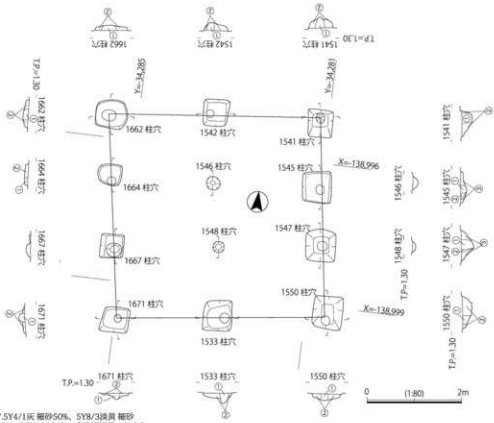
第45図－２は1671柱穴（図版13－２）から出土した土師器甕の口縁部片であるが、古墳時代のものと考えられ、建物の機能時期を直接示すものではない。先述の建物同様、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古代の建物と考える。ただし、先述の建物が土間と考えられるのに対し、建物14は床張りであること、また、建物軸も上記の建物の軸とはややずれること、これらの事実から、他の建物とは違った機能を有していたと考えられる。

建物15（第27・33図、図版11－５～８・図版39－１・図版40－１）　建物14の南に位置する。桁行は２間で総長4.0m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長4.65m、柱間はほぼ等間。建物の軸はN－４°－Wで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべてほぼ円形。1584柱穴（図版11－６）・1593柱穴で柱の抜き取り痕跡、1577柱穴（図版11－５）で、柱材の残欠を検出した。残りの柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は見られなかった。

第45図－３は1577柱穴から出土した土製錘片であるが、古墳時代のものと考えられ、建物の機能時期を直接示すものではない。上記の建物同様、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古代の建物と考える。

次に述べる建物17～22は、調査地の南側部分に位置し、先に述べた一群とは谷状の落ち込みを挟んだ位置関係にある（第34図）。

建物17（第34・35図、図版14・図版15）　６区の微高地上で、谷状の落ち込み際に位置する。桁行は３間で総長6.8m、柱間は西側2.15m、中央2.5m、東側2.15m。梁間は２間で東の梁行は等間で総長4.2mであるが、西の梁行は芯々間で測ると、北側から順に1.8m、2.4mで等間にならない。中央の柱穴（841



1662柱穴①7.5Y4/1灰 細砂50%、5Y8/3淡黄 細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%
②5Y8/3淡黄 細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト30%、7.5Y4/1灰 細砂20%

1664柱穴①7.5Y4/1灰 細砂70%、5Y8/3淡黄 細砂30%
②7.5Y4/1灰 細砂40%、5Y8/3淡黄 細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト30%

1667柱穴　7.5Y4/1灰 細砂50%、5Y8/3淡黄 細砂50%

1671柱穴①7.5Y4/1灰 細砂70%、5Y8/3淡黄 細砂30%
②5Y8/3淡黄 細砂70%、7.5Y4/1灰 細砂30%

1533柱穴①7.5Y4/1灰 細砂90%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%(炭化物混)
②7.5Y4/1灰 細砂50%、5Y8/3淡黄 細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%

1550柱穴①7.5Y4/1灰 細砂90%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%
②7.5Y4/1灰 細砂60%、5Y8/3淡黄 細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%

1547柱穴①7.5Y4/1灰 細砂80%、5Y8/3淡黄 細砂20%
②5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト40%、5Y8/3淡黄 細砂40%、7.5Y4/1灰 細砂20%
③7.5Y4/1灰 細砂80%、5Y8/3淡黄 細砂20%

1545柱穴①7.5Y4/1灰 細砂80%、5Y8/3淡黄 細砂20%
②5Y8/3淡黄 細砂80%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%
③7.5Y4/1灰 細砂70%、5Y8/3淡黄 細砂30%

1541柱穴①7.5Y4/1灰 細砂90%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%
②7.5Y4/1灰 細砂70%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト15%、5Y8/3淡黄 細砂15%

1542柱穴①7.5Y4/1灰 細砂80%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%、5Y8/3淡黄 細砂10%
②7.5Y4/1灰 細砂40%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト30%、5Y8/3淡黄 細砂30%

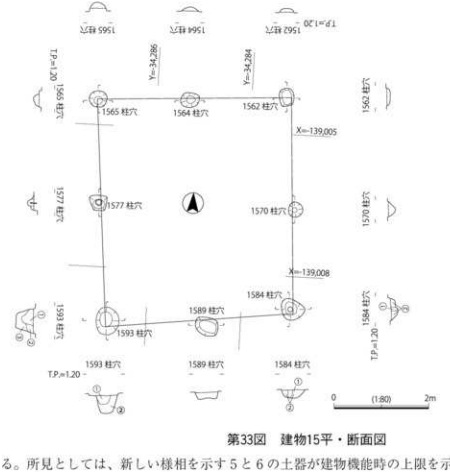
1546柱穴 7.5Y4/1灰 細砂50%、5Y8/3淡黄 細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%

1548柱穴 7.5Y4/1灰 細砂50%、5Y8/3淡黄 細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%

第32図　建物14平・断面図

柱穴〔図版15－８〕）の端いっぱいに柱が立てられていた可能性が高い。桁行３間、柱間は７尺・８尺・７尺、梁間２間７尺等間の建物といえる。桁行中央の柱間が両側と比べて広いのは、扉を取り付けたためであろう。建物の軸はＮ－２°－Ｗで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形はすべて方形で、断面形もすべて方形。柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等が検出された柱穴はない。建物の破却時に、柱穴が掘り返され、その後埋め戻されたか、検出面そのものが礎板や柱の最下端よりも低いかのどちらかであろう。

柱穴からの出土遺物は、第45図－４（図版69）・５・６（図版61）である。４は格子目タタキ痕のみられる平瓦片で、７世紀代のものと考えられる。906柱穴（図版15－５）から出土した。５は土師器小型甕の口縁部付近の破片で、外面にハケ目（カキ目に近い）がみられる。８世紀前半と考えられる。836柱穴から出土した。６は土師器甕の口縁から胴部にかけての破片で、外面にハケ目がみられる。５と同様、８世紀前半と考えられる。1021柱穴（図版15－３・４）から出土した。これらの資料については、その包含層が建物破却後に堆積したのか、柱の根固め時の堆積なのかにより、大きく解釈は変わってく



第33図　建物15平・断面図

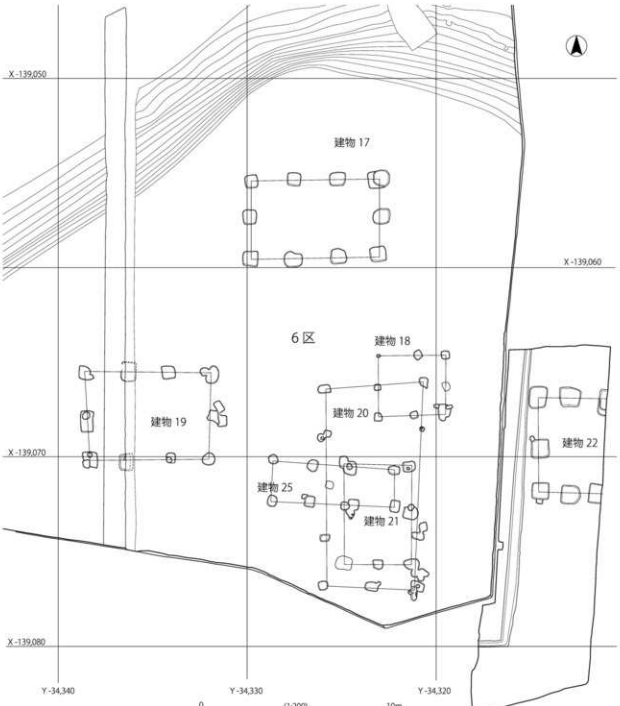
る。所見としては、新しい様相を示す５と６の土器が建物機能時の上限を示すものとして捉え、建物17の機能時期を８世紀後半から９世紀中頃までの間としておく。

今回の調査で検出した殆どの建物の周辺には、土坑が密集していた。居住にともなう廃棄行為や、構造物の建替えなどの活動痕跡の結果であろう。しかし、建物17の周辺だけは、同時期の土坑が密集せず、他の建物とは様相が異なる。したがって、他の建物とは機能の差があったと考えられる。

建物18（第34・36図、図版18－２・図版19－１～４）　建物17の南東に位置する。桁行は２間で総長3.2m、柱間はほぼ等間。梁間２間で総長3.4m、柱間は南の梁行ではほぼ等間であるが、北の梁行は東側1.45m、西側1.95mと等間にはならない。建物の軸はＮ－２°－Ｗで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。周辺には下面の古墳時代の遺構が集中しているため、柱穴内の堆積土中には、古墳時代の包含層のブロックが多くみられる。1100柱穴（図版19－４）で、柱の抜き取り痕跡がみられるのみで、他の柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は見られなかった。

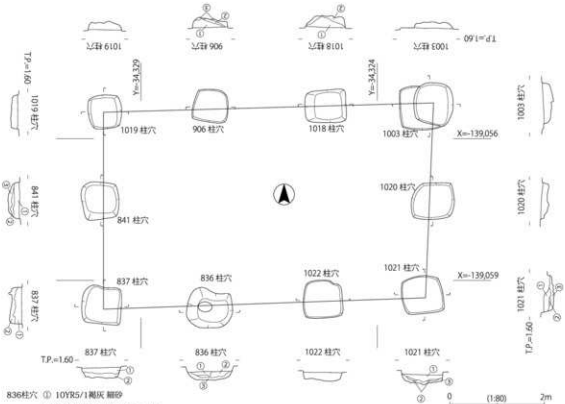
柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古代の建物と考えられる。

建物19（第34・37図、図版16・図版17）　建物17の南西、後述する建物20の西に位置する。桁行は３間で総長7.8m、柱間は西側3.3m、中央2.15m、東側2.35m。梁間は２間で総長4.65m、柱間はほぼ等間。桁行３間、柱間は11尺・７尺・８尺、梁間２間８尺等間の建物。扉が桁行のどの柱間に付いたかは不明。建物の軸はＮ－１°－Ｗで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形はすべて方形で、断面形もすべて方形。1137柱穴（図版17－２）・904柱穴・843柱穴（図版17－３）で、柱の抜き取り痕跡を確認した。それ以外の柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は検出できなかった。



第34図　6区古代の建物配置図

柱穴からの出土遺物は、第45図－７～10である。７と８は須恵器杯Ｂ蓋の口縁部分の破片である。明確な時期決定はできないが、８世紀後半にあたる。どちらも1372柱穴の柱根周囲の地層から出土。９は土師器の小型甕の口縁から屈曲部にかけての破片。古墳時代から飛鳥時代にかけてのもので、建物の存続期間を直接示すものではない。827柱穴（図版17－７）から出土。10は土師器甕の口縁から体部にかけての破片。８世紀後半のものである。1063土坑から出土した。以上の資料で、建物が機能していた時期を決定することができるのは、７・８・10の３点である。ただし、10は建物柱穴からの出土ではなく、1063土坑からの出土である。1063土坑は1064柱穴（図版17－８）と一体化しており、遺構間の重複関係は断面観察では確認できなかった。1063土坑は平面形状を見る限り、1064柱穴に建てられていた柱を北



836柱穴 ① 10YR5/1褐灰 細砂
② 10GY6/1緑灰 極細砂～シルト
③ 10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

1022柱穴 10YR5/1褐灰 細砂40%、5Y3/1オリーブ黒 細砂40%、10GY6/1緑灰 極細砂～シルト20%

1021柱穴 ① 10YR5/1褐灰 細砂
② 10GY6/1緑灰 極細砂～シルト
③ 10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

1019柱穴 10YR5/1褐灰 細砂

841柱穴 ① 10YR5/1褐灰 細砂
② 10GY6/1緑灰 極細砂～シルト
③ 10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

837柱穴 ① 10YR5/1褐灰 細砂
② 10YR5/1褐灰 細砂50%、10GY6/1緑灰 極細砂～シルト50%

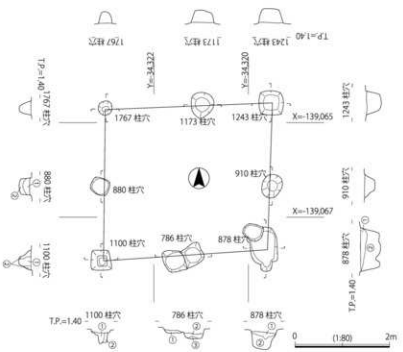
1020柱穴10YR5/1褐灰 細砂

1003柱穴10YR5/1褐灰 細砂

1018柱穴①10YR5/1褐灰 細砂
②10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

906柱穴 ①10YR5/1褐灰 細砂
②10GY6/1緑灰 極細砂～シルト
③10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

第35図　建物17平・断面図



1767柱穴　10YR5/1褐灰 細砂

880柱穴　① 5Y3/1オリーブ黒 細砂(炭化物混)
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂70%、5GY5/1オリーブ灰 細砂～極細砂30%

1100柱穴　① 2.5Y3/1黒褐 シルト
② 10GY6/1緑灰 極細砂～シルト70%、10YR5/1褐灰 細砂30%

786柱穴　① 10YR5/1褐灰 細砂
② 10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)
③ 5GY5/1オリーブ灰 細砂～極細砂80%、10YR5/1褐灰 細砂20%

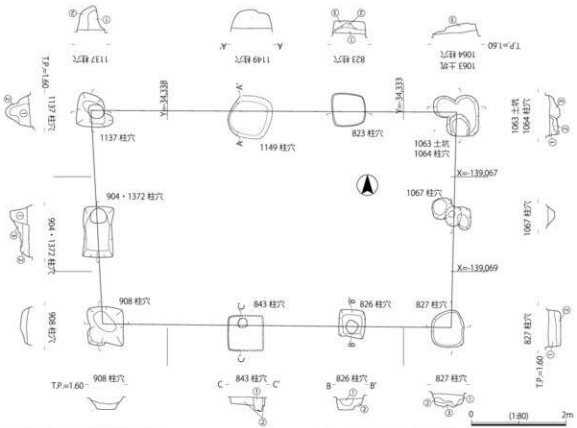
878柱穴　① 10YR5/1褐灰 細砂50%、10GY6/1緑灰 極細砂～シルト50%
② 10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

910柱穴　10YR5/1褐灰 細砂

1243柱穴　10YR5/1褐灰 細砂

1173柱穴　10YR5/1褐灰 細砂

第36図　建物18平・断面図

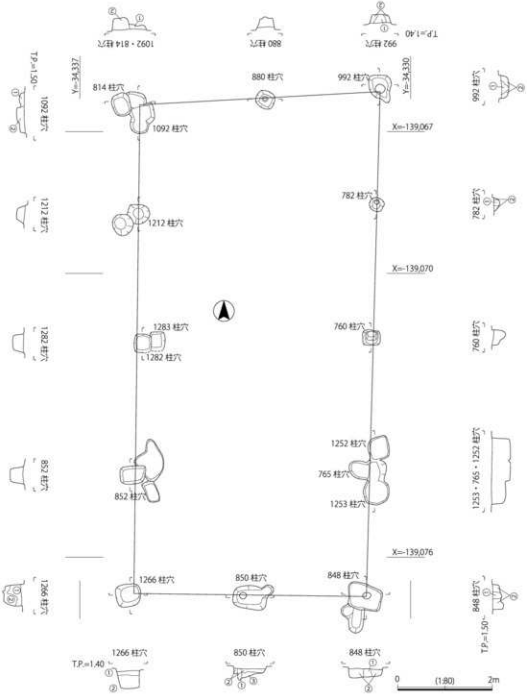


第37図　建物19平・断面図

西側に倒してできた凹みと考えられよう。したがって、1063土坑に入り込んだ堆積土は、建物廃絶以降に堆積したものと考えられ、そこから出土した10の土師器甕は、建物の機能時期を検討する際には除外するべきである。したがって、やや大きな時期設定となるが、1372柱穴から出土した須恵器７・８の時期、すなわち８世紀後半が建物19の機能時期の上限と考えられる。

建物20（第34・38図、図版18－２・図版20－３～８）　建物19の東、建物17の南に位置する。桁行は４間で西側柱筋の総長は10.3m、柱間は北から順に、2.4m、2.7m、2.8m、2.4mである。東側柱筋の総長は10.4m、柱間は北から順に、2.4m、2.7m、2.8m、2.5mである。梁間は２間で総長5.0m、柱間はほぼ等間。各柱間は尺の実長を29cmで想定しても、30cmで想定しても割り切れない。建物の軸はN－1°－Eで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形は一部円形を呈しているものがあるが、もともとはすべて方形だったと考えられる。断面形も残存状況が悪い例もあるが、もともとはすべて方形だったと考えられる。782柱穴・848柱穴・850柱穴・992柱穴（図版20－６）で、柱の抜き取り痕跡を確認した。それ以外の柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は検出できなかった。

柱穴からの出土遺物は、第45図－11～22である。11は須恵器杯Ｂの蓋で、８世紀前半にあたる。1266



1092・814柱穴　①10GY6/1緑灰 極細砂～シルト40%、10YR5/1褐灰 細砂30%、5Y3/1オリーブ黒 細砂30%
②10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

1212柱穴　7.5Y3/1オリーブ黒 シルト

1282柱穴　10YR5/1褐灰 細砂80%、5Y3/1オリーブ黒 細砂20%

852柱穴　10YR5/1褐灰 細砂(炭化物混)

1266柱穴　①5Y3/1オリーブ黒 細砂
②5Y3/1オリーブ黒 細砂60%、10GY6/1緑灰 極細砂～シルト40%(炭化物混)

850柱穴　①2.5GY3/1暗オリーブ灰 シルト
②5Y3/1オリーブ黒 細砂70%、10GY6/1緑灰 極細砂～シルト30%
③10YR5/1褐灰 細砂50%、5GY5/1オリーブ灰 細砂～極細砂50%

848柱穴　①2.5Y3/1黒褐 シルト
②10YR5/1褐灰 細砂50%、10GY6/1緑灰 極細砂～シルト50%

1253・765・1252 柱穴　10YR5/1褐灰 細砂

760柱穴　10YR5/1褐灰 細砂80%、10GY6/1緑灰 極細砂～シルト20%

782柱穴　①2.5Y3/1黒褐 シルト
②10YR5/1褐灰 細砂

992柱穴　①5Y3/1オリーブ黒 細砂50%、5GY5/1オリーブ灰 細砂～極細砂50%
②10YR5/1褐灰 細砂80%、5Y3/1オリーブ黒 細砂20%

880柱穴　10YR5/1褐灰 細砂

第38図　建物20平・断面図

柱穴（図版20－５）から出土した。1266柱穴からは他に18が出土している。18は土師器甕の口縁部片で、８世紀代にあてられるが、それ以上の特定は難しい。12は土師器杯Ａの口縁部の破片で、時期は概ね８世紀代といえるが、これもそれ以上の特定は難しい。1253柱穴から出土した。1253柱穴からは他に21が出土しているが、これは古墳時代の壺の口縁部片であるため、前代の包含層からの混入と考えられる。以下の３資料は、814柱穴（図版20－７）から出土している。13は土師器皿の口縁部から体部の破片で、時期は８世紀後半にあてられる。14は須恵器杯の体部から高台にかけての破片で、８世紀末から９世紀前半までの資料である。19は土師器甕の屈曲部の破片であるが、時期については古代ということしか限定できない。15は土師器杯の口縁から体部の破片で、８世紀末から９世紀前半までの資料である。1283柱穴から出土した。16は土師器甕の口縁であるが、時期については古代ということしか限定できない。850柱穴から出土した。17は土師器高杯の受け部の破片であるが、時期は古墳時代で、前代の包含層からの混入と考えられる。1282柱穴から出土した。20は製塩土器の口縁部片で、古代のものであることはわかるが、それ以上の特定は難しい。765柱穴（図版20－３）から出土した。22は土師器甕の口縁部片で、８世紀代にあてられるが、それ以上の特定は難しい。760柱穴（図版20－８）から出土した。

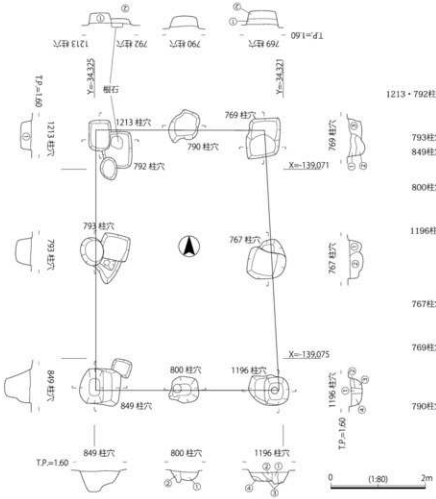
上記の資料のうち、850柱穴から出土した16の土師器甕以外は、柱が抜き取られ、建物が破却された以降の堆積土から出土している。したがって、16以外の資料で最も新しい、14の須恵器杯と15の土師器杯が建物機能時の下限を示すと考えられ、その時期は９世紀中頃といえよう。したがって、先にとりあげた建物17・19、次にとりあげる建物21よりも後出するものと考えられる。

建物21（第34・39図、図版18・図版19－５～８・図版20－１・２）　建物18の南、建物19の西に位置する。桁行は２間で総長5.4m、柱間はほぼ等間。梁間２間で総長3.6m、柱間は南の梁行ではほぼ等間。桁行２間９尺等間、梁間２間６尺等間の建物。建物の軸はＮ－１°－Ｗで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。769柱穴・793柱穴（図版20－１）・800柱穴（図版20－２）・1196柱穴（図版19－８）で、柱の抜き取り痕跡を確認した。また、1213柱穴（図版19－７）では、根石が残存していた。根石は柱抜き取り後、掘り返されたと考えられ、1213柱穴に先行する792土坑の堆積土上層で検出された。それ以外の柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は検出できなかった。

柱穴からの出土遺物は、第45図－23～27・28（図版62）・29～31である。23は土師器椀、24は土師器杯で、どちらも８世紀後半にあてられる。28は８世紀代の四耳壺である。以上の土器は769柱穴から出土している。25は土師器杯で８世紀前半、26は土師器椀で９世紀前半、27は土師器椀で８世紀後半にあてられる。いずれも768柱穴から出土している。768柱穴は遺構検出時の重複関係から、769柱穴より後出することがわかっている。29～31は古代の土師器甕であるが、詳しい時期の特定はできない。29は767柱穴から、30は793柱穴から、31は872柱穴から出土した。

上記の資料のうち、建物の機能時期を想定するにあたって有効な資料は、769柱穴から出土した23・24・28であろう。769柱穴から出土した土器は、柱根周囲の地層から出土したものである。したがって、769柱穴から出土した土器のうち、最も新しいものが建物21機能時の上限になると考えられる。ここでは、建物21の機能時期を８世紀後半ととらえておく。

建物22（第34・40図、図版21・図版22）　建物20・21の東側に位置する。桁行は２間以上、柱間寸法は1.8mでほぼ等間。梁間は２間で総長4.9m、柱間はほぼ等間。ただし、梁間は調査区に入るのが西側のみで、東側は調査区外である。建物の軸はＮ－0.5°－Ｗで、ほぼ座標の南北方向に沿っている。柱穴の

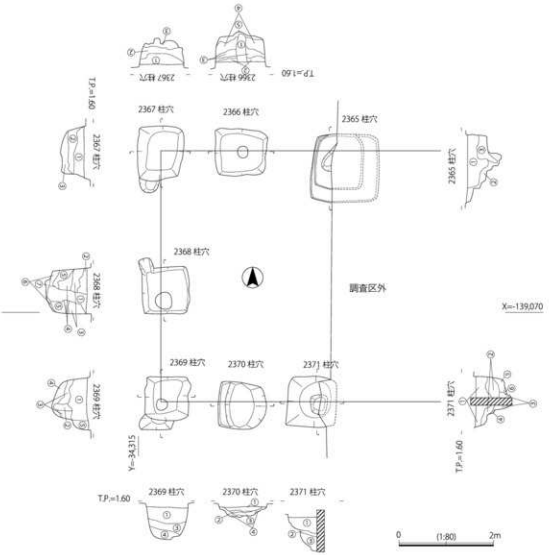


第39図　建物21平・断面図

平面形はすべて方形で、断面形もすべて方形。2366柱穴・2367柱穴（図版22－３・４）・2368柱穴（図版22－２）・2369柱穴（図版22－５・６）で、柱の抜き取り痕跡を確認した。それ以外の柱穴では、柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は検出できなかったが、2365柱穴（図版22－１）・2371柱穴（図版22－８）については、調査区外に柱の抜き取り痕跡が残存している可能性がある。

柱穴からの出土遺物は、第46図－１・２・３（図版62）・４～12・13（図版63）・14～16・17（図版63）である。１は土師器椀で、９世紀前半にあたる。７は土師器杯身、９は須恵器杯蓋、15は土師器甕、17は土師器鍋で、いずれも８世紀のもの。以上の土器は2367柱穴から出土した。２・４は土師器杯身、10は高杯の杯部と考えられる。どれも６～７世紀代のものであるが、４が最も新しい様相を持つ。５は土師器杯、11は土師器皿で、８世紀後半にあたる。以上の土器は2369柱穴から出土した。３・６は土師器杯であるが、３は７世紀後半から８世紀初頭に、６は８世紀代にあてられる。13は土師器鉢、14は土師器皿で、どちらも８世紀中頃から後半のものであろう。以上の土器は2368柱穴から出土した。８は土師器杯、16は土師器甕で、いずれも８世紀代のもの。2370柱穴（図版22－７）から出土した。12は土師器椀で、８世紀後半に位置づけられる。2366柱穴から出土した。

上記の資料のうち、2367柱穴・2370柱穴から出土した１・７～９・15～17は、柱が抜き取られ、建物が破却された後の堆積土から出土しているため、建物が機能した時期を直接示すものとはならない。したがって、上記以外で最も新しい資料である５･11･12が建物の機能時期の上限を示すと考えられる。こ



2367柱穴
① 7.5Y3/2オリーブ黒 極細砂、5GY5/1オリーブ灰　極細砂
② 5GY5/1オリーブ灰　極細砂ブロック少量混、
5GY4/1暗オリーブ灰 極細砂(炭化物混)
③ 5GY4/1暗オリーブ灰　シルト(炭化物混)

2368柱穴
① 7.5Y4/1灰 シルト
② 5Y6/1灰 細砂(炭化物混)
③ 5Y5/1灰 シルト50%、7.5Y8/3淡黄 細砂(炭化物混) 50%
④ 5Y6/1灰 細砂(炭化物混)
⑤ 5Y6/1灰 細砂50%、7.5Y4/1灰 シルト(炭化物混) 50%
⑥ 10Y4/1シルト

2369柱穴
① 5GY3/1暗オリーブ灰　極細砂50%、7.5Y3/2オリーブ黒 極細砂50%
② 2.5GY3/1暗オリーブ灰 シルト
③ 10Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト
④ 2.5GY3/1暗オリーブ灰 シルト50%、7.5GY4/1暗緑灰 細砂50%
⑤ 5Y6/1灰 細砂(炭化物混)

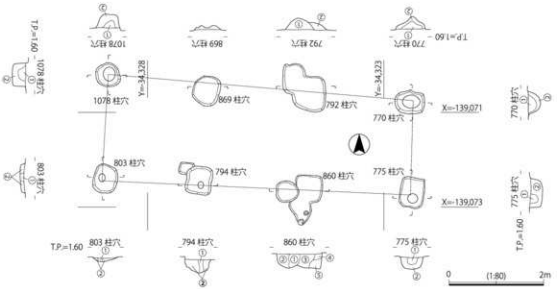
2370柱穴
① 7.5Y4/1灰 シルトブロック、5GY6/1オリーブ灰 シルトブロック(炭化物混)
② 2.5GY6/1オリーブ灰 細砂
③ 7.5Y4/1灰 シルトブロック、5GY6/1オリーブ灰 シルトブロック(炭化物混)
④ 7.5Y4/1灰 シルトブロック、2.5GY6/1オリーブ灰 細砂ブロック

2371柱穴
① 7.5Y4/1灰 シルトブロック、5GY6/1オリーブ灰 シルトブロック
② 2.5GY6/1オリーブ灰 細砂(炭化物混)
③ 7.5Y4/1灰 シルト(炭化物混)
④ 7.5Y4/1灰 シルト(炭化物混)
⑤ 5GY3/1暗オリーブ灰シルト(炭化物混)
⑥ 5GY4/1暗オリーブ灰 シルト

2365柱穴
① 5GY3/1暗オリーブ灰 極細砂ブロック、
10GY4/1暗緑灰　極細砂ブロック(炭化物少量混)
② 10Y4/1灰 極細砂～シルト
③ 5GY3/1暗オリーブ灰 極細砂～シルト(炭化物少量混)

2366柱穴
① 7.5Y4/1灰 極細砂(炭化物混)
② 7.5Y3/1オリーブ黒 シルトブロック、5GY6/1オリーブ灰 シルトブロック
③ 7.5Y4/1灰 シルトブロック、5G6/1シルトブロック、2.5GY5/1オリーブ灰 細砂
④ 10Y3/1オリーブ黒 シルト(炭化物混)
⑤ 10Y4/1灰　シルト

第40図　建物22平・断面図

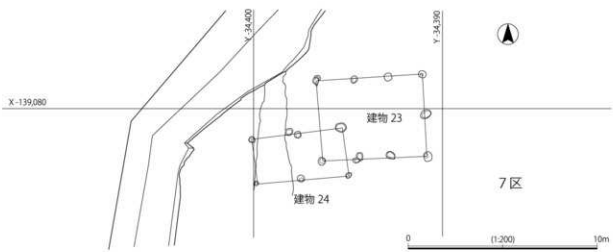


1078柱穴
① 7.5Y2/1黒 シルト
② 5Y4/1灰 細砂～極細砂
803柱穴
① 7.5Y2/1黒 シルト
② 2.5Y3/1黒褐 細砂～極細砂（炭化物混）
794柱穴
① 7.5Y2/1黒 シルト
② 2.5Y3/1黒褐 細砂～極細砂50%,2.5GY6/1 シルト50%

860柱穴
① 7.5Y2/1黒 シルト
② 10YR5/1褐灰 細砂
③ 2.5Y5/1黄灰 細砂～極細砂
④ 2.5Y5/1黄灰 細砂60%,2.5GY6/1 シルト40%
⑤ 2.5Y5/1黄灰 細砂20%,2.5GY6/1 シルト80%
775柱穴
① 10YR5/1褐灰 細砂
② 2.5Y3/1黒褐 細砂～極細砂

770柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 細砂（炭化物混）
② 5Y5/1灰 細砂
792柱穴
① 7.5Y2/1黒 極細砂～シルト
② 5Y4/1灰 細砂
869柱穴
5Y4/1灰 細砂

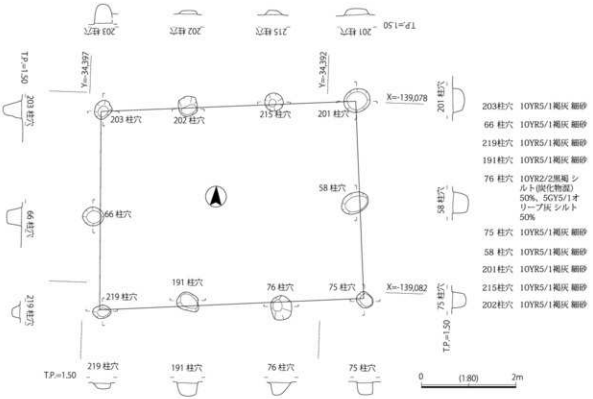
第41図　建物25平・断面図



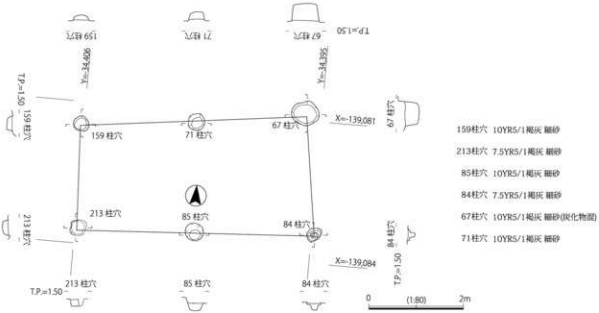
第42図　7区古代の建物配置図

のことにより、建物22の機能時期の上限は８世紀後半となり、建物19とほぼ同時期に存在していたことが確認できる。

建物25（第34・41図）　建物19の東側に位置する。桁行は３間で総長6.6m。柱間は東から順に、2.16m、2.28m、2.16mである。桁行は１間で柱間は2.16m。桁行３間、梁間１間の建物。建物の軸はN－5°－Eで、他の古代の建物と比べると、やや東に傾いている。柱穴の平面形はすべて方形で、断面形もすべて方形。775柱穴・792柱穴・794柱穴・803柱穴・860柱穴・869柱穴で、柱の抜き取り痕跡を確認した。792柱穴・860柱穴は建物21でも柱穴として使用されている。



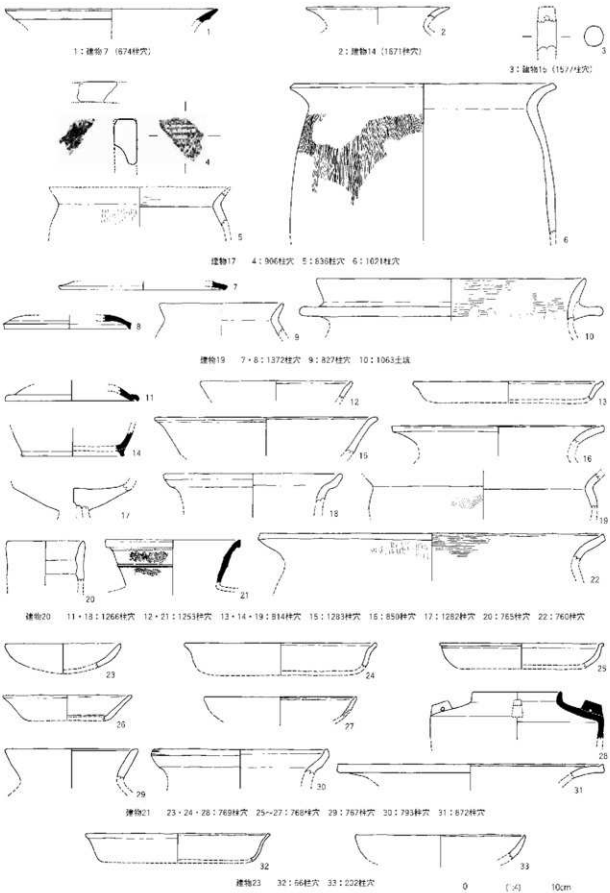
第43図　建物23平・断面図



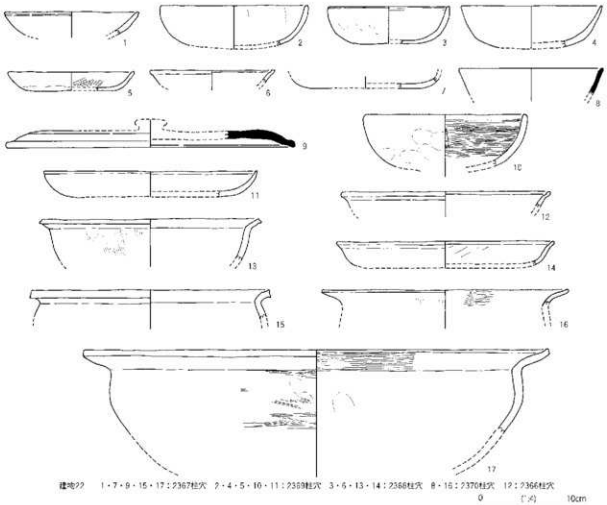
第44図　建物24平・断面図

柱穴からの出土遺物は、第65図－７・８・23・26である。７は須恵器杯蓋。８は土師器椀。どちらも８世紀前半のもので、794柱穴から出土した。23は土師器杯身で、８世紀前半のもの。26は土師器椀で、８世紀代のもの。どちらも869柱穴から出土した。これらの土器は、柱根周囲の地層から出土したもので、概ね８世紀前半に位置づけられることから、建物の機能時期の上限を８世紀前半におくことができよう。

以下に述べる建物は、調査地南西の７区で検出されたものである（第42図）。



第45図　古代の建物柱穴出土土器①



第46図　古代の建物柱穴出土土器②

建物23（第42・43図、図版23－１）　調査区西端７区の微高地上に位置する。桁行は３間で総長5.4m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長4.2m、柱間はほぼ等間。桁行３間６尺等間、梁間２間７尺等間の建物。建物の軸はN－５°－Wで、他の古代の建物と比べると、やや西に傾いている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等はみられなかった。

柱穴からの出土遺物は、第45図－32・33である。32は土師器杯身で、66柱穴から出土。33は土師器椀で、202柱穴から出土。どちらも８世紀後半にあてられる。これらの土器は、柱が抜き取られ、建物が破却された後の堆積土から出土しているため、建物22同様、建物機能時の上限を示すものといえる。

建物24（第42・44図、図版23－１・２）　建物23の西隣に位置する。建物23と24がどちらも切妻であったとしても、妻側の屋根が接近し過ぎているため、建物23と24が同時並存していたとは考えにくい。桁行は２間で総長4.8m、柱間はほぼ等間。梁間は１間で総長2.4m。桁行２間８尺等間、梁間１間６尺の建物。建物の軸はN－７°－Wで、他の古代の建物と比べると、やや西に傾いている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等はみられなかった。

柱穴からの出土遺物は無い。建物の機能時期は古代と考えられるが、上述したように建物23との同時並存は考えにくい。

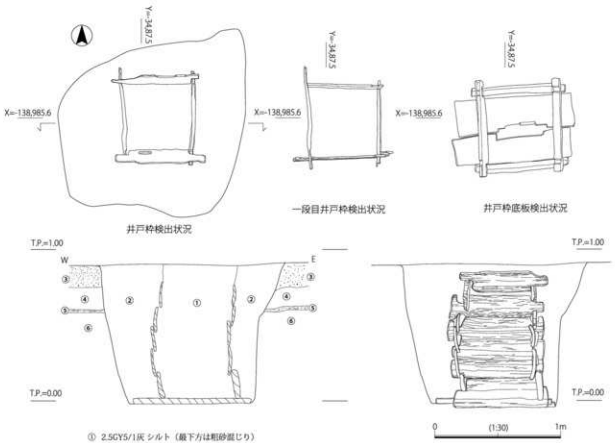
（３）井戸

2030井戸（第47・54図、図版24）　調査区北東部に位置する。検出時の平面形は、ややいびつな正方

形であったが、検出面から約６㎝堆積土を掘り下げた状況で、方形の井戸枠を確認した（図版24－１・２）。井戸は約13m四方の掘形を掘削した後、井戸枠を据えつけている。井戸枠は５段検出しているが、断面図を見る限りさらにあと数段あったと考えられる。井戸枠の底部には長方形の板を２枚敷いている（図版24－７・８）。底部の板の長辺の片側は凹状に加工されており、２枚合わせることにより、中央部分に長方形の空白ができる。取水層が砂層であるため、井戸枠を安定させるためには、底板が不可欠である。底板の中央の隙間は、直下層から水を汲み上げるための工夫といえよう。５段の井戸枠はすべて相欠継ぎを用いて組み上げられている。ただし、５段目は北側と南側の枠板のみが残存しており、西側と東側は取り去られたものと考えられる。枠板のうちいくつかは、端面や平面同士で接合する。このため、枠板は元々一つないしは複数の角材を加工して作られたものと想定できる。井戸枠の内側は、分層不可能なシルトが、植物遺体をまばらに含みながら堆積していた。ただし、最下部は底板の隙間から湧き上がる地下水とともにもたらされた粗砂が、シルトと混ざり合っている状況であった。上記の堆積土の観察から、井戸は廃棄された後も開口しており、井戸枠内が完全に埋まるまで、長期間にわたったと考えられよう。

井戸枠内の堆積土からは、網代、木製釣瓶、土器類が出土した（図版24－３・５・６）。網代は底板から約40㎝の高さの位置で出土した。井戸廃棄後に捨てられたものであろう。釣瓶は井戸枠内堆積土の最下部から出土した。

第133図－１（図版105）は2030井戸内より出土した木製品で、釣瓶と考えられる。最大径9.4㎝、刳り



第47図　2030井戸平・断面図

貫き部の最大径６㎝、残存長34㎝である。樹木の幹の先端部分を加工したものと考えられ、外見は角杯に似る。外面は樹皮を剥がしただけであるが、節によって生じた窪みに小さな穴が穿たれており、井戸内で上げ下げするための紐が通されていたものと考えられる。内側を刳り貫いて水を掬えるようにしているが、鑿状工具による粗い刳り貫きで、一度に掬える容量は約150ccと少ない。

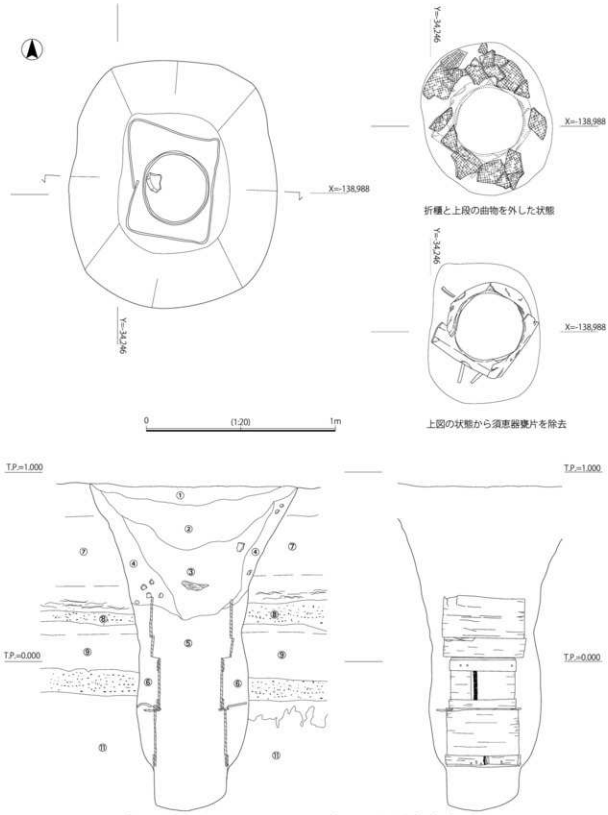
土器類は釣瓶と同じく、井戸枠内堆積土の最下部から出土したものである（第51図－１～15、図版62）。１は内面に墨書で紋様を施す土師器皿。２～４は土師器杯。５は古墳時代後期の平瓶または提瓶の口縁部。６～８は製塩土器の口縁部。９・10は土師器の杯と皿で、どちらも内面に暗紋を施す。11は古墳時代の土師器甕。12は古代の土師器小型甕。13・15は古代の土師器甕。14は古墳時代の土師器小型壺である。以上のうち、５・11・14の土器は下層に包含された遺物の混入と考えられ、井戸の機能時期を示すものではない。５・11・14を除いた土器のうち、最も古いものは９の土師器杯と10の土師器皿で、８世紀後半にあたる。残りは９世紀前半のものである。土器の出土位置がすべて井戸枠内の最下層であることから、上述の土器の時期が井戸の機能時期を直接示すと考えてよいだろう。したがって、2030井戸の機能時期の上限は遅くとも８世紀中頃、下限は９世紀中頃と考えられる。この時期は調査地における奈良・平安時代の建物の機能時期と合致する。

403井戸（第48・55図、図版25・26）　調査地東側４区の微高地上に位置する。検出時の平面形は円形。検出面から約60㎝掘り下げた段階で、正方形の井戸枠を確認した（図版26－１・２）。井戸は検出面で直径1.2ｍ、最下面で直径0.4ｍの掘形を掘削した後、井戸枠を据えつけている。井戸枠は下から曲物２段、折櫃１段を使用している。上述したように、折櫃の上端から井戸の当初検出面までは約60㎝ある。地層観察の限り、この間の堆積土は人為的な埋め戻しによるものと考えられる。おそらく井戸を廃絶させる段階で、それまで据えてあった木製の井戸枠を取り外し、開口部分を埋めたものと考えられる。最上段の井戸枠に転用された折櫃は、平面形42㎝×54㎝（14寸×18寸）の長方形を呈し、高さは30㎝（１尺）である（図版25－１・図版26－３）。西側の側面には、材の両端を留めた樺皮による継ぎ目がみられる（図版26－５）。また、折櫃の角部分の内面には、折り曲げる際に加工された縦方向の筋が幾つも確認できる（図版26－４）。中段の井戸枠に転用された曲物は、直径32㎝（約11寸）、高さ27㎝（９寸）を測る。下段に用いられた曲物は、直径36㎝（約12寸）、高さ30㎝（１尺）を測り、中段の曲物よりやや寸法が大きい。中段と下段の間には、４枚の板材が敷かれており（図版25－２・図版26－７）、さらにその板材を固定するために、須恵器甕の胴部の破片が敷かれていた（図版26－６）。４枚の板材は、中段の曲物を据え付ける際に、落下を防ぐため敷かれたものと考えられる。

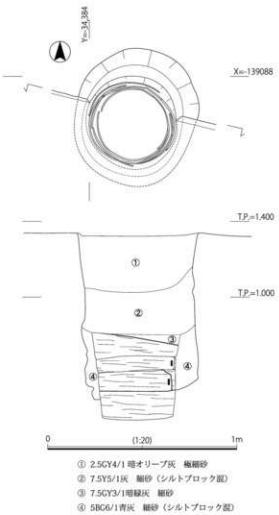
なお、403井戸の最下層は、湧水層である粗砂層まで達しておらず、第48図⑪のシルト層で掘削が止まっている。通常井戸は湧水層である粗砂層を目的に掘削するものであるが、403井戸が切り込む基盤層で確認できる粗砂層は、第48図⑧と⑨の下部に限られる。ただし、⑧の地層の広がりは限定的と考えられ、湧水が安定して得られるとは考えられない。おそらく403井戸は、⑨の地層下部を湧水層としていたと考えられるが、安定した水量を得ることは難しかったと考えられる。

出土遺物は第51図－16・17（図版63）・18（図版62）で、すべて井戸枠内堆積土から出土している。16は土師器杯。17は須恵器壺。18は土師器甕。このうち、16と17は９世紀前半のものと考えられ、井戸の機能時期を示すものといえる。

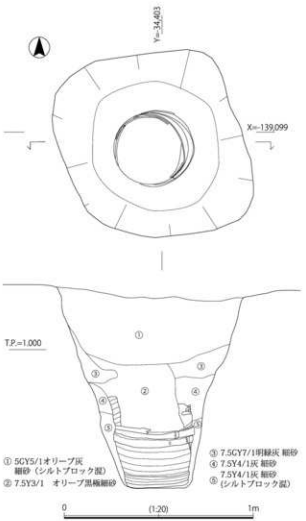
153井戸（第49・61図、図版27－１～３）　調査地西側７区の微高地上に位置する。検出時の平面形は円形。検出面から約50㎝掘り下げた段階で、円形の井戸枠を確認した。井戸は検出面で直径0.64ｍ、



第48図　403井戸平・断面図



第49図　153井戸平・断面図



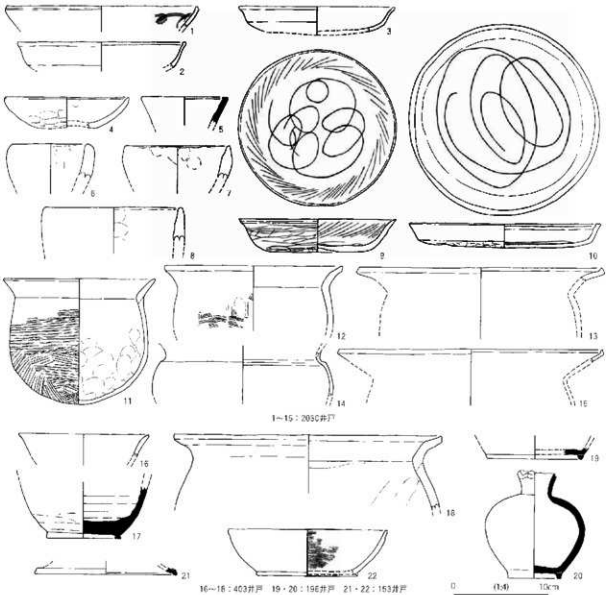
第50図　196井戸平・断面図

最下面で直径0.4mの掘形を掘削した後、井戸枠を据えつけている。井戸枠は曲物２段分を使用している。地層観察により、残存する井戸枠の上部には、自然堆積層が認められないことから、それまで据えてあった井戸枠を取り外し、開口部分を埋めたものと考えられる。

出土遺物は第51図－21･22（図版62）である。どちらも井戸枠内堆積土の最下部から出土したもので、井戸の機能時期を直接示すと考えてよい。21は須恵器杯蓋で、９世紀代のもの。22は内面黒色土器の椀で、10世紀後半のものである。このことから、153井戸の埋め戻し時期の上限が10世紀後半にあたることがわかる。

196井戸（第50・61図、図版27－４～６）　調査地西側７区の微高地上に位置し、さきの153井戸より10m弱西に位置する。検出時の平面形は方形。検出面から約55cm掘り下げた段階で、円形の井戸枠を確認した。井戸は検出面で南北0.8m×東西0.9m、最下面で直径0.4mの円形の掘形を掘削した後、井戸枠を据えつけている。井戸枠は曲物２段分を使用している。上述の153井戸同様、残存する井戸枠の上部には自然堆積層が認められないことから、それまで据えてあった井戸枠を取り外し、開口部分を埋めたものと考えられる。

出土遺物は第51図－19・20である。この２点はこれまでの井戸出土土器とは違い、埋め戻し土（第50



第51図　古代の井戸出土土器

図②の堆積層）から出土している。19は須恵器杯身で、9世紀中頃のもの。20は須恵器壺で、8世紀後半から9世紀初頭にあたる。196井戸の機能時期は、8世紀後半から9世紀の中頃までといえる。

（4）土坑

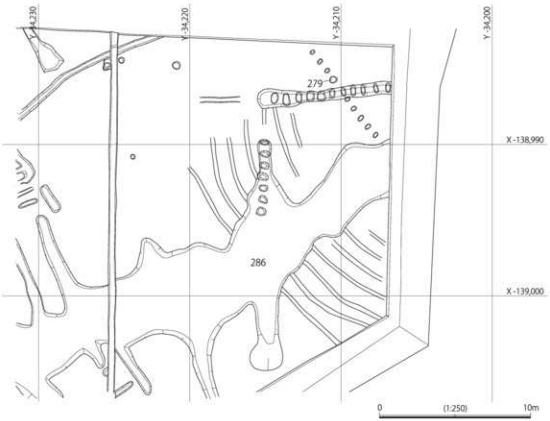
262土坑（第55・63図）　堆積土は古代の地層（第10－2層）。古墳時代の須恵器杯身（第64図－6）と須恵器壺（第64図－7）が出土している。

269土坑（第55図）　堆積土は第10－2層。7世紀代の須恵器杯身（第64図－1）と古墳時代の須恵器杯蓋（第64図－2）、古墳時代の高杯（第64図－3）が出土している。

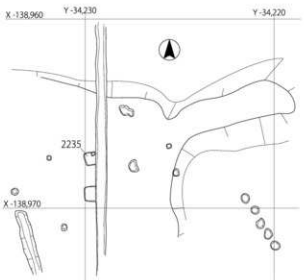
270土坑（第55図）　堆積土は第10－2層。古墳時代の須恵器高杯（第64図－4）と須恵器杯身（第64図－5）が出土している。

271土坑（第55図）　堆積土は第10－2層。古墳時代の須恵器杯身（第64図－24）が出土している。

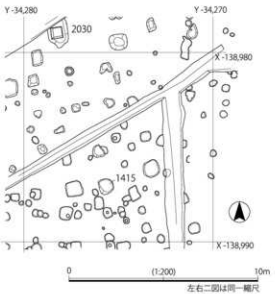
273土坑（第55図）　堆積土は第10－2層。古墳時代の須恵器高杯（第64図－25）が出土している。



第52図　2区古代の遺構配置図

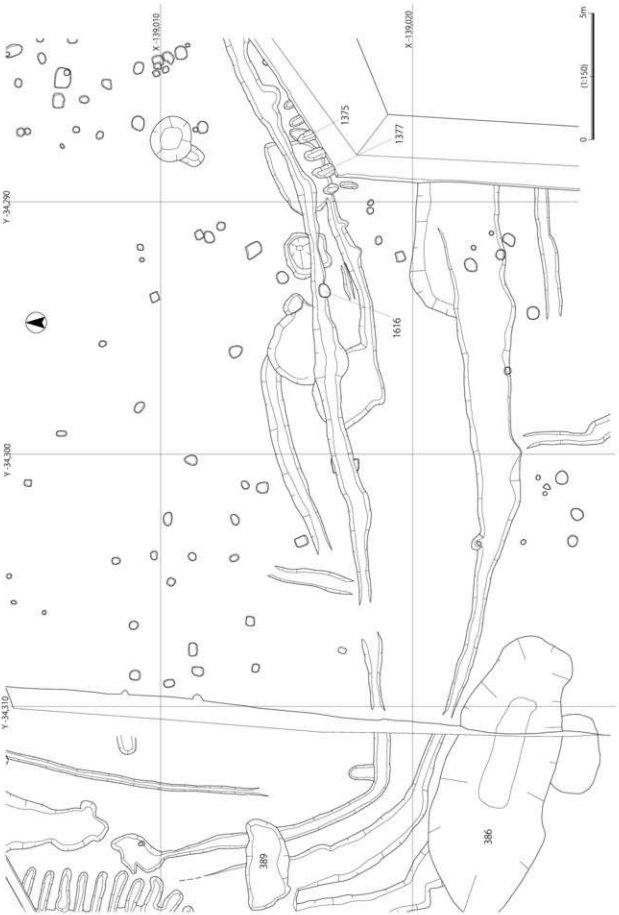


第53図　1区古代の遺構配置図



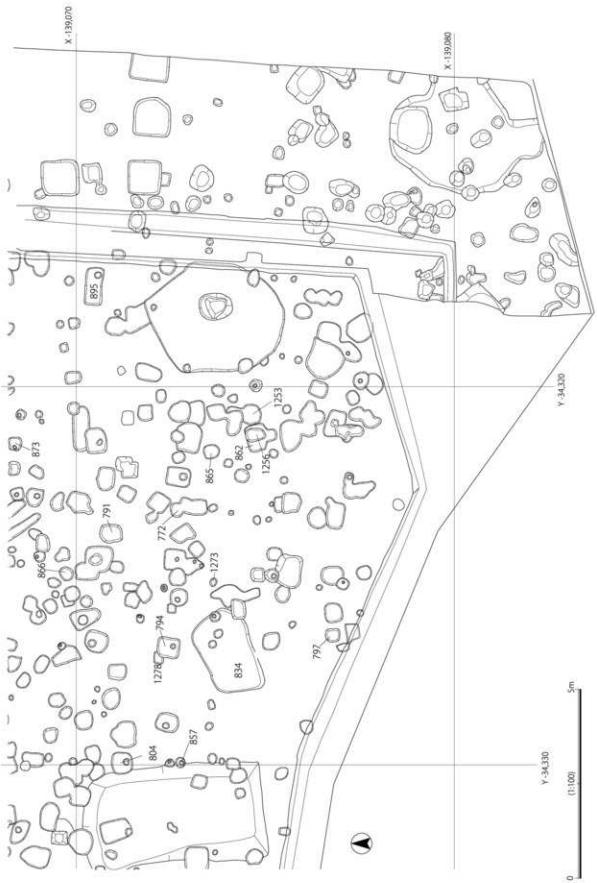
第54図　1～3区境古代の遺構配置図

第55図　2・3区古代の遺構配置図



第56図　4・5区古代の遺構配置図

第57図　6区古代の遺構配置図①



第58図　6区古代の遺構配置図②

274土坑（第55図）　堆積土は第10－２層。７世紀代の須恵器杯身（第64図－27）が出土している。

279土坑（第52図）　堆積土は第10－２層。上記の270土坑・271土坑・273土坑・274土坑と同一の堆積土であるため、これらの土坑と同時に掘削され、ほぼ同時に埋没したと考えられる。８世紀代の須恵器杯蓋（第64図－22）が出土した。

386土坑（第62図、図版32－５・６）　堆積土は古代～中世の地層（第９・10－１・２層）。385井戸と重複関係にあり、385井戸の埋没後、386土坑が掘削された状況が確認できる。

出土遺物（第65図－１～６、図版63）の時期はさまざまであるが、４の瓦器椀が12世紀代と最も新しい。１は調査地から出土した唯一の銭貨「延喜通宝」（初鋳延喜７年、907年）である。実年代のわかる資料であるが、土坑の埋没時期を示すものではない。

389土坑（第56・62図）　堆積土は何層かに分かれるが、第10－２層と第12面の基盤層である第12層のブロックが主体である。埋没後の390溝・391溝・392溝を削平している。８世紀代の把手付土師器甕（第66図－５、図版73）が出土している。

397土坑群（第55図）　堆積土は第10－２層。270土坑・271土坑・273土坑・274土坑・279土坑と同時期に掘削され、ほぼ同時期に埋没したと考えられる。７世紀末から８世紀初頭の土師器椀（第64図－23）が出土している。

413土坑（第55・63図、図版28－１・２）　堆積土は第10－２層。８世紀代の把手付土師器甕（第64図－32、図版62）が出土している。

540土坑（第55・62図、図版52－４）　堆積土は第10－２層。８世紀代の土師器甕（第64図－34）が出土している。

742土坑（第60図）　６区の西側の落ち込み部分で検出した。堆積土は第10－２層。８世紀代の須恵器杯蓋（第65図－24）が出土している。

759土坑（第62図）　堆積土は第10－２層。８世紀代の須恵器杯身（第65図－27）が出土している。

772土坑（第58・63図）　堆積土は、柱の残欠と考えられる木片が混入した第10－２層。８世紀代の土師器甕（第65図－32）が出土している。

791土坑（第58・62図、図版28－４）　堆積土は第10－２層。下層部分はシルト主体となる。シルトは土坑の開口期間に流れ込んだものか。８世紀代の土師器甕（第65図－35）が出土している。

797土坑（第58・62図、図版28－８）　堆積土は第10－２層にブロック状の第11－２層が混じる。土師器皿（第65図－14）と丸瓦（第65図－15）が出土している。

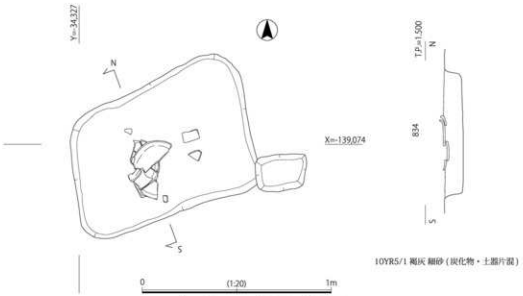
804土坑（第58・62図、図版29－１）　柱の抜き取り痕跡をともなう土坑。抜き取り痕跡の周囲の堆積土は第10－２層。土師器椀（第65図－17）が出土しており、９世紀前半にあたる。

815土坑（第57・62図、図版29－２）　堆積土は第10－２層の単一層と、第10－２層と第11－２層のブロックが入り混じった層の２層である。須恵器杯身（第65図－16）と土師器皿（第65図－18）が出土しており、いずれも８世紀末から９世紀初頭にあたる。

828土坑（第60・62図）　柱の抜き取り痕跡をともなう土坑。抜き取り痕跡の周囲の堆積土は第10－２層。７世紀代の土師器椀（第65図－12）が出土している。

831土坑　（第60・62図、図版29－３）　堆積土は第10－２層と第11－２層がブロック状に入り混じっている。９世紀前半の土師器皿（第65図－20）が出土している。

833土坑（第60・62図）　堆積土は第10－２層。８・９世紀代の土師器甕（第65図－37）が出土して



第59図　834土坑平・断面図

いる。

834土坑（第58・59図、図版29－４）　堆積土は第10－２層であるが、炭化物が多く混じっているのが特徴である。検出当初の平面形は楕円形であったが、周辺を精査することにより、長方形を呈することがわかった。８世紀代の須恵器杯身（第65図－29）と須恵器皿（第65図－30、図版63）が出土している。とくに須恵器皿はほぼ完存しており、検出状況から正位置にすわった状態で埋納されたと考えられる。このことから、834土坑は単なる廃棄土坑や建物の柱穴といった性格の土坑とは考えにくい。

835土坑（第57・62図）　堆積土は第10－２層。８・９世紀代の土師器甕（第65図－33）が出土している。

857土坑（第58･62図）　堆積土は第10－２層であるが、殆どは上面の耕作溝によって削平されている。８世紀代の土師器杯（第65図－21）が出土している。

862土坑（第58・63図、図版29－５・６）　堆積土は第10－２層と第11－２層がブロック土に、炭化物が混じる。遺構の殆どは766土坑に削平されている。９世紀代の土師器椀または杯身（第65図－25）が出土している。

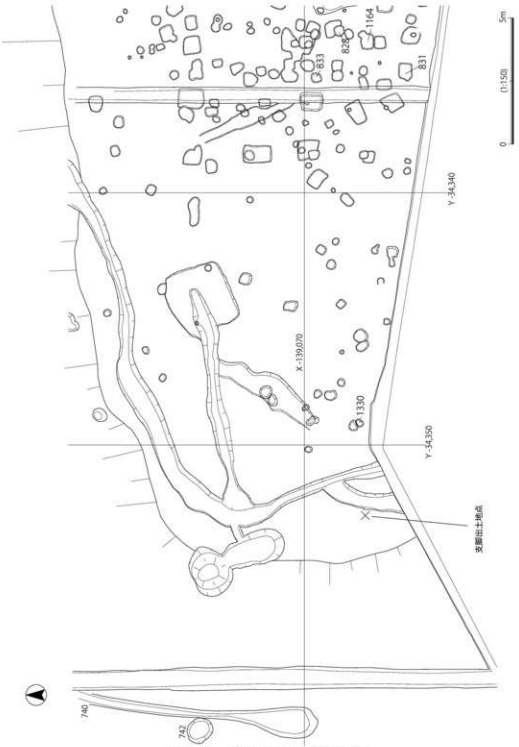
865土坑（第58・62図）　堆積土は第11－２層。堆積土からみれば古墳時代の遺構であるが、８世紀代の土師器杯身（第65図－28）が出土している。土坑を埋める際に、古墳時代の包含層を用いたためであろう。

866土坑（第58・62図、図版29－７）　堆積土は第11－２層。９世紀代の土師器甕（第65図－38）が出土している。865土坑同様、土坑を埋める際に、古墳時代の包含層を用いたのだろう。

873土坑（第58・63図、図版29－８）　柱の抜き取り痕跡をともなう土坑。抜き取り痕跡の周囲の堆積土は第10－２層。８世紀代の土師器杯身（第65図－19）が出土している。

893土坑（第57・63図）　堆積土は第10－２層であるが、層の上部では炭化物が混じる。８・９世紀代の土師器甕（第65図－36）が出土している。

895土坑（第58・63図、図版55－４）　平面形は南北0.3ｍ、東西１ｍの長方形の土坑。土坑東側で柱の抜き取り痕跡が確認された。抜き取り痕跡周りの堆積土は、炭化物混じりの第10－２層と第11－２層である。

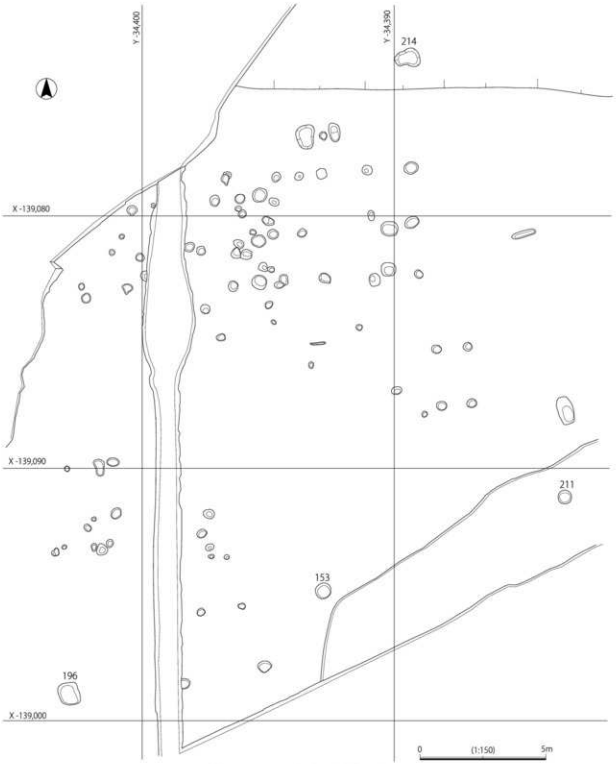


第60図　6区古代の遺構配置図③

出土遺物は須恵器高杯の脚部から裾部にかけての破片である（第66図－２）。出土遺物は古墳時代のものであるが、土坑の方向や堆積土から、奈良・平安時代の遺構と考えられる。

1000土坑（第57･62図、図版30－１）　堆積土は第10－２層。ほぼ完存する土師器杯身（第65図－34、図版63）が出土している。ただし、34は器形的に稀なものであるため、時期は８・９世紀代ということしかわからない。

1014土坑（第57・63図、図版30－２）　堆積土は炭化物混じりの第10－２層。遺構の約３分の１は1013土坑により削平されている。８世紀代の須恵器杯蓋（第65図－11）が出土している。

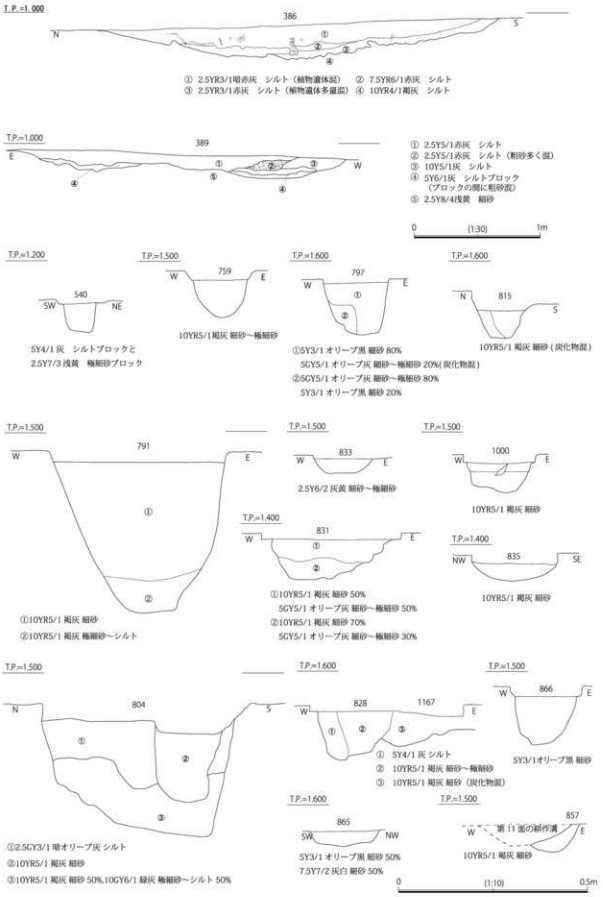


第61図　7区古代の遺構配置図

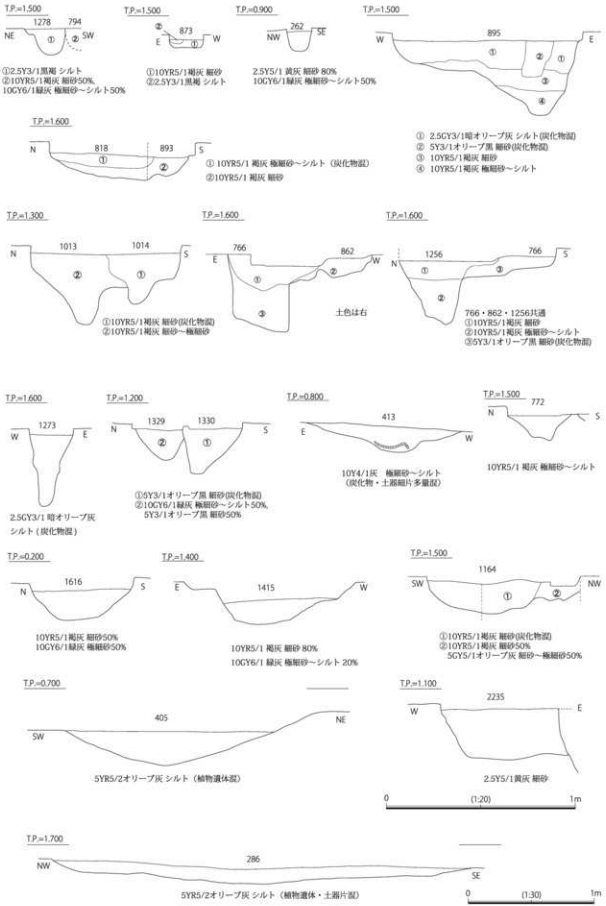
1164土坑（第60・63図、図版30－4・5）　堆積土は炭化物混じりの第10－2層。須恵器杯身（第65図－9・10）が2点出土しているが、どちらも8世紀後半のものと考えられる。

1256土坑（第58・63図）　堆積土は第10－2層だが、層の下部はシルト混じりである。古墳時代の遺構と考えられる766土坑の約半分を削平している。9世紀代の土師器椀（第65図－31）が出土している。

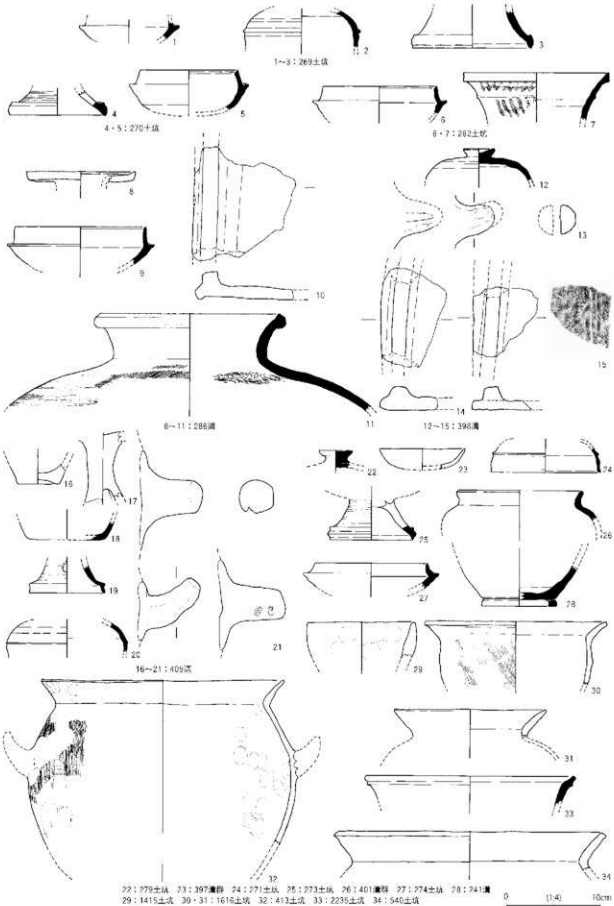
1273土坑（第58・63図）　堆積土は第11－2層。9世紀代の土師器杯（第65図－13）が出土している。865土坑・866土坑同様、土坑を埋める際に、古墳時代の包含層を用いたのだろう。



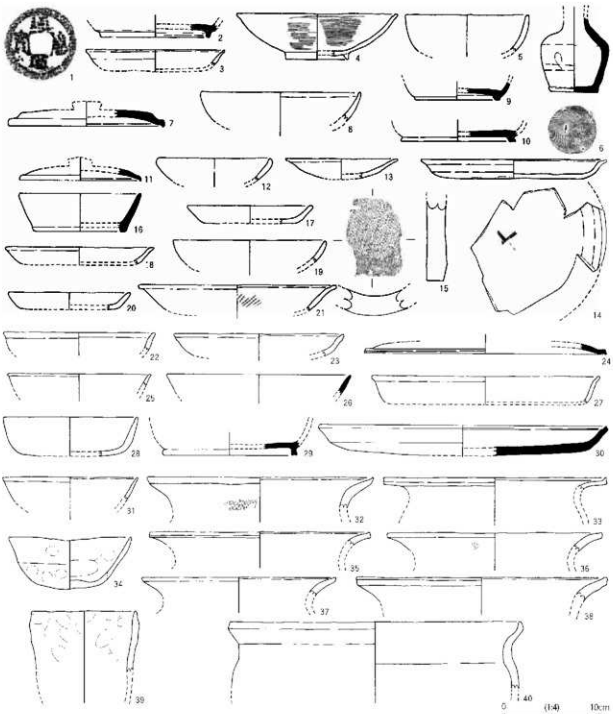
第62図　古代の遺構断面図①



第63図　古代の遺構断面図②



第64図　古代の遺構出土土器①

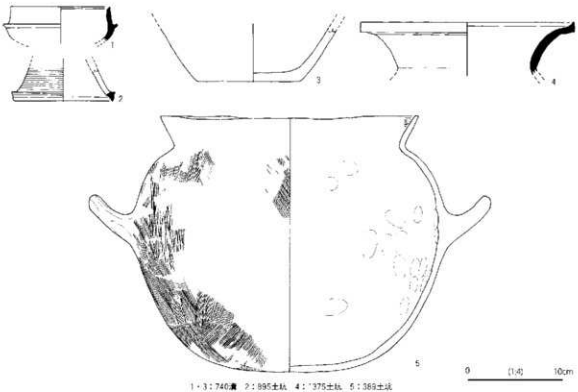


第65図　古代の遺構出土土器②（1は1/1）

1278土坑（第58・63図）　堆積土は第10－2層。遺構の約4分の1は建物25の柱穴である、794土坑に削平されている。8・9世紀代の土師器杯身（第65図－22）と土師器甕（第65図－40）が出土している。

1330土坑（第60・63図、図版30－3）　堆積土は炭化物混じりの第10－2層で、1329土坑を削平している。8・9世紀代の製塩土器（第65図－39）が出土している。

1375土坑（第56図）　堆積土は第10－2層。古墳時代の須恵器壺（第66図－4）が出土しているが、



第66図　古代の遺構から出土した古墳時代の土器

堆積土から古代の遺構と判断し、4の壺は下層遺物の混入と捉えている。

1415土坑（第54・63図、図版32－4）　堆積土は第10－2層。8・9世紀代の製塩土器（第64図－29）が出土している。

1616土坑（第56・63図）　堆積土は第10－2層。古墳時代の溝である1386溝を削平している。8世紀代の土師器小型甕（第64図－30）と土師器甕（第64図－31）が出土している。後者の甕は古墳時代のものと考えられる。

2235土坑（第53・63図）　堆積土は第10－2層。須恵器甕の口縁部小片（第64図－33）が出土しているが、時期は不詳である。堆積土から古代の遺構と判断した。

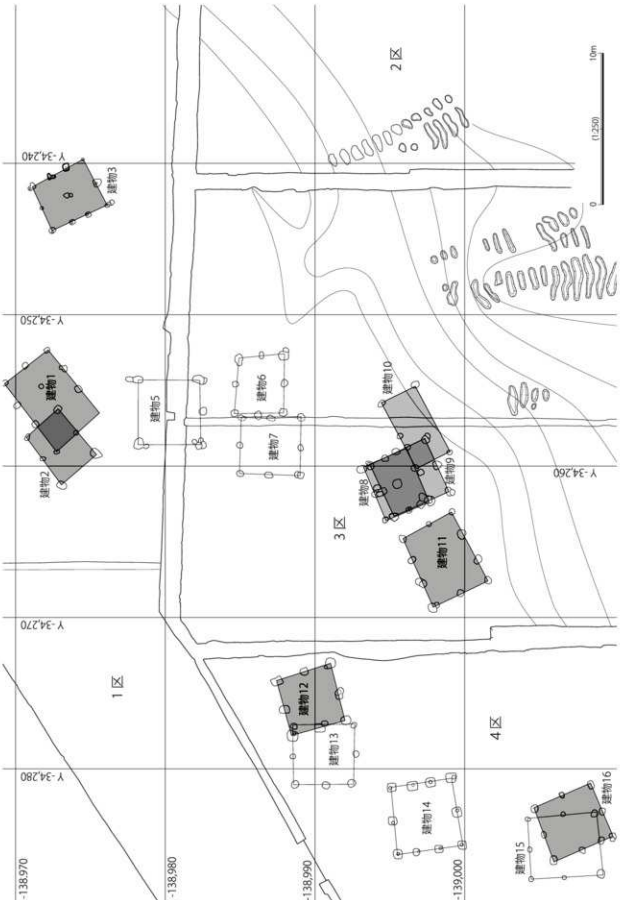
（5）溝

241溝（第55図）　調査地北側の微高地から落ち込みへと向かう傾斜地にある。堆積土は第10－2層。8世紀代の須恵器壺（第64図－28）が出土している。

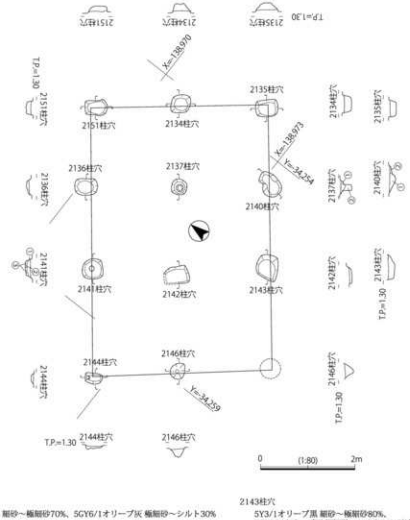
286溝（第52・55・63図、図版31－1・2）　調査区北東の落ち込みに北東から南西へむけて伸びる溝。検出幅は最大で5m。286溝からはほぼ直交する形で、南東や北西に向けて幅1～2mの溝が延びる。これらの溝の堆積土は、おしなべてシルト質の第10－2層で、平面観察および断面観察において、遺構間の重複関係は認められなかった。そのため、これらの溝も286溝と一体としてとらえた。286溝は3区の南側で398溝と一体になる。

出土遺物は面積に比して少なく、殆どが細片であるため、図化できるものは4点にとどまる。古墳時代の須恵器杯身（第64図－9）、U字形土製品（第64図－10）、須恵器壺（第64図－11、図版62）が出土しているが、最も新しい遺物は土師器高杯（第64図－8）で、8世紀代のものと考えられる。

398溝（第55図、図版32－3）　286溝と一体になる溝。堆積土はシルト質の第10－2層。須恵器杯蓋



第67図　1～4区古墳時代の建物配置図

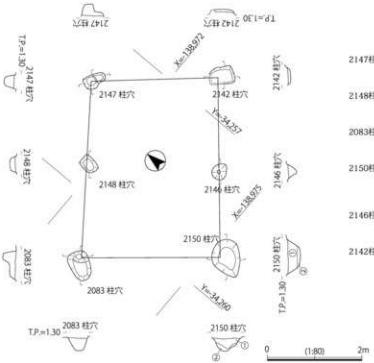


2151柱穴
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂70%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト30%
2136柱穴
2.5Y3/1黒褐 極細砂～シルト
2122柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%
2141柱穴
① 5Y4/1オリーブ黒 細砂～極細砂80%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%
② 2.5Y3/1黒褐 シルト
③ 5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト60%、5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂40%
2144柱穴
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%
2146柱穴
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂80%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%
2143柱穴
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂80%、
5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%(炭化物混)
2140柱穴
① 5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%、5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%
② 5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト70%、5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂30%
2135柱穴
2.5Y3/1黒褐 極細砂～シルト
2134柱穴
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%
2137柱穴
① 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～シルト90%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%
2142柱穴
2.5Y3/1黒褐 極細砂～シルト

第68図　建物１平・断面図

（第64図－12）、土師器煮炊具の把手（第64図－13）、U字形土製品２点（第64図－14・15）が出土しているが、これらはすべて古墳時代の遺物であり、下層の包含遺物が当時の溝の掘削時に紛れ込んだと考えられる。

401溝群（第55図、図版32－３）　幅約40㎝、長さ２～３ｍの溝が、南北に14単位並んでいる一群を401溝群と認識した。堆積土は細砂から極細砂で、色調は褐色を呈し、植物遺体の混入が見られる。第10－２層とはあきらかに峻別可能である。埋没後の398溝を削平している。８世紀代の壺（第64図－26）が出土している。



第69図　建物２平・断面図

405溝（第55・63図）　３区西南隅で検出した溝。おそらく調査区外で286溝と一体になると考えられる。堆積土はシルト質の第10－２層。弥生土器（第64図－16）、古墳時代の土師器高杯（第64図－17）、８世紀代の須恵器杯身（第64図－18）、古墳時代の須恵器高杯（第64図－19）、須恵器杯蓋（第64図－20）、土師器煮炊具の把手（第64図－21、図版62）が出土している。このうち、溝の掘削年代を示すものは18の須恵器杯身である。

740溝（第60図）　742土坑の東隣に位置する。堆積土はシルト質の第10－２層。古墳時代の須恵器杯身（第66図－１）と平底鉢の底部（第66図－３）が出土しているが、堆積土から古代の遺構と判断し、１・３の土器は下層遺物の混入と捉えている。

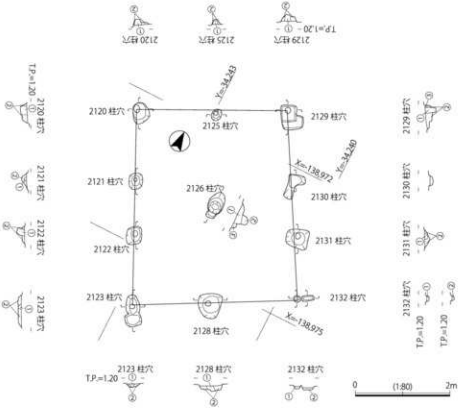
第５節　古墳時代の遺構と遺物―第12面の遺構と遺物②―

（１）掘立柱建物

建物１（第67・68図、図版33・図版34－１～４）　調査地北側の１区に位置する。桁行は３間で総長5.7m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長3.6m、柱間はほぼ等間。桁行３間、梁間２間の総柱建物。建物の軸は桁行きでＮ－51°－Ｅ分ふれている。柱穴の平面形はすべて隅丸方形で、断面形はすべて方形。柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等はみられなかった。

2136柱穴（図版34－２）からは、古墳時代の製塩土器片（第77図－５）が出土している。この資料だけで詳細な時期決定はできないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、建物１が存続していたのは古墳時代と考えられる。

建物２（第67・69図、図版33・図版34－５～８）　調査地北側の１区に位置し、建物１と一部重複する。桁行は２間で総長3.8m、柱間はほぼ等間。梁間は１間で総長2.8m、柱間はほぼ等間。桁行２間、梁間１間の建物。軸線は建物１同様、桁行でＮ－51°－Ｅ分ふれている。2142柱穴は建物１でも用いられている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は



2120柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂70%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト30%

2121柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂70%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト30%

2122柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト（極細砂・炭化物混）
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%

2123柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト70%

2128柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト（炭化物混）
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%

2132柱穴
① 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂
② 7.5Y4/1灰 細砂

2131柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%

2130柱穴
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%

2129柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5Y8/3淡黄 細砂50%
③ 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂80%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%

2125柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト（極細砂・炭化物混）
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%

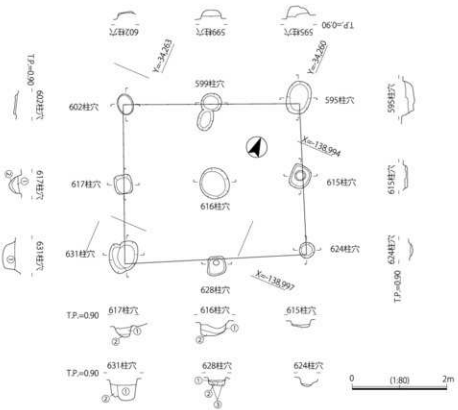
2126柱穴
① 2.5Y3/1黒褐 シルト90%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%
③ 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂30%、5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト70%

第70図　建物３平・断面図

みられなかった。

柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古墳時代の建物と考えられる。

建物３（第67・70図、図版33－２・図版35）　調査地北側の１区、建物１・２の東に位置する。桁行は３間で総長3.9m、柱間はほぼ等間。梁間は１間で総長3.2m、柱間はほぼ等間。桁行３間、梁間１間の建物。桁行中央の柱列のみ２間となるが、中央の柱穴が床束となるのか、棟木の支えとなるのかは、断面観察では判断できない。軸線は桁行でN－27°－W分ふれている。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。2120柱穴（図版35－５）・2121柱穴（図版35－２）・2122柱穴（図版35－４）・2123柱穴・2125柱穴・2128柱穴・2129柱穴・2131柱穴（図版35－３）で、柱の抜き取り痕跡を確認した。柱



602 柱穴
2.5Y6/3 にぶい黄 シルト（細砂混）
617 柱穴
①2.5Y7/3 浅黄 細砂～極細砂 50%、5Y3/2 オリーブ黒 シルト 50%
②5BG5/1 青灰 シルトブロック（極細砂ブロック混）
631 柱穴
①2.5Y3/1 黒褐 シルト 60%、10G6/1 緑灰 シルト 40%
②7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト 60%、10G6/1 緑灰 シルト 40%
628 柱穴
①7.5Y3/2 オリーブ黒 シルト 50%、2.5Y7/4 浅黄 細砂～極細砂 50%
②7.5Y3/2 オリーブ黒 シルト 70%、2.5Y7/4 浅黄 細砂～極細砂 30%
③2.5Y7/4 浅黄 細砂～極細砂

624 柱穴
2.5Y7/3 浅黄 細砂～極細砂 80%、2.5Y3/1 黒褐 シルト 20%
615 柱穴
2.5Y7/3 浅黄 細砂～極細砂 80%、2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト 20%
595 柱穴
2.5Y7/3 浅黄 細砂～極細砂 50%、2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト 50%
599 柱穴
2.5Y7/3 浅黄 細砂～極細砂 50%、2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト 50%
616 柱穴
①2.5Y7/3 浅黄 細砂～極細砂 70%、2.5Y4/1 黄灰 シルト 30%
②2.5Y4/1 黄灰 シルト 50%、5Y7/1 灰白 シルト 50%

第71図　建物８平・断面図

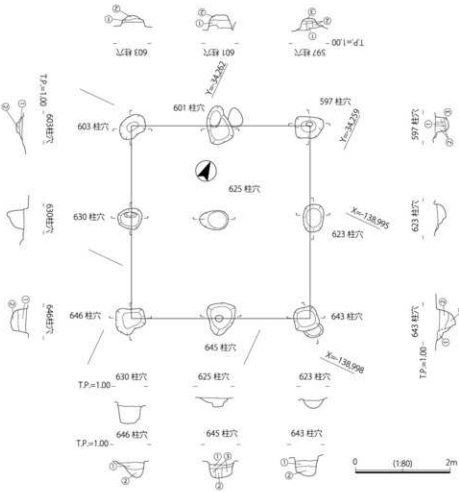
や礎板の痕跡等がみられる柱穴はなかった。

柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古墳時代の建物と考えられる。

建物８（第67・71図、図版36・図版37－１～４）　調査地北側の２区に位置する。桁行は２間で総長3.7m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長3.3m、柱間はほぼ等間。桁行２間、梁間２間の総柱建物。軸線は桁行でＮ－63°－Ｅ分ふれている。柱穴の平面形はすべて方形で、断面形はすべて隅丸方形。628柱穴（図版37－２）で、柱の抜き取り痕跡を確認した以外は、柱や柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は確認できなかった。

柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古墳時代の建物と考えられる。

建物９（第67・72図、図版36・図版37－５～８）　調査地北側の２区に位置し、殆どが建物８の位置と重なる。桁行は２間で総長3.6m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長4.1m、柱間はほぼ等間。桁行２間、梁間２間の総柱建物。軸線は桁行でＮ－26°－Ｗ分ふれている。柱穴の平面形はすべて方形で、断面形もすべて方形。597柱穴（図版37－６）と645柱穴（図版37－７）で、柱の抜き取り痕跡を確認した



630柱穴　5Y6/3オリーブ黄 細砂～極細砂50%、7.5Y3/2オリーブ黒 シルト50%

646柱穴　① 7.5Y4/2灰オリーブ シルト60%、5Y6/3オリーブ黄 細砂～極細砂40%(炭化物混)

② 2.5YGY6/1オリーブ灰 シルト70%、7.5Y3/1オリーブ黒 シルト30%

645柱穴　① 5Y4/1灰 シルト60%、2.5Y7/3浅黄 細砂～極細砂40%(土器片・炭化物混)

② 2.5Y3/1黒褐 シルト（極細砂混）

③ 5BG6/1青灰 シルト80%、7.5Y4/1灰 シルト20%

643柱穴　① 2.5Y4/1黄灰 シルト(礫・細砂・炭化物混)

② 2.5Y4/1黄灰 シルト50%、5BG6/1青灰 シルト50%

③ 7.5Y4/1灰 シルト80%、5BG6/1青灰 シルト20%

623柱穴　2.5Y6/3にぶい黄 細砂～極細砂80%、2.5Y3/1黒褐 シルト20%

597柱穴　① 5Y3/1オリーブ黒 シルト80%、2.5Y7/3浅黄 細砂～極細砂20%

② 2.5Y7/3浅黄 細砂～極細砂70%、5Y3/1オリーブ黒 シルト30%

③ 2.5Y7/3浅黄 細砂～極細砂70%、5Y3/1オリーブ黒 シルト30%

601柱穴　① 7.5Y4/2灰オリーブ シルト60%、5Y6/3オリーブ黄 細砂～極細砂40%(炭化物混)

② 2.5YGY6/1オリーブ灰 シルト70%、7.5Y3/1オリーブ黒 シルト30%

625柱穴　2.5Y6/3にぶい黄 細砂

603柱穴　① 2.5Y6/2灰黄 細砂～極細砂70%、5Y3/1灰オリーブ シルト30%

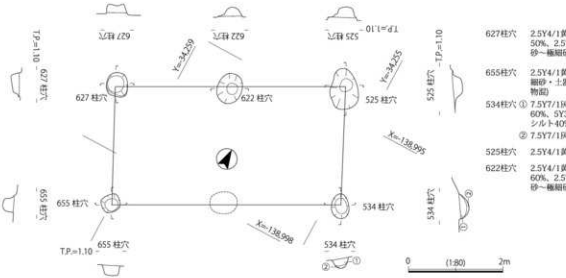
② 2.5Y6/2灰黄 細砂～極細砂

第72図　建物９平・断面図

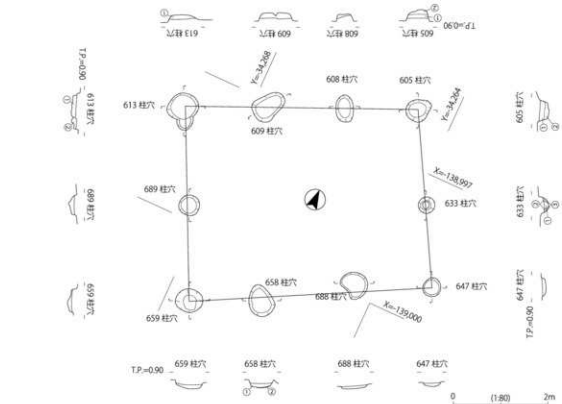
以外は、柱や柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は確認できなかった。建物８と建物９は、ほぼ同位置で梁間も近似した寸法であることから、どちらかが倒壊直後の建替え建物である可能性が高い。

出土遺物は第77図－３・８（図版71）・９である。３は須恵器杯蓋で、外面上部に僅かに反りが認められることから、つまみが付くものと考えられる。９は土師器煮炊具の把手である。どちらも646柱穴から出土した。８は３方透かしを持つ須恵器高杯の脚部で、643柱穴（図版37－５）から出土した。以上の資料からは、建物の詳細な存続時期を決定できないが、概ねこれらを６世紀前半ととらえ、建物存続時期をその頃に求めることはできよう。また建物８も建物９と相前後する時期に機能していたと考えられる。

建物10（第67・73図、図版36・図版38－１～３）　建物８・９の南東に位置する。桁行は２間で総長4.8m、柱間はほぼ等間。梁間は１間で総長2.6m。軸線は桁行ではＮ－63°－Ｅのふれになるが、梁間で



第73図　建物10平・断面図



613柱穴
① 7.5Y3/1オリーブ黒 シルト30%,2.5Y7/2灰黄細砂70%
② 7.5Y3/1オリーブ黒 シルト70%,2.5Y7/2灰黄細砂30%

689柱穴
7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト50%,2.5Y7/2灰黄 細砂50%

659柱穴
7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト50%,2.5Y7/2灰黄 細砂50%

658柱穴
① 7.5Y3/2オリーブ黒 シルト
② 5BG6/1青灰 シルト

688柱穴
7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト50%,2.5Y7/2灰黄 細砂50%

633柱穴
① 7.5Y3/1オリーブ黒 シルト50%,2.5Y7/2灰黄 細砂50%
② 2.5Y7/2灰黄 細砂90%,7.5Y3/1オリーブ黒 シルト10%
③ 2.5Y7/2灰黄 細砂50%,5BG6/1青灰 シルト50%

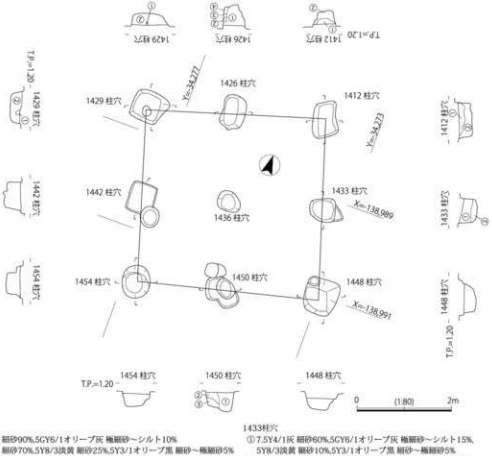
605柱穴
① 7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト50%,2.5Y7/2灰黄 細砂50%
② 2.5Y7/2灰黄 細砂

608柱穴
7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト50%,2.5Y7/2灰黄 細砂50%

609柱穴
5BG6/1青灰 シルト70%,7.5Y3/1オリーブ黒シルト20%,2.5Y7/2灰黄 細砂10%

647柱穴
7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト50%,2.5Y7/2灰黄 細砂50%

第74図　建物11平・断面図



1429柱穴
① 7.5Y4/1灰 細砂90%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%
② 7.5Y4/1灰 細砂70%,5Y8/3淡黄 細砂25%,5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂5%

1442柱穴
7.5Y4/1灰 細砂80%,5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂10%,
5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%

1454柱穴
7.5Y4/1灰 細砂85%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂5%

1450柱穴
① 7.5Y4/1灰 細砂90%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%(炭化物含)
② 7.5Y4/1灰 細砂80%,5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂10%,
5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト5%,5Y8/3淡黄 細砂5%
③ 5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト90%,7.5Y4/1灰 細砂10%

1448柱穴
7.5Y4/1灰 細砂80%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト15%,5Y8/3淡黄 細砂5%

1433柱穴
① 7.5Y4/1灰 細砂60%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト15%,
5Y8/3淡黄 細砂10%,5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂5%
② 7.5Y4/1灰 細砂90%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト10%

1412柱穴
① 7.5Y4/1灰 細砂50%,5Y8/3淡黄 細砂30%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト20%
② 7.5Y4/1灰 細砂60%,5Y8/3淡黄 細砂30%,5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂10%

1426柱穴
① 7.5Y4/1灰 細砂80%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト15%,
5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂5%
② 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%,5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト50%
③ 5GY6/1オリーブ灰 極細砂～シルト
④ 5Y3/1オリーブ黒 細砂～極細砂50%,5Y8/3淡黄 細砂50%

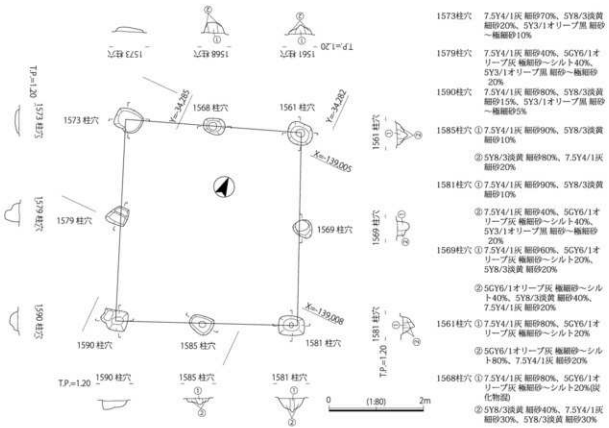
1436柱穴
7.5YS/1灰 極細砂

第75図　建物12平・断面図

はN－26°－Wとなり、さきの建物８・９とほぼ同じ軸の傾きとなる。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。柱、柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等はみられなかった。建物10は建物８・９と一部重なる部分があることから、建物８・９とは存続時期が別であることがわかる。

柱穴からの出土遺物はないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、古墳時代の建物と考えられる。

建物11（第67・74図、図版36・図版38－４～８）　建物８・９の南西に位置する。桁行は３間で総長5.0m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長4.0m。東側柱列の柱間は北から2.1m、1.9mで、西側柱列の柱間2.0mの等間である。軸線は桁行でN－63°－E、建物10と同じふれである。桁行３間、梁間２間の建物となるが、身舎内の635土坑・639土坑をこの建物の柱穴として考えると、総柱の建物となる。ただし、建物11を総柱建物とすると、中央の梁行がややいびつな形となるため、ここでは可能性を指摘するにとどめておく。柱穴の平面形はすべて円形で、断面形もすべて円形。633柱穴（図版38－５）で、柱の抜



第76図　建物16平・断面図

第77図　古墳時代の建物柱穴出土土器

き取り痕跡を確認した以外は、柱や柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は確認できなかった。

出土遺物は第77図－１の須恵器杯蓋の破片のみである。この資料から詳細な時期決定はできないが、柱穴内堆積土と建物軸の方向を合わせて、建物11が存続していたのは古墳時代と考えられる。

建物12（第67・73図、図版12－２・図版39・図版40－２～５）　建物11の北西に位置する。桁行は３間で総長3.8m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長3.6m、柱間はほぼ等間である。桁行２間、梁間２間の総柱建物。建物の軸線は桁行でN－73°－Eである。柱穴の平面形はすべて方形で、断面形もすべて方形。1429柱穴（図版40－３）・1450柱穴（図版40－５）で、柱の抜き取り痕跡を確認した以外は、柱や柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は確認できなかった。

出土遺物は第77図－２・７の２点である。２・７はどちらも須恵器杯蓋で、５世紀後半のものである。２は1426柱穴から、７は1448柱穴（図版40－４）から出土しているが、双方とも出土層位は柱抜き取り後の堆積土である。そのため、上記の須恵器から、建物12の機能時期を限定することはできない。堆積土や建物軸の方向から考えると、先に述べてきた建物同様、存続時期は古墳時代と考えられるが、出土

土器からみて、他の建物よりは時期がやや先行する可能性もある。

建物16（第67・76図、図版39－１・図版40－１・図版41－１～６）　建物11の南西、建物12の南に位置する。桁行は２間で総長4.2m、柱間はほぼ等間。梁間は２間で総長3.6m、柱間はほぼ等間である。桁行２間、梁間２間の建物。建物の軸線は桁行でN－73°－Wである。柱穴の平面形は円形ないしは隅丸方形で、断面形はすべて円形。1561柱穴（図版41－５）・1568柱穴（図版41－２）・1581柱穴（図版41－３・４）で、柱の抜き取り痕跡を確認した以外は、柱や柱の抜き取り痕跡、礎板の痕跡等は確認できなかった。当調査地で検出された古墳時代の掘立柱建物のなかで、唯一総柱建物ではないと確言できる例である。

出土遺物は第77図－４・６である。４は須恵器杯蓋で、端部が外に開く非常に古い様相を持つ。５世紀中頃にあたる。６は須恵器杯身で、口縁端部と底部を欠くが、５世紀後半のものと考えられる。どちらも1568柱穴から出土した。これらの須恵器は、柱根周囲の堆積土から出土したもので、建物存続時期の上限を示すといえる。建物16は建物12同様、他の古墳時代の建物よりやや先行すると考えられる。

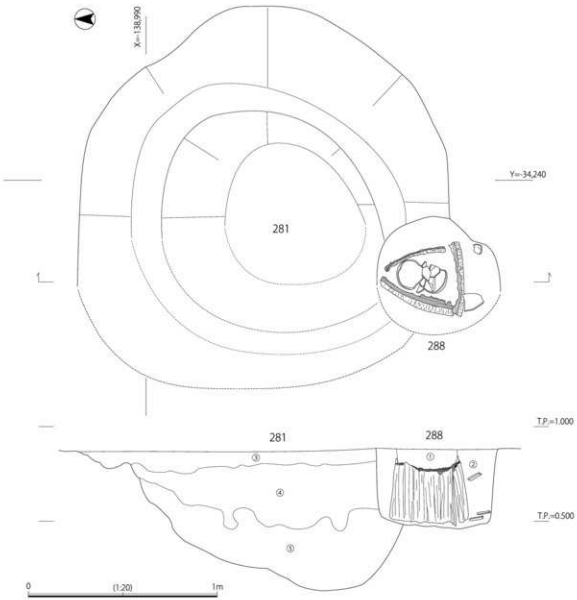
（２）井戸

288井戸（第78・89図、図版42）　調査地北側の微高地から低地への落ち際に位置する。検出時の平面形は円形。検出面から５cm堆積土を掘り下げた状況で、三角形の井戸枠を検出した。288井戸は、281土坑（第89図、図版42－２）と重複関係にある。堆積土を観察する限り、281土坑は人為的に埋め戻されたと考えられ、それは井戸掘削時におこなわれたのであろう。井戸枠は直径約0.65mの円形の土坑を掘削した後、方形の井戸枠３枚を合わせて据付けられている。井戸枠の最下部には底板などはなく、井戸枠直下層である砂層から直接井戸枠内に湧水を得る構造である。井戸枠に使用された板材は幅35cm、高さ30cm前後のもの３枚を用いている。ただし、井戸枠の上部には、当時の加工面が残存していない。そのため、井戸枠は本来縦方向にさらに寸法が長くなるものと考えられ、当然井戸機能時の地表面は、検出面よりもはるかに高いと予想される。

井戸枠外側の裏込め土中には、土器片がいくつか混入していたが、細片ばかりで時期決定できるものはなかった。いっぽう、井戸枠内からは、第84図－15～20の須恵器と土師器が出土している。15は須恵器高杯の脚部から裾部の破片。16は須恵器杯蓋で、６世紀前半のもの。17は須恵器高杯の脚部片で、５世紀後半のものか。18は須恵器壺の口縁部の破片。詳細な時期決定はできない。19・20は土師器甕の胴部から底部にかけての部分。内外面の調整や器形から考えて、古墳時代中・後期のものと考えられるが、それ以上の時期決定はできない。19・20は井戸最下層からの出土（図版42－１・３～５）であることから、釣瓶として使われたものの一部かもしれない。15～18は井戸埋没過程時の堆積土から出土したもので、井戸が機能した時期を明確に確定付けるものではない。

288井戸に先行する281土坑の埋め戻し土からは、第84図－１～９・10（図版71）・11～14の須恵器が出土している。１～４は須恵器杯蓋の破片であるが、すべてつまみを有する。５は須恵器壺の口縁から頸部にかけての破片。６～10は須恵器杯蓋の上部を欠く破片。11・12は須恵器杯身の破片。13・14は須恵器高杯の脚部片である。上記の遺物は５世紀後半のものが主体であるが、埋め戻し土からの出土であることから、土坑の時期をその時期に当てはめることはできない。ここでは、281土坑埋め戻し時期の上限を、５世紀後半ととらえておく。そして288井戸枠内出土須恵器の時期から考えて、288井戸の機能時期を６世紀前半と想定する。

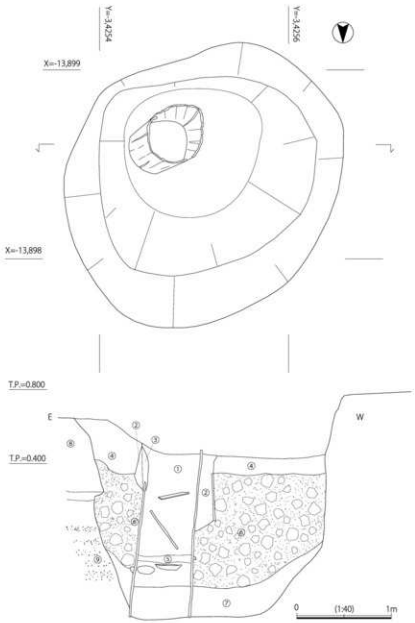
409井戸（第79・89図、図版43・図版44）　調査地北側３区のほぼ中央に位置する。さきの288井戸同



①10Y5/1 灰 極細砂～シルト（土器細片，炭化物少量混）②2.5GY5/1 オリーブ灰 シルト（極細砂・土器片・炭化物多く混）
③2.5Y3/2 黒褐 シルト（礫・極細砂・土器片・炭化物混）④7.5Y3/2 オリーブ黒 シルト⑤10GY6/1 緑灰 シルト（細砂混）

第78図　288井戸平・断面図

様、微高地から低地への落ち際に掘られている。後述する408土坑の埋没後に築造された。検出時は直径３ｍ弱の円形の土坑であった。検出面から約40㎝堆積土を掘り下げた状況で、円形の井戸枠を検出した。井戸枠は平面円形で、最下面で直径1.3ｍとなる掘形を掘削してから据付けられている。井戸枠は掘形の北端に拠っており、やや南西に傾いている。井戸枠周囲の裏込め土は、第11－２層と第12層のブロックで構成されている。掘形を掘削した際に生じた土をそのまま用いたのであろう。井戸枠は１本の木を縦方向に半裁してできた、蒲鉾状の木材の内側を刳り貫き、再び合わせたもので、前期古墳にみられる割竹型木棺と同様の製作方法で作られている。409井戸もさきの288井戸同様、井戸枠の上部には、当時の加工面が残存していない。そのため、井戸枠は本来縦方向にさらに寸法が長くなるものと考えられ、当然井戸機能時の地表面は、検出面よりもはるかに高いと予想される。特徴的なのは、井戸枠として樹立させたときに、両方の材が離れないよう縄で括り付けられていたことである。縄は井戸枠の最下部より50～65㎝の高さの部分で括り付けられており、北東部分に結び目が確認できた。本来の井戸枠の

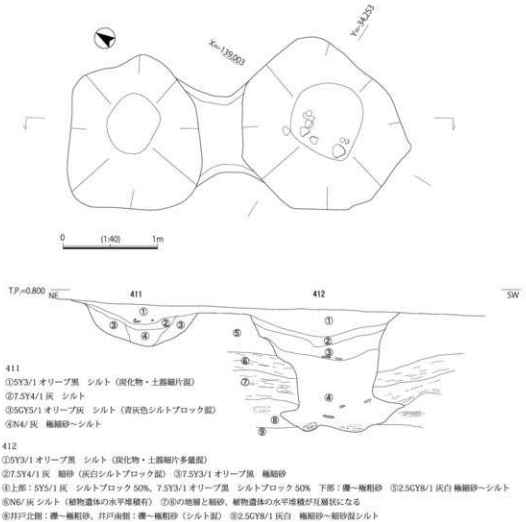


① 10GB2/1緑灰　シルト（井戸壁内の埋土）
② 5GY2/1オリーブ黒　シルト
③ 7.5GY2/1緑黒　シルト
④ 5G5/1緑灰　シルトブロックと
オリーブ黒　シルトブロック
⑤ 5G5/1緑灰　シルト（植物遺体混）
⑥ 5GY5/1緑灰　極細砂ブロックとオリーブ黒　極細砂シルトブロック
⑦ 5Y8/1灰白　細砂ブロック（シルトブロック混）
⑧ 5BG6/1青灰　シルト
⑨ 5Y8/1灰白　極細砂

第79図　409井戸平・断面図

縦寸法が検出時のものより長くなることを考えれば、縄の括り付けは残存している１ヶ所では不十分と考えられ、おそらく欠損した上部に、もう一つ括り付けられた箇所があったと想定できる。

井戸枠外側の裏込め土中からの出土遺物はない。いっぽう、井戸枠内からは、第86図－８の土師器甕と瓢箪（図版43－２・図版44－８）が出土している。８は井戸枠内の最下層から出土したもので、井戸機能時の土器である可能性が高い。ただし、底部のみの残存で、内外面の調整や器形から考えて古墳時代中・後期のものと考えられるが、それ以上の時期決定はできない。さきの288井戸同様、釣瓶として使用していた土師器の、胴部から下の部分が、井戸枠内に転落したものと考えられる。瓢箪も内部が刳り貫かれていたために、釣瓶として使用された可能性が指摘できる。残念ながら瓢箪は、取り上げ後の

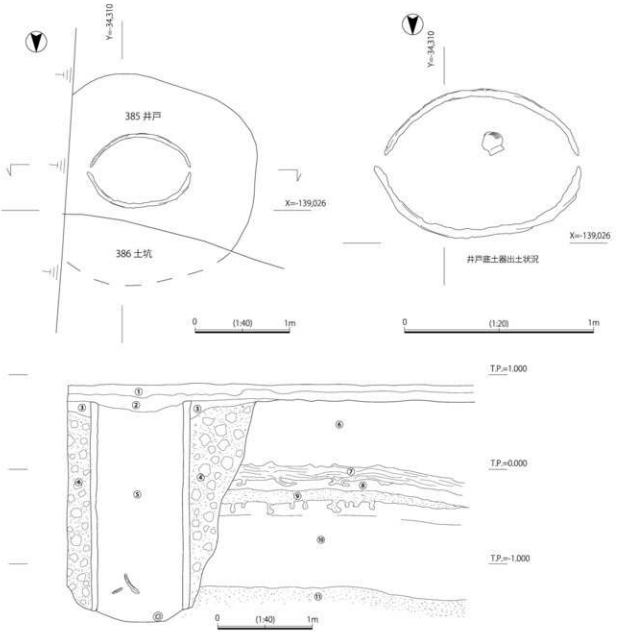


第80図　411土坑・412井戸平・断面図

洗浄段階で細片化してしまったため、図化することができなかった。以上のように、出土遺物からは409井戸の機能時期を決定することはできない。先述した周辺の建物の存続時期から考えて、おおまかに6世紀代ととらえておく。

412井戸（第80・89図、図版45）　409井戸の南で検出した。409井戸よりやや低い場所に位置する。検出時の平面形は直径1.8mのややいびつな円形。井戸枠は無い。最下面が砂質の湧水層で、井戸枠が無い状態でも涌水が得られたと考えられる。ただし、断面の形状からみると、本来井戸枠が設置されていたものが抜き取られた後、埋没した可能性も考えられる。それは掘形の最下部が一部末広がりになっていることから想定される。井戸の掘形を掘削するときに、最下部を末広がりに掘削することはまず考えられない。おそらく井戸の機能時に、湧水とともに周辺の細砂が井戸枠内に流れ込んだ結果隙間が生じ、そこに上部の地層が落下して、一部末広がりの掘形のようになったと考えられる。ただし、堆積層の下半部は、第11－２層と第12層のブロックで構成されており、分層不能であったため、井戸枠が存在したのか否かは確言できない。

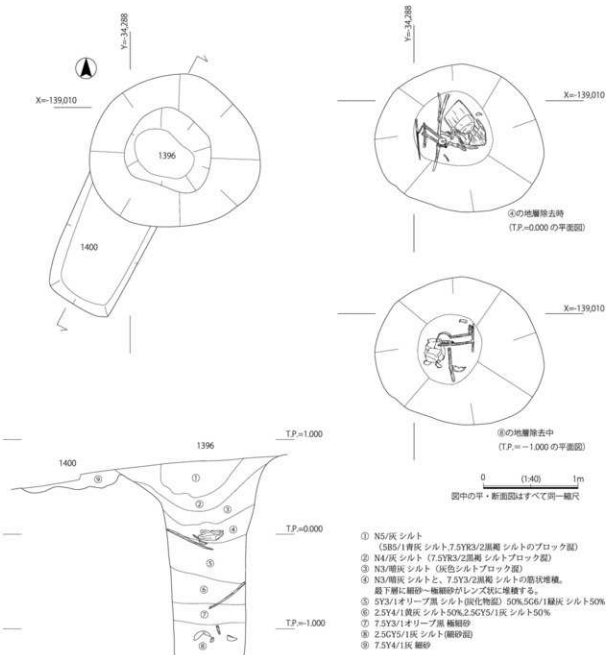
掘形内堆積層からの出土遺物は、第84図－21～28（図版71）、第86図－４、第131図－11である。第84図－21・22・24・25・27は掘形の最下部から出土した（図版45－８）。21・22は土師器高杯の身の部分で、どちらも内外面に縦方向のミガキが施されている。24は土師器高杯の脚部で、円形の透かし穴が



第81図　385井戸平・断面図

3ヶ所穿たれている。25は須恵器甕の体部片。27は平底鉢で、外面にはタタキ、外面底部にはナデを施す。23は底部丸底の土師器鉢。26は須恵器甕の体部片。28は平底鉢で、体部外面は磨滅し煤が付着しており、調整方法は不明。外面底部には方形の凹型圧痕がみられる。第86図－４は土師器甕の胴部から底部にかけての破片。外面には格子状のタタキ痕跡がみられる。第84図－23・26・28、第86図－４は第80図③の堆積層から出土した。第131図－11は滑石製の小玉。第80図④の堆積層を洗浄し、篩いにかけたところ出土した。掘形最下部から出土した土器から判断する限り、412井戸が機能した時期は５世紀末から６世紀前半と考えられる。

385井戸（第81・90・142・143図、図版32－６・図版46・図版108～110）　調査区中央５区の北側、



第82図　1396井戸平・断面図

微高地から低地への落ち際に位置する。５区調査時の側溝掘削中に検出した。検出時の平面形は直径約2.2～2.5mの楕円形。検出面から約15cm堆積土を掘り下げた状況で、円形の井戸枠を検出した。井戸枠は平面形は楕円形で、最下面で直径1.3mとなる掘形を掘削した後、据付けている。井戸枠は掘形のほぼ中央に位置している。井戸枠周囲の裏込め土は、第11－２層と第12層のブロックで構成されている。掘形を掘削した際に生じた土をそのまま用いたのであろう。いっぽう、井戸枠内の堆積土は、最上部から最下部に至るまで、保水量の多いシルト層で、分層は不可能だった。

平安時代後半の堆積層である第９層を除去した時点でも、僅かながら井戸の凹みが確認できたことから、井戸築造当初から平安時代に至るまで、井戸枠の中は自然堆積土で徐々に埋まりながらも、常時開口していたといえよう。井戸枠直下は第12層のなかでも、特に粗砂の堆積が厚い箇所（第81図⑪の地層）に位置し、調査時にも常時水が湧き出ていた。井戸枠は１本の木を縦方向に半裁してできた蒲鉾状の木

材の内側を、刳り貫き再び合わせたもので、409井戸の井戸枠と同じ構造である。しかし、409井戸との基本的な違いは、385井戸の井戸枠が準構造船の底部分の転用部材であることである。もともと一つであった船底の部材を、横方向に二分し合わせたものと推測される。この井戸枠については、出土木製品の項で詳述する。

井戸枠外側の裏込め土中からの出土遺物はなかった。井戸枠内からの出土遺物は、第86図－６（図版71）・７である。６は土師器小型壺で井戸枠内の最下層から出土した（図版46－２）。７は土師器杯で７・８世紀のものと考えられる。第81図⑤の上層から出土した。６の土師器は古墳時代のものであるが、詳細な時期は不明。ただし385井戸の築造時期が、古墳時代であったことは確かである。

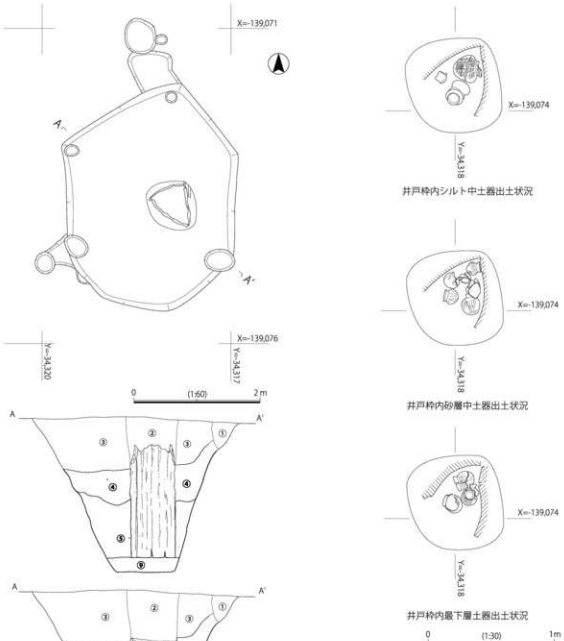
1396井戸（第56・82・90図、図版47）　調査区北側中央より４区、微高地上に位置する。建物16の西隣に位置する。1396井戸は南側の1400土坑が埋没した後に掘削されている。検出時の平面形は直径1.7mのほぼ円形。埋没過程の間で、一定期間の開口時期があったようである。井戸検出時には、開口していた時期に堆積した灰色シルト層（第82図①の層）の広がりが中央部分にみられ、一見ドーナッツ状の平面形が確認された（図版47－２）。井戸の最下部は基盤層である第12層の粗砂部分に達している。井戸枠は検出されなかった。掘形内堆積土のうち、④以下はすべて水平堆積で基盤層（第12層）のブロックを多く含むことから、④～⑧の堆積土は人為的な埋め戻し土であるといえる。②③の堆積土は擂鉢状に堆積していることから、開口時の自然堆積とみられ、混入している第12層のブロックは周囲から崩落したものと考えられる。なお、412井戸では、井戸枠が取り去られた可能性を指摘したが、1396井戸については不明である。

出土遺物は、第84図－29～38（図版71）、第86図－５、第133図－２である。このうち第84図－34・37・38と第86図－５は、井戸の最下部から出土したものである（第82図－８、図版47－５）。すべて土師器甕で古墳時代のものである。特に第84図－38は口縁端部が内湾し、37よりも古い様相を示している。29・32は第82図④の堆積層を除去している段階で、多くの木片とともに出土した。29は土師器甕の口縁部、32は土師器高杯の脚部である。これらはおそらく、周辺の包含層や廃棄物と同時に投棄されたと考えられる。残りの30・31・33・35の土師器高杯、36の土師器甕も④～⑧の堆積土中から出土しており、井戸埋め戻し土に含まれていた土器であろう。第133図－２の木製桶底部は、⑦⑧の堆積層にまたがって出土した。復元径が約29cmの円形で、幅約３cm、厚さ１cmの板材を貼り合わせて成形している。縁辺部分は胴部と組み合わせるための段差を有しており、底部と胴部を結合させるための木釘が残存している。古墳時代の遺構から出土したことを考えると、桶の底部としては古い事例であると考えられる。

以上の遺物のうち、1396井戸の築造時期を示すものは第84図－38といえ、その築造上限は５世紀末まで遡る可能性がある。

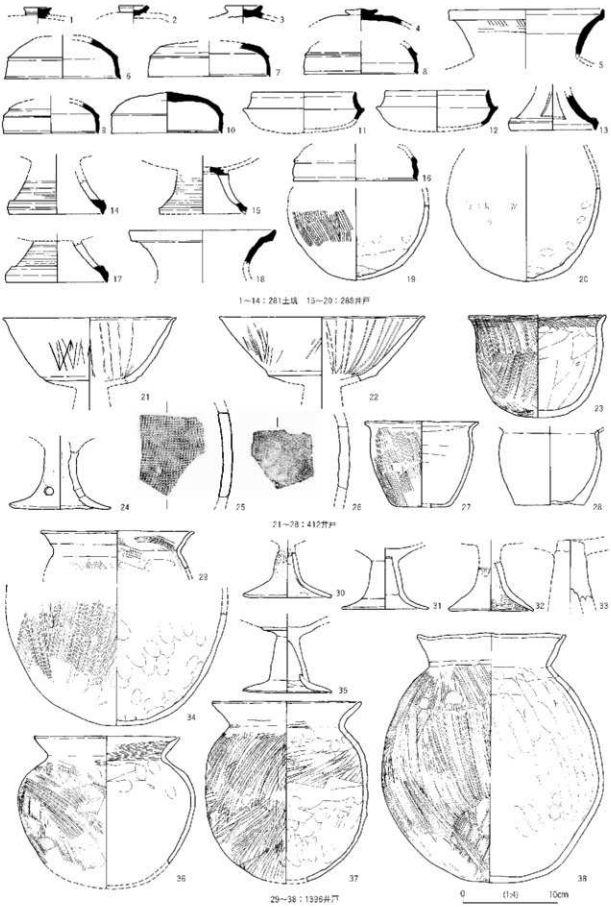
754井戸（第83・100・144図、図版48・図版49・図版50）　調査地南側中央よりの微高地上に位置する。検出時の平面形は幅2.7～3.6mの六角形で、南角部分が隅丸形状になっている。検出面から約45cm堆積層を掘り下げた段階で、三角形の井戸枠を検出した。六角形の井戸掘形の角には、裏込め土の堆積後に掘削された円形の土坑４基を検出している（第83図平面図）。土坑の堆積土はいずれも第11－２層で、古墳時代の地層が堆積していることから、754井戸築造直後に掘削された可能性が高い。このため、754井戸には、上屋などの上部構造が設けられていたと想定できる。

井戸掘形の断面形は逆台形で、底面は直径約１mの円形であった。井戸枠は掘形の中央やや東よりに据付けられている。井戸枠上部は本来の加工痕跡がみられず、廃絶時に一部削平されたと考えられる。

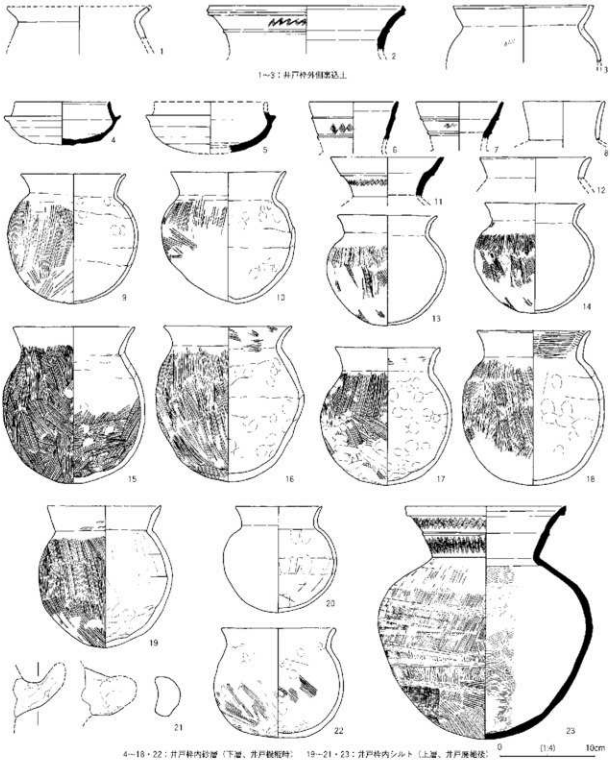


第83図　754井戸平・断面図

また、検出面から井戸枠まで50㎝近くあるため、井戸機能時には、もう１段井戸枠が据付けられていたとも想定できる。検出した井戸枠は、３枚の板材（第144図－１～３）を三角形の筒状になるように合わせて作られている。一部北側の角と西側の外側の角には、隙間を塞ぐための細長い板材が当てられていた（第144図－４・５）。３枚の板材は準構造船の船材を転用した可能性がある。たとえば北西側（第144図－１）の枠板と、東側（第144図－２）の枠板の断面形には、側縁部にほぼ直角の段差が確認できる。これらの板材が井戸枠専用に加工されたと考えるならば、板同士の合わせ目に隙間を生じさせやす



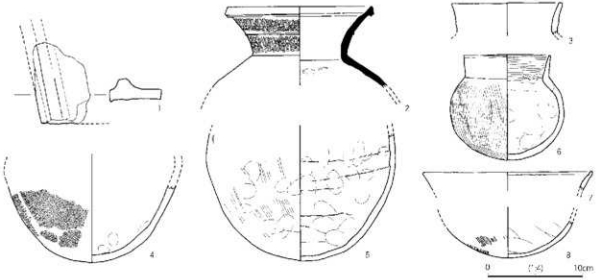
第84図　古墳時代の井戸出土土器①



第85図　古墳時代の井戸出土土器②（754井戸出土土器）

く、不要な段差としか考えられない。ここでは３枚の板材が準構造船の舷側板、または船底の一部である可能性を指摘しておく。

井戸枠外側の裏込め土は、第11－２層と第12層のブロックから成る。いっぽう、井戸枠内側の堆積土は明確に２層に分かれる。上層は灰色のシルトで、井戸廃棄後の堆積層である（第83図⑥の層）。木葉や種子などの植物遺体が混入していることから、井戸枠内部は開口状態が続いており、徐々に自然堆積層で満たされていったものといえる。下層は灰白色の細砂と粗砂の混成層である（第83図⑦の層）。この層



1～3：754井戸（1・2：井戸枠内シルト　3：裏込め）　4：412井戸　5：1396井戸　6・7：385井戸　8：409井戸

第86図　古墳時代の井戸出土土器③

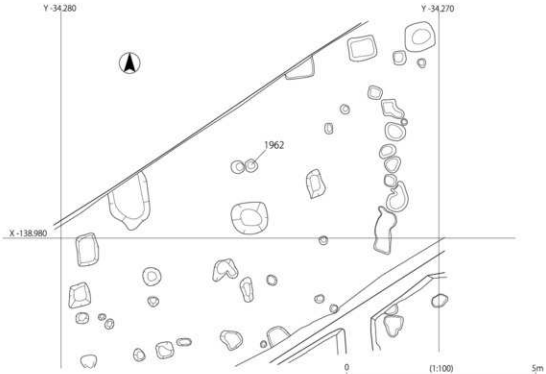
は直下の地層（第83図⑨の層）が、灰白色の粗砂層で湧水層であることから、細砂と粗砂が湧水により井戸枠内に運ばれて形成されたものである。したがって、この地層は井戸が機能している期間中に形成されたと考えられ、ここから出土する土器は、井戸機能時に使用された土器であるといえる。

井戸枠外側の裏込め土中から出土した遺物は、第85図－１～３と第86図－３である。第85図－１は土師器甕の口縁部。第85図－２は須恵器甕の口縁部。第85図－３と第86図－３は土師器甕の口縁部である。とくに第85図－３の甕口縁端部は内湾しており、やや古い特徴をもつ。この甕は井戸築造以前に周囲で展開していた住居等にともなうと考えられる。

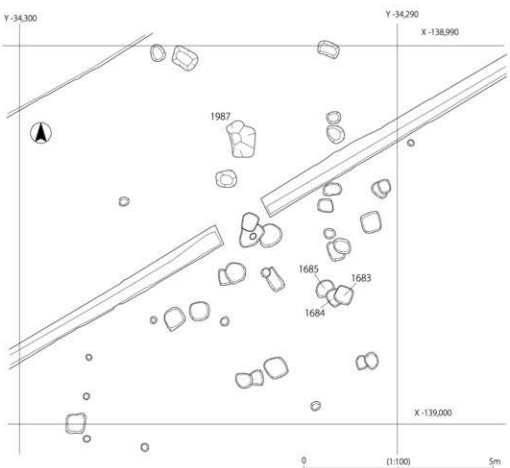
井戸枠内からは、第85図－５～23（図版72・73）、第86図－１・２（図版71）・３、第131図－12・13（図版97）の小玉が出土した。そのうち、第85図－５～18・22は井戸枠内の砂層（第83図⑦の層）からの出土である。５は須恵器杯身で、５世紀後半のものか。６・７は須恵器大型ないしは樽型𤮈の口縁。８は土師器直口壺の口縁。11は須恵器小型𤮈の口縁。12は土師器甕の口縁。９・10・13～18・22の９点は土師器甕で、22以外の８点は寸法に差異はあるものの、外面にハケ目がみられ、内面に指頭圧痕を残す（15はハケ目）など共通した様相を持つ。これら９点はすべての個体において、わずかな欠損部分が見られるだけで完存している。井戸枠内の砂層から一括して出土したこと（図版49・図版50－６・７）から考えると、釣瓶として使用されていた甕が、井戸内に落下したのであろう。いっぽう、４～７・11の須恵器はすべて破片資料であるため、井戸の機能時期を積極的に決定付けるものではない。第85図－19～21・23は、井戸枠内のシルト層と、砂層の間（第83図⑥と⑦の間）からの出土である。19は土師器甕で、さきの砂層出土土師器甕と同じ特徴を持つ。頸部に細手の縄が巻かれた状態が確認でき（図版50－８）、釣瓶として使用されたことを証明している。20は土師器の小型甕。外面にナデ調整を施す点が他の土師器甕と異なる。21は煮炊具の把手。23は須恵器壺。完存していることから、釣瓶として使用していたものが落下したのであろう。図版50－４・５でわかるように、19・20・23は砂層の上面に位置し、その上にシルト層が堆積していることから、井戸の機能停止時に近い時期に、井戸枠内に落下したものと考えられる。第131図－12・13は滑石製の小玉で、井戸枠内のシルト層を洗浄した際に出土した。

（３）土坑・溝

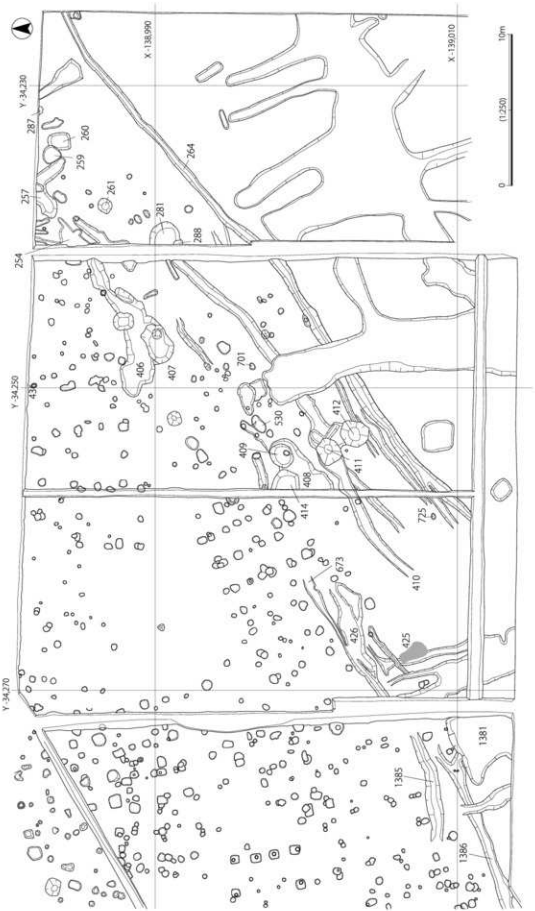
1962土坑（第87・95図、図版52－２）　調査地北側の微高地上に位置する円形の土坑。堆積土は第11



第87図　1962土坑平面図

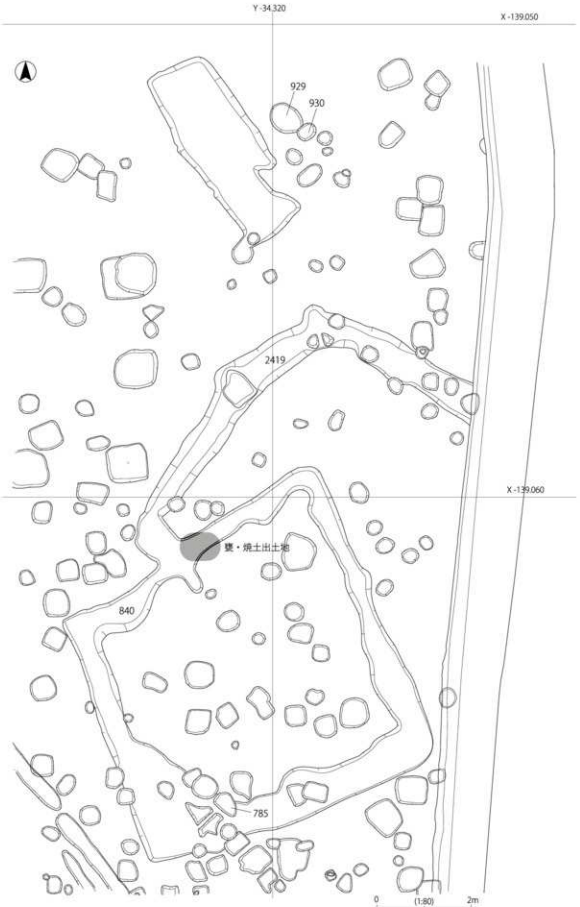


第88図　1987・1684土坑平面図

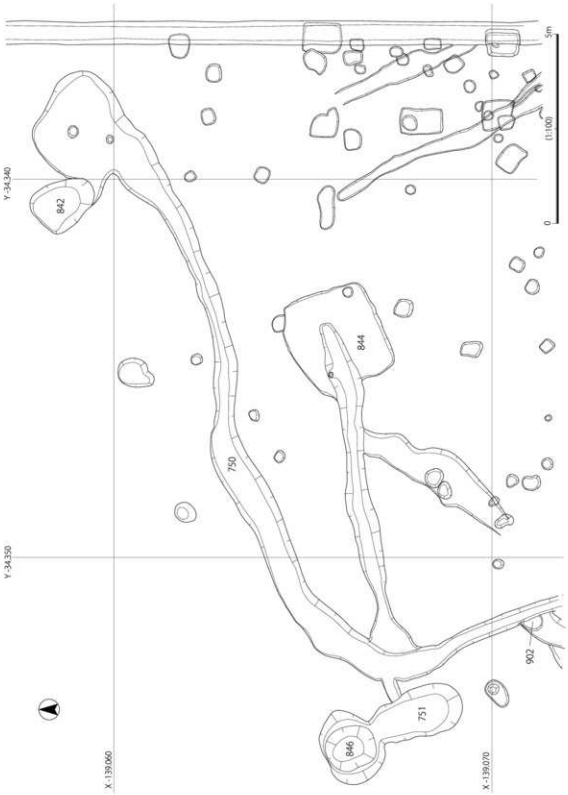


第89図　2・3区古墳時代の遺構配置図

第90図　4・5区古墳時代の遺構配置図



第91図　6区古墳時代の遺構配置図①



第92図　6区古墳時代の遺構配置図②

－２層。出土遺物は土師器小型甕の口縁部片（第105図－47）である。

436土坑（第89・95図、図版52－３）　調査地北側の微高地上に位置する隅丸方形の土坑。堆積土は第11－２層。出土遺物は須恵器杯蓋（第105図－43）である。

1987土坑（第88・95図、図版52－５）　調査地北側中央よりの微高地上に位置する方形の土坑。堆積土は第11－２層。須恵器杯蓋（第103図－31）と須恵器杯身（第103図－32）が出土していることから、古墳時代の遺構と考えられるが、平面形と軸方向から、古代の遺構の可能性も考えられる。

287土坑（第89図）　調査地北側２区の微高地から低地への落ち際に位置する。堆積土は第11－２層。須恵器杯身（第104図－27）が出土している。

259土坑（第89図）・**260土坑**（第89図）　287土坑の西側に位置する。260土坑の埋没後に、259土坑が掘削されている。259土坑からは、３ヶ所の掛け口の穴が確認できるカマド片（第104図－33、図版94）が出土している。260土坑からは、須恵器高杯の脚部から裾部片（第104図－31）が出土している。

261土坑（第89図）　259土坑・260土坑の南西に位置する。堆積土は第11－２層。須恵器高杯（第104図－28）が出土した。28の外面には、形骸化した波状紋が巡らされている。

254溝（第89図）・**257溝**（第89・95図）・**406溝**（第89・93図、図版51－１・２）・**407土坑**（第89・93図、図版51－１・２）　調査地北側の微高地から、低地への落ち際に位置する土坑と溝。254溝と257溝、406溝は検出状態では繋がっていないが、本来は一体の溝であったと考えられる。堆積土は黒色のシルトで土器片を多く含んでいた。407土坑は254溝・257溝・406溝の埋没後に掘削されている。堆積土は黒色の極細砂で、土器片、炭化物、焼土を多く含む。焼土のなかには、炉壁らしき塊もみられたことから、鋳造など高温処理をおこなう生産関連遺構の可能性がある。

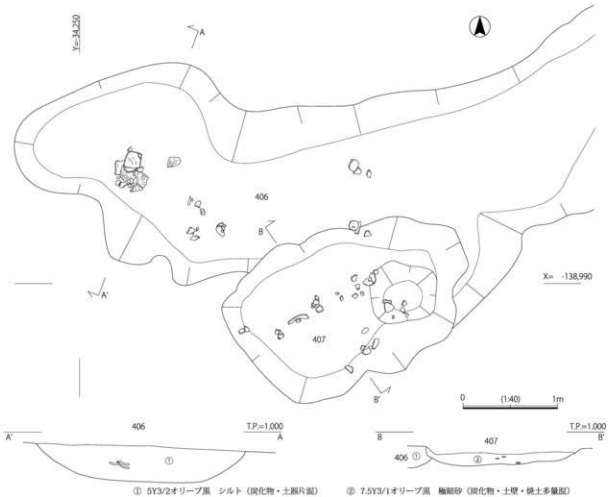
254溝から出土した遺物は、第103図－21・22である。21は須恵器壺の口縁部。22は須恵器高杯の脚部で、３方向の透かし孔が穿たれている。

257溝から出土した遺物は、第103図－23･24である。23は須恵器高杯の杯部。24は須恵器壺の口縁部。

406溝から出土した遺物は、第104図－１～19（図版74）である。１は土師器椀または平底鉢の底部で、内外面ともに磨滅が著しく、調整方法は不明。２は須恵器杯身。３は土師器高杯。内外面ともに磨滅が著しく、調整方法は不明。４は土師器小型甕。５は平底鉢の底部で、内外面ともに磨滅が著しく、調整方法は不明、底部はナデ調整が確認できるのみ。６・15は須恵器大型器台の脚部で、杯部と裾部は欠損している。脚部には３段の突帯が巡り、突帯間には波状紋を施した後、方形の透かし孔を穿っている。７・８は煮炊具で、おそらく甑の把手。上面中央に１条の溝がみられる。９は土師器甕の口縁部。11～14・16・17は須恵器甕の胴部の破片。18は須恵器甕の底部。19は須恵器甕の口縁部から胴部で、外面は平行タタキを施した後、水平方向に沈線を巡らせる。

407土坑から出土した遺物は、第104図－20～26（図版74）である。20は土師器高杯の杯部で、内外面ともに磨滅が著しく、調整方法は不明。21は土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片。22は土師器甕の口縁から胴部であるが、上層（第10－２層）遺物の混入の可能性がある。23は須恵器大型器台の杯部の破片。外面には波状紋の下に、斜めＺ字状に列点紋を巡らせる。24は須恵器甕の口縁部から胴部の破片。外面は平行タタキを施した後、水平方向に沈線を巡らせる。25は土師器煮炊具の胴部の破片。26は器台の脚部の破片。

701土坑（第89図）　407土坑の南西で微高地から落ち込む傾斜地に位置する。堆積土は第11－２層。須恵器杯身（第105図－44）が出土している。



第93図　406溝・407土坑平・断面図

530土坑（第89図）　701土坑の西側に位置する。堆積土は第11－２層。須恵器杯身（第105図－46）が出土している。

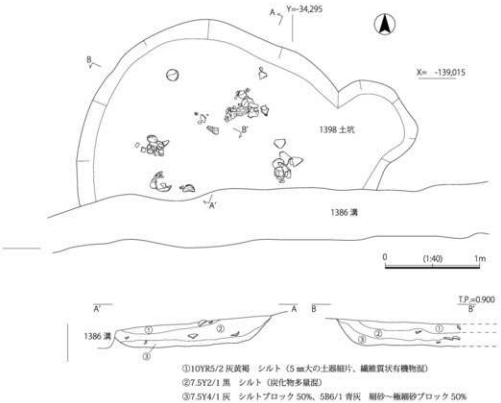
408土坑（第89・95図）　調査地北側の微高地から低地への落ち際、古墳時代の建物群（建物８～11）の南東に位置する土坑。深さは検出面から約20㎝。浅く自然の落ち込みのようにみえるが、当時の地表面が検出面より高かったことを考えれば、人工的な土坑と捉えるべきであろう。

出土遺物は第105図－１～７である。１は須恵器杯身。２は須恵器高杯の杯部から脚部にかけての破片。透かし孔は一つ確認できたが、総数はわからない。３は須恵器高杯の裾部。脚部付近に段がある。４は須恵器短頸壺の口縁部片で、口縁は直口状を呈する。５はＵ字形土製品の脚部分の破片。６・７は煮炊具の把手。６はおそらく甑の把手であろうが、下側には２単位の刺突痕がみられる。

414土坑（第89・95図、図版51－３）　調査地北側の微高地から低地への落ち際に位置する土坑。408土坑の埋没後に掘削された土坑。円形の土坑で、全体の約６割が残存していた。直径は1.9m、深さは検出面から約１m。堆積土の殆どが第11－２層と、第12層のブロックから成っているため、人為的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は第105図－13・14である。13は須恵器杯蓋。14は土師器直口壺の口縁部片である。

411土坑（第80・89図、図版51－４・５）　412井戸の北西に位置する。後述する410溝の埋没後に掘削されている。土坑の最終堆積土（第80図①の堆積土）は412井戸の最終堆積土と繋がる。この堆積土



第94図　1398土坑平・断面図

が炭化物や土器片を多量に含むことから、412井戸と同時に人為的に埋め戻されたと考えられる。ただし、掘削開始時期が412井戸と同時かどうかはわからない。

出土遺物は第105図－８～12である。８は須恵器杯身。９は須恵器甕の口縁部片。10は土師器甕の胴部片で、外面に格子目タタキが施されている。11は土師器甕の口縁から胴部の破片。古代の甕で、上層（第10－２層）遺物の混入である。12は須恵器甕の胴部片である。

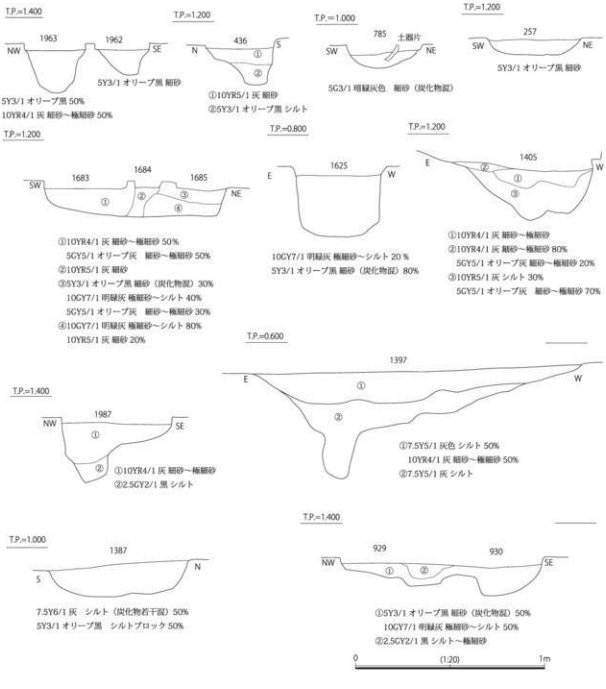
725土坑（第89図）　３区南側の低地部分に位置する。堆積土は第11－２層。古墳時代の須恵器杯蓋（第105図－39）、杯身（第105図－40）が出土している。

1398土坑（第90・94図、図版53－１・２）・**1387溝**（第90・95図、図版52－８）　1398土坑は1387溝の埋没後に掘削されている。1387溝の堆積土は、黒色の第11－２層と第12層がブロック状に混じりあい、さらに炭化物の混入もみられる。堆積土の観察から、人為的に埋め戻したものと考えられ、1398土坑はその後に掘削された。

1387溝から出土した遺物は、第103図－25・26である。25は須恵器杯蓋、26は須恵器杯身である。ただし、26は1398土坑よりの位置から出土している。厳密な出土遺構は決めがたい。

1398土坑は本来直径約３ｍの円形の土坑であったものが、1386溝によりその半分近くが削平されてしまっている。1398土坑の堆積土は３層に分かれるが、最下層が第11－２層と第12層のブロック土で、上の２層は黒色ないしは灰色のシルトである。どの堆積土にも、炭化物と土器片が多く混ざっていることが共通する。土器の出土状況や残存状況、堆積土の観察から廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は、以下で述べる遺物からわかるように、当調査地の古墳時代における早い段階にあたることがわかる。

1398土坑から出土した遺物は、第106図（図版74）、第131図－１～８（図版97）である。第106図－１～８は須恵器杯蓋。９～18は須恵器杯身。杯蓋も杯身も上限は５世紀後半。19・20は土師器椀。21は須



第95図　古墳時代の遺構断面図①

恵器高杯の裾部片。22は土師器高杯の杯部片。23・26・33～35は小型土師器甕の口縁から胴部にかけての破片。25は土師器平底鉢の底部から胴部の破片。底部は平坦、外面はハケ目調整痕が残る。27～32は土師器煮炊具の把手。36は土師器甕の口縁部片。37は須恵器壺。38・39は土師器甕の口縁部。38は外面に格子状のタタキを施し、焼成は硬質で赤褐色を呈する。39は口縁端部が内湾する。40・43は小型土師器甕。41は土師器甑の口縁部から胴部の破片。42は土師器甕。44は須恵器壺で、胴部外面には僅かに平行タタキ痕がみられる。45・46は土師器甕。双方とも外面にハケ目調整痕が残る。46は他と比べて長い胴を持つ。第131図－１～８は土坑の堆積土を洗浄して出土した小玉である（巻頭図版中段）。１は翡翠製、４は琥珀製、８は瑪瑙製、２・３・５～７は滑石製である。以上の遺物を概観すると、土師器甕や甑などの煮炊具が多くを占めていることがわかる。このことから、廃棄土坑である1398土坑の周辺で、煮炊きをともなう生活行為がおこなわれていたといえる。

1405土坑（第95図、図版54－５）　調査地北側やや中央よりの微高地上、建物12の北側に位置する。直径0.6ｍの円形の土坑。出土遺物は須恵器高杯の裾部片（第104図－30）である。

1684土坑（第88・95図、図版54－４）　調査地中央微高地上に位置する。直径約0.2ｍの円形の土坑。堆積土は第11－２層と第12層のブロック土。複数の遺構と重複関係が確認でき、1685土坑（第88・95図）→1684土坑→1683土坑（第88・95図）の順で掘削された。出土遺物は土製錘（第107図－７）である。1683土坑・1685土坑からの出土遺物は無い。

1625土坑（第90・95図、図版54－３）　調査地中央４区の南側にひろがる低地に位置する。直径約0.5ｍの円形の土坑。堆積土は第11－２層に炭化物を含む。出土遺物は須恵器杯身（第107図－５）である。

1397土坑（第90・95図、図版53－４・５）　1398土坑の東に位置する。直径約1.8ｍの円形の土坑。1398土坑同様、1386溝により一部が削平されている。堆積土は下層はシルトであるが、上層は第11－２層と第12層のブロックから成る。

出土遺物は第103図－45・46（図版73）である。どちらも小型の土師器甕であるが、45は口縁部片で、46はほぼ完存している。46は堆積土の下層（第95図②の堆積土）から出土した（図版53－５）。

929土坑（第91・95図、図版56－５）　調査地南側の微高地から低地への落ち際に位置する。直径約0.5ｍの円形の土坑である。一部930土坑（第91・95図）に削平されている。柱の抜き取り痕跡らしき層を確認した。抜き取り痕跡周囲の堆積土は第11－２層である。出土遺物は土師器甕（第109図－14）である。

840溝（第91図）・**2419溝**（第91図）　調査地南側の微高地上に位置する。正方形状に巡る溝で、住居址の可能性が指摘できる。ただし、溝の内側では、いくつかの土坑が検出されているが、住居の柱穴に成り得るような位置関係にあるものはない。

2419溝は840溝の北側部分で交差する。正方形状に全周するわけではないが、840溝同様、住居址の可能性が考えられる。双方の溝の堆積土は炭化物混じりの第11－２層で、遺構間の重複関係は認められなかった。

840溝・2419溝とも、溝内からの出土遺物は無いが、第91図のアミ掛け部分で、ほぼ完存する土師器甕２個体が並んで検出された（第108図－４～６、図版57－６、図版76）。甕周囲の包含層が炭化物を多く含んでいたことから、カマドの残骸の可能性も捨て切れない。４・６は溝の内側で並んで検出されたものであるが、５は周辺の炭化物混じりの包含層から出土した。４・５は当調査区でよくみられる土師器甕である。いっぽう、６は口縁部が直角に立ち上がり、端部の下約１㎝の部分で、やや外に膨れると

いう特徴を持ち、内外面ともにハケ目調整がみられる。

785土坑（第91・95図、図版54－６）　調査地南側の微高地上に位置する。840溝の埋没後に掘削されている。直径約0.4ｍの円形の土坑。出土遺物はカマドの裾部片である（第109図－18）。側面だけの破片で、焚口部分は残らない。18の外面には指頭圧痕とハケ目が確認できる。

842土坑（第92・96図、図版54－７）　調査地南側の微高地から低地への落ち際に位置する土坑。下記の750溝と繋がるため、一体の遺構の可能性がある。堆積土は上層と下層に分かれ、どちらも極細砂からシルトを主体とした第11－２層である。下層にはブロック土が混じるが、これはおそらく周囲からの基盤層（第12層）が崩落し、流れ込んだものと考えられる。したがって、842土坑の埋没は自然堆積によるもので、人為的なものではないと考えられる。

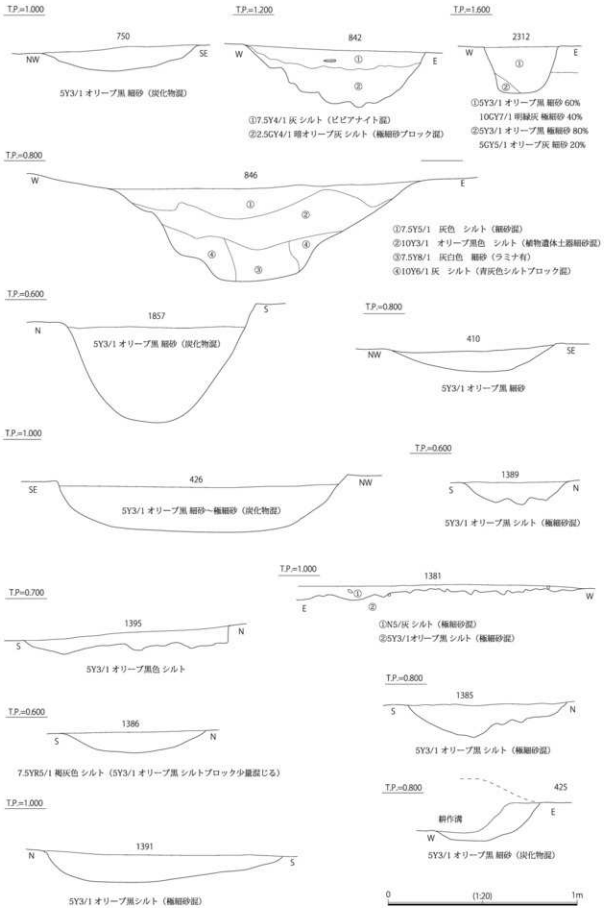
出土遺物は第109図－１～10（図版75・94）である。１は須恵器杯蓋。２は須恵器杯身。３・４は土師器高杯の脚部。５は須恵器高杯で、脚部に３方向の透かし孔を持つ。６は土師器小型壺で、外面には僅かにハケ目、内面には内傾する粘土紐の接合痕跡と指頭圧痕が残る。７は須恵器甕の口縁部片。８・９は土師器甕の胴部片と口縁部片。10はＵ字形土製品の脚部の破片。表面には２条の突帯が付く。裏面は磨滅により、製作・調整痕跡が確認できない。

750溝（第92・96図）　調査地南側の微高地から低地への落ち際に位置し、微高地の北西周囲を巡る。溝は北東端が最も高く、ほぼ東西方向に走り、途中で鍵の手状に南に曲がる。曲がりきった南西端近くが最も低い。堆積土は極細砂からシルトを主体とした第11－２層で、埋没は842土坑同様、自然堆積によったと考えられる。溝が巡る位置から考えて、古墳時代における集落縁辺に排水目的で掘られた溝といえる。

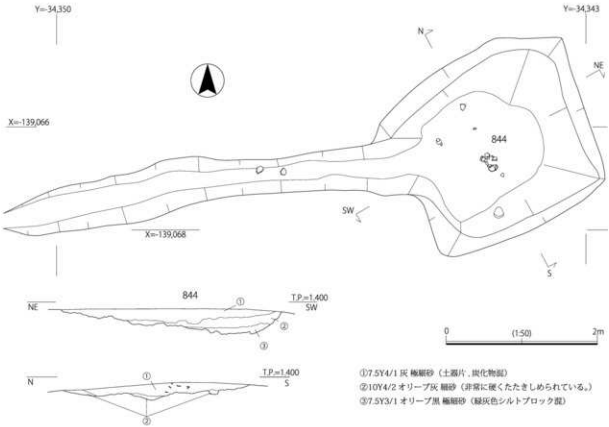
出土遺物は第108図－23～27・28（図版76）・29・31（図版76）・31である。23・24は土師器高杯の脚部から裾部にかけての破片。25は土師器平底鉢の口縁部から胴部にかけての破片。内外面にハケ目が残るが、外面の方が１条ごとの間隔が広く深い。26は須恵器杯身。27～31は土師器甕。27は口縁部片で、端部は平坦面を持ち内湾する。28は内外面ともに指頭圧痕がみられる他は、磨滅により調整方法は不明。30の口縁端部は内傾し内湾する。31は外面にハケ目が残り、内面には底部近くで横方向のケズリ、屈曲部近くで指頭圧痕が残る。

844土坑（第92・97図、図版56－１～４）・**751土坑**（第92図）・**846土坑**（第92・96図、図版54－８）
調査地南側の微高地から低地への落ち際、750溝の南に位置する。方形の土坑と、土坑から西へ向けて派生する溝で構成される。溝は750溝と交差し、846土坑に流れ込む。したがって、844土坑とそこから派生する溝、846土坑は一体のものと考えられる。844土坑の平面形は、残存長一辺2.4ｍを計る正方形である。正方形にしては北東隅がやや不整形であるが、これは平安時代以降の畠耕作により、隅部分が削平されたためである。土坑の検出時は中央部が盛り上がり、周囲は溝状に落ち込むと判断された（図版56－１）。しかし、この認識は誤りで、土坑内を掘削し、断面観察をしたかぎり、中央部の盛り上がりと周囲の溝状の落ち込みは認められなかった。堆積土は３層に分かれ、下部の２層（第97図②③の層）は叩き締められたように硬質であった。土坑内を平坦にするために埋めたと考えられる。上層（第97図①の層）には土器片や炭化物が多く混じっており、人為的に埋め戻されたことを示している。

正方形の北西隅からは西の斜面に向かって溝が伸びている。溝の堆積土は844土坑の上層とほぼ同質であり、844土坑の埋め戻しと同時に、溝が埋められた可能性が指摘できる。溝は西の落ち込みに向かって伸び、先述した750溝と交差し、751土坑・846土坑に取り付く。751土坑・846土坑は正円形の土坑（846）



第96図　古墳時代の遺構断面図②



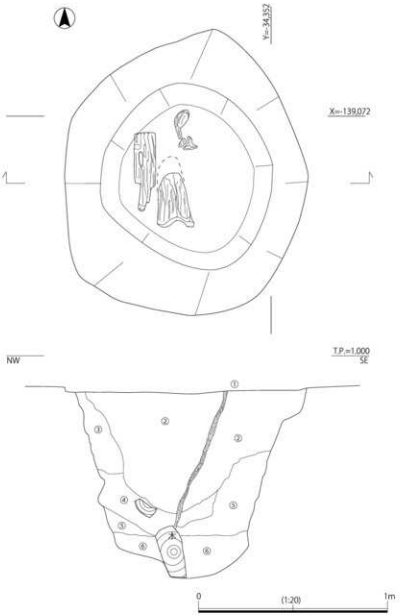
第97図　844土坑平・断面図

と楕円形の土坑（751）が結合しており、751土坑よりも846土坑のほうが深い。堆積土は下層のシルトに基盤層（第12層）のブロックが混じる以外、すべて自然堆積である。以上のことから、844土坑から派生する溝を伝って流れ込んできた排水が、いったん750溝に流れるが、溢れた排水は751土坑・846土坑に溜まる仕組みになっていたと想定する。となれば、844土坑の機能が問題となるが、下層の堆積層が固く叩き締められていること、上層に炭化物が多く混じることなどから、高温の火気を使用する作業場所であったと仮定する。

844土坑の出土遺物は、第108図－12・13（図版75）・14～22である。12・13は須恵器杯蓋である。14・15は須恵器杯身。16・18は小型の土師器甕の口縁部片。どちらも外面の屈曲部の下方と、口縁の内面にハケ目が残る。17は須恵器瓶の口縁部片。19は土師器甕の口縁部から胴部までの破片。外面にハケ目が残り、内面には指頭圧痕と、内傾する粘土紐接合痕跡がみられる。20は土師器高杯の杯部口縁の破片。内面は磨滅が著しく調整方法は不明、外面はナデ調整が部分的に確認できるのみ。21は土師器甑の胴部から底部にかけての破片。外面にはハケ目が残る。実測図では表現し切れなかったが、底部には２ヶ所の孔が確認できる。22は大型の土師器鉢である。842土坑から派生する溝の堆積土から出土した。

846土坑の出土遺物は、第108図－１～３である。１は須恵器杯蓋。２は土師器高杯の杯部から脚部にかけての破片。内外面ともにナデ調整が施されているが、ミガキはみられない。３は須恵器壺の底部である。底部は使用時の磨滅により、調整方法は不明。残存する胴部には、横方向のヘラ削りがみられる。

902土坑（第92･98図、図版55－５～７）　調査地南側の微高地から低地への落ち際に位置する。平面検出をおこなった時点では、750溝と重複関係がみられ、902土坑の埋没後に750溝が掘削されていること



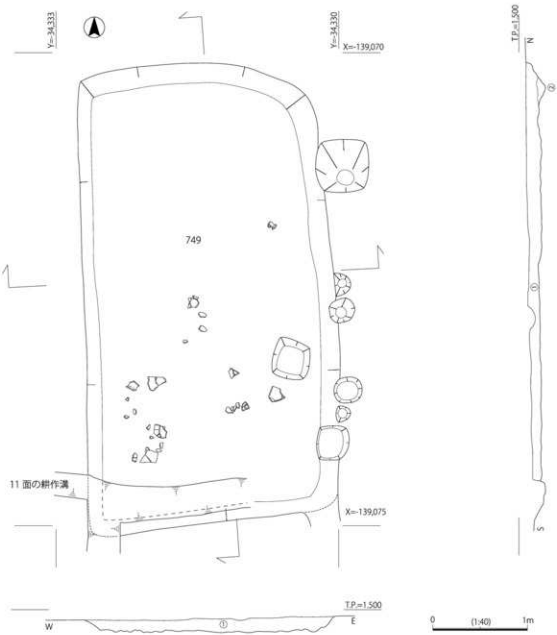
①2.5Y8/1 灰白 細砂（噴砂、12 層の噴き上がり）②7.5Y7/2 灰白 極細砂（細砂・炭化物混）
③7.5Y7/2 灰白 極細砂（わずかに細砂・炭化物混）④10Y3/2 オリーブ黒 極細砂～シルト（炭化物少量混，木製品混）
⑥10Y3/2 オリーブ黒 極細砂～シルト（緑灰色シルトブロック混）⑥10Y3/2 オリーブ黒 細砂木片混じり

第98図　902土坑平・断面図

がわかった。902土坑の堆積土は、極細砂またはシルトを主としており、自然堆積により埋没したことがわかる。堆積土中には木片や植物遺体が数多く見られた。これらは周辺から雨水に運ばれ流れ込んだものであろう。

出土遺物は煮炊具（おそらく甑）の把手である（第109図－16、図版76）。外面は上部に格子状のタタキ痕跡がみられる。上部には深さ約２㎝の切れ込み（溝）が１条、下部には直径３～４㎜、深さ約５㎜の２単位の刺突痕がみられる。尚、第98図の土坑の大きさは、第92図のものと異なっているが、これは完掘後、土坑が大型化したためである。

749土坑（第99図、図版55－１～３）　調査地南側の微高地上に位置する。平面形は東西2.5m、南北8.1mの長方形。ただし、西・南辺は平安時代以降の耕作溝により削平を受けており、土坑の端は想定に



①5Y3/1 オリーブ黒 細砂（土器片、炭化物、緑灰色シルトブロック混）
②2.5Y6/3 にぶい黄 細砂（緑灰色シルトブロック多く混）

第99図　749土坑平・断面図

留まる。堆積土は基本的に単一層で、炭化物や土器片を多く含んだ第11－２層に、第12層のブロックが混じる（第99図①の層）。一部中央西側で灰色のシルト層が下層にみられる（第99図②の層）。当遺構は平面形から住居址の可能性が想定されたが、土坑内では柱穴となりそうな位置に遺構は無く、住居址と断定できるだけの積極的な根拠に欠ける。

出土遺物は第107図－８～27（図版76）である。８～11は土師器高杯。８・９は同一個体と考えられ、８が杯部、９が脚部から裾部である。10は裾部、11・12は脚部の破片である。13は須恵器小型甕または小型壺の口縁部片。14は小型または樽型甕の口縁部片である。口縁部の傾斜および波状紋がさほど形骸化していないことから、５世紀後半のものと想定される。16・18・20は土師器甕。20の口縁端部は上部が内傾し、内側は内湾する。下部はやや外側に膨れ上がる。19は土師器壺で、直口壺の系譜を引く。21・

22・25は韓式土器系の甕または鉢。21は外面に格子状のタタキを施すが、タタキ痕跡は屈曲部までみられる。このことからタタキを施した後に、屈曲部と口縁を折り曲げて整形したことがわかる。22の外面には平行するカキ目、内面には指頭圧痕がみられる。25の外面にも21同様、格子状のタタキが施されているが、屈曲部付近はナデ調整が施されているため、それ以前の調整は不明である。23は土師器甕で、内外面とも磨滅が著しく、調整方法は不明。24・26・27は土師器甑の口縁部と底部片。26には煤が付着している。なお、15は8世紀代の須恵器杯身で、上層遺物の混入である。

2336土坑（第100図）　10区の南端近くに位置する。堆積土は第11－2層。土師器甕（第111図－31、図版75）が出土した。

2374土坑（第100図）　2336土坑の東に位置する。土坑の大半は調査区外である。堆積土は炭化物を多く含む第11－2層。土師器甕（第111図－33・34）が出土した。このうち34は、口縁端部が内湾する。

763土坑（第100図）　754井戸の南側に位置する。堆積土は第11－2層。古墳時代の須恵器杯身（第109図－11）が出土した。

2301土坑（第100・101図）・**2312土坑**（第96・100図、図版57－2）・**2373土坑**（第100・101図、図版57－3・4）　調査地南側の微高地上に位置する。それぞれの平面形は、2301土坑が直径4mの不整形な円形、2312土坑は直径0.35mの円形、2373土坑は直径1.5mの円形である。2312土坑・2373土坑は2301土坑の埋没後に掘削されている。2301土坑の堆積土は、概ね第11－2層の単一層であるが（第101図③の層）、低い部分にはシルト混じりの第11－2層が堆積している（第101図④⑤の層）。2373土坑の堆積土は、3層に分かれるが、上の2層（第101図①②の層）は炭化物と土器片が多く混じった第11－2層で、最下層は炭化物や土器片を含まないシルト主体の第11－2層である（第101図⑥の層）。2312土坑の堆積土は、第11－2層と第12層がブロック状に混じり合ったものである。

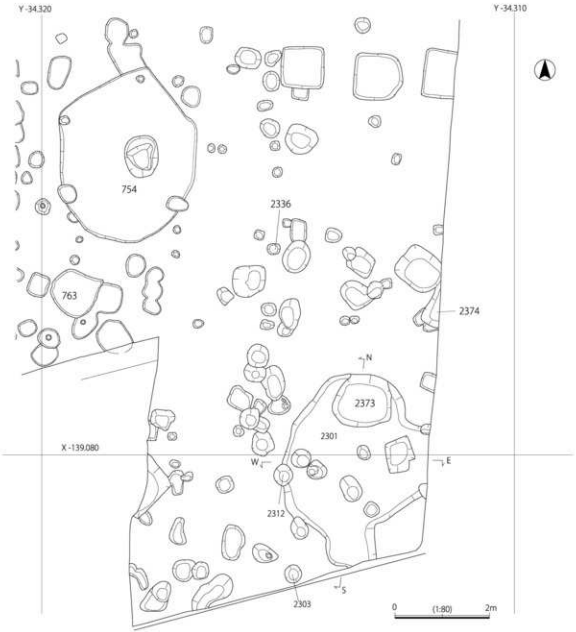
2301土坑からの出土遺物は、第111図－1～20（図版75）である。1・2は須恵器杯蓋。3・5～7・9は須恵器杯身。4・8・12は須恵器高杯の脚部から裾部。4・12には方形の、8には円形の透かし孔が、どちらも3単位あけられている。10は須恵器壺で、口縁部近くに退化した波状紋を巡らせる。11は土師器甕。内面は磨滅により、外面は煤が付着しており、調整方法は不明。13・14・15～17・18は製塩土器。すべて外面にタタキ痕跡、内面に指頭圧痕がみられる。製塩土器はこれら以外にも小片が多数出土している。19・20は土師器煮炊具の把手。

2312土坑からの出土遺物は、第111図－29・30である。29・30はどちらも須恵器杯蓋。30の上部には僅かながらつまみの反りが確認できる。

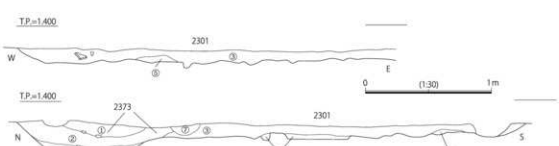
2373土坑からの出土遺物は、第111図－21・22・23（図版75）・24～28である。21・22・23は須恵器杯蓋。21の上部には僅かながらつまみの反りが確認できる。24・25は須恵器杯身。26は須恵器壺の口縁部で、立ち上がり部分にやや退化した波状紋を巡らせる。27・28は土師器甕。27は磨滅により、内外面とも調整方法は不明。28の口縁端部は上部が内傾し、内側は内湾する。外面にハケ目、内面に指頭圧痕が残る。

2303土坑（第100図）　10区南端に位置する。堆積土は第11－2層。土師器甕（第111図－32）が出土した。

1857溝（第96・102図、図版52－1）　調査区北側の低地部に走る溝。ほぼ正方位で東西に走るため、検出時は古代に掘削されたものと予想された。しかし、堆積土がシルトを主とする第11－2層であることと、出土遺物が古墳時代のものであることから、古墳時代に掘削された溝と考えられる。

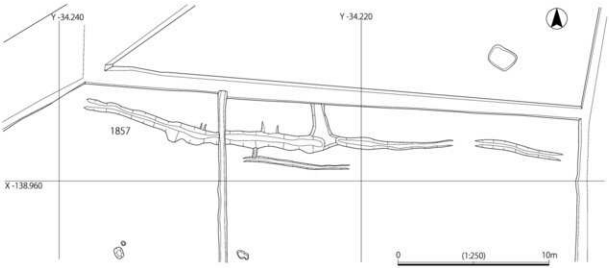


第100図　6・10区古墳時代の遺構配置図



①5Y4/1 灰 細砂（炭化物・土器片混）　②5Y5/1 灰 細砂（炭化物・土器片・褐色のシルトブロック混）　③5Y5/1 灰 細砂④5Y3/1 オリーブ黒 シルト
⑤5Y4/1 灰 細砂 30%、10GY7/1 明緑灰 極細砂 70%　⑥5Y3/1 オリーブ黒 細砂 30%、10GY7/1 明緑灰 極細砂 70%　⑦10YR4/1 灰 シルト

第101図　2301・2373土坑断面図



第102図　1857溝平面図

出土遺物は第103図－36・37・38（図版73）である。36は須恵器杯身。37はU字形土製品の外側突帯部分である。38は土師器甕の胴部中央より上の破片で、内外面ともに磨滅が著しいが、かすかに内面にケズリ痕跡、外面にハケ目が確認できる。

264溝（第89図）　調査区北側の微高地から低地への落ち際を、南西から北東にかけて走る溝。南西が高く、北東が低い。堆積土はシルトを主とする第11－２層で、人為的な埋め戻しの痕跡はみられない。古代に掘削された溝に削平されている部分が数ヶ所ある。

出土遺物は第103図－27･28である。27は須恵器杯身。28は土師器高杯。27は６世紀初頭にあてられるが、溝の掘削時期や埋没時期を示すものではなく、機能していた時期の一端を示すとしか考えられない。

410溝（第89・96図）　264溝の北側で平行に走る溝。傾斜は264溝と同じく、南西が高く、北東が低い。堆積土は第11－２層。南西端は264溝とほぼ同じ場所まで伸びているが、北東端は281土坑に交わり止まっている。

出土遺物は第103図－１～20（図版73・74）である。１～４・６は須恵器杯蓋で、１のようにつまみの付くものも含まれる。７～９は須恵器杯身で、蓋の時期幅と身の時期幅はほぼ重なるといってよい。５は製塩土器の底部片。10・16・17は須恵器甕の胴部片。11はやや大ぶりの高杯の身部。12・15・19は土師器甕の口縁部から体部にかけての破片。15と19は古代の溝である398溝との交差地点近くから出土しているため、後世の遺物が調査段階で混入したものであろう。13は土師器煮炊具の把手。14・18は須恵器高杯の脚部から裾部にかけての破片で、14は透かし孔が無く、18は推定３方向の方形透かし孔が開けられている。

264溝と410溝は双方が平行することと、堆積土の観察から、同じ目的で掘削されたものと考えられる。両溝の北側、すなわち微高地側には、建物８～11が展開していることから、両溝は建物群一帯の排水を目的に掘削されたといえよう。ただし、平面図から判断する限り、410溝は北東で288井戸・281土坑につながる形となる。排水用の溝が井戸に流れ込むという状況は理解しがたく、288井戸と410溝の同時並存はありえない。410溝から出土している土器が、当調査地では古い時期（５世紀末から６世紀初頭）にあたることから、当初建物群の排水目的に410溝が機能しており、排水の流れ込む先が281土坑であった。ある時点で281土坑の最下部からの湧水を利用するため、281土坑と410溝は埋め戻されたものと考

えられる。すなわち288井戸の開削時に410溝は埋没し、機能を停止したと推測する。そしてあらたに排水用に掘削された溝が264溝であり、288井戸の機能を優先させ、かつての410溝より南側に掘削されたと考えられる。

426溝（第89・96図）・**673溝**（第89図）・**1385溝**（第89・96図、図版52－６）　410溝の北に位置し、先の二つの溝同様、南西から北東に走る。この溝も立地から排水用に掘削されたと考えられる。本来は西側で1385溝に接続していたのだろう。

426溝からの出土遺物は、第105図－33・34・35（図版75）・36である。33は須恵器杯蓋。34・35は須恵器杯身。36は退化した波状紋を巡らせた小型の須恵器壺である。

673溝からの出土遺物は、第105図－48の土師器甕である。

1385溝からの出土遺物は、第103図－43・44（図版74）である。43は須恵器大型甕の立ち上がり部分の破片。44は須恵器器台の身部の破片。凸帯の上部には波状の簾状紋が巡る。

1381土坑（第89・96図）・**1386溝**（第89・90・94・96図、図版52－７・図版57－５）・**392溝**（第90図）・**393溝**（第90図）　調査区北側の微高地から、低地への落ち際に位置する土坑が1381土坑。1381土坑から南西に走る溝が1386溝である。南西から北東に走る溝が北東端で土坑に流れ込む状況は、さきの410溝と281土坑でもみられた。ただし1381土坑と1386溝の堆積土は、極細砂を主とする第11－２層で、人為的に埋め戻された形跡は認められない。1386溝は1395土坑・1397土坑・1398土坑の埋没後に掘削されている。本来は西側の392溝・393溝と繋がっていた。

1381土坑からの出土遺物は、第103図－33～35である。33は土師器煮炊具の把手。上部に１条の刻み目がみられる。34は須恵器杯蓋。先行する土坑や410溝からの出土遺物よりも新しい。35は須恵器甕の胴部片。

1386溝からの出土遺物は、第103図－39～42である。39は須恵器杯蓋。40は須恵器高杯の脚部から裾部の破片で、方形の透かし孔が確認できるが、何単位あったのかはわからない。41は須恵器甕の胴部片。42は土師器煮炊具の把手である。

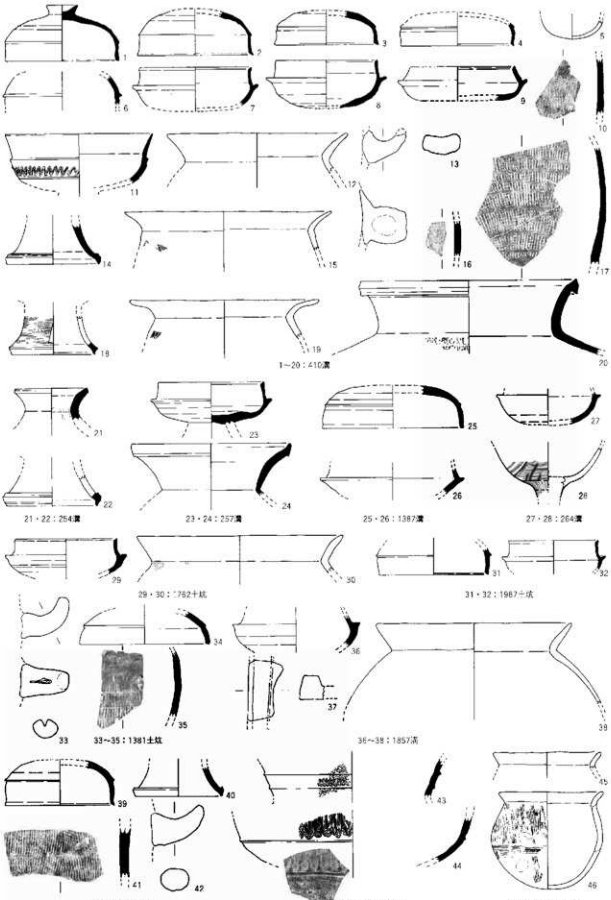
392溝からの出土遺物は、第105図－15～21である。15・19は須恵器杯身。16は須恵器高杯の脚部から裾部にかけての破片。17・18は須恵器小型甕の口縁部片。20は須恵器小型椀の底部片。21は土師器煮炊具（おそらく甑）の把手で、上部に１条の刻み目がみられる。15の須恵器杯身は、周辺の土坑や溝から出土した杯身のなかでも新しいもので、この溝が６世紀後半でも機能していた可能性を示唆する。

393溝からの出土遺物は、第107図－１～４である。１は須恵器杯蓋。２は須恵器杯身である。３は土師器高杯。４は須恵器高杯の脚部から裾部の破片で、方形の透かし孔が３方向に開けられている。

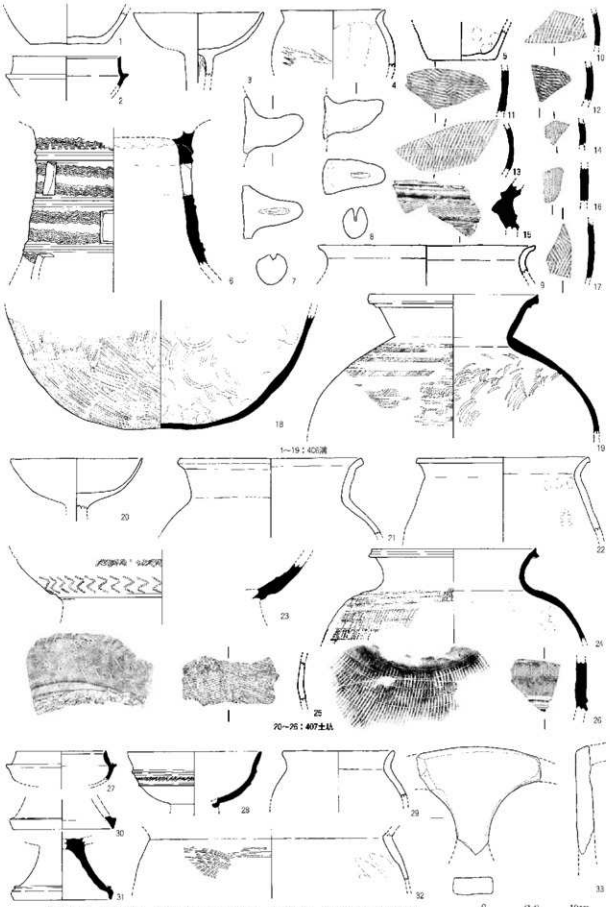
1395土坑（第90・96図、図版57－５）・**1389溝**（第90・96図、図版53－３）　1395土坑は1398土坑の南西に接する。重複関係を確認できたのは、非常に狭い範囲であるが、1398土坑が1395土坑に先行することがわかっている。堆積土は第11－２層のブロックと、第12層のブロックが混ざり合っている。1389溝は1395土坑の東端から派生する溝。堆積土は1395土坑とほぼ同じ。1389溝・1395土坑どちらも人為的に埋め戻されたものと考えられ、その契機は1386溝の掘削かもしれない。

1389溝からの出土遺物は、須恵器杯身（第107図－６）１点のみである。1395土坑からの出土遺物も土師器煮炊具（おそらく甑）の把手（第105図－41）の１点のみである。41は上部に１条の刻み目がみられる。

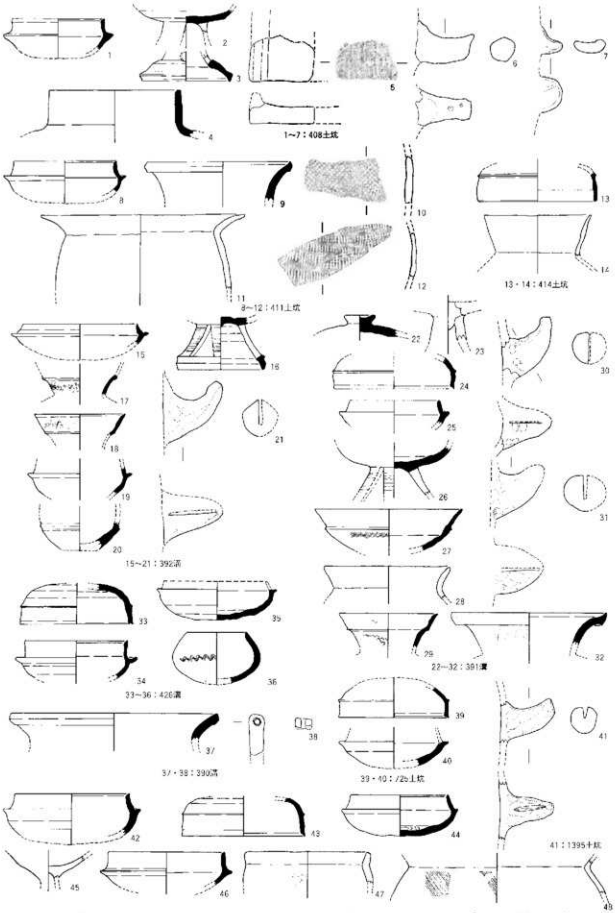
1391溝（第90・96図、図版54－１・２）・**391溝**　さきの1386溝・392溝・393溝とほぼ平行して走る溝



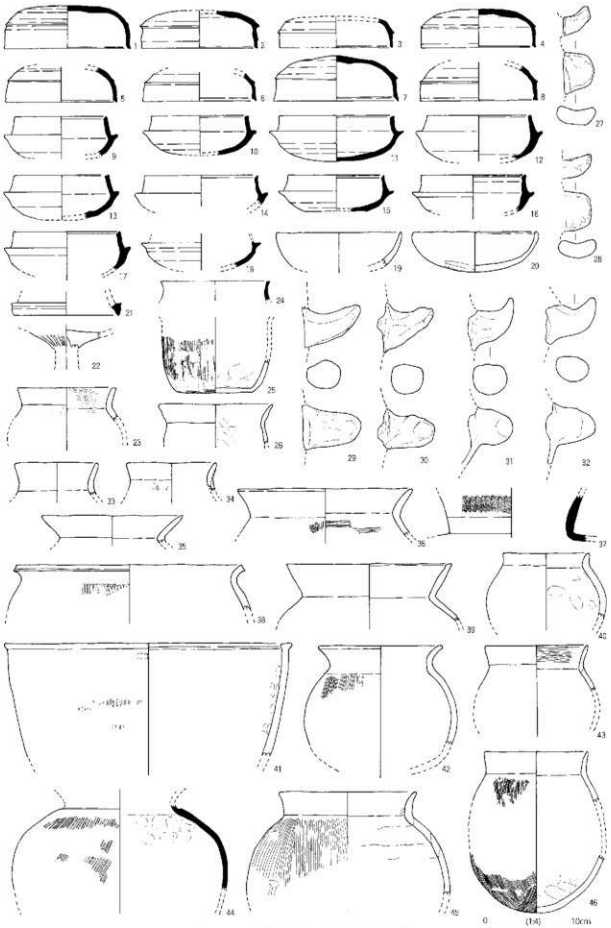
第103図　古墳時代の遺構出土土器①



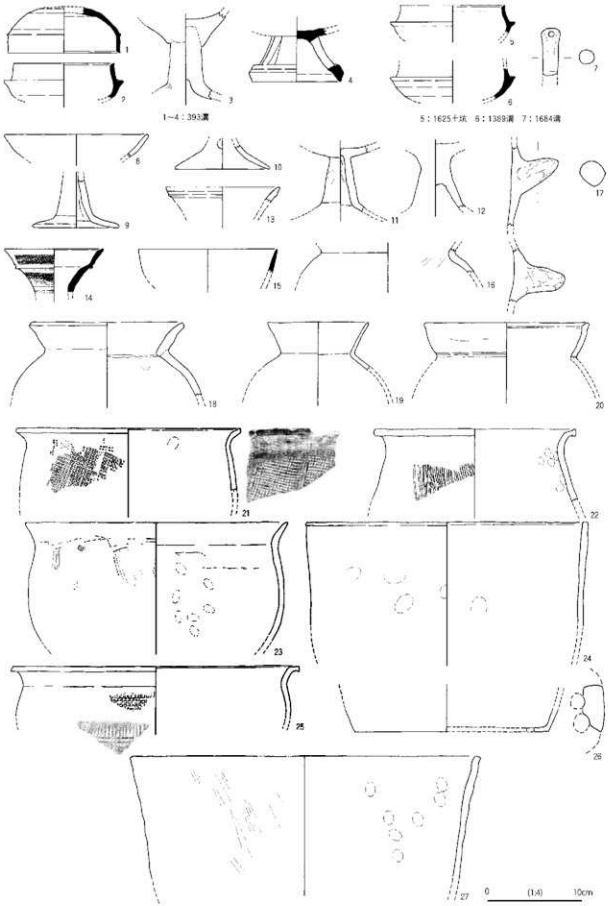
第104図　古墳時代の遺構出土土器②



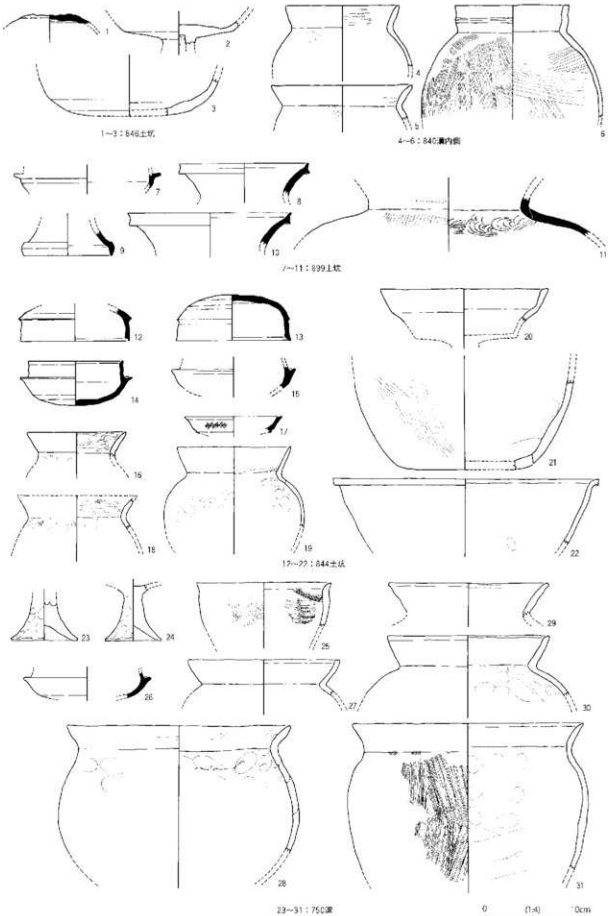
第105図　古墳時代の遺構出土土器③



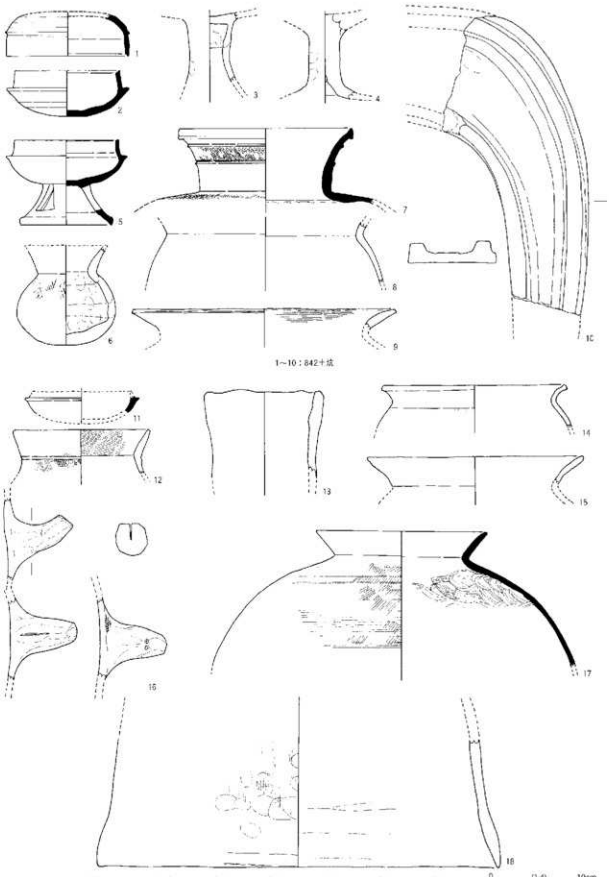
第106図　古墳時代の遺構出土土器④



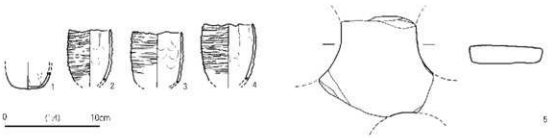
第107図　古墳時代の遺構出土土器⑤



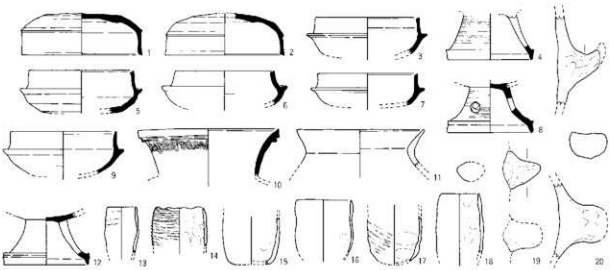
第108図　古墳時代の遺構出土土器⑥



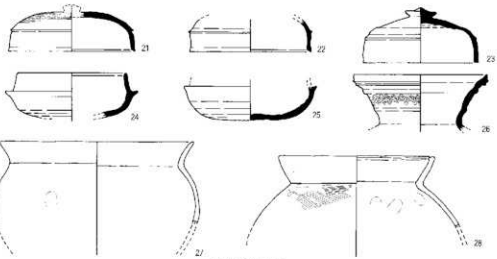
第109図　古墳時代の遺構出土土器⑦



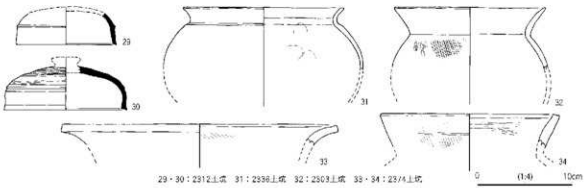
第110図　古墳時代の遺構出土土器⑧



1～20：2301土坑



21～28：2373土坑



29・30：2312土坑　31：2338土坑　32：2503土坑　33・34：2374土坑

第111図　古墳時代の遺構出土土器⑨

で、1391溝・391溝の方が微高地からみて外側に位置する。おそらく北側の微高地上の排水を、南東側の低地に流し込むために掘削されたのであろう。391溝は古代の段階で、389土坑と北端の溝群により削平されている。1391溝の堆積土はシルトを主とした第11－２層のブロックと、第12層のブロックが混ざり合っており、さきの1389溝と同じ様相が窺える。北側の391溝でも細砂を主とした第11－２層のブロックと、第12層のブロックが混じり合っている。したがって、両溝とも人為的に埋め戻された可能性がある。

1391溝からの出土遺物は、第104図－32の土師器甕１点のみである。

391溝からの出土遺物は、第105図－22～32である。22・24は須恵器杯蓋。23は土師器高杯。25は須恵器杯身。26・27は須恵器高杯。28は土師器小型壺。29は須恵器小型甕の口縁部片。30・31は土師器煮炊具の把手で、どちらも上部に１条の刻み目がみられる。32は須恵器壺の口縁部片。

390溝（第90図）　391溝の東側に位置する。391溝・392溝同様、排水目的の溝と考えられる。堆積土は細砂を主とした第11－２層のブロックと、第12層のブロックが混じり合っている。出土遺物は第105図－37・38である。37は須恵器甕の口縁部片。38は土錘片。

214土坑（第61図）　７区の北側微高地から落ち込む傾斜地に位置する。堆積土はシルト質の第11－２層。土師器甕（第109図－12）と須恵器甕（第109図－17）が出土した。

211土坑（第61図）　７区の南東部に位置する。堆積土はシルト質の第11－２層。製塩土器（第109図－13）が出土している。

425製塩土器集積（第89・96図、図版57－７）　調査地北側３区の微高地から低地への落ち際に位置する。大量の製塩土器が、炭化物混じりの第11－２層に包含されていた。出土状況から判断する限り、土坑状に掘り込んだ場所に製塩土器を投棄したのではなく、斜面上に投棄し、その上から土を被せたといえる。周囲の土を洗浄したが、得られた製塩土器はすべて細片であった。

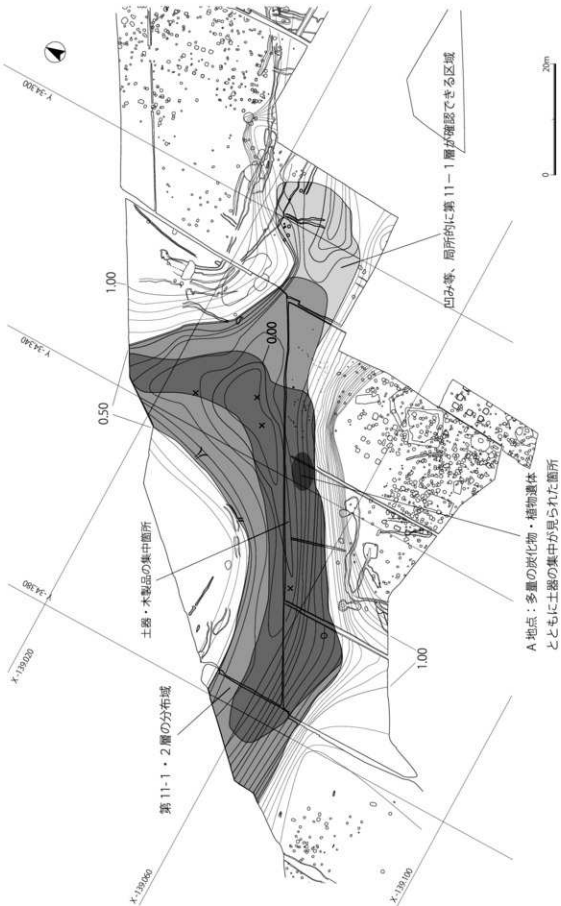
2420製塩土器集積（第90図、図版57－８）　調査地北側４区の微高地から低地への落ち際に位置する。上記の425同様、大量の製塩土器が炭化物混じりの第11－２層に包含されていた。斜面に投棄し、土を被せた状況も425と同じである。土壌洗浄により、大量の製塩土器片が得られた（図版90）。第110図－１～４はそのうち完形に近いものである。

（４）落ち込み内第11－１層出土遺物

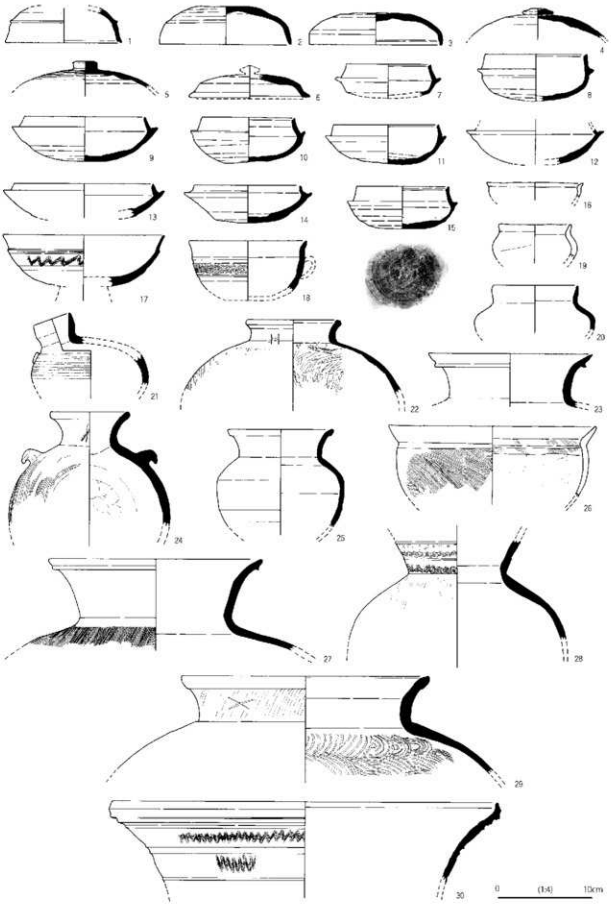
①土器（図版66・77～79・82・87）

第113図に第11－１層から出土した遺物を掲げた。第11－１層と第11－２層は、５区と６区にまたがる落ち込み内で確認できる地層で、１～４区では、低地部のごく限られた場所で、部分的に残っているにすぎない。第11－１・11－２層とも古墳時代の遺物を包含する地層であるが、前者が土器や有機物の包含が少ないのに対し、後者は土器や有機物を多く含む。このことから、古墳時代集落の最盛期に形成された、落ち込み内の堆積層が第11－２層であり、集落が途絶え始める頃に形成された堆積層が第11－１層であるといえる。したがって、第11－１層出土土器から得られる時期は、当地における古墳時代集落の衰退期を表すといってよい。ただし、比較的古い時期にあてられる１・８・18などは、第11－２層包含遺物が第11－１層形成時に何らかの理由で混入したものと考えられる。比較的古い時期の資料を除外すると、第11－１層出土土器の時期は、６世紀第４四半期（３・13）から７世紀第４四半期（５・６）の間と考えられ、概ね７世紀代ととらえて大過ない。

②木製品（図版101・105）



第112図　第11－2層の範囲



第113図　第11－1層出土土器

第133図－３（図版105）は掛矢である。身の部分は部材になった丸太の表皮をはがしただけの簡単な加工にとどまり、長さは20.4㎝、直径10㎝を測る。握り部分は長さ30㎝、奥行5.6㎝、幅4.8㎝の角材状に成形している。身の先端部と打面に使用によって生じたと考えられる剥離痕が有り、握りの末端面は面取りが施されている。

第133図－４（図版101）は刳物容器の蓋と考えられる。平面形は長方形を呈しており、全長26.5㎝、最大幅8.6㎝、最大高4.5㎝短辺の縁を厚く、長辺の縁は薄く刳り出している。面取りも施され、全体的に見ても丁寧に加工されており、製作者が意匠を凝らしていたことが窺える。

第133図－５（図版101）は底板を４枚の側版で、方形に囲んだ指物容器側板の１枚である。最大長31.4㎝、最大幅11.9㎝、最大厚２㎝を測る。左右辺に深さ４㎜の溝を設け、その上下に方形の孔を穿ち、ほぞを有する側板と組み合わせるようにしている。また同じく下辺にも深さ４㎜の溝を設け、底板をはめ込むようにしている。また下辺の溝下には、左右に１ヶ所ずつ円形の孔が穿たれており、底板が抜けないように梁が通されていたと考えられる。下辺中央に繰り込みを入れ、下辺の両端が脚状に見えるようなつくりになっている。上辺に段を有していることから、この容器に蓋が存在したことがわかる。

（５）落ち込み内第11－２層出土遺物・骨（図版58・59）

①須恵器（図版69・77～83・86～89）

第115～121図は第11－２層から出土した須恵器である。第115図に杯蓋、第116図に杯身を掲げた。杯の中で古い様相を持つものとして、杯蓋では第115図－１～11等、杯身では第116図－１～９等があげられ、５世紀後半に位置づけられる。いっぽう、新しい様相を持つものとしては、杯蓋では第115図－47～52、杯身では第116図－44～48があげられ、７世紀第１四半期に位置づけられる。

第117・118図には高杯、椀、小型甕、壺を掲げた。杯部の直径が10㎝前後の小型の高杯は、方形縦長の３方向透かしを持つもの（第117図－５～７・11～17、第118図－６～９・11・12・16～19）が多い。第117図－２のような正方形の３方向透かし、第117図－９・10のような円形の３方向透かし、第117図－３・４・８、第118図－10・13～15のような透かしを持たないものは少数派である。杯部の直径が15㎝を超える中・大型の高杯（第117図－18～30、第118図－20～22）には、すべて杯部下半部に波状紋が巡り、脚部には縦長の４方向透かしを持つ。小型椀には第118図－１～３のように把手の付くものと、第118図－４のように把手の付かないものがある。１の内面全体には黒漆が付着しており、漆塗りの作業に使用されたことがわかる。第118図－29の大型椀の残存部には、把手が付いた痕跡は認められなかったが、器形から把手がついていたと想定できる。

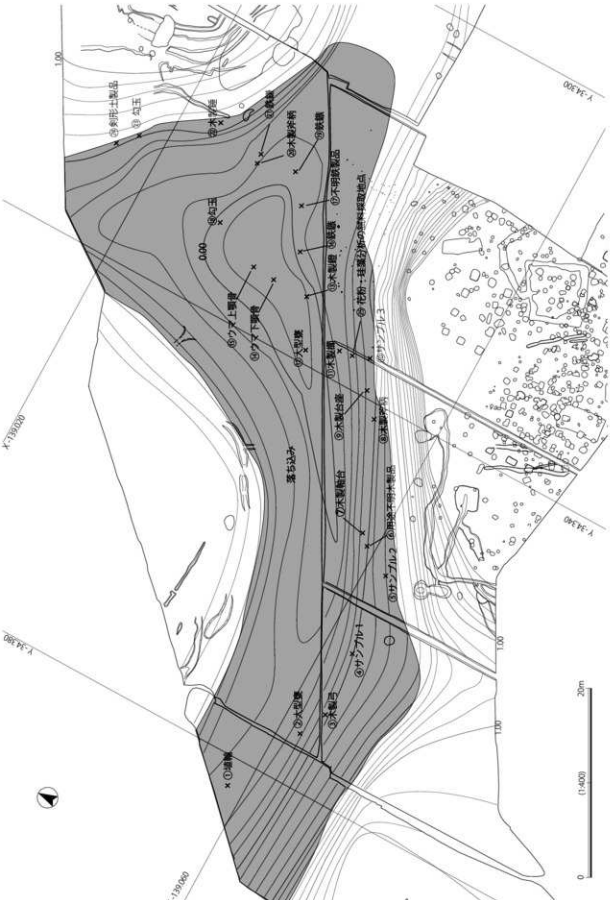
第119・120図には最大胴部径が20㎝を超える中・大型の甕と筒型器台を掲げた。第119図－13は頸部に「×」のヘラ書きをもつ甕である。第119図－14・15は鳥足紋のタタキを施した甕の体部片である。第120図－14は口縁部の先端と底部を欠くのみで、完形に近いものである。胴部には縦方向の平行タタキを施した後、横方向に４条の沈線を、頸部付近には退化した波状紋を巡らせている。第120図－15・17・18は筒型器台の受部の破片である。15・18はＺ字状の列点紋と退化した波状紋を巡らせる。17は鋸歯状の線刻とスタンプによる円形の紋様が交互に配されている。第120図－16は樽型瓶の胴部である。

第121図は大型甕である。１は第114図②の地点から、２は同図⑫の地点から出土した。

②土師器（図版83～85・88～90）

第122～124・132図は第11－２層から出土した土師器である。便宜上、韓式系土器もこの中に含めた。

第122図には製塩土器、椀、杯、高杯、平底鉢、小型壺を掲げた。１～３は５区落ち込み内の第11－



第114図　特殊遺物の出土地点

２層を洗浄して得られた製塩土器、４・５・29は平底の椀である。４の内外面には粘土の巻き上げ痕跡が明瞭に確認できる。５は外面にハケ目が残る。29は底部外端の部分に、古代の杯高台のような僅かな段差をもつ。６～10・13・15は丸底の椀である。６・８・15の内面と９の外面には暗紋が施されている。11・12・16～18・20・21は小型の壷。14は用途不明の土製品。19・22～28・30～35は平底鉢。外面に格子状のタタキ痕跡がみられるもの（25・28・31）と、縄席紋がみられるもの（35）と、ハケ目の見られるもの（34）がある。ただし、34は小型甕の可能性もある。これら以外は、二次焼成等で外面が磨耗しており、調整方法は不明である。また底部には長方形の凹型圧痕を持つもの（30～33）がある。35の底部には凹型圧痕はなく、縄席紋がみられる。席上で土器を製作したか、素地の段階で縄を巻きつけた工具で叩いたかどちらかであろう。36～41は高杯である。

第123図には高杯、壷、椀、鉢、甕を掲げた。１～３は高杯、４・５・９・10は平底鉢である。４・９の外面には縄席紋がみられる。６～８は直口壷。６は外面頸部付近に、９は口縁部内外面にミガキ痕跡がみられる。11は椀で、底部の縁に高台状の盛り上がりを有するのは、第122図－29と共通する。12は鉢で、外面にミガキ痕跡、内面にケズリ痕跡を残す。13～28は甕である。14・15・25・26の口縁部の内側は内湾する。17の口縁部は直角に立ち上がり、受け口状を呈する。20の外面には、幅約２㎜・深さ約２㎜の断面三角形のクシ目が施されている。

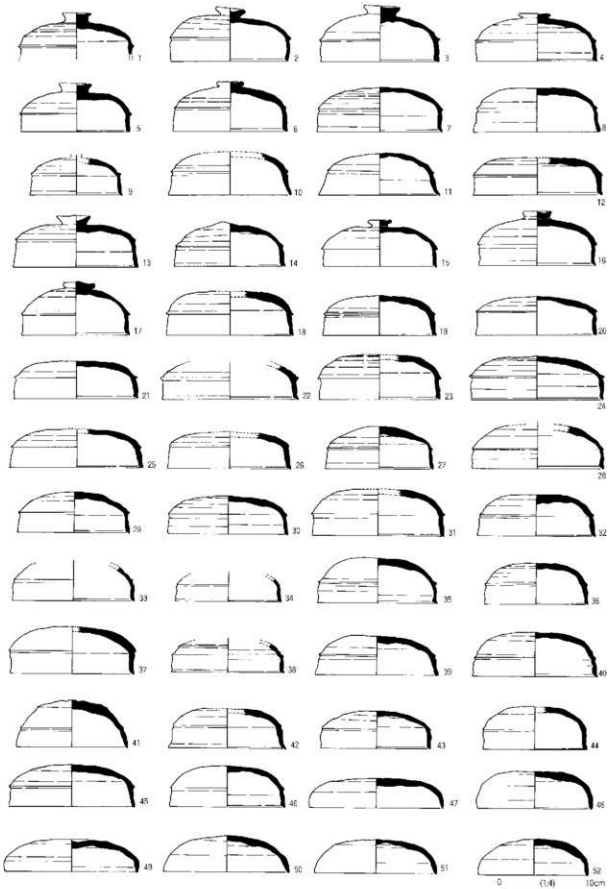
第124図には甕、甑、把手付鍋を掲げた。１～５は甑である。２は外面にハケ目、３・５は外面に平行タタキ、４は格子状のタタキ痕跡がみられる。いずれも底部には３のように、中央に直径５㎝前後の大きな孔が開けられ、その周囲に直径２㎝前後の小さな孔が巡らされていたのだろう。６・７は甕で、６の外面には縄席紋、７の外面にはハケ目、内面にはケズリ痕跡がみられる。８は把手付鍋で、外面には平行タタキが施された後に沈線が巡らされている。９は甕で、口縁部の内側は僅かに内湾する。

第132図の土器は、６区の落ち込みで局所的に植物遺体や炭化物が密集していた地点（Ａ地点）から出土したものである（第112図）。１・２は高杯で、２の脚部外面にはミガキ痕跡、杯部内面には暗紋がみられる。３は平底鉢で、底部は平坦で凹型圧痕はみられない。外面全体に縄席紋がみられる。４～８は甕。４は東海系の甕で、外面には第123図－20同様のカキ目がみられる。５は内外面が黒色を呈し、外面は胴部のほぼ全面にわたって細かなミガキが施され、艶やかな印象を受ける。８の頸部以下には格子状のタタキが施されている。９は把手付鍋で、外面に縄席紋が施されている。第132図の土器群は、落ち込み内の湿地状堆積のなかでも、最下層から出土している。また土器を包含していた地層中に、多くの炭化物や植物遺体が含まれていた。これらの土器群は、集落経営期間の初期におこなわれた煮炊き行為にともなうものであろう。

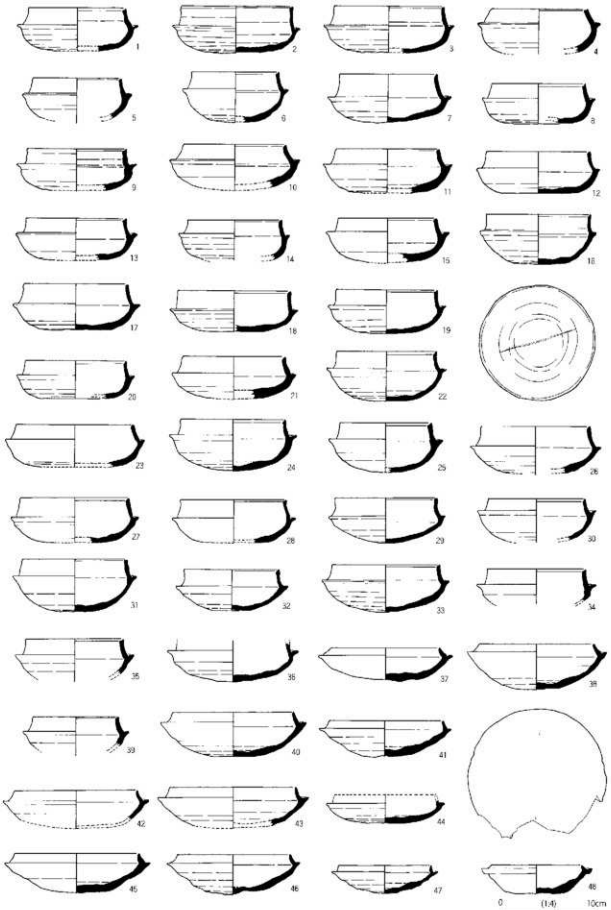
③土製品（図版91～97）

第125図は６区の微高地から、落ち込みへかけての傾斜地から出土したカマドである。脚部の下半部と奥の掛け口部分の約３分の１が欠けている他は残存している。上部には直径14.5㎝の円形の掛け口が三つ開けられている。表面はハケによる調整の後、一部ナデを施している。焚き口の上部には長さ８㎝弱の庇が付いており、側面に回ると庇の長さは３㎝弱と短くなる。今回の調査では、この資料以外にも、２点の同様のカマド片が出土しており（第104図－33、第110図－５）、当地の古墳時代集落では、さほど珍しい形式ではなかったといえる。

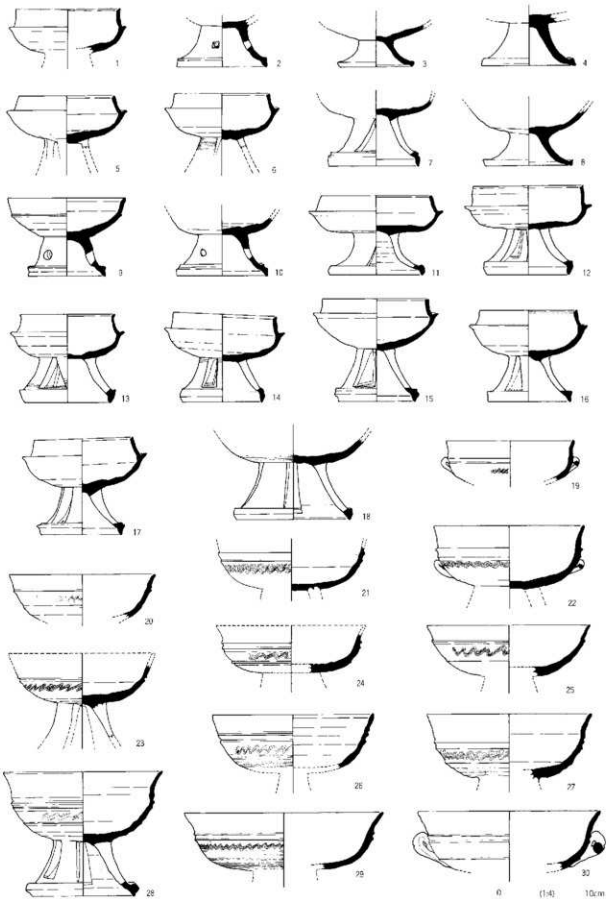
第126図には上記以外のカマドと、カマドの付属部分と考えられるＵ字形土製品を掲げた。１～３はカマドの焚き口部分で、縦方向に凸帯が貼り付けられている。２は凸帯部分が剥落していたものを接合



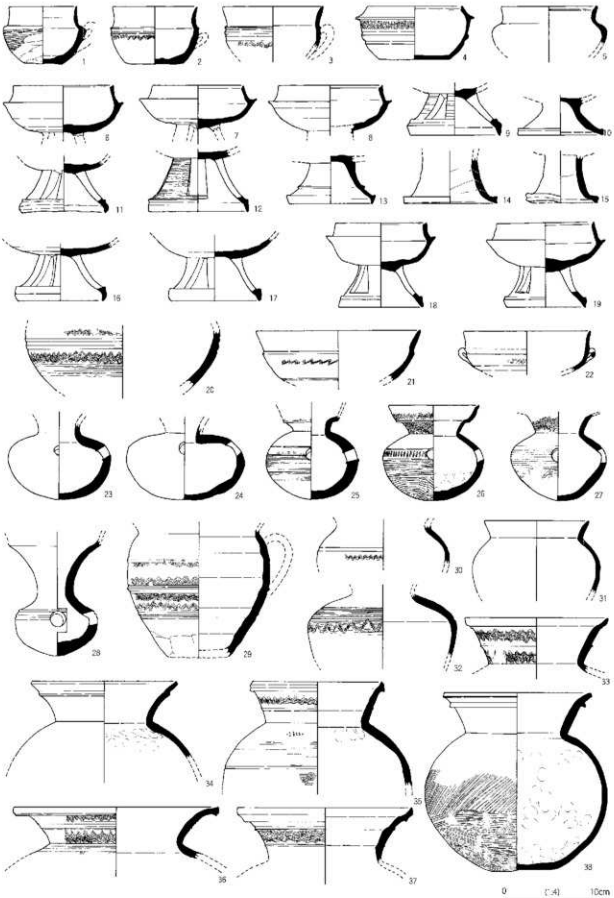
第115図　第11－2層出土須恵器①



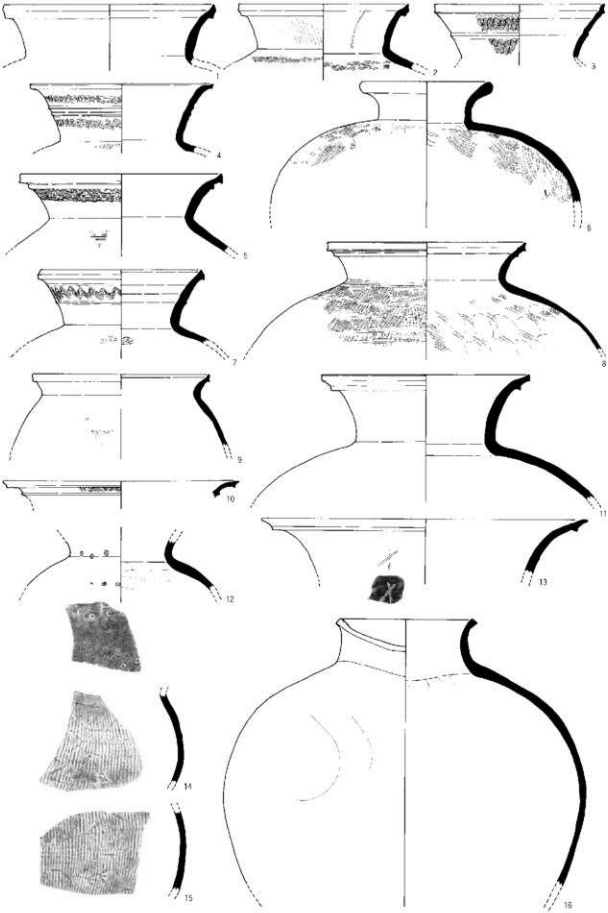
第116図　第11－２層出土須恵器②



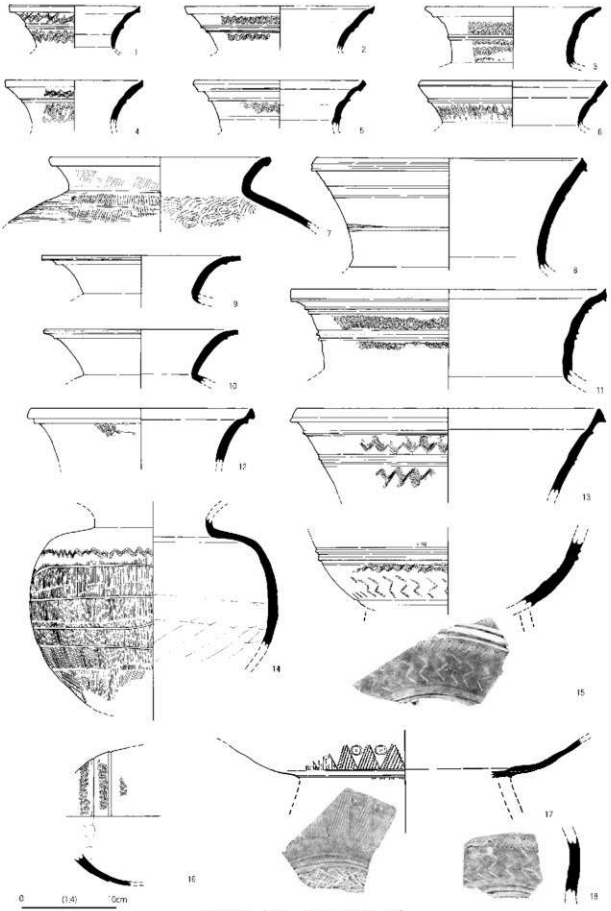
第117図　第11－2層出土須恵器③



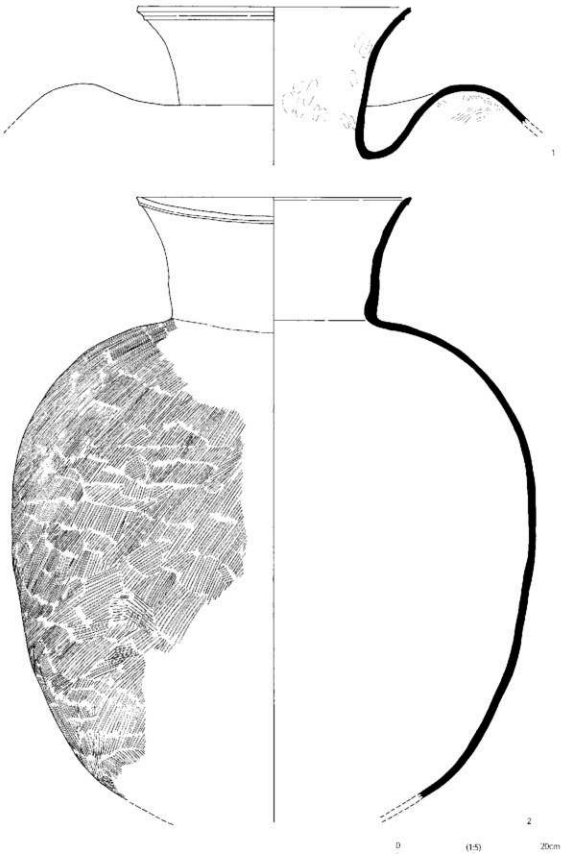
第118図　第11－2層出土須恵器④



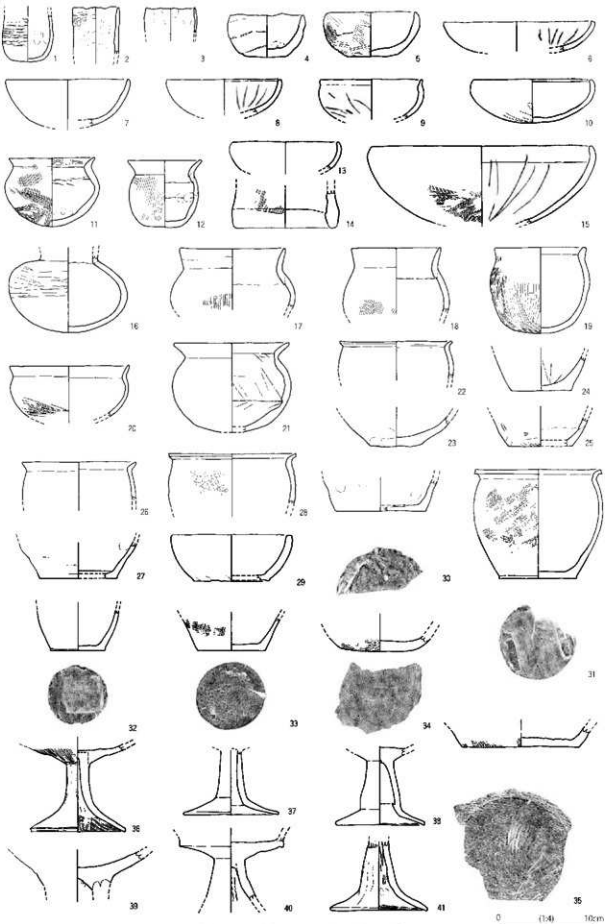
第119図　第11－2層出土須恵器⑤



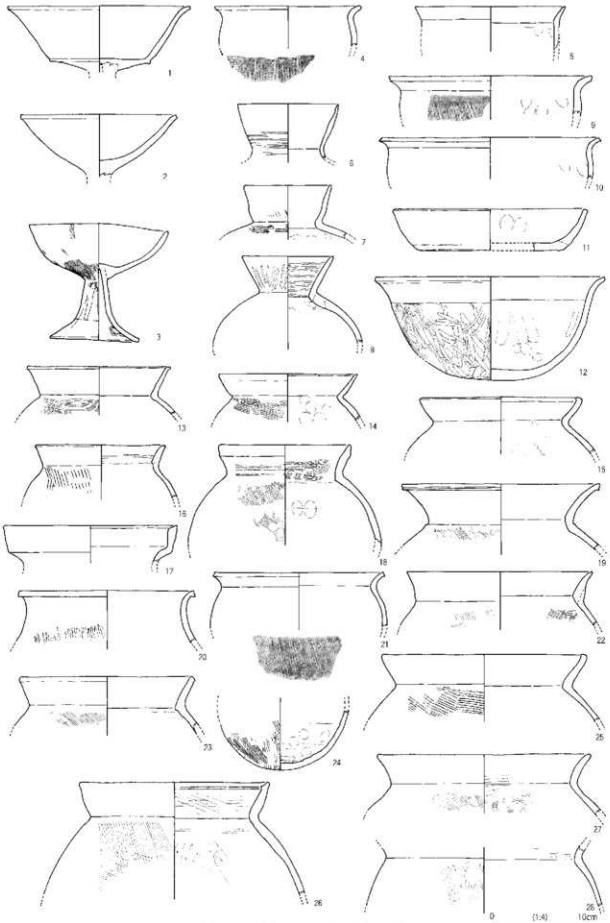
第120図　第11－2層出土須恵器⑥



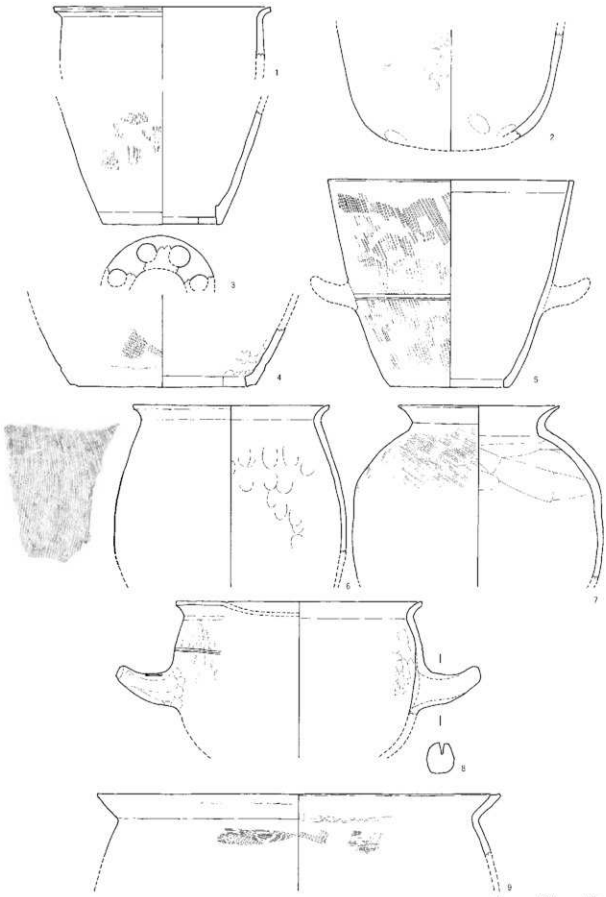
第121図　第11－2層出土須恵器⑦



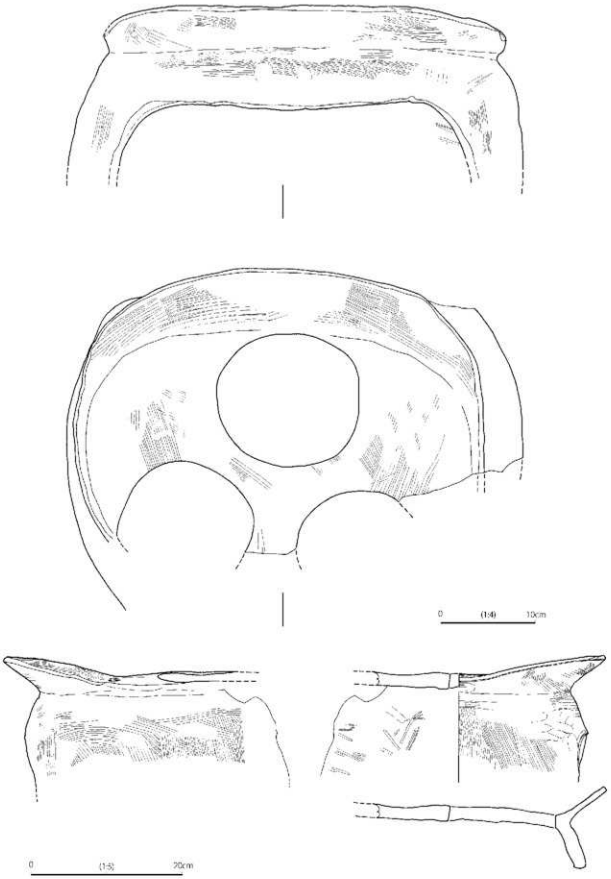
第122図　第11－2層出土土師器①



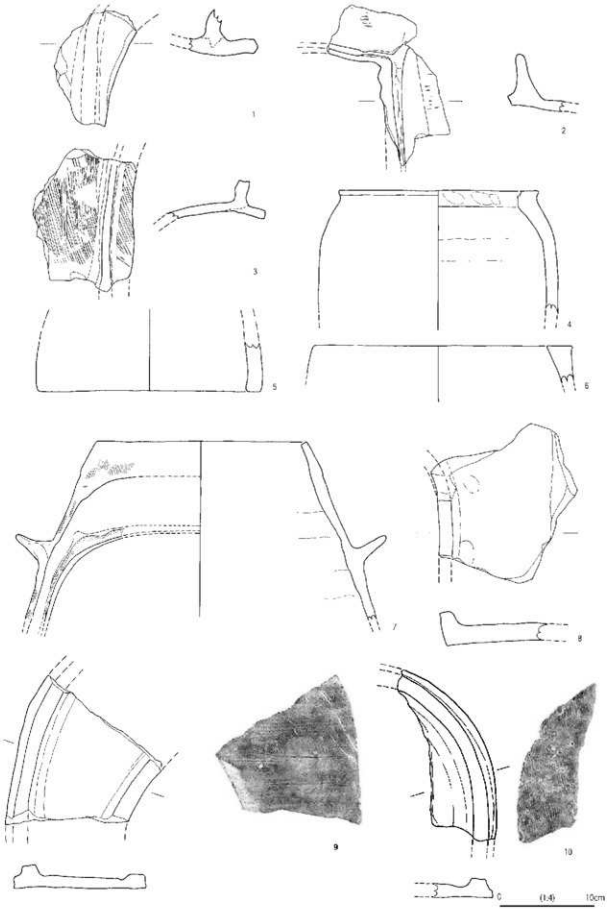
第123図　第11－2層出土土師器②



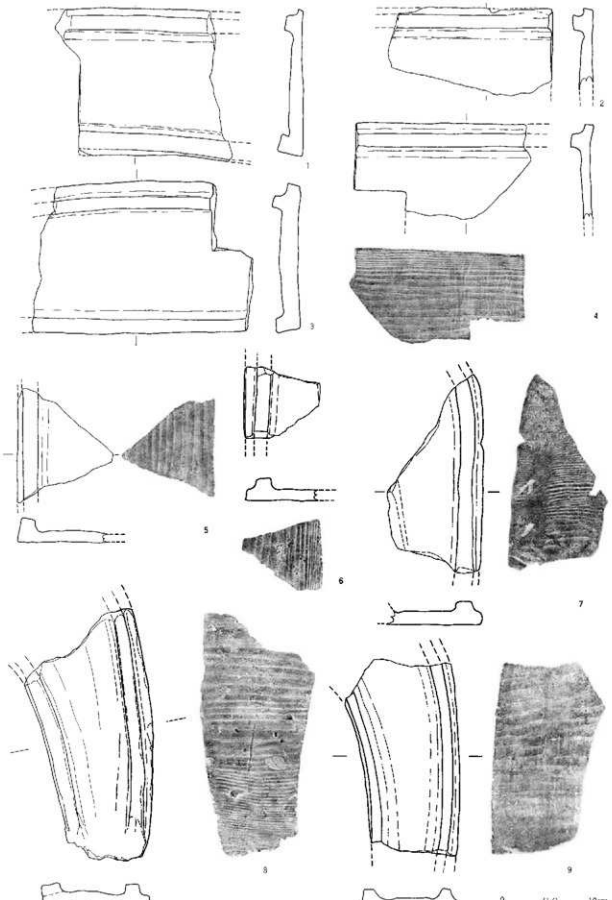
第124図　第11－2層出土土師器③



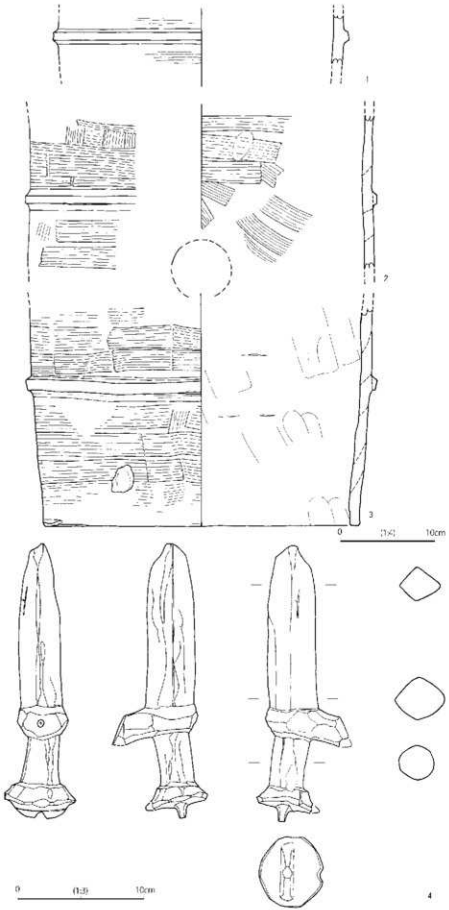
第125図　第11－2層出土カマド



第126図　第11－2層出土カマド・U字形土製品



第127図　第11－２層出土Ｕ字形土製品



第128図　第11－2層出土埴輪・剣形土製品

した。凸帯の接合にあたっては、カマド本体側に数ヶ所の孔を開け、凸帯側には孔にはめ込む突起を作り出す工夫をしている。4・6はカマドの上端部分。5はカマドの脚部下端部分である。7はカマドのほぼ全体寸法がわかる資料である。外面にハケ目、内面には粘土紐の接合痕が確認できる。残念ながら上部は欠損しており、掛け口の形態は不明である。8はやや反り返った粘土板の端に、断面四角形の凸帯が付く。U字形土製品と捉えているが、後に述べるU字形土製品とは、凸帯の形状や粘土板の微妙な反り方から考えて、カマドの一部とも考えられる。

第126図－9・10と第127図はU字形土製品である。U字形土製品については、これまで用途が不明であったが、近年カマドの焚き口の枠に取り付ける部材であった可能性が指摘されている（註2）。また当調査地に近接する薗屋北遺跡からは、U字形土製品の全体を復元できる資料が出土しており（註3）、用途と全体像はほぼ解明されているといってよい。以下では、今回の調査で出土したU字形土製品の特徴を述べる。凸帯の付く表側はナデ調整により仕上げられている。2条の凸帯の内側は、ややあたりの強いナデが施されており、溝状の凹みを呈している。2条の凸帯は粘土板の内側に接合されていることがわかる（第126図－9、第127図－8・9）。ただし、カマド取り付け時に上部にあたる箇所では、内側の凸帯は粘土板の端に接合されているのがわかる（第127図－1・3）。裏側は筋状の皺があるもの（第127図－4～9）と、無いもの（第126図－9・10）にわかれる。なお表面が磨滅してしまっているものについては、拓影を省略した。筋状の皺は第127図－5・6を除いて、全て横方向に走っていることがわかる。第127図－5・6は細片のため、どの箇所の破片か判別し難いが、上部の破片である可能性も捨てきれない。となれば、皺の確認できる全資料が、横方向の皺を持つといえる。この痕跡はおそらく製作時の木製台の形状に大きく関わるもので、年輪が転写されたためと考えられる。年輪は下部から上部へ間隔が狭くなるものと、その逆がある。このことから、U字形土製品は柾目で切り取られた板材の上で粘土板を敷いて成形されたものと考えられる。また、上部の年輪の間隔が狭いものと、下部の間隔が狭いものの2種が存在することから、板材の形状は、半乾燥状態のU字形土製品全体を乗せることのできる長方形であったと考えられる。第126図－9・10については、ケズリ調整が施されているが、細かく観察すると、僅かながら年輪の転写が確認できる。したがって、当遺跡におけるU字形土製品はすべて、柾目の板材の上に乗せられて製作されたといえる。

第128図－1～3は円筒埴輪片である。第114図①の地点から出土した。これら以外にも、6区の第10層から蓋形埴輪の傘部？（第25図－7、図版69）が出土しており、周辺に古墳があった可能性を想起させる。

第128図－4は剣形の土製品である。最大長28.5㎝、最大幅6.6㎝、土師質の土製品。一部欠損はあるものの、ほぼ完形である。出土層位は5区北側の落ち込み内第11－2層である。第114図⑨の地点から出土した（図版58－2）。鹿角装刀剣を模したものと考えられる。把の長さに比べると剣身は短い。全体にわたって丁寧な縦方向のミガキが施されている。把縁と把縁突起の表現がされており、把縁突起の先端には直径7㎜、深さ7㎜の断面三角形の孔が穿たれている。把頭には把縁突起と同一線上に「へ」の字状の切れ込みがある。また把頭端面には、剣身と直交する方向に、長さ約5.3㎝の突起があり、その中央部分にも「へ」の字状の切れ込みがある。把縁突起先端の孔、把頭の切れ込み、把頭端面の切れ込み、これらは同一直線上にあることから、匂金を装着するためのものといえる。このように当資料は、細部にわたって鹿角装刀剣を忠実に模したものといえる。

第129図には不明陶製品、紡錘車、金属製品を掲げた。1は須恵質で灰白色を呈するが、用途は不明。

厚みは最大で５㎝あるが、甕や壺などの食器ではない。山形の形状を呈していることから、陶棺の可能性が考えられるが、断定できない。７区の落ち込み（第11－２層）から出土した。２～７は紡錘車である。２・３は石製品なので後述する。４～７は土製の紡錘車。４・６は断面長方形であるが、５・７は六角形である。４は３区の低地部から、５～７は５区の落ち込み（第11－２層）から出土した。この他に須恵器窯の窯体片とおもわれるものも出土している（図版96－ａ）。

④金属製品（図版98～100）

第129図－８～13と第130図は金属製品である。

第129図－８・９は鉛製の鉄窕玉。８は４区の第４層から、９は５区の第４層から出土した。出土層位から17・18世紀のものか。

10は金属製品の輪。用途は不明。Ｘ線ＣＴ撮影（自然科学的分析の章で後述）により、物質密度を分析したところ、鉄密度を超える数値が出ており、銅あるいは銅を含んだ合金の可能性が指摘されている。５区の落ち込み（第11－２層）から出土していることから、古墳時代のものといえる。

11は鉄製鍬の破片。２区の第５層から出土した。出土層位から16・17世紀代のものといえる。

12・13は鉄製刀子。どちらも完形であるが、使い切られて廃棄されたためか、刃部があまり残存しない。どちらも４区の第９層から出土した。出土層位から平安時代後期（11・12世紀）のものといえる。

第130図－１は鉄製の用途不明品。鍵の手状に曲がった形状で、長軸の先端は平坦で薄くなっている。鉈の可能性があるが、断定できない。６区落ち込み（第11－２層）から出土した。

２は鉄滓、６区落ち込み（第11－２層）から出土した。

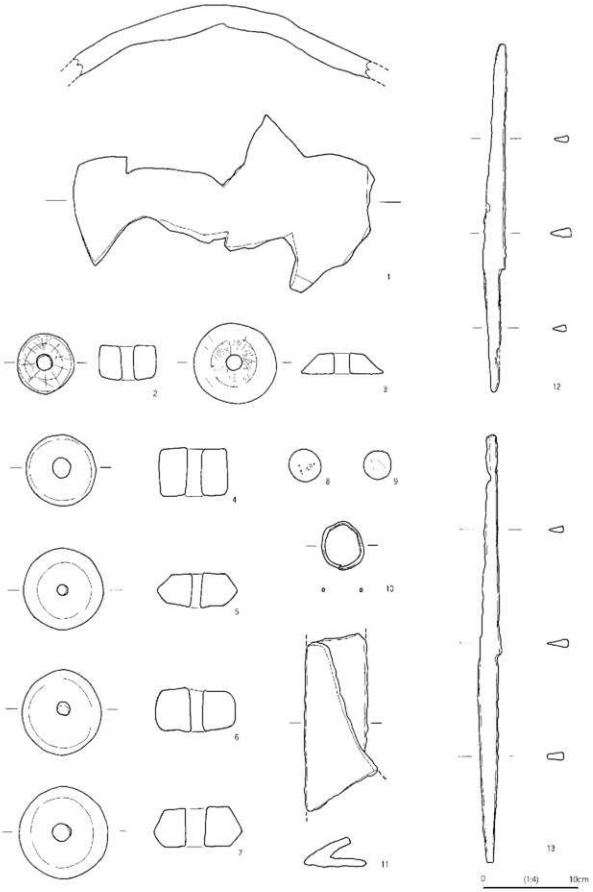
３は用途不明の鉄製品。正円に近い馬蹄形を呈している。Ｕ字形の切れ込み部分には、鍛造時に切断する際生じたバリ（切れ損ない）が確認できる。第114図⑰の地点から出土した。

４は鋳造鉄斧である。袋部に近い部分の破片と考えられるが、袋部・刃部は欠損している。銹着はみられないが、内側には土が付着している。断面形は梯形を呈する。破断面には気泡が多くみられることから、当資料が鋳造によるものであることがわかる。５区の落ち込み（第11－２層）から出土した。

５は鉄鎌である。刃の一部と柄部の先端を欠く。先端部分に僅かだが銹着がみられる。刃先を左、刃部を手前、背部を奥にすると柄部の折り返しは下向きになる。また、柄部はほぼ直角に折り返されて形成されていたと想定される。背部には、おそらく鍛造時に生じたであろうバリが確認できる。第114図㉑の地点から出土した。

６はＵ字形鋤・鍬先である。耳部先端は残存しているが、刃部は欠損している。図はほぼ同じ位置と層位から出土した、着装用木製品（第134図－４）の寸法を参考に復元したものである。全体的にやや銹着している。刃面である外側は尖り気味であるが、内側は鉄板が２枚にわかれ、Ｖ字状の溝を形成している。鉄板は刃先に近い部分では、２枚とも密着しており１枚にみえるが、内側と外側どちらの破断面を観察しても、あきらかに２枚の鉄板が合わさっているのがわかる。本資料は横方向と縦方向でＸ線ＣＴ撮像をおこなっており、撮像結果からも、２枚の鉄板が合わさっている状況を確認している（註４）。

７・８は鉄鎌である。７は長頸鎌で、頸部の下３分の２あたりから、茎部中ほどにかけて湾曲する。とくに茎部の湾曲は著しく、ほぼ90°近く湾曲している。刀部には僅かな刃こぼれが見られるが、ほぼ完存しているといってよい。一見片丸造であるが、平坦な側の刀面を細かく観察すると、研ぎ面が確認できる。ただし、刃部から頸部にかけての側面をみるかぎり、当資料は本来的には片丸造で製作されたといえる。反対側の刃面は、研ぎ調整をおこなった際に生じたバリを削る等の理由で研がれたのだろう。



第129図　第11－2層出土不明須恵器・金属製品

関部は両側面に棘状の突起を持つが、突起の無い面でも僅かに段差が見られる面がある。茎部には矢柄装着時に糸状のものが巻かれた痕跡が明瞭に確認できる。第114図⑲の地点から出土した(図版59－５)。８も同じく長頸鏃で、頸部の中ほどから茎部先端にかけて大きく湾曲している。刀部は２段の逆刺をもつが、２段目は片側のみである。刀部には、僅かな刃こぼれが見られるが、ほぼ完存しているといってよい。片丸造で、刀部から２段目の片逆刺部にかけて一連の研ぎ面が明瞭にみられる。２段目の逆刺部分には、刃部の上部にかけて長さ1.2㎝の溝状の切れ込みがみられる。これは裏面でも確認することができ、裏面での長さは0.4㎝である。頸部の中ほどには、湾曲の際に生じたと考えられる厚さ１㎜の鋼のめくれがみられる。関部は台形関で、四面すべてで明瞭な段差が確認できる。２段逆刺のある側の側面では、斜め方向の研磨痕跡が確認できる。第114図㉖の地点から出土した。

第130図中の鉄製品は、すべて出土層位から古墳時代のものといえる。なお、４～８については、実態顕微鏡を用いた報告をすでにおこなっている（註５）。文章中で不明な箇所があれば、参考にして頂きたい。

⑤石製品（図版97・98）

第129図－２・３と第131図に石製品を掲げた。

第129図－２・３は石製の紡錘車である。２は円と放射状の線刻を施す。断面形は長方形である。７区の落ち込み（第11－２層）から出土した。３はかすかに多方向の線刻が確認できる。断面形は台形である。６区の微高地上から出土した。

第131図－１～27は小玉である。１～８は1398土坑から、９・10は391溝から、11は412井戸から、12・13は754井戸の井戸枠内のシルト層から出土した。これらについては、遺構の項で述べている。14～17は４区の、局所的に残存していた第11－２層を洗浄して出土したもの。18～22は５区落ち込み内の第11－２層を、23～27は６区落ち込み内の第11－２層を洗浄して出土した。

28～32は有孔円板である。32は単孔であるが、それ以外はすべて双孔である。28は５区北端落ち込み内の第11－２層を、29・30は６区の落ち込み内の第11－２層を洗浄して出土した。32は３区の調査区南端の側溝掘削中に出土した。

33･34は勾玉である。どちらも出土層位は５区落ち込み内の第11－２層である。33は第114図㉒、34は同図⑱の地点から出土した。

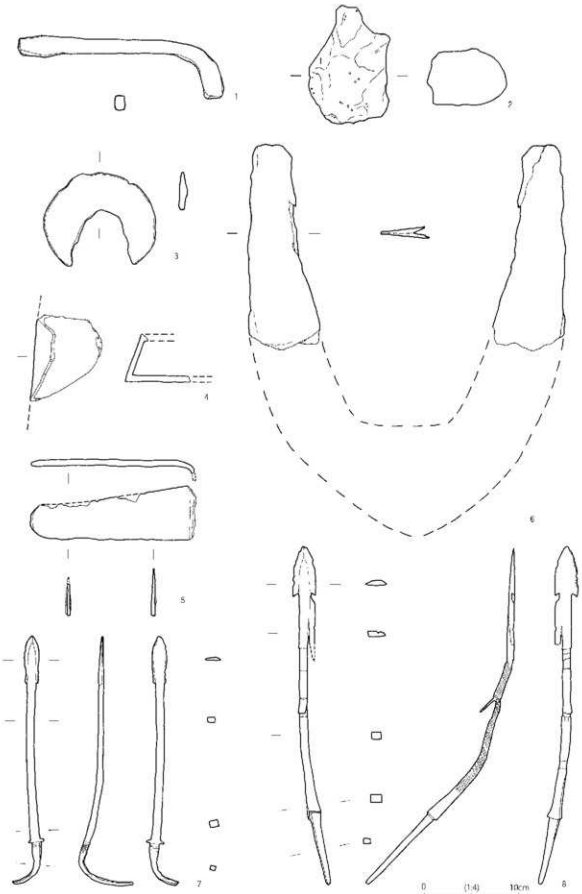
35は用途不明品である。完形であれば、断面円形であったと想定され、先端は３㎜程度まで細くなっており、逆側の端には鑿等による加工痕跡が５ヶ所認められる。穿孔された痕跡は無い。３区低地部の第11－１層から出土した。

36～38・40～44は砥石である。37・40・42・44には平坦な研ぎ面に線状の細い溝がいくつも確認できる。36は６区の第７層から、37・38は５区の落ち込み（第11－２層）から、40は６区の落ち込み（第11－１層）から、41・43は６区の落ち込み（第９層）から、42・44は６区の落ち込み（第11－２層）から出土した。

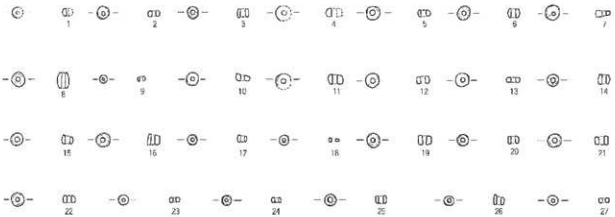
39は石材片である。小玉や有孔円板等の母岩と考えられる。先述した426溝から出土した。当地で玉作りがおこなわれていたことを示唆する資料である。

⑥木製品（図版101～107）

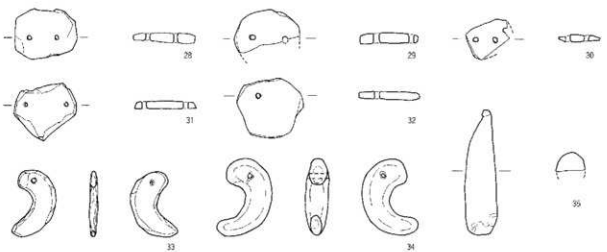
以下に報告する木製品の数点は、先行して『大阪文化財研究』で報告している（註６）。そのため、一部の遺物については内容が重複している。また、その後の整理作業によって、年代観に若干の相違が



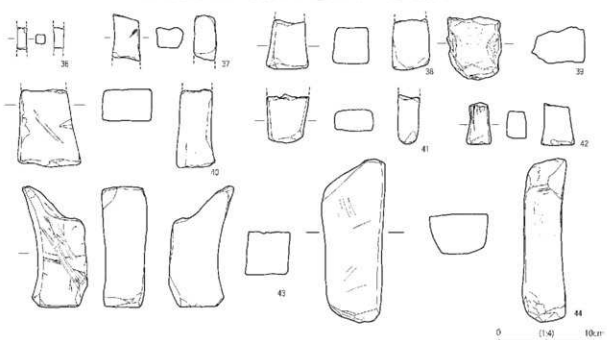
第130図　第11－2層出土金属製品



1～8：1398土坑　9・10：391溝　11：412井戸　12・13：754井戸　14～17：4区低地10層
18～22：5区落ち込み11－2層　23～27：6区落ち込み11－2層　（縮尺2/3）

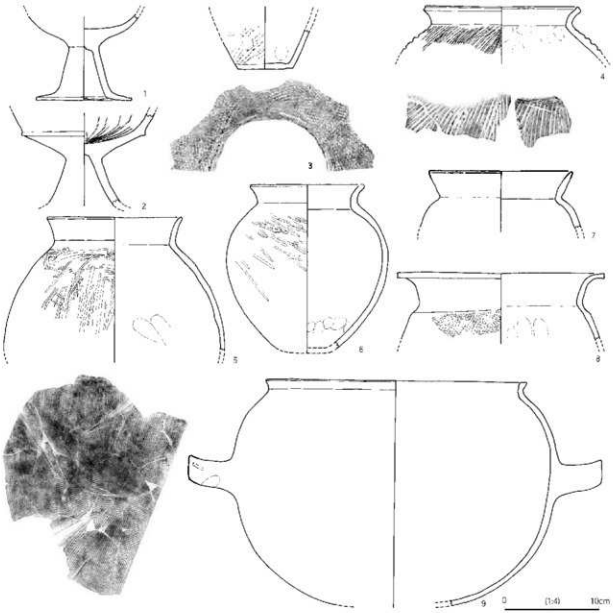


28・31：5区落ち込み11－2層　29：6区落ち込み9層　30：6区落ち込み11－2層
32：3区低地部　33・34：5区落ち込み11－2層　35：3区11－2層　（縮尺2/3）



0　(1:4)　10cm

第131図　第11－2層出土石製品



第132図　第11－2層A地点出土土器

生じているが、合わせて参照されたい。

以下の報告において、名称や部位の呼称、分類については、『木器集成図録　近畿原始篇』（註7）に準じるものとし、異なるものについては、参考文献として文末に掲載する。

第134図－1（図版102）と第134図－2（図版102）は、いずれも袋状鉄斧を装着して使用する斧膝柄で、斧台の先端部が垂直方向に薄く削りだされていることから、装着した鉄斧の刃部は垂直方向になったものと考えられる。第134図－1には、使用時に生じたと思われる鉄斧の圧痕が縦方向に2筋認められる。そのうち、先端から見て奥についた圧痕は、前方の圧痕と比べると両端部が顕著に残っており、鉄斧の装着方向を換えて使用したものと考えられる。第134図－1が斧台の中心部分から、ほぼ真っ直ぐにのびる柄であるのに対して、第134図－2は斧台の後部から先端方向へ彎曲する柄をもつ。第134図－1は第114図㉑、第134図－2は第114図⑧の地点から出土した。

第134図－3は楔と考えられ、長さ10㎝、幅3.1㎝、厚さ1.2㎝を測る。先端面の加工痕が明瞭に残っており、先端の磨滅も見られないことから、石材や木材を割る際に用いる責め木としての楔ではなく、組

み合わせた部材を固定するために用いられた楔ではないかと考えられる。

第134図－４（図版101）は曲柄平鍬で、笠のくびれ部から刃部にむけて下膨れに広がるＤⅠ式に区分できる。表面は損傷と使用による磨滅によって、加工痕がほとんど認められない状態である。

第134図－５（図版102）・第134図－６（図版102）は、いずれも把手の部分で、身の部分が遺存していなかったため、必ずしも鋤柄と断定できないが、これまでの出土類例に従い、鋤柄とする。第134図－５は半分以上が欠損しているが、Ｖｂ型に分類される形状が逆三角形で、中央を穿った把手部分と考えられる。第134図－６は長さ28㎝、直径3.8㎝の丸太を利用したＴａ型の把手である。中心部分にノミ状工具によって、２㎝×４㎝のほぞ穴を穿ち、ここに柄を差し込んだと考えられる。また、第134図－７と第134図－８も第134図－６と同様の形状で、ほぞ穴の部分で折損したものと考えられる。ただし、第134図－７は復元長が50㎝前後になるため、鋤柄の把手としては適当な大きさではなく、馬鍬の把手と考えるほうが妥当である。第134図－８については復元長が第134図－６と同程度であるが、破断面にあたる部分に面取りが施された痕が認められ、破損後に再加工されて転用されたか、まったく異なる製品であった可能性も考えられる。

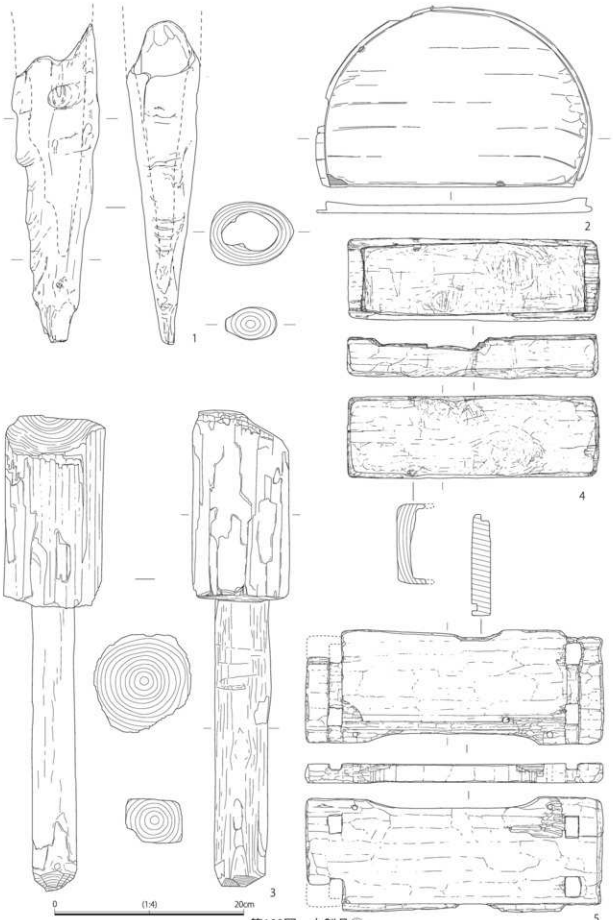
第135図－１（図版103）は馬鍬の台木で、残存長88.4㎝、最大幅９㎝、最大厚６㎝を測る。台木の下面には、幅3.5～５㎝、長さ６㎝の孔が３ヶ所認められる。これらは破損しており、残存状態は良くないが、馬鍬の歯を差し込むためのものと考えられる。これらの孔の間に、把手用の孔が上面から下面に貫通して穿たれている。また、前面から後面へ貫通して引き棒を差し込む孔が幅約２㎝、長さ７㎝の長方形状に穿たれており、さらに同様の大きさで把手用の孔と交差するように穿たれている。また、馬鍬の歯の先端部分と考えられる木片（第135図－２）も出土しているが、この台木に対応するものであるかは特定できなかった。

第135図－３（図版106）は横槌である。身の部分が木目に沿って剥離するように欠損している。残存状態は良くないが、本来は断面が方形を呈する形状であったと考えられる。握り部は完存しており、身の中心よりもやや上付きになっている。

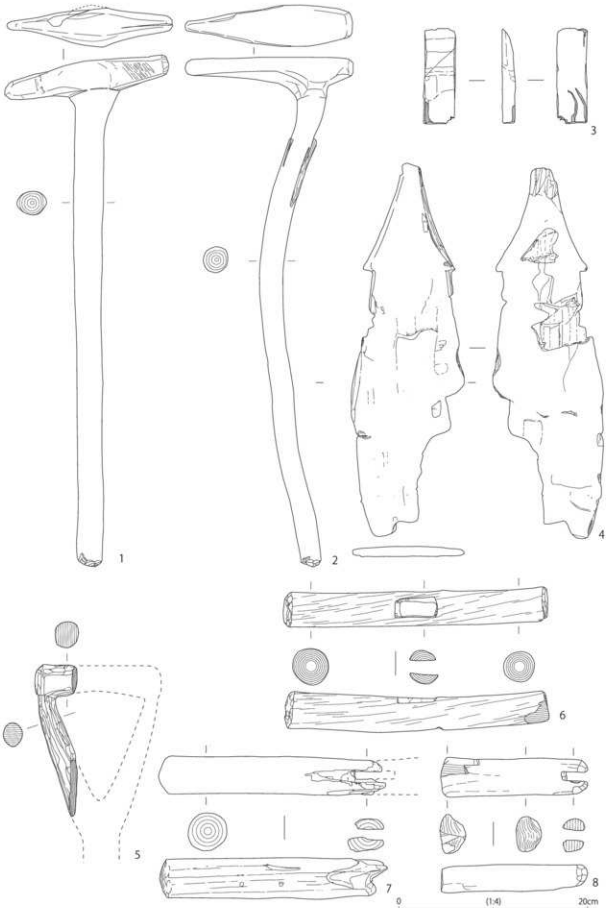
第135図－４（図版106）は杭に転用加工された杵である。残存長31.6㎝、最大径４㎝を測る。残存する握り部が鋭く加工されているが、搗き部との境にその名残りが窺える。搗き部の端は磨滅しているが、これは杵として使用された際に生じたものか、杭として打ち込まれた際に生じたものかは判断できない。出土時は横倒しになっており、機能した状態で出土していないが、落ち込み際から出土しており、護岸に用いられた可能性もある。

第136図－１（図版105）は筵など目の粗いものを編む際に用いられたと考えられる編台の板である。残存長24.5㎝、最大幅６㎝、最大厚0.9㎝を測る。上端と下端には経糸の位置を安定させるための溝が設けられており、一定の間隔かつ複数の組み合わせで設けられていることから、様々な製品が製作されたものと考えられる。経糸の溝は使用によって半円形に磨滅している。断面が楕円形を呈しているのも、使用時の摩擦の影響によると考えられる。上端と下端どちらにも溝が設けられているが、位置が上端と下端とでは対応していないこと、上下端の磨滅が同程度であることから、製作する品目によって上下を入れ替えて使用していた可能性も考えられる。また編む際に縦糸を張る役割の木錘も３点出土している（第136図－２～４、図版102）。そのうち第136図－４は端部に向かって再び細くなるという形状になる。大きさはいずれも15㎝前後におさまる大きさである。第114図㉔の地点から出土した。

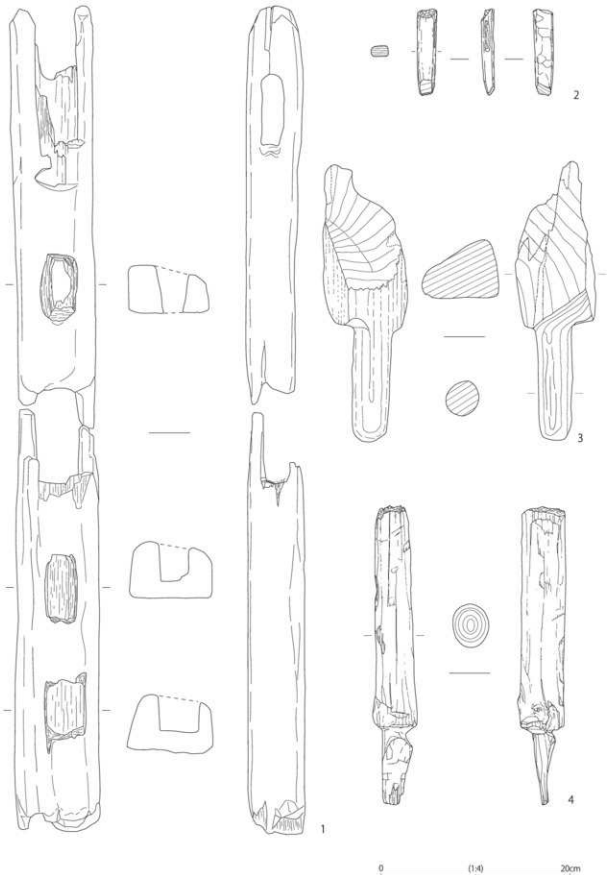
第136図－５～７は糸紡ぎ用の部材である。いずれも枠木で、「宮都型」とよばれるものである（註８）。



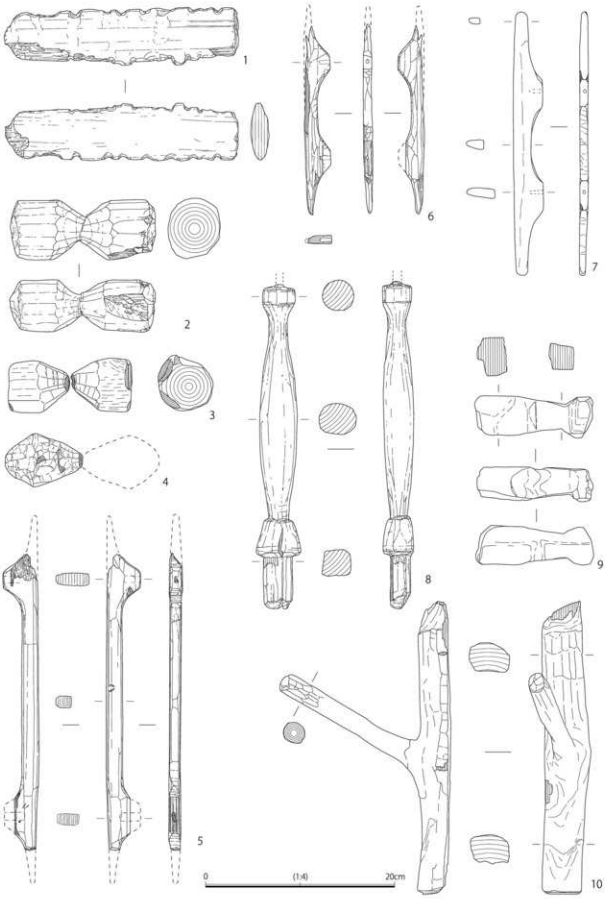
第133図　木製品①



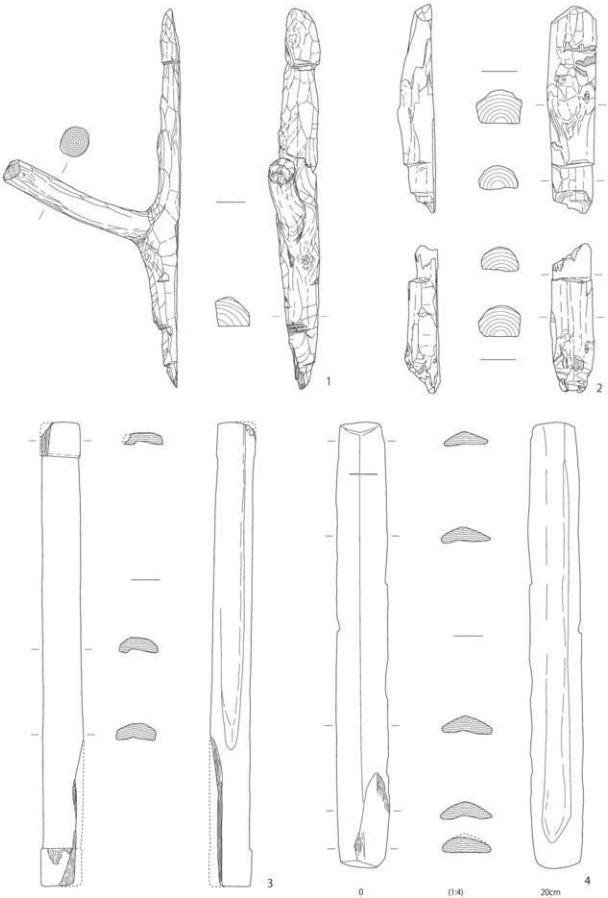
第134図　木製品②



第135図　木製品③



第136図　木製品④



第137図　木製品⑤

第136図－７（図版102）は枠木の形状を良く残しているが、第136図－５と第136図－６は残存状態が良くない。しかし、いずれも横木と接合させるためのほぞ穴が残っており、第136図－５はほぞ穴の間隔が10.5㎝、第136図－６が10㎝となり中型に分類でき、第136図－５は25㎝で大型になる（註９）。

第136図－８（図版103）は綛かけの軸台である。綛かけの回転軸は欠損しているが、残存状態は良好で、装飾性に富んだつくりになっている。軸の形状は中心部分が最も太く、上下端に向かうほど細くなるように成形し、上端では円柱状に成形されている。下端では台形状に加工し、続いて台座に差し込むためのほぞが削りだされている。第114図⑦の地点から出土した。

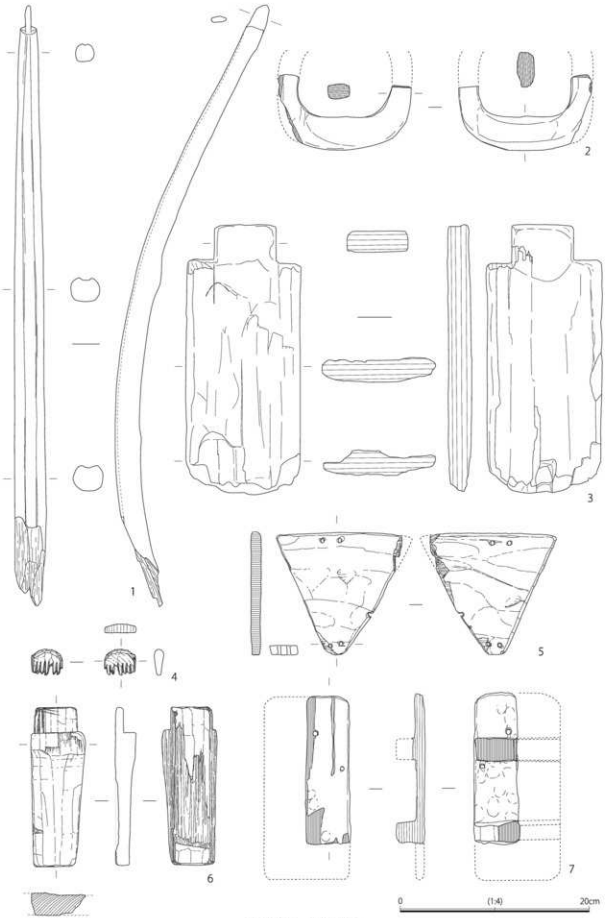
第136図－９は部材端部の手前を削りこむことによって、端部が紐かけの突起状に成形している。これとよく似た形状の部材が、瓜生堂遺跡と静岡県登呂遺跡で出土している。いずれも完形で、『木器集成図録　近畿原始篇』では布（経）巻き具と推定されているが、断定は避けている（註10）。これに対して、前田亮はカレン族の民族資料を参考に経保持具の可能性を示唆している（註11）。

第136図－10（図版103）と第137図－１（図版103）は、いずれも自然木を加工した有爪型の背負子の縦の枠木である。第137図－１は枠木の全長が約40㎝、最大幅が４㎝で爪（腕）木の長さは15㎝であった。枠木は樹皮を剥がした上で全体を削って調整し、背あて部分は平滑になるように割いている。枠木の上端部は紐掛の突起状に加工されており、下端部は薄く削ることで段を設けている。爪木の先端部分は半球状に面取りがおこなわれている。第136図－10は枠木の残存長が約31㎝、最大幅が約５㎝、爪木の長さは15㎝である。第137図－１と同様に、自然木の樹皮を剥がし、背当ての部分を平滑にしている。全体を削って調整しているが、第137図－１に比べて仕上げは粗い。爪木の先端部は半球状に面取りがおこなわれている。上端部が欠損しているが、現存の上部が端に向かって薄く削りだされており、紐掛突起状に加工されていたのではないかと考えられる。また、第137図－２は爪木の部分が残っていなかったため、背負子と断定するには至らなかったが、表面の加工方法に第136図－10、第137図－１と共通する点が多いことと、欠損箇所が爪木の付け根部分にあたることから、背負子であると考えられる。

第137図－３（図版104）は刀鞘で、佩裏である。鞘間を僅かに削りこむことで、鞘口と鞘尻を立体的に表現して、鞘装具Ⅱ類に分類される形状になる（註12）。鞘口から鞘尻までの長さは49㎝、鞘口の幅4.2㎝、鞘間の幅４㎝、鞘尻の幅は一部が破損しており不明であるが、鞘口の幅と同程度であったと考えられる。鞘間には、佩表と佩裏を固定するために巻きつけられたと考えられる、紐帯の痕がかすかに残る。佩表と佩裏を貼り合わせた完存状態での断面形は、腹側が背側に比べてやや尖った楕円形になる。内面の溝は背側を厚く刃側を薄く刀の形状にあわせて刳り貫かれている。溝の幅は2.4㎝で鞘口から34.1㎝の位置で刃先に達しており、刀身の長さに対して鞘の長さが1.25倍になる。第137図－４（図版104）も刀鞘で、佩表である。完存状態での鞘間の断面形は菱形になる。鞘間と鞘口・鞘尻を区別する明確な加工は見られないが、鞘口側の端から5.2㎝の位置に幅0.5㎜の切り込みを有し、これが鞘口と鞘間を区分する目的で設けられた可能性がある。長さ47.2㎝、幅5.4㎝を測り、内面の溝は刀形に刳り貫かれている。溝の最大幅は３㎝で鞘口から44.3㎝の位置で刃先に達している。

第138図－１（図版104）は丸木弓で、握りの部分で折損しているが、遺存状態は良好である。復元長が１ｍ前後になり、弓幹は最大径で３㎝を測る。弓幹の外彎する面に最大幅1.2㎝、深さ1.5㎜の棒樋を施している。端部には、弭が残存しているが、弦の痕は認められなかった。第114図③の地点から出土した。

第138図－２（図版105）は輪鐙である。外面は磨耗して加工の痕跡はまったく認められず、素鐙であっ



第138図　木製品⑥

たと考えられる。上半分を欠損しているが、破断面を観察すると、木目に沿って割れており、騎乗時など鐙に大きな負荷がかかった際に割れたものと考えられる。第114図⑬の地点から出土した。

第138図－３は端部に、ほぞと考えられる突起を削りだした板状の部材で、残存長28.6㎝、幅12.2㎝。ほぞの部分は長さ４㎝、幅6.6㎝である。

第138図－４（図版106）は櫛状の木製品である。残存長3.2㎝、残存幅2.8㎝、最大厚0.5㎝の半円形の板に切り込みを入れ、櫛歯を挽き出している。一部櫛歯が欠けているが、残存する櫛歯を観察すると、ほぼ挽き出した状態のままであり、表面の調整痕も顕著に認められる。使用に支障をきたす大きさであり、実用品としての機能は無かったと思われる。『古事記』には、伊邪那岐が櫛の歯を折り灯火に用い、また、伊邪那岐を追う鬼の足止めに櫛の歯を筍に変えるといったように、櫛が本来の用途とは異なる使われ方をしている記述が見られる。このほかにも、古代には、櫛を用いた通過儀礼や宮中祭祀も存在することから、櫛を携帯することは実用目的のほかに、呪術的な意味合いも含まれていたと考えられ、呪術的機能に特化し仮器化した櫛も存在した可能性がある。第114図⑪の地点から出土した。

第138図－５は一辺13～14㎝を測る三角形の板状品である。最大厚は0.5㎝を測る。天地は明らかではない。二角は鋭角に作られ、残る一角は丸く成形されている。この一角付近に円形小孔が２点、対面する辺の中央にも孔が２点穿たれている。また、欠損するが、一側辺にも小孔が１点認められる。平面形状は、四方転の箱に類似するが（その場合は図示天地が逆）、紐孔の位置が不規則である点と、断面形状がやや平行四辺形を呈しているため、別の用途を想定すべきであろう。一角を欠損する以外、特に明確な使用痕跡は認められない。

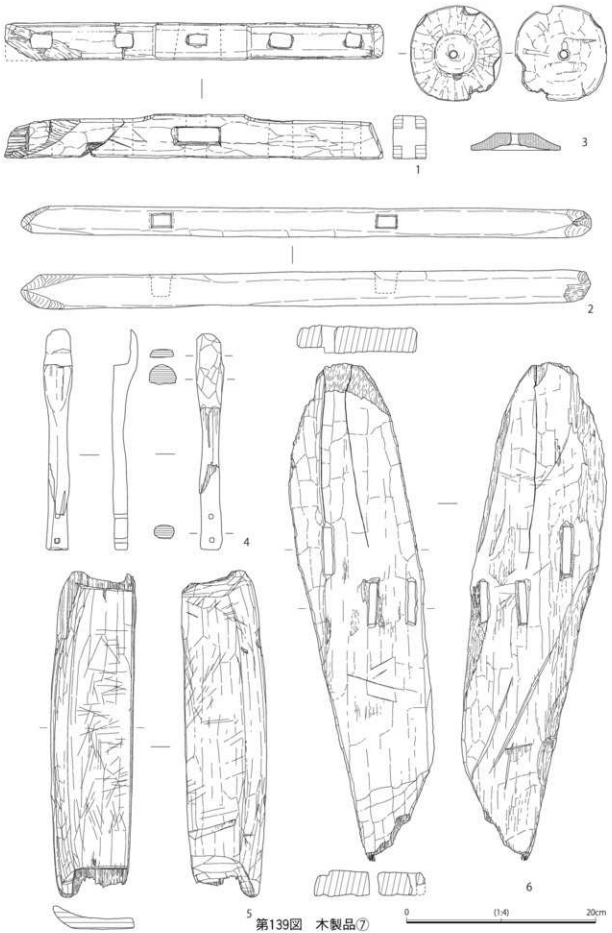
第138図－６は段をもつ部材である。最大長16.4㎝、残存幅6.0㎝、最大厚2.0㎝を測る。両側面を欠損する。段より上方は他部材へ差し込む部分のようである。腰掛や机の脚部とみる説もあるが、天板と組み合う例はまだ見つかっていない。

第138図－７（図版106）は連歯下駄である。鼻緒を通す前壷と後壷の部分が残存し、前壷と後壷との位置関係から左足用と考えられる。台は左半分と踵部分、前歯が完全に欠損しているが、台の幅がおおよそ８㎝前後であったと考えられる。台の表面の調整痕や後歯の先端部分が磨滅していることから、実際に使用されたものであることがわかる。古墳時代の下駄は全国的にも出土例は少ないが、これまでの出土例や従来の下駄が、後壷を後歯の手前に穿孔しているのに対して、この遺物では、後壷が前歯の直後に穿孔されているのが特徴である。

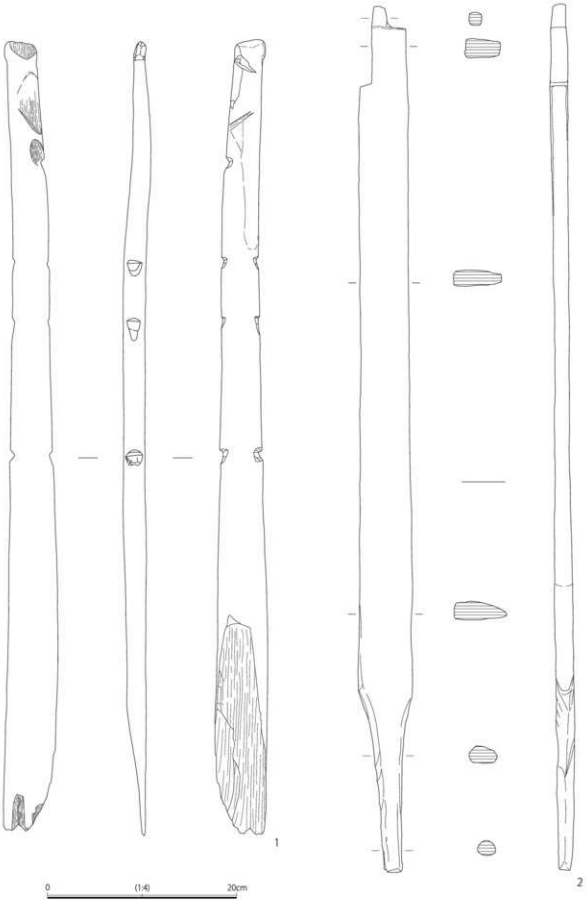
第139図－１（図版107）は脚座で、残存長40㎝、幅４㎝、高さ4.5㎝を測る。中心部分がやや突出するように削りだされ、角が面取りされており、装飾性を意識した成形になっている。脚（軸）を差し込むために、おおよそ２㎝×1.5㎝のほぞ穴が、約９㎝間隔で上面から底面を貫通して５ヶ所穿たれている。これは細い脚をできる限り安定させるためであったと思われ、脚座側面中央に横5.8㎝、縦２㎝のほぞ穴が穿たれているのは、対になる脚座にも同様の加工がおこなわれ、横軸でつなぎ、強度の弱い脚に代わって本体のたわみを抑えたものと考えられる。細い棒状の角材を５本用いて天板を支えた、正倉院の二十六机に類似し、装飾性の強い調度品であったといえる。

第139図－２は長さ60.5㎝、最大幅３㎝、高さ3.5㎝で、長辺2.4㎝、短辺1.3㎝、深さ2.4㎝のほぞ穴が２ヶ所穿たれている。第139図－１同様、脚座の可能性も考えられるが、強度と安定性の問題から脚座とは異なる部材であったとも考えられる。

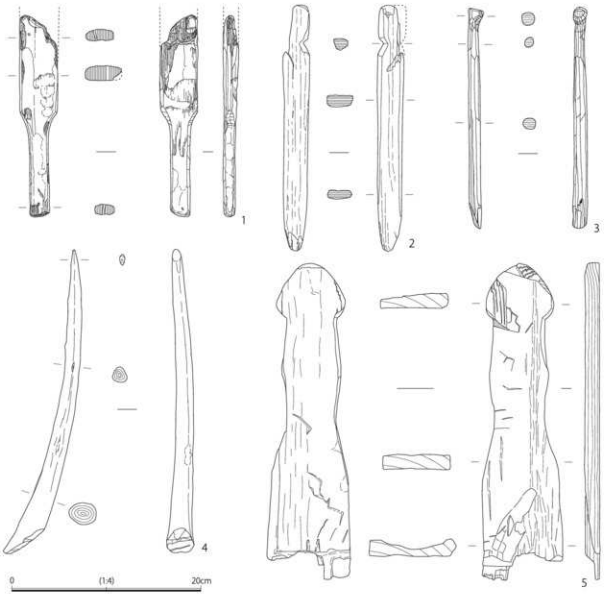
第139図－３（図版106）は直径約10㎝の円形を呈し、表面は端部から中心に向かってせり上がるよう



第139図　木製品⑦



第140図　木製品⑧



第141図　木製品⑨

に成形され、中心に直径約１㎝の孔が穿たれている。裏（底）面は中心部が彫り窪められている。表面の加工が丁寧なのに対して、裏面の加工は粗雑である。紡輪の可能性も指摘されているが、形状は灯台の台座に似る。しかし、灯台の台座は轆轤挽きによって成形された類例しかみられないため、機能の断定はできない。ただ、灯台の台座ではなかったとしても、軸受けの台座であることには変わりない。第114図⑨の地点から出土した。

第139図－４（図版105）は板材から削りだされた用途不明の木製品である。残存長23.5㎝を測る。柄状の末端に小孔が２ヶ所穿たれている。外見が杓子に似るが、身に相当する部分に掬うための窪みはなく杓子としての機能は無い。団扇の柄とも考えられるが、面を固定した痕跡などは観察できなかった。

第139図－５は例物容器の槽である。器高は最大で2.2㎝を測る。破損しているものの、残存する底部隅に明瞭な稜線が認められることから、方形であったと考えられる。おそらく長方形で、緩やかに弧状になっている辺が長辺であろう。縁部の立ち上りはゆるく、把手の痕跡は認められない。ただし、通常方形の槽の場合、把手は木目と直交する辺に取り付けられる。当資料は直交する辺の縁部が破断しているため、把手の有無は断定できない。底部に脚は無く、平底である。

第139図－６は用途不明の板状部材である。残存長53.2㎝、幅12.5㎝、最大厚は2.8㎝を測る。長さ4.4㎝、幅８㎜の方形の孔が平行に３ヶ所穿たれている。うち２ヶ所は並ぶようにして穿たれており、残りの１ヶ所は並んだ２ヶ所の孔より若干ずらして穿っている。穿たれた３ヶ所の孔は、近接して穿たれていることと大きさから、ほぞ穴ではなく、部材と部材を繋ぐために樹皮などの結束帯を通した穴ではなかったかと考えられる。

第140図－１（図版107）は残存長83.2㎝の棒状品で、端部に近くなるにつれて細くなるように成形されている。端部には紐掛状の低い突起が削り出されている。紐掛状の突起を上向き（背）にすると、ゆるやかに外反している。腹側に端部から13㎝の位置に浅い切り欠きが設けられ、そこから10.5㎝、さらに６㎝、最後に14㎝の位置にも切り欠きが設けられており、はじめの切り欠きを除くと、背側にも腹側と対応する位置に切り欠きが設けられている。端部の紐掛状突起と切り欠きの周りには、紐ずれなどの磨耗痕は確認できなかった。

第140図－２は長さ91.5㎝、最大幅5.2㎝、最大厚２㎝の完存品であるが、用途不明の板状品である。端部片側は柄状に削り出されているが、一側面が長く作られており、左右対称にはならない。また、片側の縁部は磨耗により、反対側の縁部よりも若干薄くなっている。第114図⑥の地点から出土した。

第141図－１は一部を柄状に削りだした用途不明の板状品で、残存長21.4㎝、最大幅4.0㎝、最大厚1.8㎝を測る。形状や削りだし方が第140図－２の柄状端部と酷似する。全体的に平滑に磨かれたか、使用によって磨滅したもの思われ、加工痕や稜線は明瞭ではないが、幅広部分から柄状に突き出した細かい部分へと収束する側面に、削りだした加工痕が観察できる。

第141図－２は全長25.9㎝、最大幅2.6㎝、最大厚0.5㎝の板状品で、用途は不明である。斎串に見られるような切り込みを有するが、対になる部分が破損しているため、切り込みの有無は特定できなかった。また、破損部分に切り込みがあった場合、荷札木簡にも似るが、切り込みの周りに紐ずれの痕は見られず、墨痕も確認できなかった。

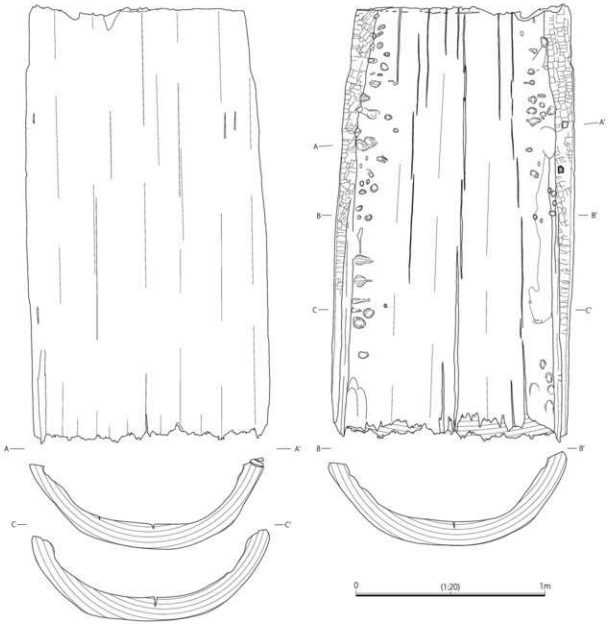
第141図－３は『木器集成図録　近畿原始篇』では、紐かけを持つ部材とされているものである。先端に紐かけ状突起を有するが、実際には紐かけ状突起の手前までを緩やかに削りこむことで、突起状に見えるだけである。残存長は23.2㎝、頭部径は1.4㎝、最大径は1.5㎝を測る。紐かけ状突起の周りには、紐痕などの使用痕跡は認められなかった。

第141図－４は、自然木の枝先を加工した、やや弓なりになる用途不明の木材である。表面は樹皮を剥がしただけの簡単な加工であるが、先端部は薄く鋭く成形されている。切断面は刀子などで断面を整形した痕跡が伺える。

⑦井戸枠転用準構造船

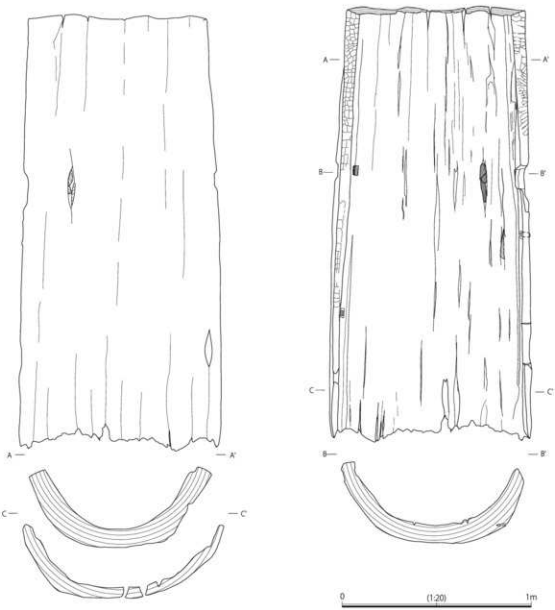
第142・143図（図版108～110）は385井戸に転用された準構造船の船材である。以下では、第142図の部材を船材①と、第143図の部材を船材②とする。なお船材①と②は、元来一体であったと推測できるが確証はない。

船材①は385井戸の北側の井戸枠に使用されていた。図では狭端を上に、広端を下に配置しているが、井戸枠に使用されていた状態は、図とは逆さまである。船材①は準構造船の船底部分と考えられ、全長2.31ｍ、狭端幅1.14ｍ、広端幅1.25ｍ、厚さ10～15㎝を測る。直径1.0～1.2ｍの丸太材を縦に半裁し、中身と側縁部分を削り取って加工したものと考えられる。ただし幅については、取り上げ後、部材そのものが自重により外反したため、やや広くなっている。船底であったためか、凸面側には加工・使用痕跡が



第142図　385井戸井戸枠転用船材①

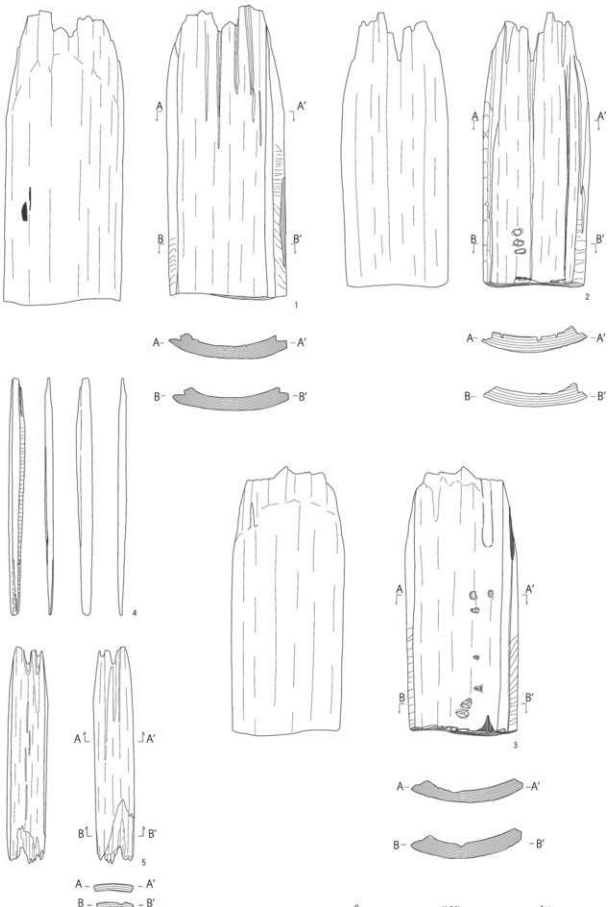
全く残っていない。いっぽう、凹面側には多くの加工・使用痕跡が認められる。凹面側縁部は水平よりやや内傾した平坦面が作り出されており、狭端側で16㎝、広端側で４㎝の幅をもつ。平坦面には手斧などの工具によるケズリ（ハツリ）痕跡が何単位も認められる。図上で右側縁部の平坦面、中ほどより上には、凸面側に向かって開けられた方形の孔が２ヶ所認められる（図版109⑦～⑨）。これらは船底と、舷側板を固定するための孔と考えられる。舷側板の側にも同様の孔が開けられ、双方の孔はサクラの樹皮等で巻きつけられ固定されていたのであろう。ただし、井戸枠として転用するためには、この孔は塞ぐ必要があり、片方の孔は孔と同形の木片により塞がれていた。おそらくもう片方の開口している孔も、井戸枠転用時には塞がれていたのであろう。凹面の内側、側縁部付近には数多くの凹みが認められる（図版109②～⑥）。これは半月状の仕切り板を、船底にはめ込む時に生じた押圧によるものと考えられる。仕切り板は、船体と直交する形で設置されたのだろう。そのため凹みは、図でいうならば、水平線上（船体と直交する線上）に左右一対となっているのが認められる。この一対の凹みはとくに狭端側



第143図　385井戸井戸枠転用船材②

に多く、複数箇所にみられる。このことから、仕切り板の設置箇所は複数あったと考えられる。ただし、すべての凹みに、同時に仕切り板が設置されたとは考えられず、航行時の状況で、設置箇所は変わると推測される。狭端側の断面は、鋭利な刃をもつ鉄斧で切断された痕跡が確認できる。元来はこれよりも長かった船底部材を、井戸枠に転用するために切断したと考えられる。

船材②は385井戸の南側の井戸枠に使用されていた。船材①同様、図では狭端を上に、広端を下に配置しているが、井戸枠に使用されていた状態は、図とは逆さまである。船材②も準構造船の船底部分と考えられ、全長2.30m、狭端幅0.95m、広端幅1.05m、厚さ５～15cmを測る。船材①と同じサイズの丸太材を縦に半裁し、中身と側縁部分を削り取って加工したものと考えられる。凸面側には加工・使用痕跡が全く残っていない。凹面側縁部には船材①同様、平坦面がみられる。ただし、平坦面は外傾しており、船材①とは傾きが逆である。船材②でも側縁平坦部にケズリ（ハツリ）痕跡が確認できる。図で見て右側縁部に１ヶ所（図版110⑥）、左側縁部に２ヶ所（図版110②③）の方形の孔が確認できる。双方とも木片で塞がれており、もともとは船材①でみられたものと同じ機能の孔が、井戸枠転用時に塞がれたと



第144図　754井戸井戸枠

いえる。また右側縁部に２ヶ所、左側縁部に１ヶ所の凹型に抉れた箇所（図版110④⑤⑩）がみられる。これらは元来孔として、凸面側に貫通していたものが、井戸枠転用時に側縁部を加工したために凹状となったのだろう。したがって、これらも舷側板固定用の孔と考えて差し支えない。凹面には何箇所か凹み（図版110②⑦⑧⑨）がみられるが、船材①のように左右対称位置にあるものはない。この部分には仕切り板が設置されなかったといえよう。船底よりやや上部には、ひび割れにより生じた孔を、複数の木片で塞いでいる部分が２ヶ所みられる（図版110⑦⑧）。木片はかなり入念に詰め込まれているが、船としての機能時に詰められたのか、井戸枠転用時に詰められたのかはわからない。狭端側の断面には船材①同様、手斧などの工具によるケズリ（ハツリ）痕跡が確認できる（図版110①）。

第144図は754井戸の井戸枠材である。１～３が三角形に組まれた枠材で、１は北西辺、２は東辺、３は南西辺で使用されていた。図と同じ天地の向きで、井戸枠に使用されていた。これらも船材①・②同様、準構造船の部材の可能性がある。２・３の凹面には船材①と同様の凹みがみられる。この３枚の板材は、円弧の反りから考えて、一つの船底を縦方向に分割したものと想定される。１～３の上部が薄くなっているのは、井戸枠としての機能時に上部が擦り減り、もともとの厚みがなくなったためであろう。４・５は１～３の合わせ目の隙間に使用されていた木片である。準構造船の部材であるかどうかはわからない。

⑧骨（図版111）

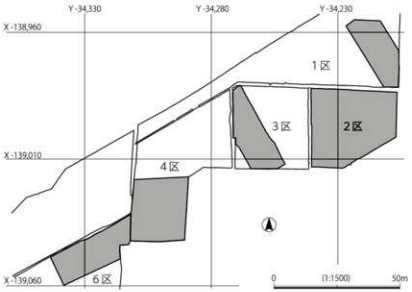
第11－２層からは大量の骨片が出土したが、すべてが獣骨で人骨は無い。写真図版111に残存状況の良いものを掲載した。１は左側資料がイヌの歯、右側資料が鳥類（カラスか？）の尺骨。２・５はいずれもシカの角で、２は刀の鞘の可能性が高く、内側に凹みが認められる。５は頭骨との付け根部分。３・４はウマの椎骨。４には刃物により解体された痕跡がみられる。６はウマの中手骨。７・９は２・５同様、シカの角。刀剣または刀子の把と考えられ、９では断面部に刳り込みが確認できる。８はウマの大腿骨。左が右大腿骨で、右が左大腿骨。10･11はウマの下顎骨である。10は第114図⑭の地点から出土した。他に小破片ながら、フグ、モグラ、タイの骨が出土している。以上はすべて５・６区の落ち込みから出土した。上記以外にウマの上顎骨が第114図⑮から出土した（図版59－３）。

第６節　弥生時代の遺構

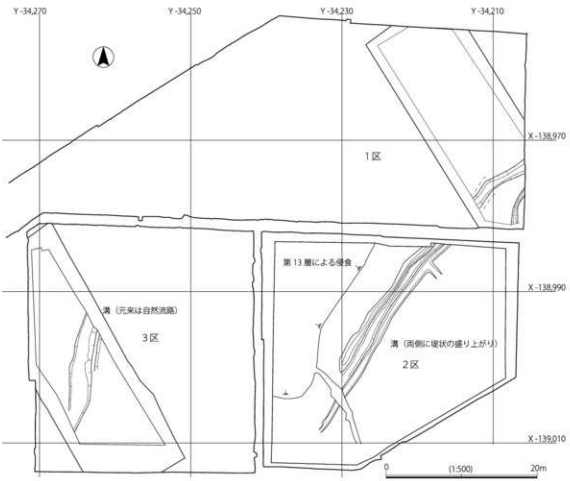
基本層序の項で述べた第12・13層は、古墳時代から古代にかけての調査地における基盤層である。第12・13層は、生駒山よりの調査地東側では、0.5～0.8mとさほど厚い堆積状況ではないが、西側では2.0m以上と厚い堆積状況を呈している。すなわち第12・13層より下層である、第14・15層が形成された時期の景観は、東側で高く、西側で低いという様相を呈していたと推測できる。第14・15面の調査は、調査地内で地表面化していた可能性が考えられる、東側に限りおこなった。

（１）第14面の遺構

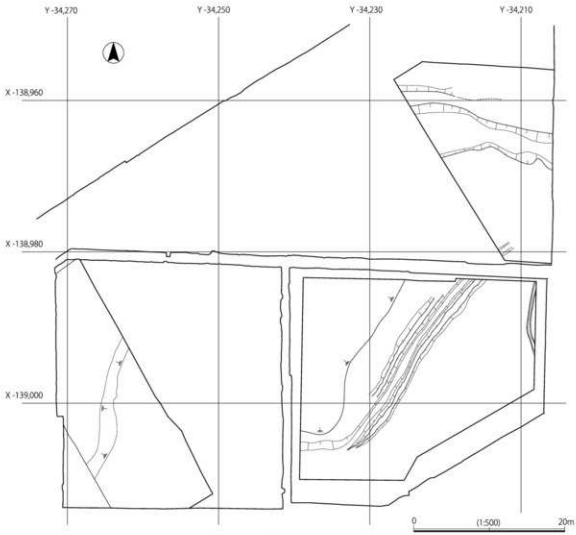
第14面の調査は１・３・４・６区の一部、２区の全域でおこなった（第145・146図、図版60－２）。１・２区では北東から南西に向けて流れる溝を検出した。溝の両側には堤状の高まりがみられ、人為的に盛り上げられた可能性が高い。溝は排水用と考えられ、堤状の盛り上がりから水田の畦が派生するような状況はみられなかった。ただし、溝が開放する箇所では、数多くのヒトの足跡が検出された（図版60－３）ことから、何らかの開発行為がおこなわれた可能性が指摘できる。３区では北から南に流れる溝を検出した。ただし、１・２区の溝で確認されたような堤状の盛り上がりはなく、単なる自然流路で



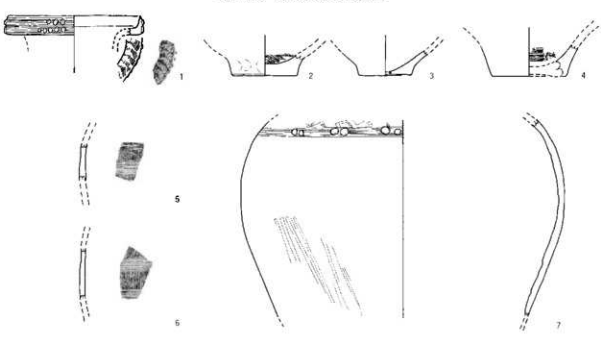
第145図　第14面の調査範囲



第146図　第14面遺構配置図



第147図　第15面遺構配置図



第148図　第14・15層出土弥生土器

あった可能性が高い。４・５区では顕著な遺構は無く、ヒトの足跡が検出されたのみにとどまる（図版60－１）。

（２）第15面の遺構

第15面の調査は１・３区の一部、２区の全域でおこなった（第147図）。１区の北側では、最大幅約３ｍの東から西へ流れる溝を検出した。この溝は北側に堤状の盛土を持つことから、人為的に掘削されたものといえる。また、１・２区にまたがって、上面の第14面で検出した溝が、第15面の時点まで遡ることを確認した。２区の東端では、南北に走る溝を１条検出した。

第148図は第14･15層から出土した土器である。３は２区の第14面で検出した溝の堆積土中から出土した。それら以外はすべて第15層中から出土している。１・２・４は２区で検出した溝脇の盛土中から、５・６は第15層の上部から、７（図版96）は１区の第15面で検出した溝脇の盛土中から出土した。出土状況から考える限り、東側の集落域から流れ込んできたものが、盛土中に包含されたと考えられる。したがってこれらの土器は、第14・15面それぞれの時期を決定するには蓋然性を欠く。ただし、第14・15面の時期が、弥生中期末（Ⅳ様式段階）から後期（Ⅴ様式段階）にあたることは確かである。

第141図－５（図版107）に掲げた木製品は、１区東西方向の溝調査時に、直下の粗砂層（第16層に相当）を掘削した際に出土した板材。平面観を表現したⅡ－Ｃ類（註13）の鳥形木製品である。残存長は33.2㎝で最大厚は1.6㎝である。頭部と体部の間に、明確な頸部が表現されているⅡ－Ｃ類の鳥形木製品は、他に出土例がない。これまでに出土している鳥形木製品と同様に、棹に挿して用いられていたと考えられるが、棹を差し込む孔を中心に破断しており、完存していれば、長さが60㎝前後の大きさになっていたものと考えられる。破断面近くに、主軸に直交する浅い溝が残っており、別の部材でつくられていたと考えられる羽を取り付けるのに、何らかの関連があるのではないかと考えられる。出土状況から考えて、東側の集落域から、洪水砂により流されてきたものと考えられる。

（３）弥生時代の遺構の性格

第14・15面は、１・２区の溝以外、顕著な遺構は無く、また、溝から離れた第15層には、人為的な撹拌行為を受けた痕跡が認められない。したがって、弥生時代における調査地１～３区の様相は、排水路の末端に位置する湿地状の環境下にあったと想定できよう。

第６章　自然科学分析

今回の調査では、珪藻･花粉微化石分析、大型植物遺体同定分析、放射性炭素年代測定（AMS)、鉄製品X－CT撮像、蛍光Ｘ線分析装置を用いた須恵器の胎土分析をおこなっている。以下にその成果の概要を報告する。

（１）珪藻･花粉微化石分析

①珪藻微化石分析　試料は第114図㊷の地点（落ち込み部分）において、第９～12層の各層分採取した。分析の結果、第９～11－１層までの珪藻化石群は、主体となり優占する種類が無く、生態系が相反する種類により構成されていることがわかった。いっぽう第11－２層では陸生珪藻の比率が多いことがわかった。第９～11－１層の分析結果は、河川氾濫原の地層堆積に由来するものと考えられ、当該層形成時期の落ち込み部は、河川氾濫時に滞水するような環境下にあったといえる。いっぽう第11－２層の分析結果から、古墳時代中・後期において調査地は、河川氾濫の影響を受けない安定した環境下にあったことがわかる。

②花粉微化石分析　試料は珪藻化石分析と同じ地点、同じ層順で採集した。分析の結果、第９～11－２層を通じて、木本化石と草本化石の構成比率がほぼ等しいことがわかっている。ただし花粉化石は一般的に広域の古植生を反映するため、調査地の環境をこの結果から即断することはできない。また第９層、第10－１・２層の木本化石の分析から、調査地の地層は、寝屋川流域の影響を受けて形成されたと推測される。

（２）大型植物遺体同定分析　試料は６区落ち込み部分の第11－２層上部と下部から採取した。結果被子植物32分類群842個の種実が検出され、栽培植物のスモモ、モモ、イネ、アワ－ヒエ、コムギ、アサ、メロン類が確認された。草本類で注目される点は、イネ科の栽培植物であるイネ、アワ－ヒエ、コムギが検出されたことである。このうち、イネとともにコムギが大量に確認されたことは重要である。これまで河内平野内の弥生～古墳時代にかけての遺跡では、コムギの検出例が殆ど無く、今回の分析結果は特徴的といえる。

（３）放射性炭素年代測定（AMS）　試料は第114図④⑤⑩の地点に打ち込まれた杭材から採取した。測定年代を暦年代較正した結果、杭材④（PLD－5501）は１σ暦年代範囲が、430－465AD（26.6%）、480－535AD（41.6%）、２σ暦年代範囲が420－540AD（95.4%）であった。⑤（PLD－5502）は、１σ暦年代範囲が、410－440AD（28.1%）、480AD－540AD（40.1%）、２σ暦年代範囲が400－540AD（95.4%）であった。⑩（PLD－5503）は１σ暦年代範囲が、985－1020ＡＤ（68.2%）、２σ暦年代範囲が900－920ＡＤ（5.1%）、960－1030AD（90.3%）であった。④⑤の２σ暦年は古墳時代集落の存続期間に、落ち込み際で杭が打ち込まれた年代を示唆している。

（４）鉄製品X-CT撮像　鋳造鉄斧（第130図－４）、円盤状鉄製品（第130図－３）、環状金属製品（第129図－10）のX-CT撮像をおこない、断面形状・物質密度を分析した。鋳造鉄斧は断面に数単位の空孔がみられ、鋳造であることが確認できた。円盤状鉄製品は観察する限り、二枚の鉄材を貼り合わせた可能性が考えられたが、撮像と物質密度の分析から一枚の鉄材で製作されたものとわかった。環状金属製品は物質密度の分析から、鉄製品とは考えられず、銅または金を主成分とする可能性が指摘された。な

お先述の鉄製品以外でも、既にX-CT撮像を実施し、成果を報告している（註４）。あわせて参照されたい。

（５）出土須恵器の胎土分析　第11－２層から出土した須恵器片21点について、蛍光Ｘ線分析装置を用いた胎土分析をおこなった。分析の結果、縄蓆紋が施された破片７点は似通った組成が確認され、生産地が同じ可能性が指摘された。その他の14点については、Rb-Sr分布において、まとまった分布状況が確認できた。おしなべて生産地が同じ可能性が指摘できる。ただし今回の産地推定法は、これまでの分析（陶邑古窯址群等）で用いられたものとは異なるため、既出の結果との相対比較は困難である。

第７章　調査成果のまとめ

今回の調査地、すなわち讃良郡条里遺跡の南西部は従来、河内潟の内側、もしくは汀線の進退範囲内と認識されてきた。しかし当地の調査では、古墳時代中期から平安時代前期にかけての濃密な遺構の集中が確認され、後述するような規模の集落が展開していたことがわかった。さらに集落域は、調査地の南側にさらに拡大すると予想される。このように、讃良郡条里遺跡南西部の調査で得られた主な成果は、古墳時代中・後期のものと、奈良・平安時代のものに分けることができる。以下に調査地における古墳時代中・後期から平安時代にかけての遺構変遷をまとめ、結語としたい。

第１節　古墳時代中・後期（５・６世紀）の遺構変遷

古墳時代の遺構変遷は井戸、土坑、溝の重複関係と出土土器の検討から、おおまかに第一・第二の二時期にわけることができる。

第一期は５世紀中頃が上限で、６世紀中頃が下限となる時期。この時期に機能した遺構としては、１～４区では、288井戸、410溝、426溝、1387溝があげられる。また1398土坑は、出土土器からこの時期の廃棄土坑と考えられる。288井戸と410溝の間には、新旧関係が認められることは先述したが、これらの遺構は、出土土器の下限からこの時期のものと考えられる。1387溝から出土した土器は僅かであるが、溝の埋没後に1398土坑が掘削されていることから第一期に入ると考えられる。６区では、754井戸と749土坑がこの時期にあたる。749土坑はその平面形から単なる廃棄土坑とは考えられず、出土土器の下限が機能時期を示すと考えた。建物については、柱穴出土土器の数が僅かであるため、第一期にどの建物が機能していたかを確言することは難しい。出土土器から、建物12と建物16がこの時期に入る可能性を指摘しておく。また410溝と426溝が、建物８～11の排水目的に掘削されたと考えるならば、建物８～11もこの時期に入る可能性がある。５・６区にまたがる落ち込み内の第11－２層からもこの時期にあたる土器が出土している。したがって遺構として認識できるものは少ないが、古墳時代における調査地内の活動は、５世紀中頃から始まったといっても過言ではない。

第二期は６世紀中頃が上限で、６世紀末が下限となる時期である。多くの遺構がこの時期に入る。１～４区では、409井戸、412井戸、385井戸、1396井戸、1386溝、1391溝、390溝がこの時期に機能していた。１～４区では、第一期の遺構は東側に集中する傾向にあったが、第二期になると、遺構の分布範囲は西側まで広がるようである。６区では、844土坑、750溝、840溝、2419溝、第一期に引き続き754井戸がこの時期にあたる。また2301土坑と2373土坑は、この時期の廃棄土坑であろう。６区で検出された多くの遺構がこの時期に入ること、840溝と2419溝は平面形から竪穴住居址である可能性が高いことから、６区のさらに南（調査区外）には、６世紀後半の大規模集落が展開していた可能性が高い。おそらくこの集落は、蔀屋北遺跡で確認されている集落と同一と考えられる。蔀屋北遺跡の集落集中箇所から６区までの距離は約200mで、この間に６世紀代の集落が展開していたといえよう。

以上のように、当調査地における遺構の変遷と、その最盛期について検討を加えた。その結果、調査地が蔀屋北遺跡から北に広がる大規模集落の北端にあたること、その最盛期が６世紀後半であることを確認した。この事実は、５・６区に展開する落ち込みから出土した土器からも追認することができる。

落ち込みから出土した土器のなかには、須恵器や韓式系土器など、5世紀中頃に上限をおくことができるものが含まれる。ただしそういった土器は、落ち込み最下層から出土したものが大多数を占め、それら以外の土器は6世紀代のものが多数を占める。このことは集落の変遷とも密接にかかわり、当地における古墳時代集落の最盛期が、6世紀後半であったことを示唆している。

また出土遺物から導き出される特徴として、当地における集落の居住者が、馬を資養する集団であったことがあげられる。当調査地における製塩土器、実用馬具、馬骨の出土量が他の遺跡より抜きん出ているという事実は、当地における馬の資養を直接示している。都屋北遺跡から調査地までの範囲は、『日本書紀』に記された「河内馬飼」の居住地ないしは放牧地の有力候補となろう。

第2節　飛鳥・白鳳時代（7世紀）の遺構変遷

5・6区の落ち込み上層（第11－1層、11－2層上部）から出土した土器の中には、6世紀末から7世紀中頃までの土器がいくつかみられる。また落ち込み以外でも、7世紀前半の軒丸瓦や、同時期の格子目タタキ平瓦などが出土しており、周辺に7世紀代の建物が存在していた可能性が示唆できる。いっぽう今回の調査区内、たとえば6区や1～4区の微高地上では、この時期の遺構はない。このことから、前代までの集落は7世紀代に入ると、その範囲が狭まったか、やや集落域を移動させたかのどちらかと考えられる。

第3節　奈良・平安時代（8・9世紀）の遺構変遷

調査地では7世紀代の遺構は皆無であったが、8世紀に入ると、掘立柱建物を中心として数多くの遺構が確認できる。その中心地は古墳時代に集落が展開した、1～4区の微高地と6・7区の微高地である。

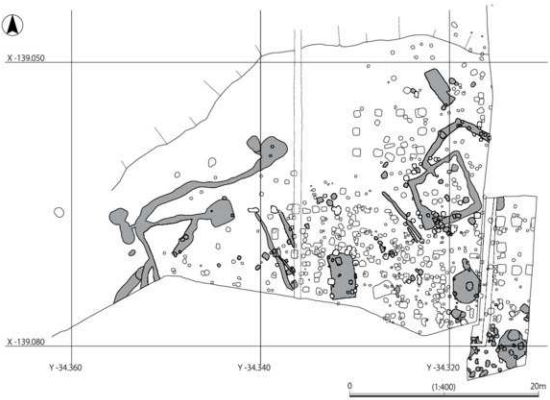
1～4区では、6棟の掘立柱建物が検出された。残念ながら柱穴からの出土土器が少ないため、詳細な機能時期を決定することができない。そのため建物の方位と、柱穴の堆積土から古代の建物と判断した限りである。ただし建物群に近接する2030井戸と403井戸の機能した時期が、8世紀中頃から9世紀中頃と考えられるため、建物の時期もそれに近いものとなろう。

いっぽう6・7区の微高地上では、9棟の掘立柱建物が検出されたが、うち7棟の建物については、柱穴からの出土土器により、おおまかな機能時期を想定することができる。6・7区微高地では、まず8世紀前半に建物25が築かれ、8世紀中頃まで機能していた。建物25は東西方向に長い、特殊な平面形をとる建物で、同様の建物は平城宮馬寮地区でもみられる。平面形の酷似が建物の機能に直接繋がるとは言い難いが、建物25が既であった可能性が指摘できる。そして奈良時代後半に入り、建物25が破却された後、同地では建物17・19・18・21・22・23が築かれた。これらの建物群はいずれも、8世紀後半から9世紀前半までの間に、同時並存していたと想定される。6区建物群周辺では、同時期の井戸は未検出であるが、西側7区の153井戸・196井戸の機能時期が、上記建物群とほぼ重なる。このことから、6・7区で展開していた古代の遺構の多くが、8世紀後半から9世紀後半の時期におさまるのがわかる。

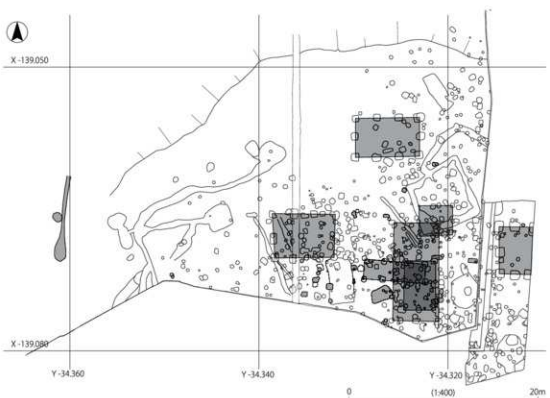
また2・3区の低地部で検出された286・398・400溝等の幅広の溝は、出土土器こそわずかではあるが、8世紀後半から9世紀後半の間に開削されたといえる。となれば、出土土器が少量であった1～4区の古代の掘立柱建物の機能時期も、6・7区の建物同様、8世紀後半から9世紀前半ととらえるべきであろう。また古墳時代の集落と同様、6・7区の建物配置から考えて、さらに南（調査区外）に複数

第149図　古墳時代の遺構（1～4区）

第150図　奈良・平安時代の遺構（1～4区）



第151図　古墳時代の遺構（６区）



第152図　奈良・平安時代の遺構（６区）

の掘立柱建物群が存在していたことが想定される。

なお6区では、先述の建物が廃絶した後、1棟だけ建物20が築かれる。建物20の存続時期は9世紀後半と考えられ、同時期の建物は7区の建物24があげられる。ただしこの2棟以降、建物の建設はみられない。

以上の成果から、讃良郡条里遺跡の南西部では、8世紀後半から本格的な土地開発が始まり、その過程で掘立柱建物群が築かれたといえる。ただし開発の具体的な内容については、発掘調査成果に欠けるため、断言することができない。とはいえ、建物規模や出土遺物から、当地における開発主体が律令制下の末端統治機関であり、活動の最盛期が8世紀後半から9世紀前半であることはあきらかであろう。

第4節　平安時代以降の遺構変遷

上記の建物20が廃絶した後、11世紀はじめから12世紀後半までの間、当地は微高地を中心に畠耕作の地となる。微高地上で検出された東西南北方向の無数の溝群は、当地における畠耕作の広がりを示している。畠作地としての土地利用が終了した13世紀から15世紀の間、当地では水田経営がおこなわれた。ただし水田畦や坪境溝などの遺構が希薄であることから、恒常的に水田経営がおこなわれたとは言いがたい。13世紀以降の当地は半乾半湿の環境下にあり、部分的に水田経営がおこなわれたと考えられる。

註

（1）狩野美都子・奥村茂輝「古代における讃良郡条里遺跡南西部の一様相」『大阪文化財研究』第32号　財団法人大阪府文化財センター　2007

（2）田中清美「造付竈の付属具」『続文化財論集』文化財学論集刊行会　2003

（3）大阪府教育委員会『部屋北遺跡発掘調査概要』

（4）村上恭通『原始・古代の鉄製品の腐食と土中環境の対応性に関する研究』Ⅳ　2006

（5）奥村茂輝「讃良郡条里遺跡出土の鉄器について」『大阪文化財研究』第32号　財団法人大阪府文化財センター　2007

（6）黒須亜希子・村田昌也「讃良郡条里遺跡出土の木製品について」『大阪文化財研究』第30号　財団法人大阪府文化財センター　2006

（7）奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始篇』1991

（8）東村純子「古代日本の紡織体制～杼・綛かけ・糸枠の分析から～」『史林』87巻5号　2004

（9）奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代篇』1984

（10）註2文献

（11）前田亮『続・図説手織機の研究　日本篇』京都書院　1996

（12）置田雅昭「古墳時代の木製刀剣鞘装具」『考古学雑誌』第71巻第1号　1985

（13）錦田剛志「弥生時代の鳥形木製品」『古代文化研究』第1号　島根県古代文化センター　1993

写　真　図　版

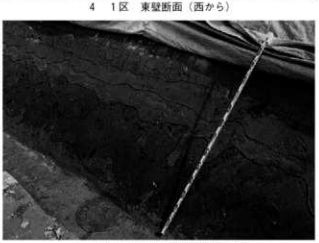
1　5～7区　調査着手前（西から）

2　1～4区　調査着手前（南から）

3　7区　道路中央断面北壁（北から）

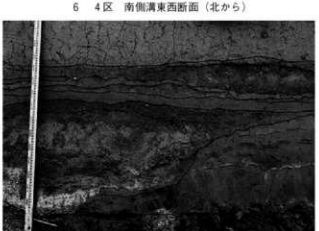
4　1区　東壁断面（西から）

5　6区　道路中央断面北壁（北から）



6　4区　南側溝東西断面（北から）

7　6区　中央南北断面（西から）



8　2区　西側溝南北断面（東から）

図版 2

1　5区　第5面全景（西から）

2　7区　第2面31溝（西から）

3　5区　第2面289土坑（東から）

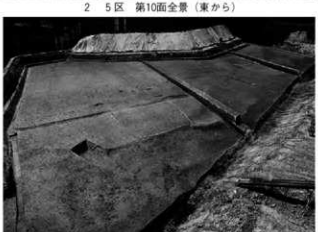
4　2区　第2面溝（南東から）

5　1区　第5面水田段差（南東から）

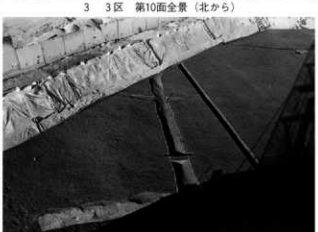
1　7区　第10面全景（東から）

2　5区　第10面全景（東から）

3　3区　第10面全景（北から）



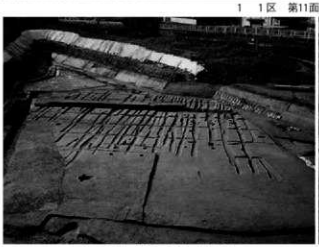
4　6区　第10面全景（北から）



5　1区　第10面全景（南から）

図版 4

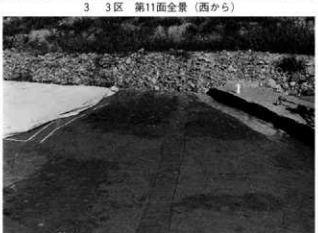
1　1区　第11面全景（南西から）



2　7区　第11面全景（東から）

3　3区　第11面全景（西から）

4　6区　第11面全景（北から）



5　耕作溝と古墳・古代遺構の重複関係（4区西端・西から）

1　1区　第12面全景（南西から）

2　2区　第12面全景（西から）

図版 6

1　3区　第12面全景（西から）

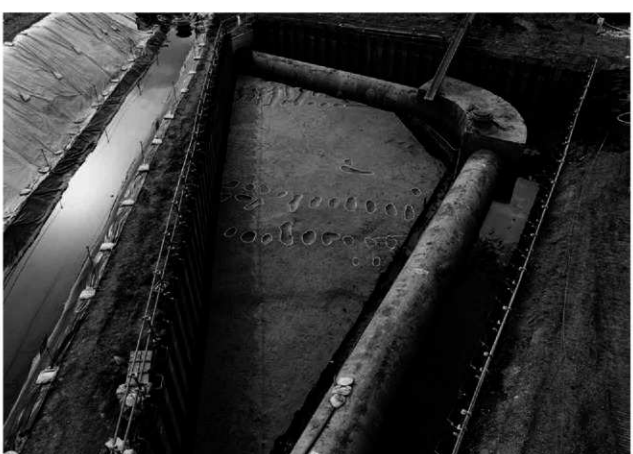
2　4区　第12面全景（東から）

1　6区　第12面全景（北東から）

2　5区　第12面全景（南から）

図版 8

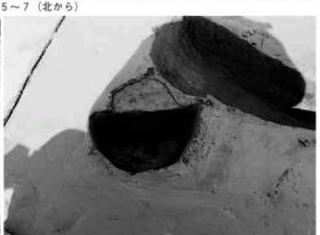
1　10区　第12面全景（真上から）



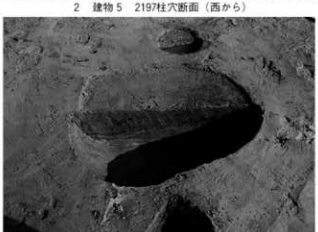
2　9区　第12面全景（東から）

1　掘立柱建物５～７（北から）

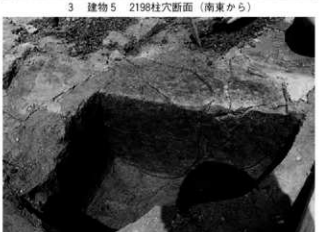
2　建物５　2197柱穴断面（西から）



3　建物５　2198柱穴断面（南東から）



4　建物５　2199柱穴断面（南から）



5　建物５　548・550柱穴断面（西から）

図版10

1　建物6　458柱穴断面1（南から）

2　建物6　458柱穴断面2（北から）

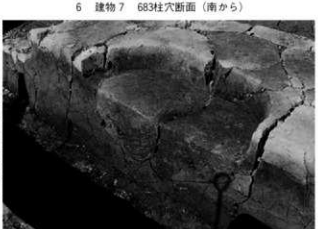
3　建物6　461柱穴断面（北から）

4　建物7　674柱穴断面（東から）

5　建物7　682柱穴断面（東から）

6　建物7　683柱穴断面（南から）

7　建物7　573柱穴断面（北から）



8　建物7　491柱穴断面（西から）

1　建物13　1428柱穴断面（北東から）

2　建物13　1431柱穴断面（北から）

3　建物13　1441柱穴断面（西から）

4　建物13　1445柱穴断面（南から）

5　建物15　1577柱穴断面（西から）

6　建物15　1584柱穴断面（南西から）

7　建物15　1562柱穴断面（南西から）

8　建物15　1570柱穴断面（北から）

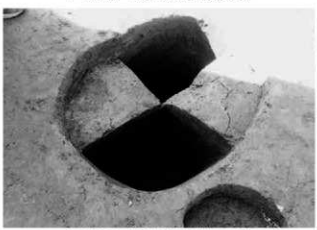
図版12

1　建物14全景（北から）

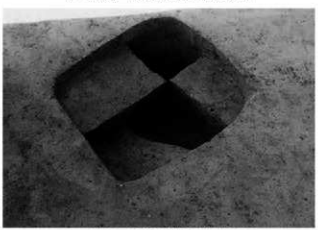
2　建物14完掘状況　奥は建物12・13（西から）

1　建物14　1550柱穴断面（北東から）

2　建物14　1671柱穴断面（北西から）



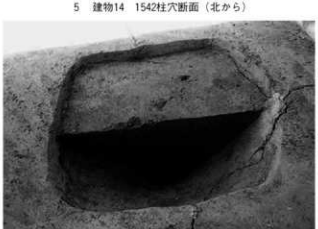
3　建物14　1662柱穴断面（北東から）



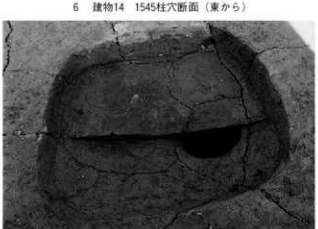
4　建物14　1541柱穴断面（南東から）

5　建物14　1542柱穴断面（北から）

6　建物14　1545柱穴断面（東から）



7　建物14　1547柱穴断面（東から）



8　建物14　1533柱穴断面（南から）

図版14

1　建物17全景（西から）

2　建物17完掘状況（北から）

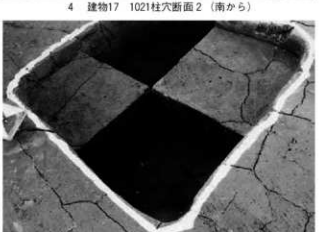
1　建物17　1019柱穴断面（南東から）

2　建物17　1003柱穴断面（北東から）

3　建物17　1021柱穴断面1（南東から）

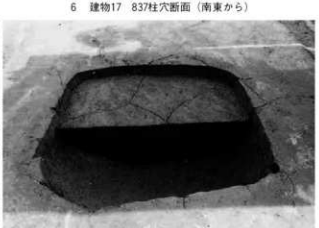
4　建物17　1021柱穴断面2（南から）

5　建物17　906柱穴断面（北から）



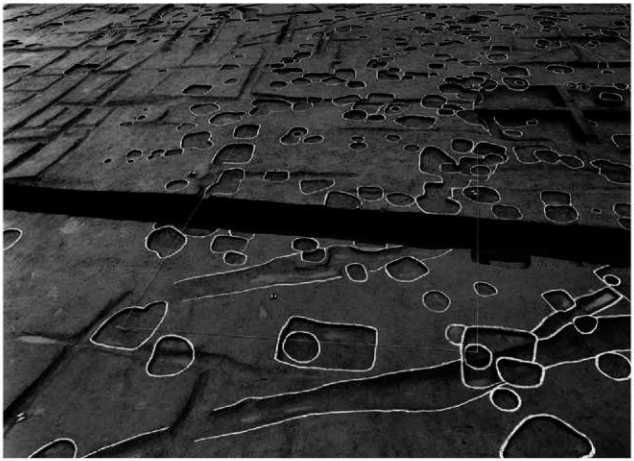
6　建物17　837柱穴断面（南東から）

7　建物17　1018柱穴断面（北から）



8　建物17　841柱穴断面（西から）

図版16



1　建物19全景（西から）

2　建物19完掘状況（南から）

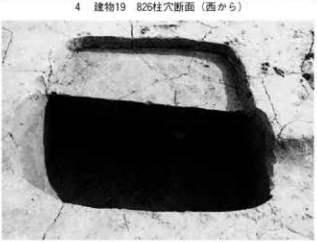
1　建物19　908柱穴断面（南東から）

2　建物19　1137柱穴断面（北西から）

3　建物19　843柱穴断面（東から）

4　建物19　826柱穴断面（西から）

5　建物19　1067柱穴断面（南から）



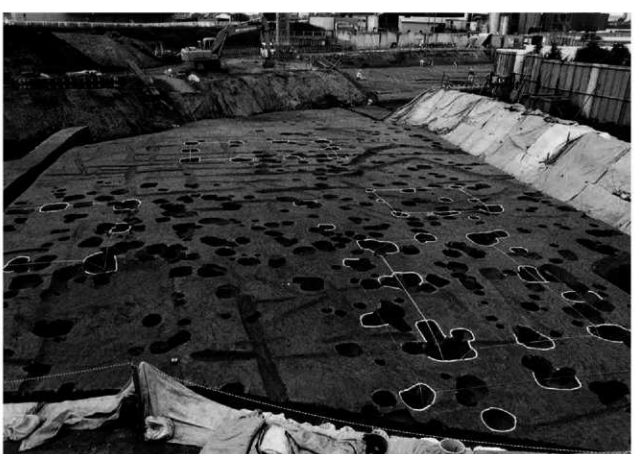
6　建物19　823柱穴断面（北から）

7　建物19　827柱穴断面（南から）

8　建物19　1064柱穴断面（北西から）

図版18

1　建物21全景（南から）



2　建物18・20・21完掘状況（南東から）

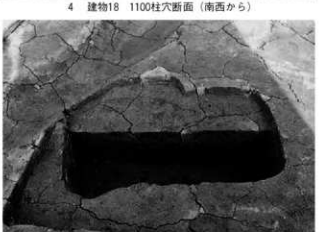
1　建物18　786柱穴断面（南から）

2　建物18　880柱穴断面（南から）

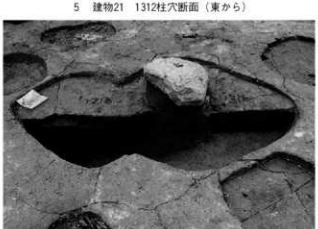
3　建物18　1767柱穴断面（南から）

4　建物18　1100柱穴断面（南西から）

5　建物21　1312柱穴断面（東から）



6　建物21　990柱穴断面（南西から）



7　建物21　1213柱穴断面（南西から）

8　建物21　1196柱穴断面（北西から）

図版20

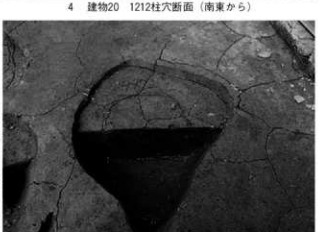
1　建物21　793柱穴断面（南西から）

2　建物21　800柱穴断面（南から）

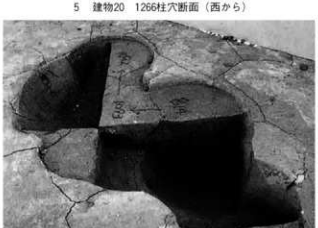
3　建物20　765柱穴断面（南西から）

4　建物20　1212柱穴断面（南東から）

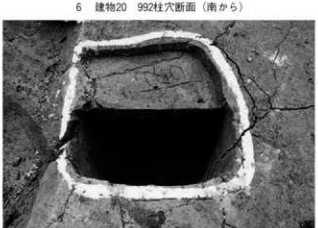
5　建物20　1266柱穴断面（西から）



6　建物20　992柱穴断面（南から）



7　建物20　814柱穴断面（北から）



8　建物20　760柱穴断面（西から）

1　建物22全景（北から）

2　建物22完掘状況（西から）

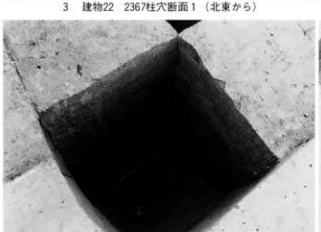
図版22

1　建物22　2365柱穴断面（西から）

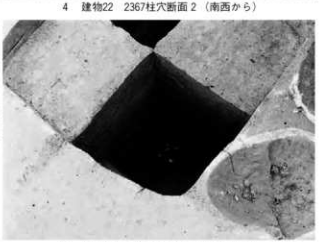
2　建物22　2368柱穴断面（西から）

3　建物22　2367柱穴断面１（北東から）

4　建物22　2367柱穴断面２（南西から）



5　建物22　2369柱穴断面１（南東から）



6　建物22　2369柱穴断面２（北西から）

7　建物22　2370柱穴断面（南から）

8　建物22　2371柱穴断面（西から）

1　建物23・24全景（西から）

2　建物24完掘状況（東から）

図版24

1　2030井戸検出状況（北から）

2　井戸枠検出状況（南東から）

3　井戸枠内木製品検出状況（上から）

4　井戸断面（南から）

5　井戸枠内網代出土状況（南から）

6　網代取り上げ（上から）

7　井戸枠最下段検出状況１（南から）

8　井戸枠最下段検出状況２（南から）

1　403井戸　井戸枠上段（南西から）

2　井戸枠下段断面（南から）

図版26

1　403井戸断面（北から）

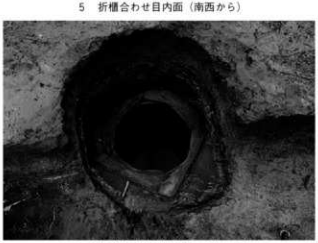
2　井戸枠上段検出状況（西から）

3　井戸枠上段折櫃検出状況（南から）

4　折櫃内面角（南から）

5　折櫃合わせ目内面（南西から）

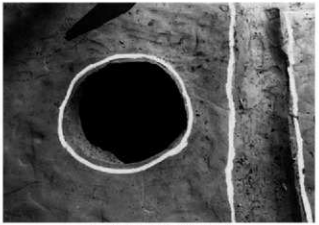
6　井戸枠下段検出状況１（南から）



7　井戸枠下段検出状況２（南から）

8　井戸枠最下段断面（南から）

1　153井戸（南から）



2　井戸検出状況（北東から）

3　井戸枠最下段検出状況（南から）

4　196井戸（南から）

5　井戸検出状況（北から）

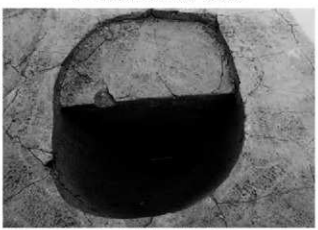
6　井戸枠内土器出土状況（北から）

図版28

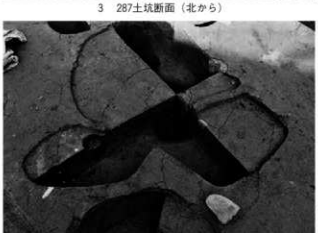
1　413土坑断面（北から）

2　413土坑土器出土状況（東から）

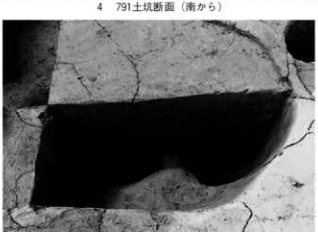
3　287土坑断面（北から）



4　791土坑断面（南から）

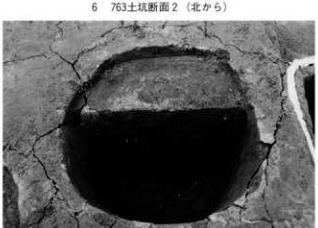


5　763土坑断面1（南東から）



6　763土坑断面2（北から）

7　794土坑断面（南から）



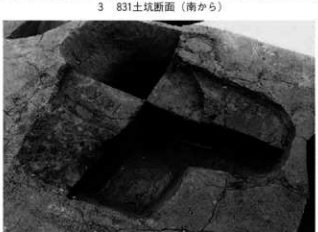
8　797土坑断面（南から）

1　804土坑断面（西から）

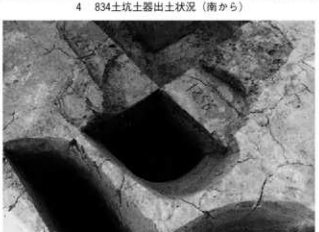
2　815土坑断面（西から）

3　831土坑断面（南から）

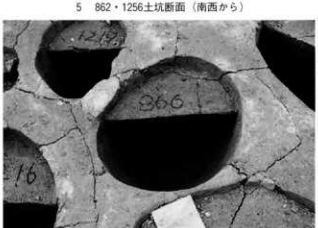
4　834土坑土器出土状況（南から）



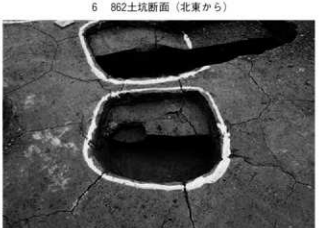
5　862・1256土坑断面（南西から）



6　862土坑断面（北東から）



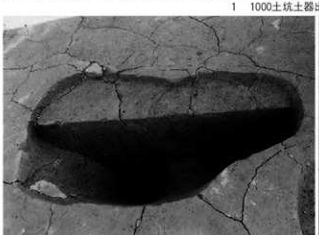
7　866土坑断面（南から）



8　873土坑断面（南から）

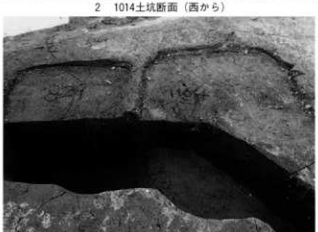
図版30

1　1000土坑土器出土状況（南から）

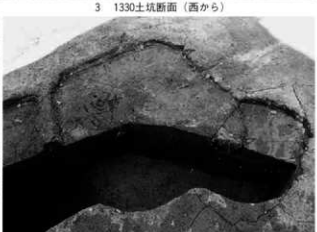


2　1014土坑断面（西から）

3　1330土坑断面（西から）



4　1164土坑断面１（東から）

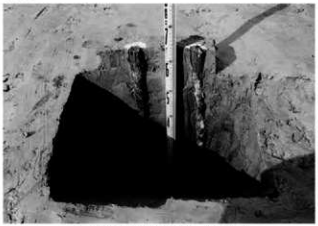


5　1164土坑断面２（南東から）

1　2区　古代の溝検出状況（南から）

2　2区　古代の溝（南西から）

図版32

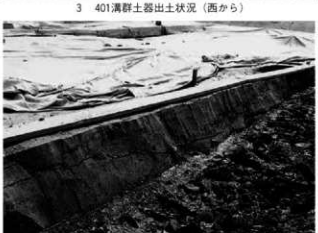


1　2区　溝中の杭断面1（南から）

2　2区　溝中の杭断面2（南から）

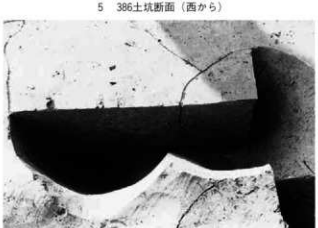
3　401溝群土器出土状況（西から）

4　1415土坑断面（北から）

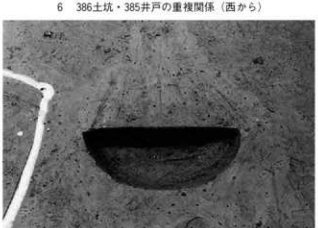


5　386土坑断面（西から）

6　386土坑・385井戸の重複関係（西から）



7　2321土坑断面（北から）



8　2360土坑断面（南から）

1　建物１・２全景（南西から）

2　建物１～３全景（南西から）

図版34

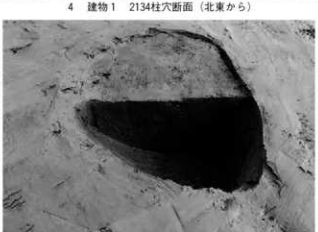
1　建物1　2140柱穴断面（東から）

2　建物1　2136柱穴断面（北西から）

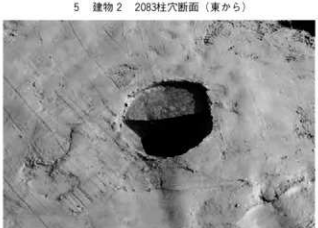
3　建物1　2143柱穴断面（南東から）

4　建物1　2134柱穴断面（北東から）

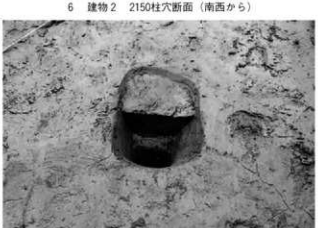
5　建物2　2083柱穴断面（東から）



6　建物2　2150柱穴断面（南西から）



7　建物2　2146柱穴断面（南西から）



8　建物2　2148柱穴断面（北から）

1　建物３全景（南から）

2　建物３　2121柱穴断面（西から）

3　建物３　2131柱穴断面（東から）

4　建物３　2122柱穴断面（東から）

5　建物３　2120柱穴断面（北から）

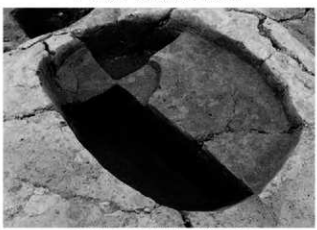
図版36

1　建物８～11と古墳時代の溝・土坑（西から）

2　建物８～11（西から）

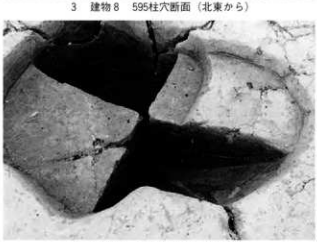
1　建物8　631柱穴断面（南から）

2　建物8　628柱穴断面（南から）



3　建物8　595柱穴断面（北東から）

4　建物8　616柱穴断面（東から）



5　建物9　643柱穴断面（南から）

6　建物9　597柱穴断面（西から）

7　建物9　645柱穴断面（南から）

8　建物9　601柱穴断面（南東から）

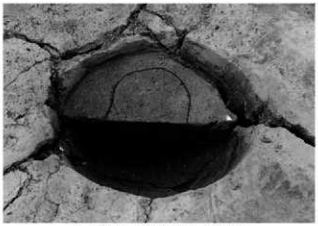
図版38

1　建物10　627柱穴断面（南から）

2　建物10　525柱穴断面（南から）

3　建物10　534柱穴断面（南から）

4　建物11　659柱穴断面（北から）



5　建物11　633柱穴断面（西から）

6　建物11　613柱穴断面（南から）

7　建物11　609柱穴断面（西から）

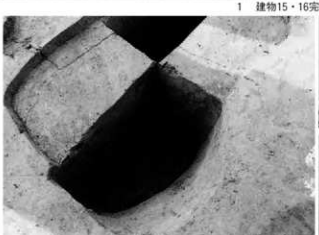
8　建物11　605柱穴断面（南から）

1　建物12～16と古墳時代の溝・土坑（東から）

2　建物12・13全景（北から）

図版40

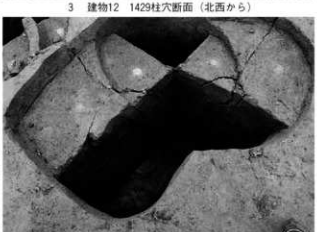
1　建物15・16完掘状況（西から）



2　建物12　1412柱穴断面（南東から）

3　建物12　1429柱穴断面（北西から）

4　建物12　1448柱穴断面（北東から）



5　建物12　1450柱穴断面（南西から）

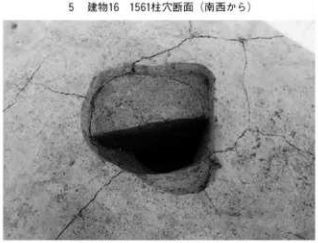
1　建物16　1569柱穴断面（東から）

2　建物16　1568柱穴断面（北から）

3　建物16　1581柱穴断面１（南西から）

4　建物16　1581柱穴断面２（北東から）

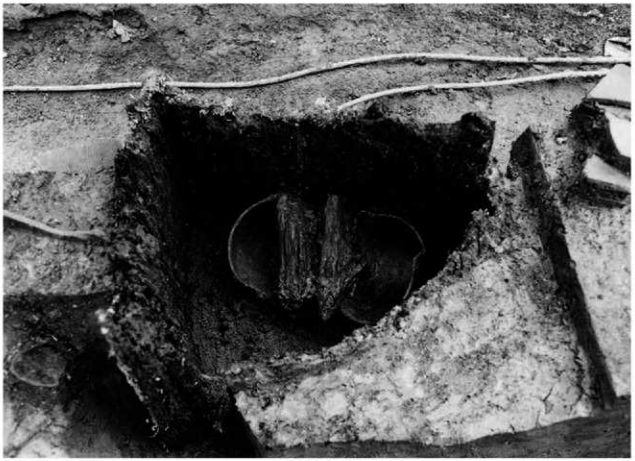
5　建物16　1561柱穴断面（南西から）



6　建物16　1579柱穴断面（西から）

7　４・６区　第12面全景（東から）

図版42



1　288井戸（西から）

2　288井戸・281土坑断面（西から）

3　井戸全景（南から）

4　井戸枠内土器出土状況（東から）

5　井戸枠除去後（東から）

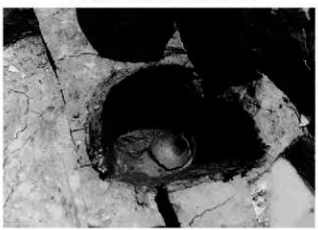
1　409井戸断面（北から）

2　井戸枠内甕棺・土器（東から）

図版44

1　409井戸　井戸枠検出状況（東から）

2　井戸上層断面（北から）

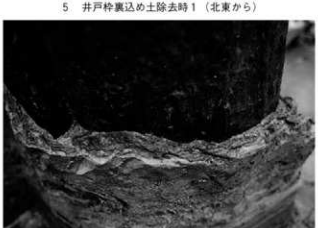


3　井戸枠内土器出土状況（南から）

4　井戸枠を縛る紐（北から）

5　井戸枠裏込め土除去時１（北東から）

6　井戸枠裏込め土除去時２（東から）



7　井戸枠を縛る紐（東から）

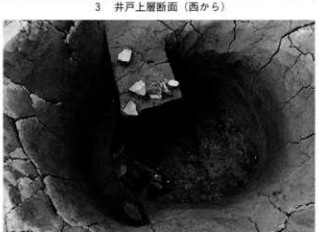
8　井戸枠内出土甕棺取り上げ

1　412井戸検出状況（西から）

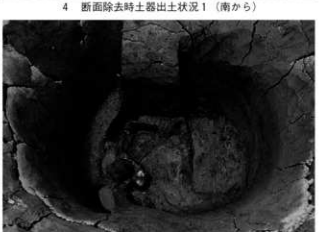
2　井戸上層断面・土器出土状況（東から）

3　井戸上層断面（西から）

4　断面除去時土器出土状況1（南から）



5　断面除去時土器出土状況2（南から）



6　断面除去時土器出土状況3（南から）

7　井戸下層断面（東から）

8　最下層土器出土状況（東から）

図版46

1　385井戸断面１（北から）

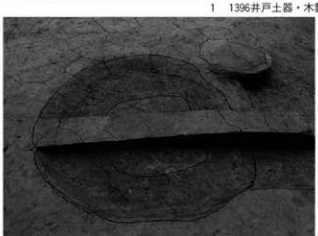
2　井戸枠内最下層土器出土状況（北から）

3　井戸断面２（北から）

4　井戸枠取り上げ１

5　井戸枠取り上げ２

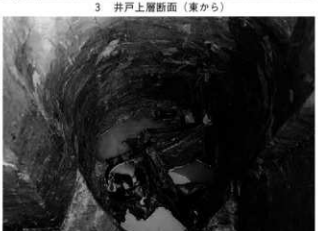
1　1396井戸土器・木製品出土状況（西から）



2　井戸検出状況（西から）

3　井戸上層断面（東から）

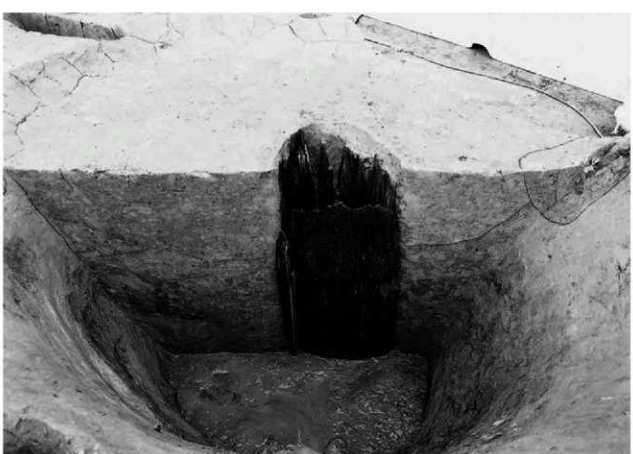
4　出土土器・木製品（西から）



5　最下層土器・木製品出土状況（南西から）

図版48

1　754井戸検出状況（東から）



2　井戸上層断面（南西から）

1　754井戸枠内最下層土器出土状況（南から）

2　最下層土器出土状況（南西から）

図版50

1　754井戸　井戸枠検出状況（上から）

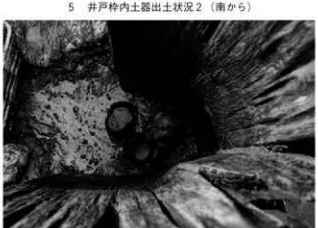
2　井戸枠内断面（南西から）

3　井戸枠内木製品出土状況（上から）

4　井戸枠内土器出土状況１（上から）

5　井戸枠内土器出土状況２（南から）

6　井戸枠内最下層土器出土状況１（上から）



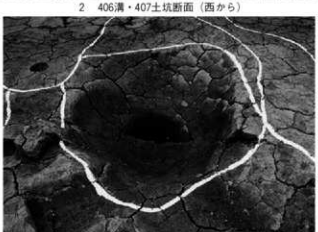
7　井戸枠内最下層土器出土状況２（上から）

8　井戸枠内出土土器に巻かれた紐

1　406溝・407土坑土器出土状況（西から）

2　406溝・407土坑断面（西から）

3　414土坑断面（西から）



4　411土坑完掘状況（東から）

5　411土坑断面（西から）

図版52

1　1857溝土器出土状況（北から）

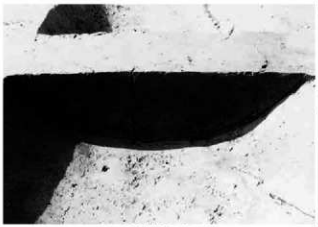
2　1962・1963土坑断面（南から）

3　436土坑断面（西から）

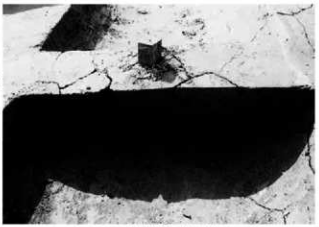
4　540土坑断面（南西から）

5　1987土坑断面（南から）

6　1385溝断面（東から）

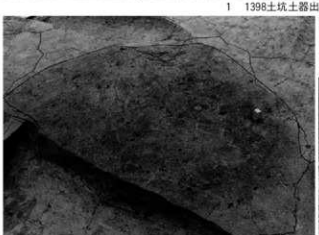


7　1386溝断面（東から）



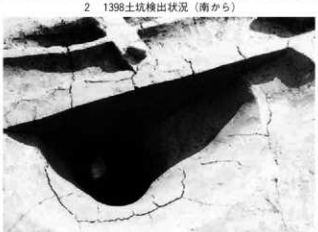
8　1387溝断面（東から）

1　1398土坑土器出土状況（南東から）

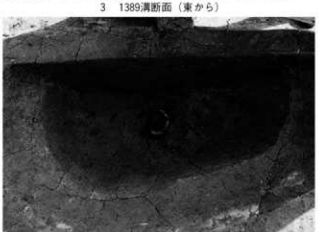


2　1398土坑検出状況（南から）

3　1389溝断面（東から）



4　1397土坑土器出土状況・断面（北から）



5　1397土坑土器出土状況（北から）

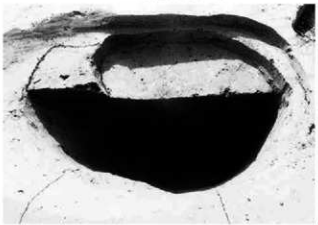
図版54

1　1391溝断面１（東から）

2　1391溝断面２（東から）

3　1625土坑断面（北から）

4　1684土坑断面（北から）



5　1405土坑断面（北から）

6　785土坑断面（南から）

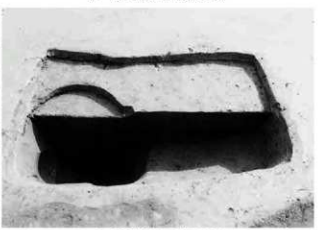
7　842土坑（北から）

8　846土坑断面（南から）

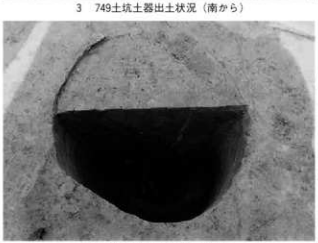
1　749土坑（南から）

2　749土坑断面（北東から）

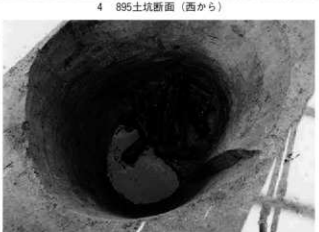
3　749土坑土器出土状況（南から）



4　895土坑断面（西から）



5　902土坑断面（南西から）

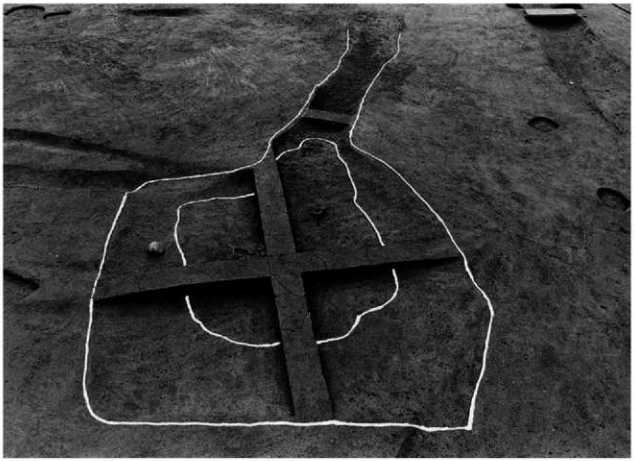


6　902土坑木製品出土状況（南から）

7　902土坑完掘状況（南から）

8　894土坑断面（南から）

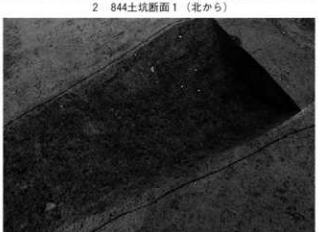
図版56



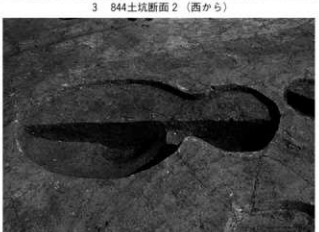
1　844土坑（東から）

2　844土坑断面1（北から）

3　844土坑断面2（西から）

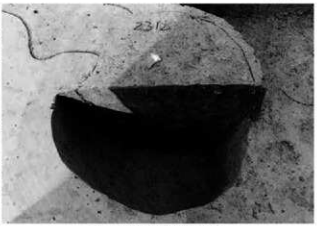


4　844土坑から派生する溝断面（南から）



5　929土坑断面（南西から）

1　耕作溝と古墳・古代遺構の重複関係（3区西側・南から）



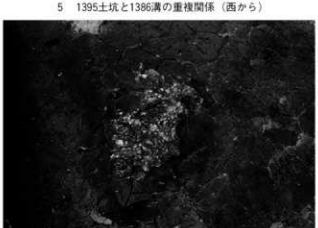
2　2312土坑断面（南から）

3　2373土坑土器出土状況（西から）

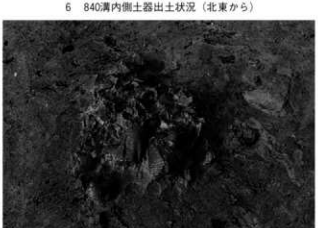
4　2373土坑断面（西から）

5　1395土坑と1386溝の重複関係（西から）

6　840溝内側土器出土状況（北東から）



7　425製塩土器集積（南から）

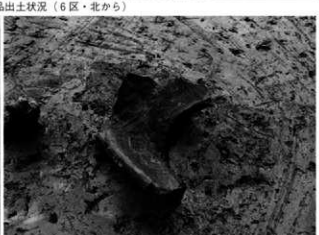


8　2420製塩土器集積（南から）

図版58

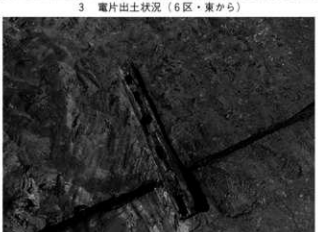
1　落ち込み土器・木製品出土状況（6区・北から）

2　落ち込みと剣形土製品（5区・南から）



3　竈片出土状況（6区・東から）

4　土器群出土状況（5区・西から）



5　木製品出土状況（5区・東から）

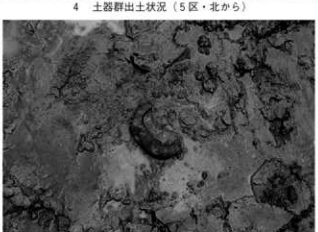
1　5区　落ち込み肩部（南から）

2　土器群出土状況（6区・東から）

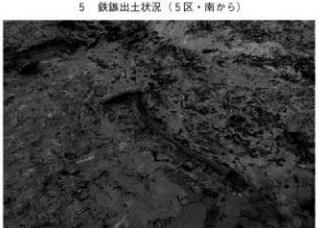
3　獣骨出土状況（5区・南から）

4　土器群出土状況（5区・北から）

5　鉄鏃出土状況（5区・南から）



6　木製鐙出土状況（5区・南から）



7　斧柄出土状況（6区・南西から）

8　木製弓出土状況（6区・南東から）

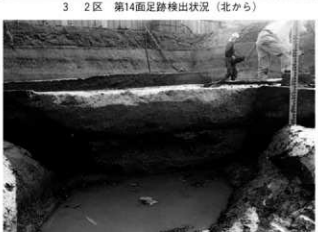
図版60

1　4区　第12層中足跡検出状況（北西から）

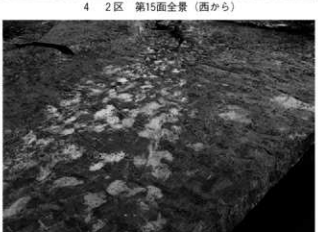
2　2区　第14面全景（西から）

3　2区　第14面足跡検出状況（北から）

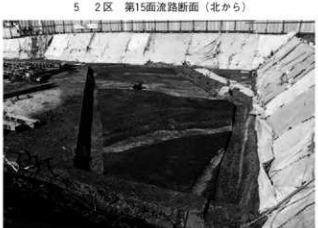
4　2区　第15面全景（西から）



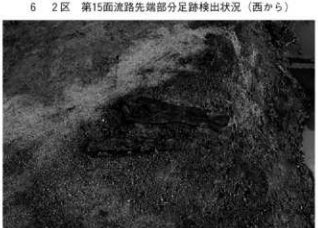
5　2区　第15面流路断面（北から）



6　2区　第15面流路先端部分足跡検出状況（西から）



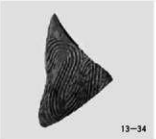
7　1区　第15面全景（南東から）

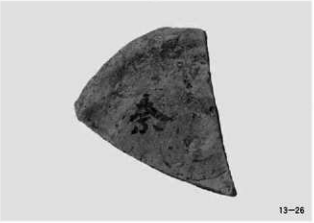


8　1区　第15b層鳥形木製品出土状況（西から）

図版61　出土遺物（須恵器・土師器・土製品）

13−25

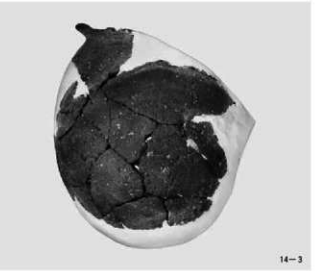

13−34


13−26

14−6

20−16

13−30


14−3

20−17

20−14

45−6

図版62　出土遺物（須恵器・土師器）

45−28

51−10

46−3

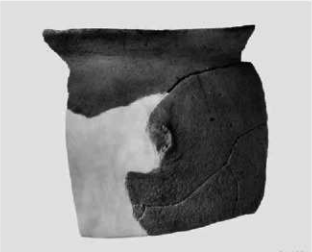
51−9

51−1

64−21

51−20

51−18


64−32

64−11

図版63　出土遺物（須恵器・土師器）

図版64　出土遺物（須恵器・土師器）

22−22

22−27

21−1

22−6

22−19

22−10

22−16

22−25

23−12

22−38

22−32

22−11

21−2

21−14

22−23

22−12

22−21

22−13

22−40

23−5

図版66　出土遺物（須恵器）

22−42

23−2

21−10

113−21

22−44

21−13

21−5

22−45

22−43

図版67　出土遺物（須恵器）

23－7

25－5

図版68　出土遺物（須恵器）

図版69　出土遺物（須恵器・土師器・土製品・瓦）

25−14

118−29

25−6

25−7

21−25

23−15

23−13

25−1

45−4

26−7

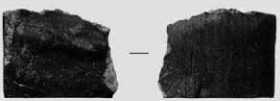
a

21−27

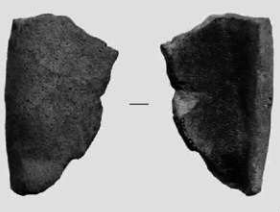
21−23

図版70　出土遺物（瓦塼）

11−14

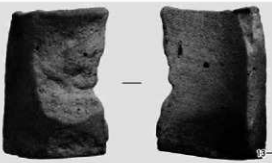

a

20−15


c

11−16

13−32


9−46

b

26−10

26−6

図版71　出土遺物（須恵器・土師器）

77－8

84－10

86－6

84－23

84－27

84－38

84－37

84－28

86－2

図版72　出土遺物（須恵器・土師器）

85−13

85−22

85−20

85−17

85−9

85−10

85−23

85−15

図版73　出土遺物（須恵器・土師器）

85−18

85−16

85−19

66−5

103−38

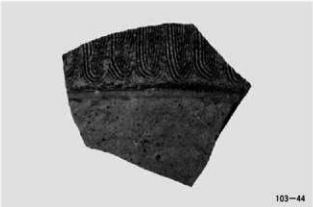
103−46

103−1

103−11

図版74　出土遺物（須恵器・土師器）

104−23


103−44

104−24

104− 6

104−19

103−20

106− 4

106−20

106−42

図版75　出土遺物（須恵器・土師器）

105−35

111−13

111−18

111−14

108−13

111−1

111−31

111−23

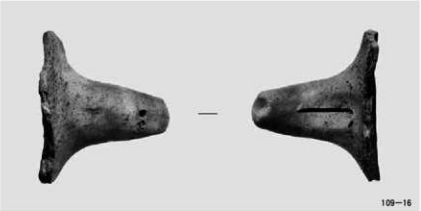
109−6

109−7

109−5

109−2

図版76　出土遺物（須恵器・土師器）


109−16

107−14

107−21

107−23

107−22

108−28

108−30

108−4

108−6

113−14

113−2

115−52

113−29

115−2

115−15

115−4

115−3

115−5

115−6

115−11

115−20

図版78　出土遺物（須恵器）

115−35

115−39

115−30

115−24

115−7

115−21

115−50

115−29

116−16

113−10

116−2

116−8

116−33

116−7

113−15

116−19

116−38

116−37

116−41

116−46

118−4

118−1

117−8

117−3

図版80　出土遺物（須恵器）

117−17

117−13

117−15

117−28

118−16

117−10

117−11

117−2

117−9

117−22

118−20

117−29

117−26

118−24

118−27

118−28

118−26

図版82　出土遺物（須恵器）

118−23

118−25

118−35

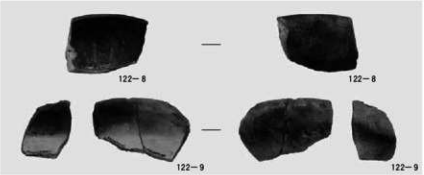
113−24

119−13

119−6

120−15

120−18


122－8
122－8
122－9
122－9

122－4

119－14

119－15

120－17

122－16

123－3

132－1

図版84　出土遺物（土師器）

132－3

122－24

122－29

122－11

122－12

122－21

122－36

122－38

122−40

123−12

123−8

124−6

122−10

132−4

132−8

123−21

132−5

図版86　出土遺物（須恵器）

120−14

118−38

113−28

121−1

図版88　出土遺物（須恵器・土師器）

120－8

132－6

121－2

124－7

図版90　出土遺物（土師器）

132－9

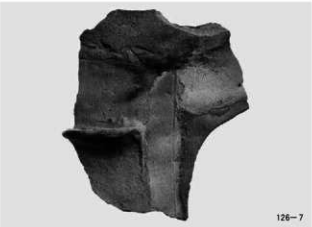
2420から出土した製塩土器

129－1

128－3

128－2

126－8


126－7

25－15

110－5

図版92　出土遺物（土製品）

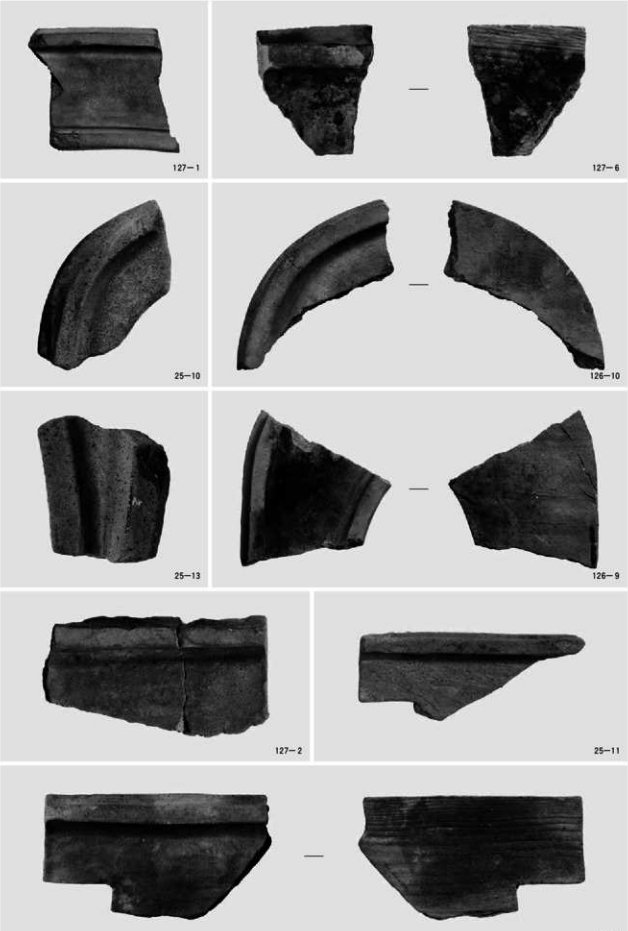
126－1

126－3

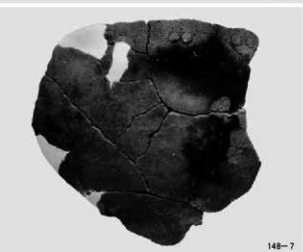
126－2

125

図版94　出土遺物（土製品）

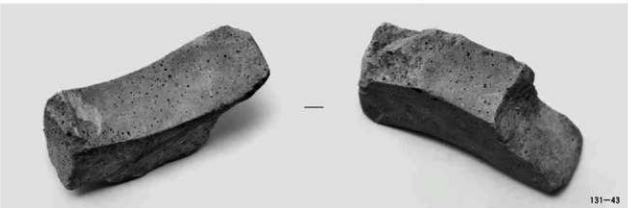

127－1
127－6
25－10
126－10
25－13
126－9
127－2
25－11
127－4

図版96　出土遺物（土製品・弥生土器）



図版97　出土遺物（土製品・石製品）

図版98　出土遺物（金属製品・石製品）

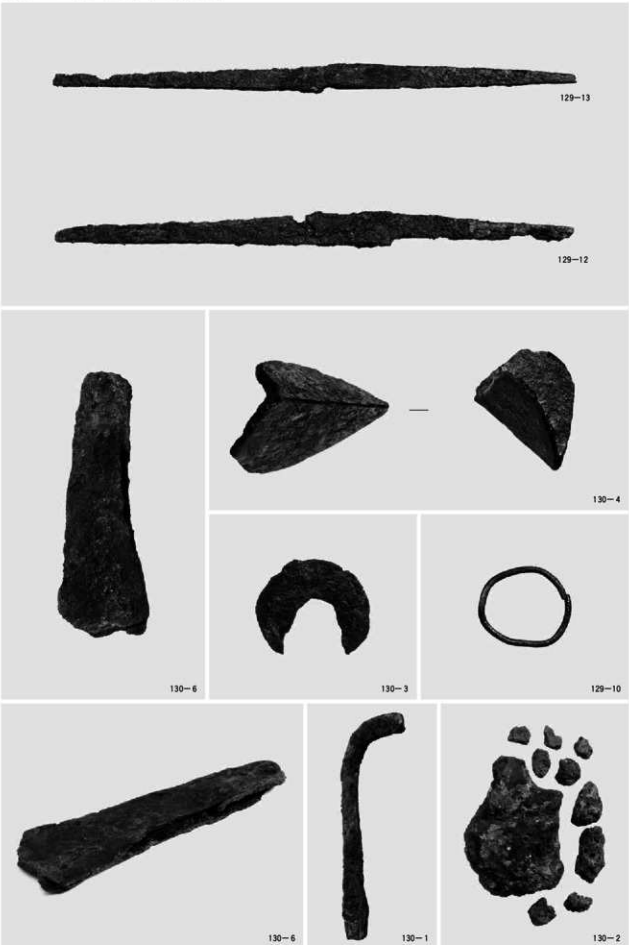


130－5

130－7

130－8

図版100　出土遺物（金属製品）



133－5

133－4

134－4

図版102　出土遺物（木製品）

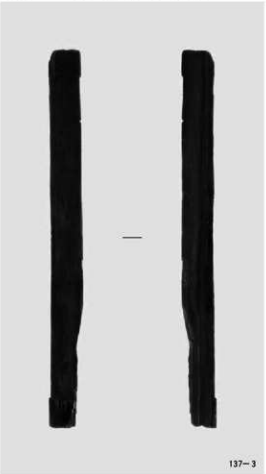
136−10

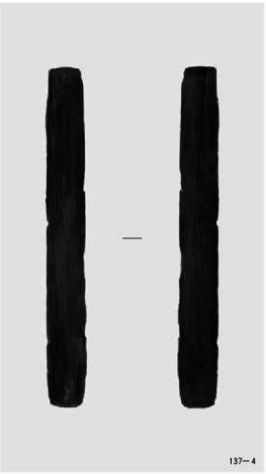
137−1

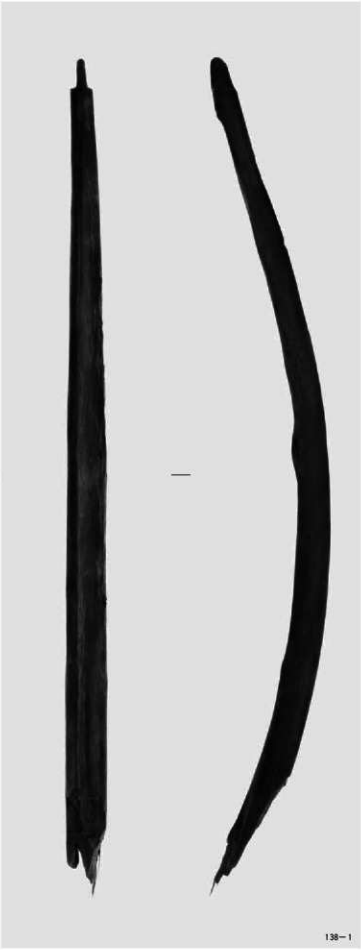
136−8

135−1

図版104　出土遺物（木製品）







図版105　出土遺物（木製品）

138－2

136－1

139－4

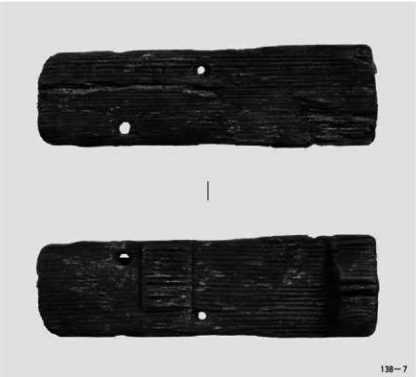
133－3

133－1

図版106　出土遺物（木製品）

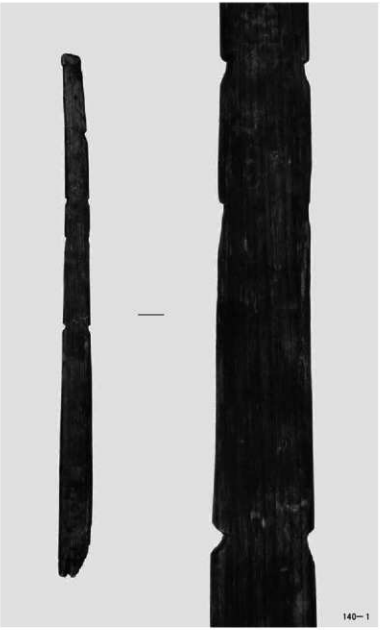
139－3

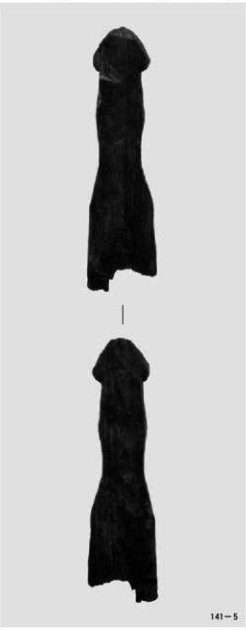
138－4

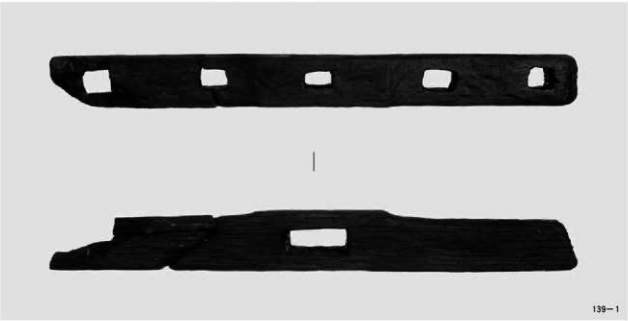

138－7

135－4

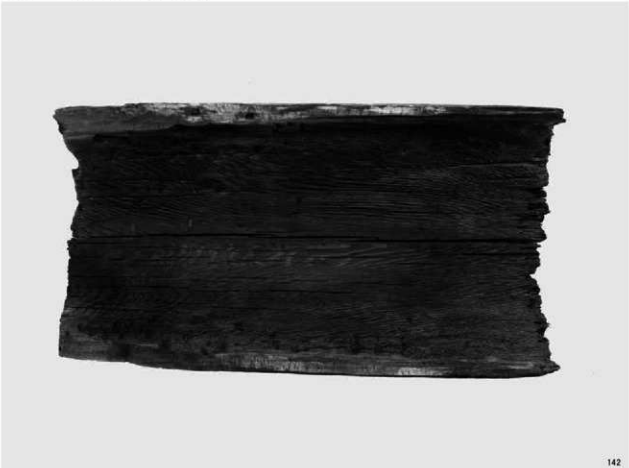
135－3


140－1


141－5


139－1

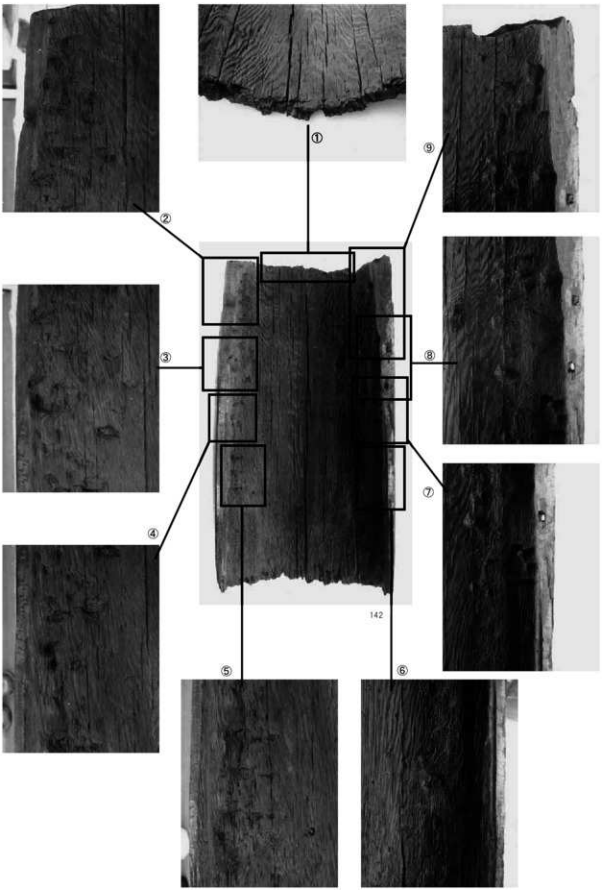
図版108　井戸枠転用準構造船



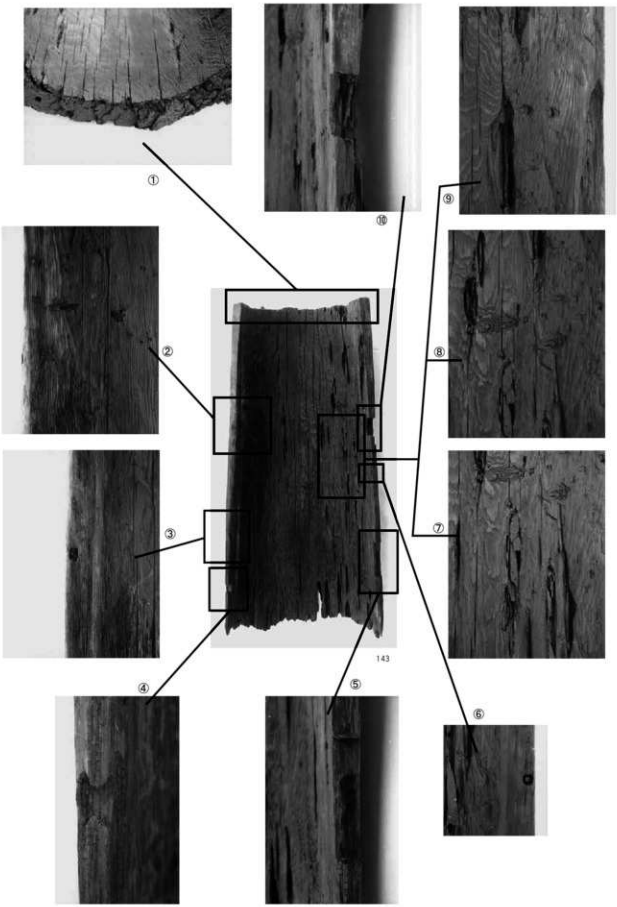
142

143

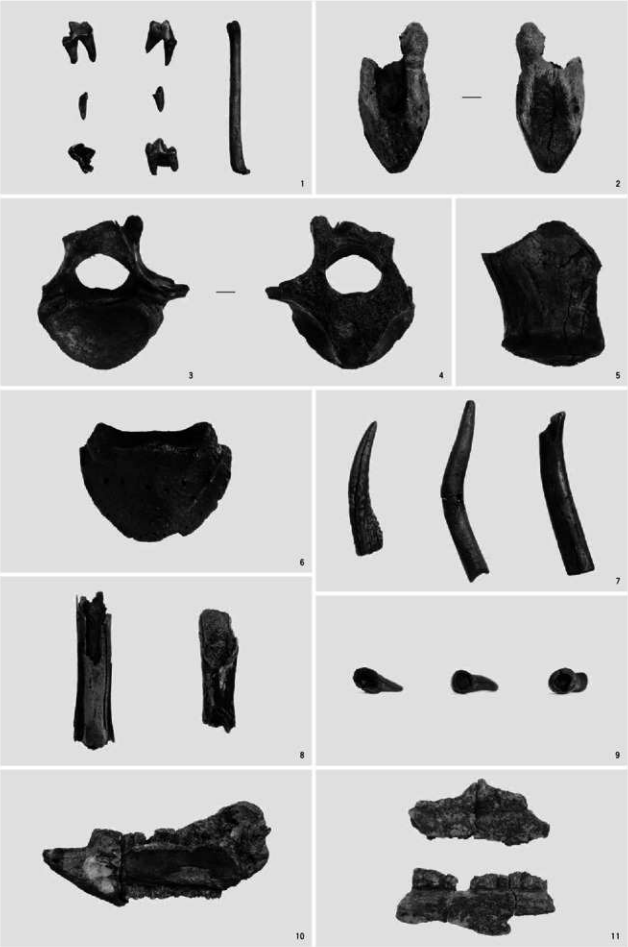
図版109　井戸枠転用準構造船



図版110　井戸枠転用準構造船



図版111　出土動物骨



報 告 書 抄 録

ふ り が な	さらぐんじょうりいせき　なな
書　　名	讃良郡条里遺跡　Ⅶ
副　書　名	一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第182集
編 著 者 名	奥村茂輝・村田昌也
編 集 機 関	財団法人　大阪府文化財センター
所　在　地	〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　℡072(299)8791
発 行 年 月 日	2008年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	ねやがわしさんらひがしまち 寝屋川市讃良東町	27215	36	34° 74′ 6″	135° 62′ 4″	2004年4月1日～2006年3月31日	10,140㎡	国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	ねやがわしさんらひがしまち 寝屋川市讃良東町	27215	36	34° 74′ 5″	135° 62′ 5″	2006年12月1日～2007年1月31日	370㎡	国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	ねやがわしさんらひがしまち 寝屋川市讃良東町	27215	36	34° 74′ 7″	135° 62′ 6″	2007年5月14日～2007年6月8日	80㎡	国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
讃良郡条里遺跡	集落	古墳時代	掘立柱建物、井戸、区画溝、廃棄土坑	須恵器、土師器、金属製品、石製品、木製品、獣骨	古墳時代中期から後期の集落跡を検出。集落に隣接する谷地（落ち込み）から、大量投棄された遺物を検出。
	集落	奈良・平安時代	掘立柱建物、井戸	須恵器、土師器、瓦、金属製品、木製品	東西・南北正方位に軸を合わせた、掘立柱建物群を検出。
	生産	中世	耕作溝	須恵器、土師器、陶磁器	調査地内の微高地において、大規模な畠作がおこなわれていたことを確認。

要　約	本調査地では、古墳時代中期～後期にかけての集落跡、奈良・平安時代の集落跡、平安時代後期から鎌倉時代にかけての畠耕作地が確認された。古墳時代の集落の居住者は出土遺物の性格から、渡来系の馬飼集団であった可能性がきわめて高い。また奈良・平安時代の掘立柱建物群は、殆どの建物が奈良時代後半に築造され、平安時代中頃まで存続していたことを確認した。

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第182集

讃良郡条里遺跡　Ⅶ

一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2008年９月30日

編集・発行／財団法人　大阪府文化財センター
〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号

印刷・製本／三 星 商 事 印 刷 株 式 会 社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル